

夢というものはとても気まぐれで、残酷で、ときに見たいものを見せるし、心地よさで麻痺させて心から願っているものをあっさり忘れさせたりもする。子供のころは夜に見る夢が恐ろしかった。大けがをしたり、みんなの前で恥をかいたり、優しい友人が意地悪になっていたり、この人の弟子になりたいとひそかに思っていたマスターが死んだりする夢まで見た。ジェダイ候補生だったから、怖い夢を見て飛び起きてもすがりつける人は誰もいなかった。仕方なく枕を抱きしめ、大泣きしたいのをこらえながら同じ文言をつぶやいた。これは夢だ、これは夢だ、これは夢だ、これは夢だ、目を覚ますとまったく別の光景が広がっていることを不思議に思わなくなったのはクワイ・ガンのパダワンになったところで、そのときにはもう怖い夢を見て飛び起きることもなくなった。

なのにアナキンときたら大人になっても怖い夢にうなされて起き、真っ先にオビ・ワンの姿を探し、オビ・ワンがすぐそばで眠っていることが分かると毛布をかぶって一人で恐怖に耐える、という子供じみた行動をする。姿を探すならそのまますがりつけばいいものを、マスターにそんな姿を見せるのは格好悪いとも思っているのだらう。おかげでオビ・ワンは理由を知らず、感情を共有できず、話も聞いてやれず、ただ彼の心配だけをさせられる。大丈夫かと声をかけても無視され、毛布に手を当てても無反応だ。だがオビ・ワンは何も言わない。彼はそのことを冷たいと思っているのに違いない。無理にでも毛布を剥がし、中から出てきた不機嫌なアナキンをどうにかして懐柔し、話を聞き出し、抱きしめ、額にキスでもしてもう一度ベッドに横たえるくらいしなければ彼は納得しまい。腹が立つほど甘ったれた態度だが、アナキンはそれを当然だと思っている。しかし彼の当

然、に應えてやろうという気には最後までなれなかった。

けれどオビⅡワンは一度だけアナキンの前で悪夢にうなされたことがある。戦争中のことだ。起こされて目が覚めたとき全身に冷や汗をかいていて、しばらく瞬きもできなかった。隣にいたアナキンに「悪夢でなくフォースがもたらすビジョンだったのでは」と言われたが、内容をまるで覚えていないので判別できない。オビⅡワンはうなされながらこう言っていたそうだ。「頼むからこの場で殺してくれ」。アナキンはこの物騒な寝言をずっと覚えていて、いつも飄々としたオビⅡワンが珍しく苦しそうな様子を見せるたびにどきりとした顔をした。だが「殺してくれ」と誰かに頼むようなことが自分の身に起こるとはどうてい思えなかった。何しろジェダイだ。拘束されて背中に杭を打たれて手足を切り落とされても、たとえ目の前で昔なじみが殺されても両目を閉じない自信があった。泣きわめきなどせず、うろたえず、ましてや死にたいなどと考えることもない。なぜならジェダイには混乱も激情もなく平和があり、平静があり、フォースがあるからだ。そう思っていたのに、「頼むから殺してくれ」と心の底から絞り出すように願う機会は、それからあつという間に訪れた。

そのときオビⅡワンはともにバトルドロイドを斬り伏せてきたライトセーバーが彼を慕っていた子供たちを惨殺するところを見た。無数に擦り傷を作っていた膝を折るところを見た。一度視界に現れたらそれが誰であれ惹きつけずにはおかなくこうべを垂れるところを見た。たいていうんざりした調子で、あるいは少しわくわくして、ときには緊張して、まるで上の空で、たまに機嫌よく吐

かれたあの言葉を、「はい、マスター」と答える声を聞いた。殺してくれと思ったのはそのときだ。だが頭に浮かんできたのは何かの偶然が起こって聖堂の天井が崩落してきたりだとか、衝撃のあまり心臓が止まったりだとか、体が勝手に生き続ける意志を失って機能を停止したりだとか、目にしているホログラムから殺人光線が放出されて額を貫かれるとか、そんな都合のいい死に方だった。そばにいたヨードや彼や彼の新たなマスターに殺される想像はできなかった。ましてや自死をしようと思ったこともなかった。ジェダイの義務がオビⅡワンを生かしたのかもしれないし、単に勇氣がなかったのかもしれないが、自分はいまでも「殺してくれ」と願いながらただ生きている。ある意味でオビⅡワンの心はあのととき死んだのかもしれない、心が死んでも肉体が生存し続けることは可能なのだと身をもって証明するはめになっている。

皮肉にも以前よりもフォースと深く繋がったオビⅡワンは、夢の代わりにビジョンをよく見るようになった。未来のものではなく、現在のビジョンだ。自分はどこかのシャトルの中にいた。恐ろしげな黒いヘルメットが視界に映り、不安と不快で心臓がどきりとする。ヘルメットをかぶった人物は死んだように動かない。フォースの中に身をゆだねているオビⅡワンには、彼が何をしているのかはつきりと分かった。瞑想だ。オビⅡワンのそばにいたころの彼は瞑想をあまり好んでいなかった。彼はフォースと繋がった精神世界の奥深くにひそむ自分の本質よりも、美しく頑強な肉体を持った自らの方をより信頼していたからだ。アナキンがあまりに集中しないから二人で瞑想することもあった。互いの手に触れ、繋がりながら同じ速度で、同じ深さまで潜っていく。彼自身に導かれた

先で見たものは何ということもない平凡な心象風景で、少年にありがちな落ち着きのなさや激しさと純粹さが何の規則性もなく散らばっていた。オビⅡワンはそれを見るたびほっとしたものだ。この子は普通の子だ。出会ったばかりのころ彼の中に見いだした危うさなどどこにもない。

だがここにいる黒ずくめの人物が見ている景色はもう違う。マスターに言われてしぶしぶ目を閉じていたあのころと違い、彼が瞑想にふけるのは暗黒面の力を強め、その中にいる自分をしっかりと確認するためだ。体に触れれば真偽が分かる。ほんの少しこの手を伸ばして肩に触れれば、彼の中の危険でおどましい世界をかいま見ることができはるはずだ。だがオビⅡワンは何度同じビジョンを見てもそれをしたことはなかった。ただの傍観者を決め込んでいた。彼はいつも瞑想していて、頭が動いたことはないし、発声器ごしのぞっとする声を聞いたこともない。当然彼はこちらに気づくことはなく、居場所の手がかりになるものもない。彼とコンタクトすることは不可能だ。なのにこんなものを見せて、フォースは自分に何をせよというのだろうか？オビⅡワンは次第にこの夢に慣れていったが、疑問は深まるばかりだった。

そのビジョンはフォースともっとも深く繋がったときに現れた。つまり瞑想中に他ならず、平穏を求めて目を閉じててもビジョンの幻から戻ってきたときには全身に冷や汗をかいている。暑くて乾燥したタトゥーの空気を吸い込むと体感温度との違いにのどが焼けそうになり、体を折り曲げてせき込むはめになる。そんなときはフォースの世界と離れ、手先を使って些末なことをする。掃除をしたり、料理をしたり、ものを組み立てたり、プラスチックを適当な形に切ったり、いまだ

にどう使ったらいものか分からない地下室の模様替えをしたりする。

この家の地下室はおそらく貴重品や武器の貯蔵庫として使われていたのだろう。室内を見渡しただけでは気づかないところに落とし戸があり、分厚い床に守られている。とはいえ財産を持つていないオビィワンには無用の長物でしかない。もっとも他人に見られたくないものを奥深くにしまった他は、せいぜい食料と作業机を置くくらいだ。あるいはあまりに暑いときに逃げ込むための場所。外から隔絶されているため涼しいことには違いなく、オビィワンは昼じゅうこの地下室で過ごすこともたまにあった。長い時間いると、徐々に居心地をよくしたくなる。階段が狭いから椅子は入らないが、ラグくらいなら敷ける。ラグを敷くと足を組んで座り込みたくなる。座り込むと体は結局、瞑想の態勢に入る。だが熱砂の下で感じるフォースの流れはやはり息苦しく、たいした色もない。寒いくらいに涼しいのに目を閉じたとたんに空気が熱くなる。耳元で細かな泡が弾ける音が聞こえる。立ち上ってくる熱気は汗すらも溶かして乾かす。そうだ。覚えがある。ここはムスタファーだ。オビィワンの中の人間だった部分が跡形もなく焼け落ちて灰となった星だ。フォースの霧の中から影を見つける。愛すべきものの気配を感じ、そのまま串刺しになってしまつて動けない。

オビィワンが現実の世界に戻ってこられたのはそれから丸三日経ってからのことで、汗まみれで目が覚めたとき二度とこの地下室の床には座らないと決めた。なぜいつもこんな奇妙なものを見るのかは分からないが、ムスタファーのビジョンだけは見たくない。それだけは真っ平ごめんだ。ただ平穏とだけ繋がりたい。

それ以来地下室に立ち入るのは最小限にし、ラグも引き上げ、少しの食料と他人にもっとも見られたくないもの、つまりは二本のライトセーバーを置くだけの場所にした。

それからはしばらく平和だった。気を入れて瞑想をしてもおかしなビジョンと繋がることはなかったし、心の中にムスタファアが現れることもなかった。しかしあるとき、奇妙なことが起こった。

その数日前、アンカーヘッドで珍しいものを見つけた。皮の柔らかい、赤い色をした果実だ。タトゥーインでは果物を手に入れることが極端に難しい。種から育てることはもちろんできないし、ときおりよその星から入ってきてほとんどすべてがジャバの宮殿に運ばれてしまう。なので庶民の口に入るのは極限まで干からびさせて小さくしたドライフルーツだけだ。それすらも標準年に一度入ってくるかどうか。コルサントでは当たり前に手に入ったその果物を見たとき、オビIIワンは普段感じることもない望郷を覚えた。懐かしさは間違って飲み込んでしまった異物に似ていた。胃からせり上がってきそうなのにそのまま吐き出すには大きすぎる。みずみずしいとは言いがたいフルーツを買って持ち帰り、しばらく食卓の上に乗せて眺め、しかし口にはせずに地下室に入れた。

アナキンはどんなものであれよく食べる子供だったが特に果物が好きだった。何かしらの果物を口にするたびに頬を紅潮させ、「うそみたい」という顔をした。自分のぶんをさっさと食べ終わってしまつて、オビIIワンのトレーの上に乗っている果物をうらやましそうに見ている姿が目につく。ママならきつと分けてくれるだろうけどマスターはどうかあ、という目。僕がこれをすごくおいしいと思つてゐることにマスターは気づいてるかなあ、という目。その執拗な視線に根負け

して、というのは大嘘で、いつも生意気で不機嫌なアナキンがうれしそうに笑うところが見たくて半分だけ彼に渡した。分かっている。そんなことを思い出すべきではない。それなのにその後悔は甘く懐かしく胸を締めつけ、すぐに吐き氣に変わった。

そういうわけで、心が決まるまで、つまりせっかく買ったフルーツを胃の中に収めてしまおうと考えることができるまでには丸一日かかった。ふたたび地下室に足を踏み入れたのは次の日の午後だ。収穫した水を少しだけ口を含み、食卓に皿を置いてから落とし戸を開けた。氣は重かったが食物を無駄にするわけにはいかない。このまま食べずに放っておけば腐ってしまう。果物はタトゥーインに在る限り二度と口にできない貴重品でもあるのだ。

オビⅡワンはため息をつきながら目隠し用のラグを剥ぎ、取っ手に指をかけた。そのときはおかしいなどとは少しも思わなかった。妙な氣配をちらりと感じたのは次の瞬間だ。取っ手をつかみ、ぐっと力を入れ、重い戸を持ち上げたとき、完璧に制御された静かな空氣とともに熱くて重いフォース、そして粘っこく弾ける泡のイメージがどっと流れ込んできた。それらが通り過ぎてしまいうまで息がでなかった。まるで沸騰直前の湯の中に体を浸したかのような衝撃と痛みが全身を貫いていた。しかしオビⅡワンにひとしきり苦痛を味わせた後、大波はさあっと引いていった。残されたものは冷や汗と白く素っ氣ない光だ。その光はまるで見覚えのないものだった。オビⅡワンは地下室に明かりを置いていない。真っ暗でもものがある場所はフォースで分かるし、必要があればグローロッドで照らせば済む。なのに、落とし戸の向こうの空間は奇妙に強い光で煌々と照らされ

ていた。真っ先に頭をよぎったのは侵入者、という言葉だった。

息を呑み、すぐに呼吸を鎮める。中に足を踏み入れる前にフォースの中から気配を嗅ぎ取ろうとしたが生きた人間の匂いはしなかった。地下室は無人だ。だが何かおかしい。ただの貯蔵庫だというのに空調を効かせているかのように空気が澄みすぎている。かびの匂いもしない。これではまるで無菌室だ。覚悟を決めて落とし戸を固定してからいつものように飛び降りると、床までの距離が思っていた以上にあって着地に失敗しそうになった。照れ隠しに唇を曲げようとしたオビIIワンの目に入ったものはさらに異様だった。壁一面に広がる宇宙が視界を支配していた。惑星の大気を通さない原色の、荒々しく鮮やかな星々。懐かしい光景だ。そしてその手前のコンソールが目に入ったとき、オビIIワンはしばらく止まっていた呼吸を再開させた。ようやく分かった。これは侵入者の仕業などではない。いつものビジョンだ。この景色には強烈に見覚えがある。コンソールの前にはあの黒いアーマーを着た人物が座って瞑想をしていた椅子がある。今日に限って本人はいないが間違いないだろう。目を奪われるものがないと、この部屋の異常さがよく分かる。何の飾り気もなく、私物も置かれていない。昔のアナキンの私室はうっそうとしたジャングルのごとき有様で、ものであふれていた。天井にも壁にもポスターが貼られ、工具と古びた機械とドロイドのかけらしきものが床に散らばり、オビIIワンでさえ足を踏み入れるのを躊躇するほどだった。何しろシートの中にまで細かなねじや針金が入り込んでいて、うっかり腰を下ろそうものなら尻に刺さる恐れもある。それなのにこの部屋には何ひとつなくて、あの黒い人物の好きなものも人となりも伝わって

こなくて、もし本当にあのアーマーの中身がアナキンだと言うのなら、肉体だけでなく頭も心も機械になり果ててしまったに違いない。彼は何も捨てられない男だった。オビ・ワンが何気なく渡したがりくたや日用品でさえ捨てられなくてベッドの下に隠していた。あれは今もあのままなのだろうか。聖堂を荒らした帝国軍の兵士たちはアナキン・スカイウォーカーのベッドの下から石鹸やくしや布の切れ端を探してただろうか。あるいは彼自身か。

オビ・ワンは思考を中断してゆるやかに頭を振った。気を抜くとすぐに思い出に耽ってしまう。今日こそは探り当てないとならない。フォースが自分にいったい何をさせたいのか、きちんと考えないとならない。なぜいまこんな風になってから繋がってしまったのか。だがいくら考えても答えは出なかった。フォースがオビ・ワンに何かをさせたいにしても、その期待に応えようという気はあまり起こらなかった。集中力と意欲を失ってしまうとあとはビジョンから追い出されるのを待つだけだ。なのに待っても待っても目は覚めなかった。立ち尽くしたまま何日も経ってしまったような気がした。タトゥーの自室と違って快適だからいくらいても汗は出ないが、生理現象は起こる。オビ・ワンは空腹を覚えて驚いた。ビジョンの中で腹が減ることは普通ない。それに足も疲れていない。不安になって周囲を見回すと、窓から見える景色が変わり果ててしまっている。馬鹿な、とつぶやく自分の声が愚かしく聞こえた。窓に映し出されているのは超空間だ。つまり、この船がハイパージャンプ中だということ。オビ・ワンは窓に駆け寄り、ひんやりと冷たいトランスパリスティールに手を当てた。宇宙船に触れるのは久しぶりだ。懐かしかったが同時に冷酷なほど現実味のある

手触りでもあった。これがビジョンだなんてとても思えない。何かの悪い冗談だ。

よろめき、後ずさりをしてでも現実を変わらなかった。地下室の床に座りたくない、という気持ちだけが倒れ込むことを防いでくれた。とはいえもはやここは地下室ではないのだろう。船の中だ。おそらく帝国軍の。見つかったら殺される。殺されるくらいならどうということはないが、オビⅡワンが殺されたらいったい誰がルークを見守る？彼の幼い顔がちりと頭をよぎったとたん、逃げなければ強く思った。そもそもいったい自分はどこから入ってきたのだったか。地下室に通じる落とし戸からだ。おそるおそる顔を上げ、天井に目をやる。すると、白すぎる天井に換気ダクトに通じる黒い穴がぱっくりと口を開けているのが見えた。熱気とカオスと無が穴から伝わってくる。まさか、と思いながらも換気口の真下に立ち、天井を見上げる。黒の向こうにぼんやりした茶色いものが見える。目隠し用のラグの一部だ。まさか。そんなわけはない。オビⅡワンは全身にフォースを込め、穴に向けて思い切り飛び上がる。突如として熱気が襲いかかってくる。着地したところは自室の床で、何ということもない昼の光が射していて、貧しい食事の支度を途中で放り出したままの食卓が見えた。しかし落とし戸の下は白く完璧な空間で、果物を置いた地下室はどこにも存在していなかった。

馬鹿な、とつぶやくのは二度目だった。落とし戸を押さえる手が震えていた。何かを恐ろしいと思ったのはルークとレイアを抱いたとき以来だった。オビⅡワンは、この先何度も同じ現象を目の当たりにすることになる。

メサイア・コンプレックス

プロローグ	...	3
ゲームを始める前に	...	14
第一章 But who may abide the day of his coming?	...	19
第二章 And who shall stand when he appeareth?	...	105
第三章 For he is like a refiner's fire.	...	293

EP3 の三年後あたりの A/O。原作の一部の設定、展開を改変し捏造した二次創作です。本編の他にクローンウォーズのキャラクター、スピンオフ小説の設定なども出てきます。パドメ、アソーカなど女性キャラもけっこう出ています。残酷描写にもご注意ください。

性描写を含むため、十八歳未満の方の購入・閲覧・所持をかく禁じます。

ゲームを始める前に

本書の遊びかた

本書は自ら登場人物の行動を選択し、物語を作っていく**アドベンチャー・ゲーム**ノベルです。

すべての文章は**パラグラフ**と呼ばれる小さなセクションに分けられ、それぞれに番号が振られています。パラグラフの最後に「○を選択するなら5へ。●を選択するなら47へ」という選択肢が出てきますので、選択したパラグラフを探して進むとその後の物語が変わっていきます。

1. アドベンチャーシートについて

本書にはA6サイズの**アドベンチャーシート**が付属されています。もし挟まっていない場合には大変お手数ですが奥付のウェブサイトからPDFファイルをダウンロードし、印刷してご使用ください。お手持ちのメモ用紙やスマートフォンなどのメモ帳などでも結構です。

アドベンチャーシートには物語の進行状況（**チェックポイント**）を記録していく表面と、**エンディングリスト**を埋めるための裏面があります。進行に応じて通過点をチェックをする箇所がありますので、到達したチェックポイントにそのパラグラフの指示の通りに数字を記入していただく。数字の有無や大小で経過やエンディングが変わります。

2. エンディングについて

エンディングは複数あり、数パラグラフで終わってしまうものもあれば最後のページまで読み進められる結末も用意されています。満了したならいつでも本を閉じることができますし、すべてのエンディングを知りたいのなら付属のアドベンチャーシートに**エンディングリスト**が記されていますので、到達した番号に印をつけ、やり直してコンプリートを目指すこともできます。

途中で不本意なエンディングを迎えてしまった場合には、やり直すことのできる最後の分岐点であるパラグラフに戻って再チャレンジしてみてください。それでも同じエンディングに到達してしまうときは、章のはじめに戻って選択し直せば解決することもあります。

3. 本書で遊ぶために必要なもの（すべてスマートフォンメモ帳などで代用できます）

① 筆記用具

鉛筆と消しゴム、あるいは消せるタイプのボールペンがおすすめです。

② 付属のアドベンチャーシート

③ メモ用紙、付箋、しおりなど

選択肢のあったパラグラフ番号を記録しておく、やり直すときに便利です。

どうしてもループから抜け出せない、何度やっても最後のエンディングにたどり着けないなど、ゲームの進め方について分からないことがあります（奥付のQRコードから飛べます）か、SNSなどよりお問い合わせください。

プロログと本項にひととおり目を通したら、さっそく1へ。

第一章

But who may abide the day of his coming?

1

目が覚めたとき、オビィワンは床に横向きに倒れ込んでいた。いったいいつの間に眠ってしまったのだらう。窓の外を見るとすっかり夜だ。のろのろと起き上がり、ベッドと兼用のソファに腰かける。体じゅうの関節が痛い。頭痛もする。たいしたことのない痛みなのに奇妙に不安を覚える。だが床で寝ていたのだから当然だ。小さくため息をつく。あれから数日経ってしまったのかも知れない。タトゥーインに来てからは時間の流れが妙に速く、ただ瞑想をしようとして目を閉じただけで日をまたいでいることもある。とはいえ、何日も気絶してしまうのは普通ではない。眠る前までいったい何をしていたのだったか。

記憶をたぐって思い出してみるなら、2へ。

何も考えず、何も思い出さず、これからすべきことだけを考えるなら62へ。

やり直すために第三章からここに戻ってきたのなら、32へ。

2

徐々に神経を集中させ、体内にあるフォースを呼び覚ます。すると意識は自然と床の一点に向かった。そうだ。地下室だ。オビィワンは恐る恐る立ち上がり、その一点へと向かった。しかし地下室へ続く小さな扉は閉まっていて、目隠し用のラグも元通りになっている。気づかないうちに戻していたのだらう。

ラグに軽く触れると、白すぎるほど白い部屋と無菌室のごとき静けさと窓から見えた超空間の景色をまざまざと思い出す。もし夢でないのなら、あの部屋は黒いアーマーの暗黒卿のものだ。だがオビィワンの存在の中心に未来永劫残り続けるだろうアナキン・スカイウォーカーはあんな場所を好まない。彼なら一瞥しただけで「ずいぶん神経質な奴なんだな」と言ってせせら笑うだろう。その差異にどこかほっとしている自分がいて、ほっとしていることに吐きそうになる。身勝手にもほどがある。心なんてとくに死んでいるはずなのに、大昔の感情の影だけが残っている。オビィワンは真っ先にすべきことは、機械になることだ。わずかな感傷すらも殺さねば、これから先奴と対峙することは二度とできないだろう。ジェダイとして生き続けることも、ルークとレイアの役に立って死ぬことも、「選ばれし者」を守護することもできなくなる。ムスタファアの炎で自分を焼き殺すイメージを脳裏に思い描き、灰になった自分を指先から感じ、目を閉じる。義務を果たすためにこれから何をすればいいだろう。

ルークの様子を見に行くことだと思うなら、62へ。

もう一度地下室を確かめることだと思うなら、7へ。

ムスタファアで逃した決着をつけにくいことだと思うなら、46へ。

3

その日はさらに穏やかに寝つくことができた。現実から逃げるような眠りではなく、後悔に心を

絞め殺されそうになりながら意識を失っているたぐいの眠りでもない。夢もビジョンも見なかった。目覚めたときには体まで軽かった。さながらオイル風呂に入ったドロイドのようで、関節も筋肉も驚くほどスムーズに動く。この状態ならまともに戦えそうだ。

久しぶりにライトセーバーを持ってみたくなったが地下室が失われてしまった今、他のもので代用するしかない。二時間ほど金属製のパイプを振り回しているとだんだん息が弾んできて苦笑した。気づかないうちにずいぶん衰えていたらしい。これからはきちんと生きるだけでなく、昔のような自分でいるために努力しないとならない。

パイプを戻してシャワーを浴び、着替え、部屋の真ん中に立つ。やるべきことはもう決まっている。

ベイダーのシャトルに行くこうと思うなら、**52**へ。

ベスティンへ買い出しに行くなら、**19**へ。

今日一日特に何もせずにごすなら、**12**へ。

4

気分転換に街に出よう、と思った。先日行ったばかりだが地下室に置いた食料が取り出せなくなっ
てしまったので買い出しが必要だ。水と双眼鏡を持ち、イオピーに揺られていると昨日のことが嘘
のように感じられる。外の世界は平穏で、退屈で、すべてのことが他人事みたいに思える。

実際、今のオビIIワンには現実のだいたいの事象が他人事だ。ジェダイの生き残りはいまでもどこ

かに隠れておびえているだろう。帝国の王政に耐えかねた人々がどこかで反撃の機会をうかがっているだろう。オビⅡワンはそのどれもに力を貸すべき立場なのに、あるいは先頭に立つべきなのに、タトゥイーンから出ることすら考えていない。自分にできるのは待つことだけだ。なぜなら、フォースに選ばれたのはアナキンであってオビⅡワンではないからだ。

最後まで彼を苦しめた「選ばれし者」という肩書きはそれを持たぬ者にとっても重い。今までオビⅡワンはアナキンという恒星の周りを回る惑星のようなものだった。惑星は恒星の重力を失うととたんにどこへ行ってもいいか分からなくなる。新たな恒星にとらわれてその周囲を巡るか、流星という名の迷子になるかのどちらかだ。なのでここにルークがいる限り、オビⅡワンは留まらざるをえない。彼こそがオビⅡワンの新たな恒星で、重力の源だ。それでいいのか、と思わないこともない。自分はジェダイだ。責任ある立場だ。それに一度きりの人生だ。そもそもこれはオビⅡワンの過ちが招いたことだ。ただ待つのではなく、もっと主体的に行動すべきなのではないか？

はあ、とため息をつき、イオピーの背中を優しく撫でる。一日に一度はこのたぐいの葛藤をしている。しかし行動に移すという選択をしたことは一度もなかった。ルークという巨大な存在を見捨てることなどとてもできない。彼を自分の恒星だと思うのは、アナキンの子だからだろうか。アナキンと過ごした日々をもう一度やり直したいとも思っているのか。なんて浅ましい。オビⅡワンは顔をローブの裾で覆い、焦らずに呼吸を整えた。このたぐいの自己嫌悪も毎日のことだった。

いつもより少し遅い時間にアンカーヘッドに着き、食料の買い出しをしてから自宅に戻ったのは

すっかり日が暮れてからだった。

66へ。

5

いくら待っても無意味だと分かっているし、危険だと分かってもいる。だがそこから離れることはできなかった。目を離すこともできなかった。見つめ続けているうちにまたあの白い部屋が現れるかもしれない。何度も彼とささやかなやりとりをするうちに何かいい考えが浮かぶかもしれない。彼を救い、銀河を救い、ルークとレイアと救い、そして自分を救うたったひとつの妙案が。

オビⅡワンは自嘲気味に唇を引き上げた。馬鹿馬鹿しい。いったい何を期待しているのだろう。相手はシスの暗黒卿だ。あのヘルメットの下にあるものが彼の顔でなければきっとこんなことはしなかった。すべての生命の敵で邪悪な存在だと決めつけ、心を通い合わせることなど考えもしない。それなのにこんな愚かな望みを抱き続けているのは、オビⅡワンの心が死にきっていないからからだ。無感覚な機械になりきっていないからだ。彼の肉体や精神も、まだ虚無に侵されきっていないからだ。

そう思うといってもたってもいられなかった。もし何か行動を起こすなら、もし自分の意志で何かを選ぶならいまいけないという気がした。五年後でも十年後でもなく、ルークが大人になる十六年後でもなく、いまだ。もし銀河やルークやレイアや自分たちをこの先に待つ破滅の運命から救える

とすれば、まだ互いに柔らかい部分を残しているこのタイミングだけだ。オビⅡワンは唇を引き結び、丸く切り取られた空間をにらみつけた。

思い切って中に飛び込んでみるなら、71へ。

もっと他の手段を探ってみるなら、39へ。

せめて身辺整理をしてから行くなら、28へ。

6

オビⅡワンはいったん自室に戻ることにした。魔法のような力が働いてでもいるのか、この中にいると妙に疲れる。換気口の真下から飛び上がって自室に戻ると、タトゥーインの強烈な暑さが体じゅうの毛穴という毛穴からどっとなだれ込んできた。宇宙船の中の人工的な快適さとは正反対だ。以前のオビⅡワンはどちらかというと快適さを好んでいたが、今は野放図なタトゥーインの気候に触れるとどういうわけかほっとする。手の甲で汗を拭いながら落とし戸を閉める。

夢のような時間だった。あるいは悪夢のようなのか。現実なのか幻覚なのか、まだはっきりとは分らない。孤独な生活が長すぎてついに発狂してしまった可能性だってある。それならそれでもいい。ルークに危険が迫っていないのなら、自分一人が冷や汗をかいたりあわてふためいたりするぶんには構わない。オビⅡワンは息をもらすように笑い、ゆっくりと立ち上がった。腹が減ったような気がして不快になった。できることなら食事などしたくないが生きるためには仕方がない。居

間の方へ歩き出し、大きく息を吸い込む。

チェックポイントAに数字が記入されているなら、47へ。

空欄のままなら、11へ。

7

地下室の落とし戸の向こうに何があるかをもう一度確かめないと、安心してここで暮らすことさえできない。もし暗黒卿や帝国軍に居場所を嗅ぎつけられたら命はないだろう。必要ならルークとともに移動し、さらに辺境の地で隠れ住まなければならなくなるかもしれない。それを考えるとじつとしてはいられなかった。どういった理屈でこの狭苦しい地下室が宇宙船と繋がってしまったのかは分からないが、そこが帝国軍の船であるならこれ以上に差し迫った脅威はない。

オビⅡワンはくたびれたラグを剥がし、ひとつため息をついてから扉の取っ手をつかんで引き上げた。中を見下ろすと案の定、薄暗い地下室ではなく白い空間が広がっている。慎重に飛び降りると思ったより足音が響いてひやりとした。部屋の中には相変わらず誰もいない。窓の外は超空間で、ハイパージャンプ中のようにだ。

「さて」と声に出してつぶやく。この現象がどれほどルークと自分にとって脅威なのかをしっかりと見極めなければ。前回はそんな余裕はなかったが、いつまでも驚いてばかりはいられない。どこから調べたらいいだろう？

コンソールへと向かい、データをスクリーンに映し出してみるなら、**43**へ。
いつもビジョンでベイダーが座っていた椅子に座ってみるなら、**44**へ。

部屋の外へ出て船内をうろついてみるなら、**8**へ。
このまま自室へ戻るなら、**6**へ。

8

この部屋は単なる暗黒卿の居室だ。もっとも重要な情報はこの外にある。誰が乗っているのか、どこへ向かっているのかを知らなければならない。ライトセーバーがないので少々不安だが、オビワンは隠れ潜みながら船内を探索することにした。

船はシャトル程度の大きさのようだった。白い部屋以外にはキャビンが二つあり、武装したストームトルーパーも乗っている。換気ダクトからコックピットを覗いてみると操縦席にはアストロメクのドロイドがいた。もちろんアナキンが心から愛していたR2-D2ではない。R2は本当の意味での彼の親友だった。R2も彼を愛していたし、心配していた。今でも心配しているだろう。どんなに彼が変わり果ててしまっても、R2なら一目で見抜くことだろう。オビワンはコックピットのドロイドに聞こえないようにため息をついた。

白い部屋に戻って探索を続けるなら、**37**へ。

自室に戻るのなら、**6**へ。

9

侵入者がまだ家の中に潜んでいるかもしれない。オビⅡワンはグロロードで照らしながら物陰やソファの下を探り始めた。とはいえ、狭い家だから隠れられる場所などほとんどない。ざっと中を探すと、今度は双眼鏡を持って外に出た。家の周囲はさらに身を潜める場所がない。何しろ一面の砂漠だ。必死で走っても隠れられはしない。なのにどんなに注意深く探しても、怪しい人影どころかサンドピールやジャワの姿すら見当たらなかった。オビⅡワンは軽く首をかしげ、双眼鏡を下げた。他人が入り込んだと思ったのは気のせいだったのだろうか。どうも自分の感覚に自信が持てない。今日はもう休んだ方がいいのかもしれない。

11へ。

10

それから二十年近くの月日が経った。オビⅡワンがルークとともに隠れ住むことに決めた場所はタトゥインよりさらに外縁にあり、ほとんど誰も寄りつかない小さな星だった。支配者はいるが銀河元老院にも属しておらず、統治らしきものは何もされていなかった。まともな経済活動が行われている形跡もないから機械類や薬が手に入りにくい。しかし気候という点ではタトゥインよりはるかにまじだった。水は豊富で、耕作もできる。少し足を延ばせば静かな水辺や険しい山もある。隠れて子供を育てるにはうってつけの場所だ。

定住を決めたときオビⅡワンはすぐにオーウェンとベルーに暗号化したメッセージを送ったが返事は来なかった。当のルークはというと、夫妻から引き離されて毎日泣き暮らしていた。背中を丸めてすすり泣く姿を見るとアナキンを思い出した。間違ったことをした、という思いはいつまでも消えなかった。しかしどんな悲嘆も長くは続かない。子供は適応に長けているから、彼はすぐにこの環境に慣れてオビⅡワンを驚かせた。もちろん彼は生きるために表面上そうしたにすぎない。ルークの心の奥には憎しみと悲しみと怒りと苦痛が押し込められ、爆発するタイミングを待っていた。

オビⅡワンはルークをジェダイとして育てる気はなかったが、アナキンを思わせるほどの才能の萌芽を彼の中に見つけるともはや誘惑に逆らえなくなった。フォースを教え、ライトセーバーを持たせ、知識を授け、ジェダイとしてのものの考え方を叩き込んだ。ルークはこれ以上なくいい生徒だった。素直さという点においてはアナキン以上かもしれない。しかしオーダーが存在していたころなら彼をもっと強力なジェダイにしてやれただろう。同年代のパダワンと切磋琢磨させ、たくさんのマスターたちから学ばせられた。ルークが知っているジェダイはオビⅡワンだけだ。それではいかにも心許ない。

なのにオビⅡワンが持ち出した書物からマスターとパダワンの師弟制度を知ったルークは、ある日突然自分をパダワンにしてくれと懇願しに来た。そのときの戸惑いは言葉にはできない。頭に浮かんだ唯一の言葉は、「恥」だった。ルークをパダワンにする？それほど恥ずべきことは他にない。自分ばかりでこの手で弟子を殺した人間だ。二度と弟子を持つ資格はない。オビⅡワンが無言でゆっ

くりと首を横に振ると、ルークは悲しげに眉を下げた。アナキンに似た目が「どうして」と言っていた。アナキンに似た口元が不安と不満を伝えていた。彼がなぜ悲しそうなのか、オビⅡワンにも分かっているつもりだった。ルークは幼いころ親代わりの存在から引き離された。その埋め合わせを無意識にオビⅡワンに求めている。アナキンの子供のころと同じだ。すべて分かっていた。だがオビⅡワンはどうしても彼を引き受けることができなかった。

爆発は目前だったが、それが起こるまでどうすることもできなかった。自分たちの預かり知らぬところで皇帝に居場所を突き止められていたことにも気づけなかった。シディアスはストームトルーパーの大軍をジェダイ二人に差し向けるような愚かな真似はしなかった。その代わりルークに近づいた。決してオビⅡワンに気どられないように、そして自らの弟子のベイダーには知らせず、ひそかに。ルークの心は徐々に暗黒面に蝕まれていった。心身の成長とともに入り込んで絡みついた暗黒面の闇は容易に振り払うことができない。オビⅡワンはこのとき真剣に彼をヨーダの元へ送ることを考えていた。自分にはもはやどうにもできないが、かのグランド・マスターならルークをうまく導いてくれる。だがそれを彼に告げると、悲しみとも怒りとも苦痛ともつかない色を瞳に浮かべ、涙とともに絞り出すようにこう言った。「あんたなんか大嫌いだ」。

そこから先は、すべてが驚くべき速さで進んだ。まずオビⅡワンはその数分後に死んだ。そしてルークはダース・シディアスの弟子となり、彼を自分の父とも知らぬままベイダーを殺し、二人は銀河を支配した。さらに気が遠くなるほどの長い年月をかけ、ルークは暗黒面の覇者となった。

彼はかつてこの銀河の唯一であり最大の希望だった。選ばれし者だった。本当は今もそうで、永遠にそうあり続けるとオビⅡワンは信じている。そうならなかったのはよりにもよって自分が師であつたせいだ。明らかな役者不足だったからだ。だがオビⅡワンが犯した最大の過ちはそのどれでもない。運命への盲従こそが判断を誤らせたという事実には、きつと永遠に気づかないままだろう。

(ED5・希望を殺したもの)

11

簡素すぎる食事をし、ベッドに横になるといつの間にか朝になっていた。それだけ疲労が深かったのだろう。タトゥイーンに来てからは浅い眠りしか経験していなかったから少し懐かしかった。

昔のオビⅡワンはジェダイらしく、どこでも寝られる人間だった。冷たい岩の上でも不潔で騒がしい海賊船の床でも、聖堂の自分のベッドで眠るときと何ら変わらない気分で夜を過ごせた。唯一落ち着かなかったのは自分の寢床にアナキンがいたときと、アナキンの寢床に自分がいたときだ。彼が枕を持ってオビⅡワンの私室を訪れ、「一緒に寝ていい？」と消え入りそうな声で聞くのは決まって、マスターに隠れて何かの失敗や悪事をしてしまった日の夜だった。必死で隠しているのに罪悪感に耐えかねて、彼は必ずマスターのところまでやってくるのだった。ベッドの中で背中合わせになるとアナキンは小さな体をもぞもぞと動かして、どうにか耳に届くぎりぎりの声で「マスター大好き」とつぶやいた。その言葉が唯一の庇護者であるマスターに嫌われたくない、見放されたく

ない、という気持ちの表れであることは明白だった。自分のような不完全なマスターの愛情だけを頼りに生きている彼が哀れでならなかった。お前を嫌ったりなどしないよ、と心の中で応え、何も聞こえなかったふりをした。彼はすぐに眠ってしまったが、オビⅡワンは明け方まで眠れなかった。目が覚めたとき、どういいうわけか自然と彼の姿を探していた。長く横たわっていると背中が痛くなるベッドから身を起こし、周りを見回す。ずいぶんぐっすり寝てましたね、という呆れ声がどこから聞こえないかと耳を澄ませる。彼のせわしない足音と、遠慮のない笑い声と、ふてぶてしくせにいつもマスターの顔色をうかがっているような視線を探してしまう。そうしてしばらく経ってから顔を伏せ、そのまま頭を強く振った。いったい何をしてるんだ、と吐き捨てる。だから深く眠りたくないのだ。寝ぼけて浅ましい夢を見てしまうから。「マスター大好き」というささやき声がまだ背中に貼りついている。気配の残滓が頭の奥をきつくえぐる。オビⅡワンはそれらを振り払って体を起こし、貴重な水を使ってシャワーを浴び、着替えて髪とひげの手入れをした。身なりを整えれば何とか普段通りの自分になれる。

簡単に掃除をした後、オビⅡワンは落とし戸の真上に立って深呼吸をした。ここは今もまだ、あの白い部屋に繋がっているのだろうか。入ってみるべきか。それとも別のことをするべきだろうか？

今日も白い部屋に行ってみるなら、15へ。

瞑想をして一日過ごすなら、54へ。

アンカーヘッドまで買い出しに行くなら、4へ。

12

また朝が来た。頭も体も軽い。一通りの身支度を済ませて部屋の本真中に立つと、どこかすがすがしい気分になった。人間らしく生きている、という気がする。

さて、今日はいったい何をしようか。

落とし戸を開けてシャトルに行くなら、61へ。

ベスティンで買い出しをするなら、19へ。

今日一日特に何もせずに過ごすなら、このパラグラフを最初から読み返すこと。

あるいは、ここへ来るのが四度目以降なら、34へ。

13

そのときぞくりとした違和感を覚えた。動きを止め、感覚を研ぎ澄ませ、素早く視線を巡らせた。だが家の中には誰もいないし何の物音もしない。フォースが危険を伝えてくることもない。もしかしたら疲れすぎて神経が過敏になっているのかもしれない。

早く眠ろう、と思い、オビIIワンは眠りにつくための準備を始めた。

41へ。

14

幸いその日からビジョンを見ることがなくなり、オビⅡワンは本来の義務に集中することができた。毎日瞑想をして穏やかに過ごし、できるだけ人目を避け、陽が落ちる寸前には必ずルークの様子を遠くから見守る。

それから十六年後、銀河は新たな希望を目の当たりにし、同時にオビⅡワンの人生は静かに幕を閉じる。歴史に名を残すこともなく、最初から何もなかったようにひっそりと。

だが彼の残した愛と執着と後悔の影だけはその後もしばらく銀河を苦しめることになる。

(EDI・新たな希望へ)

15

少なくとも、まだあの白い部屋と繋がっているかどうか確かめるくらいはするべきだろう。もしかしたら二日続けて幻覚を見たのかもしれないし、本当に発狂したのかもしれないし、夢だったのかもしれない。オビⅡワンはラグを剥がし、重たい扉を持ち上げる。一瞬ぎゅっと目をつぶってから開いて地下室を見下ろすと、やはりそこは一面の白だった。冷たい空気が流れ込んでくる。肌の表面がぴりぴりと痛い。間違いないこれは現実だ。いい加減認めなければならぬ。

覚悟を決めて床に飛び降り、人の気配を探る。だがいつも通り誰もいなくて、扉の外からも音が聞こえない。部屋の中も昨日と変わったところは何もなかった。埃ひとつ落ちていないし、何の匂

いもしない。窓の外は相変わらず超空間で、またこの船がどこかハイパージャンプしているのが分かる。オビIIワンはコンソールの前の椅子に座り、窓に映る景色をひたすら眺めていた。まるでパダワンだったところに戻ったかのようだ。あのころは旅が楽しかった。超空間に入るとわくわくした。船に乗ると必ず窓に張りついていた。マスターに苦笑されながらコンソールを占領して通信係を気取っていた。こんな風に。思わず手元を見ると、コンソールに接続された小さなデータパッドがあった。ボタンがまるで誘うように点滅している。

データパッドを起動してみるなら、35へ。

立ち上がって部屋の中を調べてみるなら、30へ。

あるいは部屋の外に出て何かを調べるなら、60へ。

16

なくなって惜しいと思うものは何も持っていなかったから、身辺整理はすぐに終わった。地下室にしまっておいた自分のライトセーバーを取り出し、アナキンのライトセーバーを仕掛けつきの箱に隠して元の場所に置いただけだ。そういえば地下室の落とし戸の向こうが奇妙な白い部屋になっていたことをふと思いついたが、今はごく普通のいつもの地下室だ。もし魔法のようなものが働いていたとすれば、ここを発とうと決めたときに消え失せてしまったに違いない。オビIIワンはライトセーバーだけを持ってモス・アイズリー宇宙港へと向かった。最初はイオピーに乗り、途中で打ち

捨てられたスピーダーに乗り換えて。何年も暮らした我が家を振り返りもしなかった。もし次にまたここに来るとしたら、肉体が滅びて宇宙のフォースに溶け込み、新しい命となった後のことだろう。次こそはたった一人の弟子を幸せにすることができくらい、彼を笑顔にすることができくらい、よいマスターでありたい。

(ED2:二度目の対決)

17

そのとき激しい違和感が雷のように背筋を貫いた。また侵入者だ、と反射的に思った。しかも昨日感じた、ささいな疑念とは別物だ。間違いない。誰かがまたしてもここに入った。そして出て行った。昨日よりもはるかに長くいたし、深く関わっていた。部屋の調度が丸ごと入れ替えられてしまったかのようで、見慣れているはずなのにまるで見覚えのない景色に思えてくる。鼓動が速くなり、胸の真ん中に手を当てる。落ち着け、と自分に言い聞かせる。ありえない顔がふたたび脳裏に浮かぶ。顔。マスク。ヘルメット。そのどれでもいいが、その人物が狭苦しいこの部屋を闊歩している想像がどうしても頭から消えない。フォースを探ってもきつと答えをくれないだろう。となると頭を使わなければならない。その前に平静を取り戻すことが必要だ。しかし焦れば焦るほど鼓動はどんどん速くなっていく。いったいどうやって侵入者の影を探るべきだろうか？

何かなくなったものがないかを探ってみるなら、45へ。

外へ出て足跡を探してみるなら、26へ。

もう一度白い部屋に向かって本人を直接問い正そうと思うなら、50へ。

チェックポイントDに数字が記入されているなら、23へ。

18

オビIIワンはその場で床に座り込み、目を閉じ、心を落ち着けてフォースに語りかけた。フォースは驚くほど多くの記憶を持っていて、人が他人に語らない感情や言葉でさえも知っていることがある。静かな声で言葉もなく語りかける。しかしフォースは鈍重な草食動物のようにゆっくりと鎌首をもたげ、オビIIワンのむき出しの精神から顔を背けた。焦るな。まだ繋がりが弱いだけだ。集中を深くし、のめり込み、さらに意識を浸らせる。しかしフォースは手を伸ばしたそばから逃げゆき、裾に触れることすらできない。オビIIワンは長いため息をついて現実の世界に戻っていった。他人が入り込んだと思ったのは、決して気のせいではない。フォースが記憶を探らせないのはおそらく意図があつてのことだ。となると、ここにいた人物はただの物盗りなどではないのだろう。ひとつの名とひとつの顔が頭に浮かんだ。だがそんなことはありえない。力なく頭を振り、心から疑念を追い出して立ち上がる。今日は何も考えず食事をして休んだ方がいい。たった数時間であまりに多くのことがありすぎた。

チェックポイント「B・侵入者の影」に0と記入して、11へ。

ほんの少しとはいえ人間らしさを取り戻してみると、日ごろの食生活の貧しさがまず気になった。聖堂で暮らしていたころから食には興味がなかったが、それでも岩のごときパンだけというのはいかにも味気ないし体にも悪い。オビIIワンはジャワのサンドクローラーに乗せてもらい、もっとも近いベステインに向かった。ベステインは銀河のほぼすべての都市と比べれば小さいが、タトゥーインの中では比較的大きな集落だ。だがベステインに行くのはよほどのことがあったときだけで、普段は人目につかないようさらに小さなアンカーヘッドで用を済ませる。なのに食料の買い出しごとの用事でここまで来ようと思ったのは、それなりに興奮状態にあったからなのかもしれない。

足早に店を回って買い物をし、ジャワたちが戻ってくるのを待っている間にカンティーナで涼んでいると、嫌でもホロネットのニュース番組が目に入った。できるなら目にしたくないたぐいのものだ。現在の銀河にはジャーナリズムは存在しない。星の数ほどあったホロネット・ニュース会社は銀河帝国の誕生とともにすべて潰され、いまでは帝国のプロパガンダだけを放映している。

弱い酒をすすりながら画面に視線を移すと、とある元老議員がジェダイを匿った罪で逮捕されている瞬間が映し出されているところだった。見覚えのある議員だ。そして議員とともに連行されているジェダイの顔も当然知っている。オビIIワンが覚えている限りではまだパダワンだったはずで、二十歳にもなっていない。議員もジェダイの若者も、きつとすぐに殺されるだろう。聖堂で死んでいたたくさんの仲間たちのように。

止めなければ、と強く思った。こんなことは早く終わりにしなければならぬ。たとえジェダイオーダーが償いきれないほどの罪を犯していたとしても、人があんな風に殺されなければならない理由はない。しかしオビⅡワンに何ができるだろう。オビⅡワンの使命は、本当に最後の切り札であるルークを守りきることだけなのだろうか。本当にそれだけが自分の運命なのか？

ニュースが終わり、「ジェダイの生き残りであると思われる者に心当たりのある方は、すぐに各星系の総督府までご連絡を」といういつもの警告文が流れ始めたあたりで店を出た。怪しまれないようにフードを深くかぶり、ジャワの待つ町外れまで歩いていく。別の店からもニュースの音声が聞こえてくる。オビⅡワンはいっそう息をひそめる。そして同じ問いを自分にする。答えは、もしかしたら目の前にあるのではないかという気がした。

12へ。

20

もしかしたら、ベイダーは換気ダクトに潜んでいるのかもしれない。しかし何のために？オビⅡワンが何度となく白い部屋に現れたことに気づいているからか？どちらにしろ、早く戻った方がよさそうだ。あの男がどこから現れるか分からない。

53へ。

「……マスターはすべてご存知なのですか？ このことについて」

「すべてではないよ。フォースでできたこの体とて万能ではない。お前の想像通りのことしか言えん」
想像通り、という言葉が鋭く胸を刺してきた。オビⅡワンはまだ何の想像もしていない。彼に同情するべきか否か迷っていただけだ。

「恐ろしいのか、それが。いったい自分たちに何が起こっているのかを想像することが？」

「正直に言えばそうなります。私はこれからも、時が来るまで何にも関わらずに日々を過ごすつもりでした。ルークを守ることだけに全神経を使い、すべて他人事のように生きていくはずだった」
いまやルークだけが自分の関心事だ。彼はたったひとつの恒星だ。ただの惑星であるオビⅡワンに過去を変えることはできないし、未来を変える力もない。そんな資格もない。もししようと思ってもまた失敗することだろう。アナキンを失ったときのように。

「なのに、フォースは私に『関われ』と言っている気がします。無理にでも私をこの家から引っ張り出そうとしているような……」

「その通りだ。さすが私の弟子だな」

クワイーガンは満足そうに微笑み、足を動かさずに移動してラグの上に立った。

「この通り、フォースはお前に機会を与えた。しかしそれがどのように作用するかまでは分からない。すべてはお前の選択次第だ。意を決して行動するか、放り出してこの狭苦しい家に逃げ帰るか」

「行動すれば掟にもマスター・ヨーダの指示にも反します。私自身の矜持にも」

「掟？ そんなものもう忘れろ。マスター・ヨーダは遠く離れていてもお前に何が起こっているかを知っているはずだ。それにそのお前の矜持とやらは、さっさと捨て去った方がいい部類のものではないかな。どうせいつも通り頑固になっているだけなのだろう？」

「ずいぶんなお言葉ですね、マスター・クワイーガン」

オビーワンは思わず噴き出し、久しぶりに自分の頬に笑みが浮かんでいるのを感じていた。

「すまん。どうやら死ぬと氣遣いができなくなるようだ」

「元気に生きておられたところからマスターはそうでした。が、確かにおっしゃる通りかもしれません。今の私に足りないのは前を向くこと、そして行動なのでしょう」

二人同時に苦笑する。オビーワンが幼いパダワンだったころ、クワイーガンは意地を張りすぎる弟子を扱いかねていた。氣を遣われるとますますかたくなになるし、叱られると自分を恥じて必要以上に消極的になってしまう。だが、からかわれると顔が赤くなるだけで肩の力が抜けた。いまだに自分は十代のパダワンと同じなのだ。恥ずべきことだが、今さら格好つけても仕方ない。

「せっかく前向きになったのなら状況を整理しよう。この下にあるものが何だか分かるか？」

「ええ、もちろん。ベイダーの専用シャトルです」

「その通り。しかしそれだけではない。ことはもっと深刻で、お前の仮住まいとアナキンの仮住まいが超次元的に繋がっているのだ。どういうわけか、な」

クワイーガンは頷き、ちらりと足元に視線を移した。

「もちろん、過去に例がまったくないわけではない。大昔、アウターリムの星のジャングルとコルサントの高層ビルの一室が一時的に繋がり、ジャングルの猛獣が街中に逃げ出して大混乱に陥ったことがある。私とマスターはその謎を解き明かすために奔走したが、繋がり数は数日でふっと途絶えた。ある研究者によると、ハイパージャンプが実用化されたところから銀河のほうぼうで同じことがたまに起こっているらしい。しかしそれはランダムなものだ。いまは敵対してお互いを避けている元マスターと元パダワンの部屋同士が繋がる、などという前代未聞の偶然は絶対に起こりえない。天文学的確率、と表現するのもおかましいほどだ」

小さくため息をつく。もちろんこれが偶然などとは最初から思っていない。

「もちろんです、マスター。偶然でも純科学的な現象でもない。おそらくフォースの意志なのだと思います。ここをベイダーの居場所と繋げることで、私に『行動しろ』と告げているのです」

「ほう。フォースはお前にどのような行動をさせるつもりなのだ？ シャトルを恒星に突っ込ませたり、あるいはムスタファアのやり直しをしてベイダーと差し違えようと衝動的に考えたことは一度もなかったらうな？」

オビIIワンは言葉に詰まった。ちらとでも頭をよぎったことがないと言えば嘘になる。しかしそれらはすべて選ばなかった道だ。ジェダイとして、彼の元マスターとしてとるべきでない行動はしなかった。はずだ。

「そんな顔をするな、オビⅡワン。お前がそのような段階を抜けたことは分かっている。しかし自らの行いに対して自覚的になることは大事だ。お前は常に忍耐を忘れず、一度も衝動に身を任せなかった。その結果、また別の行動をとることができるといふわけだ」

「別の行動？ それはどのような……？」

ラグに浮かんでいるクワイⅡガンの霊体は、微笑を浮かべてオビⅡワンの肩に手を伸ばしてきた。『前を向くこと、そして行動』。お前自身が言った言葉だ」

「あまり答えになっていないようですが」

「何でも私の指示をおおがけないと不安になってしまふ癖は変わっていないな。すべてはお前が考えるんだ。頭だけでなく、心でも。お前がパダワンだったころから何度も口を酸っぱくして言ってきたが、心が欲するものを自覚することは衝動とは言わんぞ。ジェダイの枠を外せ。思い込みの檻を破れ。そうして初めて本当に『行動した』と言える」

昔のアナキンでも言わないような過激な発言だが、懐かしくてつい口元に笑みが浮かんだ。

「感謝します、マスター。私には荷の重い任務ですが、できるだけやってみせます」

「試しはないのだ、オビⅡワン。やるだけだ。荷が重かろうとなんだらうとこれはお前にしかできない。いや、お前だけではないな。アナキンにも同じ重荷が降りかかっているのだ」

「アナキンに？ なぜです？」

驚いて目を見開くと、クワイⅡガンは少しおかしそうに笑った。

「意外ではなからう。お前と同じことがアナキンにも起きている。彼も今ごろお前と同じ葛藤をしているはずだ。なぜよりもよってオビⅡワンの居場所と繋がってしまったのか、と」

急に居心地が悪くなる。彼がここに来て何を思っていたのかと思うと不安になる。軽蔑したのだろうか。こんなところでいったい何を、と思っているだろうか。昔の面影はどこにもないな、と笑っただろうか。しかしその彼も今ごろ同じようなことを感じているのだ。あれだけ手ひどく裏切っておきながらしょせん皇帝の使い走りにしかねなかったことを笑っているんじゃないか。不自由で醜い自分をさげすんでいたりしないか。オビⅡワンは唇を噛みしめ、自分で自分を抱きしめた。お前を笑ってなどいない。さげすんでもいない。だがどう受け入れたらいいのか分からない。受け入れるべきかどうか分からない。許すべきなのか、拒絶するべきなのか。それは彼が子供だったころから抱いてきた葛藤とまるで同じだ。アナキンの「愛してくれ」という心の声にどう応えたらいいかを悩んでいたときと。

「いいか、オビⅡワン。ここから先は私は手助けしてやれん。さんざん迷うだろうがとにかく進め。心を開いて自分と向き合え。そうすれば悪いことにはならないだろう」

ここから先、という言葉が引っかかった。フォースとなった彼には未来を見通すことができる。しかしオビⅡワンには見えない。

「どこかへ行かれるのですか、マスター？」

「私が行くのではない。お前が行くのだ。だからアドバイスをしてやっている。何しろお前の元マ

スターだからな」

クワイⅡガンはにやりと笑って片目をつぶる。どうもよく分からない。礼をしてからゆっくりと目線を上げると、オビⅡワンの元マスターはラグの上からふっと姿を消した。「お前が行くのだ」？ いったいどういう意味だろう。ここに隠れ住んでいる限り、どこかに行く用事など生じない。オビⅡワンは首をかしげ、あごひげに手をやった。クワイⅡガンはよく弟子を煙に巻くが決して嘘はつかない。そのうち彼の言葉の意味を身をもって理解できる日が来るだろう。いつになるのかは分からないが、それだけは間違いない。

チェックポイント「F・クワイⅡガンの助言」に1と記入し、41へ。

22

「……ったな。本当にどこにもいないのか？ 隠れてるんじゃない？」

ずいぶんくぐもった声だ。ストームトルーパーのものに違いない。

「狭いシャトルだ。隠れられる場所なんてない。魔法でも使わなきゃ消えられないぜ」

「魔法か。もしかしたらジェダイの技を使って消えたのかもしれないぞ」

「馬鹿、その言葉聞かれないようにしろよ。殺されるぞ」

会話を聞く限り、ストームトルーパーは三人いる。囲まれたらまずいことになるかもしれない。早くここから退散するべきだったのに、気になる単語が出てきたせいで足が動けなかった。「ジェ

ダイの技」。いったい何の話だろう。

「まったく、次は子守以外の任務につきたいぜ。何だってハイパースペースに入るたびに姿を消すんだ？ おれたちを試してるのか？」

「さあな。しかし、上にどう報告したらいいものか」

「報告なんてだめだ。『任務の途中で消えた』なんて馬鹿正直に告げ口したらこっちが消される。あの黒ずくめ卿どのは部下の命なんぞ鼻紙程度にしか思っちゃいないからな」

思わず目を見開いた。「黒ずくめ卿どの」とは間違はなくベイダーのことだろう。彼らの話を総合すると、ベイダーが「ハイパースペースに入るたびに姿を消」している、ということになる。

鼓動が速まり、指先が冷える。この船は今、ハイパージャンプをしているところだ。つまり彼はいまここにいない。どこかに姿を消している。しかし彼らが話していた通り、ここには隠れられるような場所はない。ハイパージャンプ中に脱出ポッドを使うと空間と空間のあわいに閉じ込められてしまう。

どっと冷や汗が流れ出た。もしかして、と思った。

チェックポイントBに数字が記入されているなら、**31**へ。

空欄のままなら、**20**へ。

頭の中で何かが弾け、大事なことを思い出した。船の中でトルーパーたちが交わしていた会話だ。決まってハイパージャンプ中にいなくなるベイダーの話。彼の体は大きく、シャトルは狭く、どこにも隠れる場所はない。なのに部下たちが必死に探しても見つからない。その話を聞いたときにちらりと頭をよぎったのは、もしかしたらオビⅡワンと入れ替わりで彼がここに来ているのではないかという可能性だった。オビⅡワンが彼のシャトルにいる間、彼はオビⅡワンの自室にやって来ている。そしてオビⅡワンがやったように、あてもなくここを探索したのかもしれない。となると、どこかに痕跡があるはずだ。これほど強い違和感を残しているなら彼はおそらく何かに触っている。もし仮に地下室に続く落とし戸から入ってきたのなら、一番先に目につくものは物置だ。確か壁にはロープとフック、そして古びたライフルをかけていた。時代遅れの電子双眼鏡と大きな工具は反対側にかかっている、床には救急セットが置いてある。そして入り口の横には水分凝結機やジェネレーターなどの大型の機械を直すために使う、長いパイプとワイヤーを立てかけていた。もし帝国軍に見つかってここに踏み込まれても、フォースでパイプを倒せば逃げる時間を稼げる。だが日常的に出入りするには邪魔で不便でもある。なのに、今日に限って出入りにあまり邪魔にならないような位置にパイプがある。普段のオビⅡワンならこんなことは決してしない。帝国軍に見つかることを常に恐れているから、うっかり倒してしまっても必ず元の邪魔な位置に戻す。もっと他にやりようがあるのかもしれないが、自分が不便を我慢すればいいだけならオビⅡワンは迷わずそちら

を選ぶ。しかし彼はいつも妙なところで几帳面だった。オビⅡワンのやり方に文句をつけ、そんな雑な片づけ方しないでもっと効率よくすればいいのに、と唇を尖らせていた。感情を抑え、呼吸を落ち着け、他の場所に視線を巡らす。

そういう目で見てみると、居室の中はさらに異様だった。まず椅子のひとつが倒れている。オビⅡワンが廃材で一から手作りしたものだ。少々背もたれが長く、ときどき邪魔になる。しかしオビⅡワンくらいのサイズの人間なら間違って倒してしまうことはまずない。もし背もたれを引っかけてしまうとすれば、よほど大柄か長々しいマントを羽織っているかのどちらかだ。義手義足で視覚も不自由なら、椅子を倒したことに気づきもすまい。

そして極めつけは、居間に置いている箱という箱、棚という棚を開けた形跡があることだった。オビⅡワンは留守中に侵入されたときのために、扉や箱などの開閉できるすべてのものに布切れを挟んでいる。もし誰かが開けたら分かるようにだ。驚くことに、部屋にある全部の箱と棚から印の布切れが落ちていた。これを開けた暗黒卿はおそらく布切れの存在に気づいていないだろう。何かを必死で探していたのか、それとも何となく開けてみたのか、オビⅡワンには分からない。もしかしたらライトセーバーを探していたのかもしれないし、オビⅡワンが自分の故郷に隠れ潜んでいるはつきりとした理由を探していたのかもしれないし、あるいはもっと個人的な動機で箱を開けてみたのかもしれない。「個人的な動機」。

地下室に移す前にライトセーバーを収めていた箱の前にしゃがみ込み、オビⅡワンは深くため息

をついた。オビⅡワンが白い部屋を探索した動機だって完全に個人的なものだ。公的な義務感から行ったことではない。もし自分にその気があれば、彼とそのマスターが敷いている恐怖政治を終わらせるために手を打つこともできた。白い部屋に爆弾を仕掛けることもできたし、トルーパーたちを皆殺しにすることもできたし、シャトルの進路を恒星の真ん中に設定して破壊することもできた。あるいは皇帝が使っている暗号コードを盗んで通信を傍受し、指令を受けたベイダーが向かう前にジェダイの生き残りを逃がすことだってできた。なのにそうしなかったのは、自分のために他ならない。オビⅡワンは自分のために皆を見殺しにした。ベイダーとふたたび対峙するためには時間が必要だったからだ。気が遠くなるほどの時間が経ち、感情と感覚を失って機械になり、何も感じなくなってしまうと再会に耐えられなかった。ルークの存在を言い訳にし、たくさんの命を犠牲にして、するべきことを先延ばしにしてきたのだ。なんて卑劣な。

嵐のような自己嫌悪を抑えようとして目の前の箱に手をつくと、触れたところから軽い電撃が走った。フォースが発する警告に近いが不快なものではない。恐る恐る開けてみると、中には当然何もなかった。ライトセーバーを地下室に移してからは何も入れていないからだ。その代わり、まるで実体のないものが入っていた。オビⅡワンが入れた覚えのないもの。それはどこかあたたかなフォースで、澁刺さと戸惑いと迷いを目一杯に含んでいた。鼻の奥が痛いほど熱くなるのを感じた。懐かしくていとおしくて苦しい。アナキンが幼かったころに彼のフォースから同じ匂いを感じた。特に何かを問いかけられてオビⅡワンが返事をする前のわずかな時間、不安とも迷いとも知

れない感情が彼から伝わってきたものだ。バイダーは、出会ったころの九歳だったアナキンがこの箱の中に残していった。元は何が入っていたかを知っていて、その上でこれを置いていった。

オビ・ワンは目にも見えず触れることもできないフォースを抱きしめ、必死で呼吸を落ち着けた。彼がここで何をしていたかが分かったからだ。彼はここで、ただあてもなくうろつき回っていた。懐かしさに愚かしく心惹かれながら、変わってしまったものを目の当たりにしながら、それでもたくさんの影の中から相手の存在を見出し、感傷や憎しみを新たにし、哀れみ切れず憎み切れないことをはがゆく思っていた。自室に戻ってきたときのオビ・ワンがそうだったように。しかしオビ・ワンと違い、彼はメッセージを残した。二人にしか分からない、暗号通信のようなメッセージ。徐々に宇宙のフォースに溶け込んでいく九歳のアナキンを抱きしめたまま、オビ・ワンはしばらくその場から動けずにいた。

チエックポイント「E・旧友の訪問」に0と記入し、57へ。

24

音を立てないように大きく深呼吸をし、感情を鎮める。どんな状況であっても自分はまだジェダイだ。いつでもジェダイらしく振る舞わねば、亡きマスターに、そして志半ばで死んだ仲間たちに顔向けできない。オビ・ワンは一瞬目を閉じてから開き、扉の向こうの声に耳を澄ませた。

「バイダー卿からの命令を聞き返したっただけで一個分隊が丸々消されたこともあるらしいぞ。で

きるだけ用心した方がいい」

「あの方はクローンみたいな連中をお望みなんでしょうよ。機械なだけある。お前、見たことあるか？ この間バクタタンクに、」

「馬鹿、やめろ！ 聞かれたら本当に殺されるぞ」

バクタタンクに。オビⅡワンは心の中でそう繰り返し、浅く息を吐いた。いまの彼がどんな状態であるのかをオビⅡワンは知らない。彼を最後に見たのは手足を切り落とされて炎に焼かれているところだ。どうにかして一命を取り留めたにしろ、皮膚らしきものはもうないだろう。呼吸器も消火器も焼かれ、生きるために体の奥深くまで機械を入れ込んでいるはずだ。いったいどんな気分がするのだろうか。機械に生かされている感覚とはどんなものだろうか。機械と一体化するということは、どんな状態であるのだろうか。

そこまで考えたとき、アナキンの義手が頭に浮かんだ。悲痛な表情を浮かべるオビⅡワンを尻目に「こんなたいしたことありませんよ」と強がっていた。「片方が機械だなんてむしろかっこいいです。だから、別に僕は気にしてません。マスターもそんな顔しないでください」。かっこいいで済ませるな、と言いたかったが黙っていた。意地でもマスターにそう見せないだけで、アナキンがひどく傷ついていたのが分かっていたからだ。右腕を失い、たった一人の肉親を失い、アナキンは途方もなくひとりぼっちになった。オビⅡワンは彼に何もしてやれず、ただジェダイとしての生き方を説くだけで少しの慰めにもなってやれなかった。いまでもときどき考えることがある。アナ

キンに「お前が一番大事だよ」と言ってやれていたら、「誰よりもお前を愛しているよ」と言えていたら、追い詰められ何もかも失っても彼はあんなに孤独にならずに済んだはずだ。彼自身は何度もそれを要求していたのに、オビⅡワンは一度も応えてやらなかった。彼の機械の腕を見るたびにそれを思った。義手の存在は彼の孤独、そしてオビⅡワンの過ちと分かちがたく、死ぬまで残る後悔の象徴だった。しかしいまやたった一本の腕でなく、孤独と後悔は彼の生命そのものに広がっている。オビⅡワンは突如息ができなくなり、あわてて胸に手のひらを当てた。「死ぬまで残る」どころではない。死んだ後も後世の者たちが残らず死に絶えた後でも残り続ける後悔だ。それは決して消せるものではない。

チェックポイント「D・暗黒卿のうわさ話」に1と記入し、53へ。

25

戻ろうと思うと、足が自然と換気口の真下に向いた。そのまま自室へ戻り、呆然と床にへたり込む。大嵐の中を行軍したわけでも、ブラスターの光弾が飛び交う戦場から戻ってきたわけでもないのにひどく疲れている。エネルギーをゴッそりもって行かれてしまったかのような奇妙な感覚だ。あるいはもう動かない手足を無理やり動かそうとしているかのような。オビⅡワンは後ろに手をつき、まだ昼の光に照らされている天井をあおいだ。足下に広がっている白い空間と違って薄汚れている。人間のすみかだという気がする。その差異に悲しくなり、あわてて感情を振り払った。

タトゥイーンに来てから、彼をこれほど近くに感じたことはなかった。これから先ずっとそんな風を感じることもないと思っていた。そうするべきではないし、そうしてはいけない。あれはアナキンではない。オビⅡワンがもっとも愛し、同じだけ苦しめられた男ではない。あれはおぞましい機械であり、ジェダイの仇敵であり、何よりも忌避すべきものだ。なのに、あれもどうしようもなくアナキンだという気がする。マスターだったとき、アナキンと同年代の子供たちが彼のうわ話をしているの聞き耳を立てずにはいられなかった。彼が悪口を言われていると嫌な気分になった。かばってやりたくなった。マスターに隠れて何かを思い悩んでいるときはすぐに分かった。聞き出したくて、なのに聞けなくて、やきもきし続けるはめになった。あのときとまったく同じ気持ちだ。出て行ってどうにかしてやりたい。

オビⅡワンはためらいながら扉を閉めた。扉の表面をそっと撫で、眠ろうとしている子供に毛布をかぶせるかのようにラグを戻す。同情などするべきではない。それくらい分かっている。だがどうしても思い切ることができない。アナキンは弟子だ。今でも弟子だ。仲間を一人残らず殺しても、他の誰かをマスターと呼んでも、彼のしたことを決して許せなくても、それでもオビⅡワンの弟子だ。なぜ彼を見限ることができるだろう？ 哀れんで何が悪い？

「……馬鹿な」

膝を強く叩き、オビⅡワンは笑おうとして力なくせき込んだ。何という愚か者だ。まだ分かっていないのか。そういう中途半端な哀れみがアナキンと自分を滅ぼした。本当に同情しているのなら、

いますぐ彼にとどめを刺しに行くべきだ。もう一度白い部屋に戻り、ベイダーを探し、機械に生かされているその心臓にライトセーバーを突き立てるべきだ。それができないのなら、哀れみなどかけるべきではない。

ラグの上にそのまま座り込み、機械的に呼吸を整えた。タトゥイーンに来てから、同じことを繰り返している。誰も何もしていないのに勝手に心乱され、勝手に鎮めている。一人でいる時間が長いぶん一人芝居が茶番になり、茶番は徐々に他人事になってきて、どんどん自分が薄っぺらくなってきたような気がする。この日常に本物の激情はもうない。いまの自分は本当の悲しみを忘れてしまつて久しい。もしかしたらそんなものは最初から自分にはなくて、ただ彼から借りていただけなのかもしれない。アナキンがそばにいたときは、すべての感情を彼が表現してくれた。彼がおかしそうに笑うとそれだけで愉快になった。彼が隣で怒ったり悲しんだりしているのを見ると、まるで自分のことのように胸が痛くなった。制御のできない激情は常に彼からもたらされ、悪夢のようにオビⅡワンをむしばんだ。この身勝手な浮き沈みも彼の魂の影が胸のうちに残り続けているせいだろう。影さえも失ってしまったら、オビⅡワンは本物の機械になり果ててしまうかもしれない。オビⅡワンは膝に力を入れて立ち上がり、窓から外を眺めた。二つの夕陽がいままさに沈もうとしているところだ。フォースを伝ってルークの笑い声が聞こえてくる。張りのある子供の声。それを聞いているとアナキンが子供だったころを思い出して苦しくなる。頭を振って一歩足を踏み出すと、急に視界がぼやけた。

チェックポイントBに数字が記入されているなら、17へ。
空欄のままなら、13へ。

26 誰かが侵入したとして、ここに留まっているわけがない。それが誰であれ必ず外へ出て位置関係やそばにあるものを探りに行くだろう。オビIIワンはあわただしく外へ出て、砂の大地に残されているはずの足跡を探した。とはいえ砂漠だから足跡などすぐに消えてしまうが、風さえ吹かなければ数時間はもつ。幸い今日は無風だ。少しも汗を乾かしてくれない。だが自分の汗の粒が砂に落ち、すぐに蒸発するサイクルを何度繰り返しても足跡は見つからなかった。ジャワのサンドクローラーが通った形跡もなければスピーダーが通った跡もない。オビIIワンはあきらめ切れずに一面の砂漠を眺めていたが、しばらくするとふたたび家に戻っていった。疲れているせいで感覚が鈍ったのかもしれない。

41へ。

27 それを見たときに感じたのは激しい喪失感だった。もうあの白い部屋に行くことはできない。きつと繋がりが切れてしまったのだ。相手のいまを知ること、互いの存在を伝え合うこともできない。

オビⅡワンは喪失に耐えられなくなってその場に座り込み、そのまぶしいような暗いような色をした空間を眺めた。眼下に広がる謎の空間には上も下もなく、音も温度もない。繋がった先が白い部屋でないのなら、ここはいったいどこなのだろう。空間と時間のあわいか。それとも超空間そのものなのか。もしそうなら足を踏み入れたとたんにオビⅡワン・ケノービという存在はこの時空から消え失せてしまうだろう。何百兆という多元宇宙のどこかの、いつとも知れない時間軸に連れ去られて置き去りにされてしまう。自分であることを忘れ、形も存在も保てなくなる。超空間とは本来非常に恐ろしいものだ。

いったん落とし戸を閉めて少し待ってみるなら、67へ。

あきらめて明日からまた普段通りの生活に戻るなら、51へ。

しばらくその場にいるなら、5へ。

28

飛び込んだ瞬間この宇宙から消えるかもしれないというのに、何もしないわけにはいかない。オビⅡワンが真っ先に考えたのはルークのことだった。とはいえ自分が消えてしまったら彼の身の安全を守ることはできないから、考えるべきは彼が育った後のことだ。無事に大人になり、フォースに目覚め、ジェダイの技を身につけたいと思ったときに助けになるものを残してやりたい。ヨーダの居場所のヒントを記したホロマップと聖堂から持ち出した数冊の本を金庫に入れる。フォース感

応力のない者が開けたら自ら燃え尽きる仕掛けを施してあるものだ。もし彼が未熟ながらもフォースを知っていたらうまく開けることができるだろう。中のものを読み解くことだってできるはずだ。数時間かけて作業を終えると、開け放したままの落とし戸に自然と目が向いた。身辺整理とは言っても他には何もするべきことはない。この家に愛着のあるものは何もないし、最後に会っておきたい人もいない。オビⅡワンが会いたいと思うのはこの銀河でただ一人だけだ。この先彼を失うなら生き続けることに何の未練もない。後悔だけに縛られて心をなくして機械になるなら生きていても仕方がない。オビⅡワンは落とし戸の前に立ち、深く息を吸い込んだ。

71へ。

29

もう少し待てばまた繋がるかもしれない。オビⅡワンはさらに半日待つことにした。

67へ。

30

白い部屋を壁に沿って歩き回っていると、徐々にめまいがしてきた。初めて来たときから薄々感じてはいたのだ。確かに清潔で快適ではあるが、全面の壁と床と天井が白いせいで奥行きがないからかどこか監獄じみている。いったい何を考えてこんな作りにしたのだろう。居室なのだろうにベッ

ドもなければ長椅子もないし作業台もない。奇妙な場所だ。くつろぐどころかずっといると早く出たくなる。オビⅡワンは思わずため息をつき、部屋の真ん中に移動した。

データーパッドを起動してみるなら、35へ。

扉の外に出て船内の様子を探るなら、60へ。

自室に戻るなら、49へ。

31

ハイパージャンプ中にここから脱出できるとすればあの白い部屋の換気口からだだけだ。そしてその穴はタトゥーインへ繋がっている。自分の居場所を突き止められるくらいならたいしたことはない。オビⅡワンの命程度で済むなら安いものだ。だが黒づくめの暗黒卿がルークのいるラーズ家を闊歩するところを想像していてもたってもいられなくなる。

一刻も早くタトゥーインに戻ってルークの様子を見に行くべきだと思うなら、65へ。

もう少しストームトルーパーたちの話を盗み聞きするなら、24へ。

32

急激に頭が冴え、同時に焦りが生まれた。自分が置かれた状況を思い出した。するべきことも分かっていた。はつきりと。そうだ。もう二度と間違わない。過ちで失われるのは、自分の命だけで

はないのだ。オビⅡワンは小さく息をついて立ち上がった。今度こそお前を救ってみせる。今度こそお前を連れ戻してみせる。今度こそ、自分たちの手で始末をつけよう。のちの世代に背負わせてはいけない。

そうと決まればさっそく行動を開始しよう。まずは地下室だ。地下室の落とし戸と繋がったベイダーの船へ飛び、当事者でないと知らないことを探していこう。

37へ。

33

だめだ。彼はもっとも信頼できる人物だが、それでもこのことだけは話せない。オビⅡワンの表情がみるみるうちに硬くなったのを見て、クワイⅡガンは深くため息をついた。

「なるほど。まだ準備が足りなかったか。仕方ないな」

「準備は常にできています。しかし私の考えが正しいのかどうか判断がつかないのです」

「大事なことは正しさではないのだよ、オビⅡワン。お前がどう感じるかだ。本当にお前に準備ができているのなら、それが正しいかどうかを迷う必要などない。直感と心の声に従えばよいのだ」

その優しい叱責に赤面する思いだった。パダワンだったころから何度も言われてきた言葉だからだ。だが彼の声色はあくまで柔らかい。

「しかし、私が言って聞かせるような段階はとうに越えているだろう。お前はとっくに一人前だ。

その意地をいつ乗り越えるかはお前自身の選択にかかっている」

オビⅡワンは下唇を噛んだ。あまりの情けなさに頷くこともできない。

「そんな顔をするな。もう若いパダワンでないぞ。マスターだ。お前はいつでも正しい行動ができる。死んだ元マスターを感じさせる必要もない。胸を張って進め。私に頼らずとも、いずれ答えが分かる」

両肩があたたかくなる。マスターの手だ、と思ったときには姿が消え去っていた。部屋の中が急によそよそしくなる。後悔が大波のようにどっと押し寄せる。もっと心を開いておけばよかった。彼は「死んだ元マスター」などではない。今でも自分のマスターで、もっともオビⅡワンを知っている人物だ。クワイⅡガンはいつかまた現れてくれるだろうか。そのときはもっとうまくやろう。うまく甘えよう。そして道を示してもらおう。パダワンだったころ、マスターに甘えることが一番苦手だったことを思い出して、アナキンもきつとそうだったことを思って胸が痛くなった。

師弟の関係をうまくいかせるのはどちらか一方だけの役割ではない。師と弟子のどちらも心が心を開いて相手に自分をゆだねなければならぬ。今さらだ。しかし大事なことだ。オビⅡワンは目を閉じて深呼吸をし、現実の世界に向き合おうとした。

41へ。

34

いくつかの選択肢を頭に思い浮かべたとたん、背筋が凍った。「こんなことは久しぶり」だとか「人

間らしい」とか「きちんと」とか「すがすがしい」などと思うのは何度目だろう。頭をフル回転させて考える。分からない。初めてあの白い部屋を発見したときから何日経った？氷のように固まってしまった両手を組み合わせる。やはり分からない。今の自分には時間の感覚はないのではないかという気がする。なのに頭が軽いのはなぜだろう。何かを捨ててきたからか。自分の本心に気づかないまま、ただ感傷だけに突き動かされてがむしゃらに前に進もうとしてきたからか。体が軽いのは、きっと後悔と義務を捨てたからだ。自分に都合のいい想像ばかりを追い求めてきたから。

オビⅡワンは膝から崩れ落ち、古びたラグの上に座り込んだ。ああ、そうか。すべて夢だったのか。狂気が見せた夢だ。もしかしたら彼は戻りたがっているのかもしれないという、そしてもしそうなら手を差し伸べられるのは自分だけだという甘美な夢。浅ましくて情けなくて仕方がない。オビⅡワン・ケノービはジェダイだ。「したいこと」ではなく「すべきこと」を第一に考えなければならぬのに、ここ数日はまるで熱に浮かされたかのように奇妙な考え方をし続けてきた。きっと発狂しかけているのだ。正気に戻るすべを見つけないと、運命に従うことさえできなくなる。

(ED6・狂気が見せた夢)

35

データパッドのダッシュボードを呼び出すと、突然画面が変わって誰かからのメッセージが自動的に再生され始めた。一瞬ためらう。個人宛てのメッセージを覗き見るべきではない。しかし画面

に映し出されたホロを目にしたとたん、罪悪感は吹っ飛んだ。そこにいたのはフードを深くかぶった老人だった。威厳深く優しかった顔が醜くただれ、表情に威圧を隠さなくなっている。老人はしゃがれた声で「我が弟子よ」と切り出した。猫なで声ながらもどこかいらついているのが分かる。

『ベイダー卿、我が弟子よ。遠くコルサントにいてもお前の存在を近くに感じる。お前が苦境にあるということ、悩み苦しんでいることさえ私には分かる。任務の最中であっても瞑想を怠らぬことだ。瞑想に励み、己を試練の中に置けば迷いも消えよう。よき報のみを待つ』

銀河帝国の唯一の支配者、パルパティーン皇帝はゆったりとした口調でそう言い、回線を叩き切るようにふつりとホロから消えた。オビィワンはしばらく身動きもできず、パルパティーンのホロが映し出されていた空間を見つめていた。いまのは皇帝がベイダーに向けた最新のメッセージだ。ということとは、ベイダーはどういうわけか師である皇帝を苛立たせるほどの悩みを抱えているということになる。彼が何に悩んでいるのかは知らないが、シディアスが弟子に瞑想を勧めていることが少しおかしかった。オビィワンも何度も何度も繰り返して彼に言い続けてきた言葉だ。「瞑想をして己を平穏の中に置けば迷いは消える」。お前はまだ迷っているのか。迷い続けるのが苦しいから暗黒面を選んだんだろうに。

笑おうとしたがうまく息が吐けなかった。ベイダーは苦しんでいる。迷っている。理由は知らないし、悩みの中身は見当もつかない。暗黒面に堕ちたのなら苦しむのは当然だとも思う。だがどうしてか放っておけなかった。かつてマスターだったとき、彼が浮かない顔をしていたらそれだけで

地獄に突き落とされたような気分になった。そのときの義務感や焦燥がまだ自分の中に残っているのだ。ただそれだけだ。オビⅡワンは目線を上げ、データパッドを操作して別のメッセージを探した。彼は子供のころから意外なほど几帳面なたちで、すべてのメッセージを保存してラベリングをして日付と送信元どちらでも検索できるように整理している。きつといまもそうだろう。メッセージが収められたフォルダを探してみると、案の定きれいに整理整頓されていた。

ひとつ前も、その前も、そのさらに前のメッセージも皇帝からのものだった。というより、彼は皇帝のメッセージしか残していない。そのどれもが「○×に隠れているジェダイの生き残りを見つけて出して抹殺せよ」という指示、それに加えていまのベイダーの状況を推測しているもの、そしてアドバイス。シディアスは彼の周りを取り囲むように言葉を紡いでいる。逃げ道をなくし、疑念の穴を塞ぎ、まるでそれが自分の意志であるかのように決断させる。長く交渉に携わってきた者として、彼の話術には素直に感嘆せざるを得なかった。見事としか言いようがない。

しかし日付が進むにつれて彼が少しずついらつき始めているのが分かってくる。特に直近三件のホロメッセージは苛立ちを隠しもしていない。何に苦しんでいるのかは相変わらず不明だが、ここ数日でベイダーの悩みはずいぶんと深くなっているようだ。深くため息をつく。瞑想で振り払えるたぐいの迷いとなると内面的なものだ。それは師と弟子にしか分からない。オビⅡワンはすでに彼の師ではないから立ち入ることができない。昔の自分なら考える前に答えにたどり着いただろう。アナキンは自分の悩みを隠しているつもりでいただろうが、マスターにはすべて筒抜けだ。つまりは

いまではシディアスにすべて筒抜けになっているということになる。

困ったな、と思った。もはや彼がどうなろうと困ることなど何もないのに、胸がざわつくのを抑えられなかった。オビⅡワンはダッシュボードを元通りにし、椅子から立ち上がった。(※チエツクポイント「C・メッセージの人身」に1と記入すること)

部屋の中をさらに調べてみるなら、30へ。

扉の外に出て船内の様子を探るなら、60へ。

自室に戻るなら、49へ。

36

ほんの少し鼓動が速くなった。船がハイパージャンプ中なら、ベイダーはここにいない。おそらくオビⅡワンの自宅に迷い込んでいる。そしてまた何かを探っているだろう。動揺を抑えるべく胸に手を当てる。

彼は自分の元マスターがここに来ていることを知っているのだろうか。オビⅡワンは痕跡を残していない。勘のいい彼のことだから薄々気づいてはいるだろうが、オビⅡワンと違って確信はないはずだ。だから、もしかしたら、何かのメッセージを残していてもいいかもしれない。とは言ってもデータパッドの中にメッセージを残すのは危険すぎる。ものを置いていくわけにもいかない。壁に文字を刻みつけるのは浅慮だ。帝国軍の兵士たちには決して理解できないもの。さらにフォー

スを感応できるだけでは判別できないもの。そして、彼が残していったものと同じようなもの。大きく深呼吸をし、覚悟を決め、コンソールの前の椅子に腰をかける。もし何かをメッセージとしてここに残していけるなら、それはフォースの記憶だけだ。オビⅡワンは意識を集中し、フォースを呼び集めた。さて、いったい何の記憶を残していくべきだろうか。

パドメが最後に残した言葉だと思うなら、42へ。

出会ったときの自分たちの記憶だと思うなら、38へ。

37

さて、どこを調べよう？

いつもビジョンでベイダーが座っていた椅子に腰かけてみるなら、44へ。

データを盗み見て皇帝と暗黒卿のたくらみを知ろうと思うなら、48へ。

部屋の外へ出て船内をうろついてみるなら、8へ。

自室へ戻るのなら、6へ。

38

目を閉じ、アナキンが九歳で、自分が二十五歳だったときの記憶を呼び起こす。はるか昔のことだ。アナキンは生意気だが親切で決して物怖じをしない子供で、オビⅡワンは自信の代わりに規則

と義務感で武装をしたかたくななマスターだった。アナキンはよりによって頑固なジェダイを親代わりに慕うという愚を冒し、オビⅡワンはそんな彼を毎日のように失望させていた。

あるとき、アナキンが自分のマスターを外出に誘ったことがあった。コルサントの街をゆっくり見てみたい、と言っていたが本当はマスターとパダワンとしてでない会話をオビⅡワンとしたかったからだ。いつも敵しいマスターが巨大なホロ看板を見て笑ったり、店先でしつこく声をかけられたり、道ばたで売っている怪しげな果物に歯を立てていたりするような人間らしいところが見たいと思っていたからだ。しかしオビⅡワンは彼の気持ちをまるで理解できず、「一人前のジェダイになれば自分一人で思う存分見て回れるぞ」と突っぱねた。

オビⅡワンとて行きたくなかったわけではないし、興味がなかったわけでもない。タトゥーインから出てきたばかりのアナキンに今までとまったく違う世界を見せて回るのはそう悪いことではないとすら思った。クワイⅡガンならアナキンに誘われる前に連れ出しただろう。もしそれが聖堂の規則に反しているなら夜にこっそりと抜け出し、子供にはまだ早いアンダーワールドの酒場にも連れて行って巨大都市の裏の顔まで見せるはずだ。

だがオビⅡワンはそうしなかった。なぜなら、考えるだけで少し心が弾んだからだ。信じがたいほど高いビルや人でごった返す繁華街を見たアナキンの反応を想像すると笑みが浮かんだ。ジェダイの枠をいったん忘れ、縁あって繋がった一人の大人と子供として一日過ごすのはたまらなく楽しそうなことに思えた。だからこそ彼の誘いを断ることにしたのだ。そんなことをしたら愛着が生ま

れそうだったから。特別を作ってはいけなかったから。特別な存在を目の前にしてもマスターとしていつも泰然としていられる自信は、オビⅡワンにはまだなかった。ただ単にジェダイの枠から外れてしまいそうなことが怖かったのかもしれない。

だがアナキンは少しもめげず、何かにつけてオビⅡワンを笑わせようとし、怒らせようとし、悲しませようとした。「僕が死んだらどう思う?」「僕が生きてうれい?」がアナキンの口癖だった。そういう困ったところもあったが、あのころの彼は間違いなく愛らしい子供だった。ときどき驚くほど大人びてもいたが、愛嬌のある賢い子だった。なのにいつも何かに飢えているような目をした大人になったのは自分のせいだ。思い出すと苦しくなる。

自分が椅子からずり落ちそうになっていることに気づいて苦笑した。フォースに思い出を残すはずだったのに、これでは後悔しか残せない。だがそれが素直な気持ちだ。オビⅡワンは彼にあのころのまま、まっすぐ大人になってほしかった。人を疑うことを知らず、自分に不可能があるということも知らず、愛されたい人に愛される資格があることを心から信じられる大人に。そうならなかったのはマスターである自分のせいだ。お前は悪くない。ただ生き抜こうとしただけだ。

椅子にきちんと座り直し、両手を組み、祈るようにフォースに感情を刻み込む。こんなものを残したからといって何かが起こるわけではないが、それでも伝えずにはいられなかった。

こんなわけの分からない空間に飛び込むなんて無謀にもほどがある。時空の隙間に閉じ込められてしまったら銀河を救うどころではない。この世界から自分の存在が抹消される。きっと他に手があるはずだ。オビⅡワンはいったん落とし戸を閉め、ラグの上に座って瞑想を始めた。

もし繋がりがなくなってしまったのなら、実空間の中であのシャトルを探すというのはどうだろう。皇帝の命を受けて銀河のどこかの星を襲うべく今も移動しているはずだ。居場所最高機密だろうがタトゥインを出て帝国軍の基地に潜入できれば探ることができる。いや、だめだ。危険すぎる。帝国の情報部は躍起になってオビⅡワンを探している。捕まって拷問されても何も吐くつもりはないが、足取りをたどられてルークの存在をかぎつけられたらと思うととても実行できない。

だったら個人的にメッセージを送るのはどうだろう？これもタトゥインを出ないとならないが、潜入するよりもはるかに安全だ。だがホロネットを介したメッセージではベイダーの目に触れる前にまず皇帝の知るところとなるだろう。そうなれば彼はジェダイと通じた罪で処刑される。

焦りのせいかわりとりに意識が浮上し、大きなため息をついた。だめだ。不可能だ。空間の繋がりをなしにこれ以上進展するとは思えない。最初は単なる不思議な出来事に過ぎなかったのに、今は唯一すがれる手段になり果てている。「唯一すがれる手段」。だったら覚悟を決めるべきかもしれない。もし自分が消えてなくなってしまうても、そのせいでルークの身が危険にさらされるはめになっても、試す価値はあるかもしれない。オビⅡワンは恐る恐るラグをどけ、落とし戸を開けた。

意を決して飛び込んでみるなら、71へ。

せめて身辺整理をしようと思うなら、28へ。

40

思いつくともに過ごすことはオビIIワンにとっては慰めであり、自分を取り戻すための大事な儀式でもあるが、彼の方ではそうではない。オビIIワンはレンチを戻し、家の中を整理しながら徐々に暗澹たる気分になっていった。こうしてときどき懐かしい気分になせられても、彼の気配から感じるのは相変わらず暗黒面のフォースだ。暗黒面の力は痛みによってもたらされ、怒りと憎しみによってより深くなっていく。一度墮ちればずっと暗黒面に居続けられるかといえれば決してそうではなく、力を持続させるために恒常的に苦痛を味わい続けなければならない。少しでも慰めや融和を呼び起こせばあつという間に力は弱まり、生き続けようとする意志さえ暗黒面にむしばまれるだろう。

シディアスが懸念を抱いたのはベイダーが何かに悩んでいることなく、彼の力が少しずつ落ちていくことかもしれない。シスの師弟関係は互いの力を利用し合うことで成立している。ベイダーの力がシディアスの求めるレベルに達しなくなれば、彼は簡単に弟子を切り捨ててだろう。手に入るためにどれほど苦労したかなど関係ない。

オビIIワンは戻した椅子に腰かけ、力なく頭を振った。同情の次は心配か。虫のいいことだ。すべては勝手な想像にすぎない。じかに顔を合わせたことはないのだから、本当は彼がどのような状

態にあるのかも分かっていないのだ。もしかしたら今までになく力を増し、シディアスは裏切りの危険にさらされているかもしれない。

この心配が当たっていたとしてもシスは敵であることには違いない。ベイダーが肅正されてシディアス一人になれば脅威も半分になる。ベイダー以上の弟子候補は今のところ銀河には存在しないし、当面はルークやレイアの身も安全になる。師弟で潰し合ってくれば僥倖だ。放っておけばいい。誰に聞いてもきつとそう答えるだろう。それなのに、オビⅡワンはどうしても彼を放っておくことができない。かといって今すぐジェダイとして戻ってくるのが彼の一番の幸せだとも思えない。それは無惨に殺されて死んでいった仲間たちに対する裏切りであり、この銀河に対する背信であり、彼が自分の人生を賭けた最大の選択を無にすることもある。いったいどうしたいだろうか。この奇妙なニアミスが続いているうちにいい答えが見つかるだろうか。いつの日か、何のためらいもなく彼に「戻ってこい」というメッセージを発することができるようになるだろうか。

3へ。

41

血管という血管に液状の金属を詰め込まれたかのようだった。体が重い。頭も重い。ジェダイとして銀河を飛び回っていたところに比べればほとんど何もしていないも同然なのに、今日一日でひどく疲れた。自分のささいな行動が銀河の命運を左右するともいうような緊張感の中で過ごしたか

らだ。タトゥイーンで暮らし始めてからは重要な決断を迫られることがなかった。「ルークを危険から守る」というのはつきりとした目的と使命感がオビⅡワンにある種の盲従を作り出していた。毎日それだけをすればいいのなら、迷うことはないし何かを決断をする必要もない。しかしここ数日は違う。誰かに自分の意志を試されているのではないかという思いが消えない。他人ではなく、フォースでなく、運命でもなく、自分が何をすべきか、何を感じるか、何を選ぶのか。

タトゥイーンに来るより前から、オビⅡワンはそれを考えることが苦手だった。いつも評議会に逆らうクワイⅡガンにやきもきしていると、必ず彼にこう言われたものだ。「評議会ではなくお前自身がどうしたいか、何をしたらいいかを考えてからもう一度口を開きなさい、パダワン。私はお前の意見をこそ聞いてみたいのだ」。

オビⅡワンはベッドに横たわり、彼の穏やかな口調を思い出して苦笑した。その通りです、マスタ―、と闇に向かってささやく。自分自身がどうしたいか、何をしたらいいか。それが問題なのだ。

64へ。

42

オビⅡワンが知っていて彼が知らないことは、ルークとレイアの誕生だけではない。彼はパドメの最後の言葉を聞いていない。「彼にはまだ善の心が残っているわ」。しかしオビⅡワン自身は彼女のその言葉を信じたことは今まで一度もなかった。善良だったアナキンは変わってしまったもう二

度と取り戻せないと思っていたのだ。背もたれに寄りかかったとき、不思議なあたたかみを感じて心臓がどきんと波打った。声に出して彼女の言葉をつぶやく。

彼にはまだ善の心が残っている。

それを信じたい、と初めて思った。ベイダーが自宅に入り込んでいたことが分かってもう少し待ってもいいと思えたのは、それを信じたかったからだ。心から。あるいはそれを信じたがっている自分をようやく認めることができたからだ。パドメの言葉が正しいかどうかは問題ではない。もっとも正しくなくても、もしかた無惨に裏切られてもいい。アナキンの善性を信じたがっている哀れな自分をすくい上げてやれるのは自分だけだ。アナキン本人ではない。また期待を裏切られるのが怖いから、二度もあんな恐怖と絶望を味わいたくないから、自分の感情を押し込めて見て見ぬふりをしてきただけだ。オビⅡワンは両拳を握りしめ、椅子の上で背中を丸めた。お前は頑固だ、とクワイⅡガンに言われ続けてきたことを思い出した。

ああ、本当にそうだ。私は銀河一頑固な人間だ。あれから三年以上経っているのに、一度も自分の気持ちに気づけなかった。義務と絶望と少しの怒りと運命への盲従がオビⅡワンの心を凍りつかせてきた。「すべきことがある」という思い込みだけが自分を本物の悲しみや痛みから遠ざけてきた。だがそろそろ解放してもいい。そうしないと完全に固まったまま少しも動けなくなってしまう。

全身の力を抜き、心を鎮め、もう一度フォースを呼び起こす。頭に焼きついて離れないパドメの最後の言葉、そして最後のすがるような表情をフォースの記憶に移していく。ベイダーが次にここ

に座ったら彼女の顔が浮かぶはずだ。それで何が起こるかは問題ではない。信じることは、決して結果を求めるものではないから。

チェックポイント「G・置きみやげ」に1と記入し、63へ。

43

これが帝国の船であることが間違いないのなら、帝国軍の動きを知ることが第一の優先事項だ。オビⅡワンは苦勞してキーパッドを接続し、目の前の巨大なビュースクリーンに航路図を映し出した。最新式の機械に触れるのが久しぶりだったせいで妙に手間取ってしまったが、この船の居場所と行き先は分かった。皇帝の側近の船なのだからてっきりコルサントへの帰路にあるものと思っていたのに、現在地は主要ハイパーレーンの途中だ。そして目的地はタトゥイーンではなくこのひとつ先の星系。どちらも銀河の反対側にある。安堵のあまり座り込みたくなったがどうにか耐えた。居場所が見つかった可能性はとりあえず除外してよさそうだ。今すぐ攻め込まれることも、ルークの生存が判明することもないだろう。

しかし大元の疑問は残り続ける。オビⅡワンはいま、銀河の反対側にいるということになる。タトゥイーンの自宅から一步しか踏み出していないというのに。結局これもまたフォースのビジョンなのだろうか。あるいは現実感のある夢で、体の方はオビⅡワンが目覚めるのを待っているのだろうか。しかしいくら待っても目覚めそうにはない。ビジョンに誘引されるとき感覚もない。いま

のところはこれが現実だと思ふほかなさそうだ。何らかの力が働き、帝国の船とオビⅡワンの自宅の地下室が繋がってしまった。奇妙な状況だが受け入れるしかない。

さらに内部を調べるのなら、37へ。

これが現実なら見逃せない。ここから船を操って恒星に衝突させようとするなら、70へ。

脅威がないなら放っておけばいい。自宅へ戻って日常に戻ろうと思うなら、14へ。

44

退屈なビジョンの中で見た暗黒卿は、いつもこの椅子に座っていた。そしてあごをわずかに持ち上げ、びくりとも動かず瞑想している。昔もその集中力があれば私に叱られずに済んだのにな、という混ぜ返しが頭に浮かぶたびに死にたくなかった。オビⅡワンは背もたれにそっと手を触れ、こわごわ椅子に腰かける。だが座り心地はよくない。人間が座るには背もたれは高すぎ、座面は広すぎる。機械になる前のアナキンと二人で座れてしまいそうだ。軽くまぶたを閉じるとフォースを通じて見覚えのない景色が流れ込んでくる。そこはムスタファーに似ていた。しかしムスタファーより暗く、足場もなく、炎と死だけが大気に充満していた。おそらくこれは彼の心象風景なのだろうが、奇妙なイメージが間に挟み込まれている。オビⅡワンとアナキンが小さなシャトルに乗っていて、このおぞましい光景を俯瞰して見ていて、まるで他人事のように文句をつけている。

「やだなあ。絶対降りたくないですよ、こんな星」

「安心しろ。足場がないからシャトルを着床させられない。降りなくて済むぞ」

「じゃあこんなところまで何しに来たんです？　ただこのつまらない風景を眺めに来たって言うんじゃないでしょうね」

「帰るために来たのだよ。ほら、手を取りなさい。私と一緒に帰、」

輪郭のぼやけたオビⅡワンが手を差し出したところでイメージはふつりと途切れ、炎と死は地響きを立てて渦を巻き始める。まるでエネルギーを与えられたかのようにだ。怒るにも絶望するにもエネルギーが要る。さっきのイメージは、そのための食事のようなものなのだろう。怒りを食べ続けるないと暗黒面に食い尽くされて死んでしまう。彼の思い出と想像は、今や暗黒面に居続けるための糧にすぎないのかもしれない。

オビⅡワンはもはやそれを悲しいとは思わなかった。怒りも湧かなかった。哀れだと思うだけだ。しかしどうにもしてやれない。そこまでして大量殺人者でいたいのなら、イメージの中の自分のように彼を連れて帰ることもできない。他に何かやり方があるだろうか。今はまだ想像もつかない。

チエックポイント「A・白い部屋の探索」に0と記入し、37へ。

45

まずは落ち着いて、侵入者の痕跡を探すところからだ。これほど強い違和感を残しているなら彼はおそらく何かに触っている。

もし仮に地下室に続く落とし戸から入ってきたのなら、一番先に目につくものは物置だ。確か壁にはロープとフック、そして古びたライフルをかけていた。時代遅れの電子双眼鏡と大きな工具は反対側にかかっている、床には救急セットが置いてある。そして入り口の横には水分凝結機やジェネレーターなどの大型の機械を直すために使う長いパイプとワイヤーを立てかけていた。はずだ。もし帝国軍に見つかってここに踏み込まれたらフォースでパイプを倒せば逃げる時間を稼げるが、日常的に出入りするには邪魔で不便でもある。なのに、今日に限って出入りにあまり邪魔にならないような位置にパイプがある。普段のオビⅡワンならこんなことは決してしない。帝国軍に見つかることを常に恐れているから、うっかり倒してしまっても必ず元の邪魔な位置に戻す。

他の場所に視線を巡らせてみると、居室の中はさらに異様だった。まず椅子のひとつが倒れている。オビⅡワンが廃材で一から手作りしたものだ。少々背もたれが長く、座面も広く、生活しているときどき邪魔になる。しかしオビⅡワンくらいのサイズの人間なら間違って倒してしまうことはまずない。もし引っかけてしまうとすれば、よほど大柄なのか長々しいマントを羽織っているかのどちらかだ。

そして極めつけは、居間に置いている箱という箱、棚という棚を開けた形跡があることだった。オビⅡワンは留守中に侵入されたときのために、扉や箱などの開閉できるすべてのものに布切れを挟んでいる。もし誰かが開けたら分かるようにだ。驚くことに、部屋にある全部の箱と棚から印の布が落ちていた。これを開けた者はおそらく布切れの存在に気づいていないだろう。何かを必死で

探していたのか、それとも何となく開けてみたのか、オビⅡワンには分からない。もしかしたらライトセーバーを探していたのかもしれないし、オビⅡワンがタトゥーインなどに隠れ潜んでいるはつきりとした理由を探していたのかもしれないし、あるいはもっと個人的な動機で箱を開けてみたのかもしれない。オビⅡワンがああ白い部屋の中をあてもなく探索したように。

部屋からなくなっているものがないことを確認すると、オビⅡワンは深くため息をついた。そろそろ認めなければならぬ。ここを訪れているのは彼だ。皇帝の弟子で、シスの暗黒卿の、ダース・ベイダーだ。彼に居場所を知られた。もし自分が彼なら、真っ先にシディアスに報告するだろう。ケノービを殺せと指示を受け、タトゥーインの周回軌道上にデストロイヤーを差し向ける。ルークの存在を探り当てられてすらいるかもしれない。それを思うと気がはやる。だがオビⅡワンが取るべき行動はたったひとつだ。

オーウェンとベルーを説得し、ルークとともに急いで別の星に避難するなら、69へ。

あわてて逃げるよりもこちらから仕掛けた方がいいと思うなら、26へ。

何もしないでいるなら、55へ。

46

全銀河をこれほど苦しめているのは、そして自分がこんなに苦しんでいるのは、心などまったく死んでいくせにまだ思い切れずにいるのは、あときムスタファーでとどめを刺さなかったから

だ。オビⅡワンは「生きたい」という彼の強い願いを甘く見た。

大きくため息をつく。自分のしたことは、結局何もかもが中途半端だ。アナキンを幸せにしてやれなかったばかりか、殺してやることもできなかった。いまこそ決着をつけに行くときだろうか。今まで何度もそれを考えたが、残されるルークのことを考えるとできなかった。彼はそろそろ三歳になる。帝国軍から一人で身を守ることなどまだできそうにない。だが諸悪の根元がこの世から消えれば身を守る必要などなくなるのだ。暗黒卿がいなければルークは選ばれし者の忘れ形見でも最後の希望でもなく、ただの水分農家の子供として穏やかで平和な一生を送ることができる。これくらいはどうすべきだろうか。

この家を引き払ってタトゥイーンを立ち、ベイダーと対決しに行くのなら、**16**へ。
考え直して別の道を探るのなら、もう一度**2**の選択肢に戻ること。

47

それはほんの少しの違和感だった。ものの位置が変わっていたわけではないし、ものがなくなっていたわけでもないし、足跡がついていたわけでもなければ、フォースの記憶が侵入者の存在を伝えてきたわけでもない。ただオビⅡワン自身の直感が告げただけだ。何かがおかしい、と。この家に他人を招き入れたことは一度もない。ジャワと取引をするときだって家の中には入れないのだ。そんな風にしても何年も隅から隅まで自分の意志や匂いだけに染め尽くされている空間だから、

他人がかすめただけでそれと分かる。間違いない。誰かがここに入った。そしてすぐに出て行った。おそらく入って出て行っただけで、たいしたことはしていないだろう。ものに触れることさえなかったに違いない。それでも匂いだけは残る。他人の匂いがする。

何気なく食卓に触れたとき、心臓がどきりと鳴った。誰かが食卓に手をついた。そんなに前のことではない。せいぜい十分、十五分前だ。まだそばにいる可能性がある。

家の中と周囲を調べるなら、9へ。

意識を集中させてフォースの記憶を探ろうと試みるなら、18へ。
放っておこうと思うのなら、11へ。

48

見るべきではないかもしれないと思いつつ、オビⅡワンは内部に収められている重要機密データに手をつけた。当然厳重に暗号化されているが規格はクロン戦争時代と変わっていない。時間をかければアクセスできる。だがこのアーカイブに保管されているデータは極端に少なく、まとまりもない。わざと残さないようにしているものもあるだろうが、これでは計画の全体像は見えない。彼が与えられた指示をこなすだけの日々であろうことは想像がつく。もっとも皇帝に近い立場にあるのだから、計画どころかその意図のかけらですら把握できていないはずだ。クロン戦争時代を思い出す。パルパティーンは誰のことも信用していない。すべてが駒なのだ。そうでなければ、あ

れほど冷徹にことを進めることはできない。

オビⅡワンはひっそりため息をついた。彼は誰にも利用されない人生を送りたかったはずだ。やり方はどうあれ、自分だけを大事に思ってくれる人を選んだはずだ。それなのに結局手駒にされている。いい気味だとあざ笑えるほどの弱さも、哀れだと思えるほどの強さもオビⅡワンにはなかった。ただ、彼の幸せだけをひそかに願っていた自分を銀河一愚かな男だと思った。虚無感が胸に広がり、砂漠のように乾いていた。暗黒卿を調べて回ればきつとこんなことが何度も繰り返されるだろう。喪失や悲しみという感覚すらなくしていく。毎日のように彼に期待し、毎日のように失望していたことさえ忘れてしまう。だったらこれ以上何も知らない方がいいかもしれない。知ることのでられるものはあるのだろうか。もしあるのなら、それは思いがけない希望をもたらすだろうか。それとも……。 (※チエックポイント「A・白い部屋の探索」に0と記入すること)

さらに船内を調べたいと思うなら、37へ。

ルーク以外に希望などない。すべてを忘れて元の暮らしに戻るなら、62へ。

49

チエックポイントC、Dどちらかに数字が記入されているなら、25へ。

空欄のままなら、68へ。

50

うっすらとはいえ、目星はついているのだ。本人と顔を合わせれば片がつく。オビⅡワンは戻したラグをもう一度剥がし、乱暴な手つきで取っ手をつかむ。今までは彼に出くわさずに済んだことに安堵していたが、今度ばかりはこちらから見つけないとならない。顔を合わせれば、また彼と対決するはめになるだろうか。ライトセーバーもなしに？ そう思うとぞっとした。彼はもう新しい赤いライトセーバーを作っているだろう。なのにこっちは丸腰。ただ無駄死にしに行くようなものだ。オビⅡワンはそっと手を離してラグを戻し、下唇を軽く噛んだ。ライトセーバーがあれば、と思ってしまう自分を戒める。交渉術の基本を思い出す。最初からライトセーバーを使わなければならないようなら、相手と対峙するのはまだ早いということだ。情報を集め、周りを固め、誰より冷静に、そして誠実にことを進めなければならない。

ひとまず冷静になれたことにほっとし、オビⅡワンは部屋に戻っていった。今もつとも必要なのは休息だ。

41へ。

51

待っても無駄だ。きっとあの不思議な繋がりが消えてしまったのだろう。結局あれが何だったのかは分からないが、すべて夢だと思えばあきらめもつく。フォースがほんの少しだけいい夢を見せ

てくれたに違いない。明日からはまたいつも通りジェダイの生き残りとしての、そして銀河を恐怖に陥れた暗黒卿の元マスターとしての義務を果たし続けよう。

14へ。

52

もちろん、地下の落とし戸からシャトルへ行くことだ。昨日は途中で追い出されたも同然だったから、もしかしたら繋がりが切れてしまったかもしれない。それを確認するためでもある。

オビィワンはラグをずらして落とし戸を引き上げ、恐る恐る下をのぞき込んでみる。眼下にあるものは自宅の地下室ではない。だが、白い部屋でもない。超空間の色合いに似た奇妙な模様が視界いっぱいにはびこっている。

チェックポイントEに数字が記入されているなら、27へ。

空欄のままなら、59へ。

53

足音を立てないように白い部屋に戻ってくると、オビィワンはほっとため息をついた。どうやら見つからずに済んだらしい。

コンソールに座ってデータパッドを起動してみるなら、35へ。

部屋の中を調べてみるなら、30へ。

自室に戻るなら、49へ。

54

眠れなかったのは昨日あんなことがあったせいかもしれない。瞑想をして心を落ち着け、自分の身を振り返ってみるべきだろう。

床に座り込み、安座を組む。ゆっくりとジェダイコードを暗唱してから目を閉じる。頭蓋骨が開かれ、脳の中身がフォースに浸るイメージを思い浮かべる。フォースと深く繋がっていると何かの凶兆やビジョンを目にすることもあるが、たいていは人に平穏だけをくれる。あるいは省察と抑制を。そしてフォースは迷ったときに道を探る手助けをしてくれる。暗黒面に堕ちた彼がたびたび瞑想をしていた理由も案外同じかもしれない。

オビ・ワンは力なく首を振り、彼の姿を頭から追い払った。この状態で彼を考え出すと抜け出せない隘路にはまり込んでしまいそうだ。

そのまま一日が経ち、現実世界に戻ってきたときには日が暮れかかっていた。立ち上がり、窓から二つの夕陽を眺める。自分の身を振り返ることはできなかったが、少なくとも心は静まった。

66へ。

オビⅡワンは倒れた椅子を戻してから腰を下ろした。控えめに荒らされた部屋を眺め回し、ため息をつく。何もしないことが最善であるという自信はない。だが、自分の命を狙っている暗黒卿が入り込んだというのにフォースに乱れがなく、何ひとつ壊されず、何ひとつものがなくなっていないことを思うと、せめてもう少し待ってもいいのではないかという気がする。オビⅡワンも落とした戸の下がベイダーの船だと分かったとき、船を破壊したり彼の情報を利用したりしようとはしなかった。してもよかったのにしなかった。特に理由はない。変わり果てた彼が自分と同じことをするという保証もない。愚かな望みであることは分かっているし、この選択が正しいとも言い切れない。それでも、性急に結論を下すのは間違いだと思った。これこそがもっとも勇気や忍耐が必要になる選択だという気もした。この行動が正しかったかどうかは、きっとここから先の行動で決まるだろう。自分の選択がどんな運命が引き寄せてしまったのかを知るのは恐ろしい。(※**チェックポイント「E・旧友の訪問」**に0と記入すること)

チェックポイントCに数字が記入されているなら、**57**へ。

空欄のままなら、**41**へ。

自分が急いで戻ってきたのだから、おそらく彼も急いで戻っていったのだろう。タトゥーインの

オビⅡワンの家もあの白い部屋と同じようにゆがんだのだろうか。独特のゆったりした威圧的な歩き方でこの部屋に入ってきて、そして小走りで行ったかと思うと少しおかしかった。案の定椅子が倒れているし、立てかけてあったパイプもぼらぼらになっている。テーブルにもぶつかったのか位置がだいぶずれていて、上に置いてあった工具が床に落ちている。よほどあわてていたのだろう。もはや侵入したことを隠す気もなさそうだ。

椅子とパイプを戻し、工具を拾って元の場所に置こうとしたとき、皮膚にびりりと弱い電流が走った。手のひらがじんわりあたたかくなる。ああ、と思った。彼はこれに触った。工具とは言っても別に何ということはない、ジャワから買った錆だらけのレンチだ。主にボルトのゆるみを直すのに使っているだけのもので、彼が興味を示す理由はひとつもない。しかしなぜ手に取ったかは分かる。目につく場所にあったからだ。もしオビⅡワンがああの白い部屋のコンソールに何かが置いてあったら、それが何であれとりあえず手に取るかもしれない。しかしまたまた手に取ったものにフォースをまとわせ、何らかの意味を込めようとしたのなら、それはもう「とりあえず」ではない。

古びたレンチに触れたとたん、懐かしい声が頭に響いた。「またそんなこと言って、僕をもっとこき使おうとしてるっていうんじゃないでしょうね?」。

「相変わらずほめ言葉を素直に受け取らない奴だな。船長にはこうも言ったよ。『エンジンの修理を私の連れに任せれば数十分後にはこの星系から離れられる』、と。修理には数日かかる予定だったそうだから驚いていた」

「それはどうも。でも数十分後は無理ですよ」

「そうか。私の見込み違いだったかな」

「違いますよ。エンジンだけなら数十分どころか十分で直せます。でも、故障してるのはエンジンだけじゃないんです。ハイパードライブが焼き切れてるし、ナビコンピュータも内部の回路がめちゃくちゃで……」

「分かった。ハイパードライブは私がかししょう。お前はとりあえずエンジンを頼む」

「へえ？ マスターにできるんですか？」

「どちらが早く修理できるか競争したそうな顔だな。乗らないぞ」

「早く直せた方が今日一日マスターをやるっていうのはどうです？」

「浅はかな提案だな、まったく。しかしジェダイマスターでなく修理工マスターになら今すぐにもなれるぞ。お前のそれは名人芸だ」

怒ったような、ふてくされているような、うれしいうような、そのくせちっともうれしくないような複雑な表情が脳裏に浮かんでくる。赤くなった顔を隠そうとして工具箱を持ってすぐに背を向けたときのこと。あのときは確か乗ってきたシャトルを失い、仕方なく貨物船に乗せてもらったのだ。しかし海賊に攻撃され、貨物を奪われて辺境の星に緊急着陸した。結果から言えばすぐにコルサントに戻れたのだが無事に船が直るまでは生きた心地がしなかった。

アナキンはこのとき十八歳で、相変わらず物怖じのしない少年で、しかし年の割には幼くて、い

つもはらはらさせられていた。ほめられるとうれしそうにし、しかしその一瞬後には「マスターが迷惑通りにうれしがってなんかやらないぞ」と言いたげな顔をし、しばらくするとまた少しだけうれしそうにする。オビⅡワンは無反応を貫いていたが、本当は愛しくてならなかった。

彼が残したフォースの記憶に触れていると、そのときの気持ちをまざまざと思い出す。タトゥーインに引っ込む前はこんな風に思い出を懐かしがるひまもなかった。彼のどんなところを愛していたのか、きちんと整理して考えたこともなかった。遠く離れた今でもそれを自覚するのは恐ろしい。掟に反するのではないかという恐れが思考を停止させようとする。だが急ブレーキをかけてしまう必要はもうないのだ。時間だけならたっぷりある。彼を懐かしがり、思い出をひとつひとつ精査し、自分の感情に向き合う時間だ。

チェックポイントCに数字が記入されていれば、40へ。

空欄のままなら、3へ。

57 彼が現れるときはいつも突然だった。予測のできないタイミングで視界の真ん中に白い姿がぼうつと浮かび、懐かしい顔で笑った。彼を見るたび畏れと愛しさがこみ上げてきてこうべを垂れずにはいられなくなった。信仰とはきつとこんなものなのだろう。絶対的な存在にすがりつきたい、許されたい、叱られたいという気持ち。打ちのめされれば打ちのめされるほどそれは深くなる。だ

が部屋の真ん中に浮かび上がったクワイⅡガンは、深すぎるほどに頭を下げたオビⅡワンを一瞥して少し嫌な顔をした。

「いっそのこと毎日お前の前に姿を見せてやろうと思うことがある。そうすれば私を単なる小うるさいマスターだと思うだけで済むだろうからな」

生前の彼のような軽口が聞こえ、オビⅡワンは思わず顔を上げた。

「だがどうもうまくいかんのだ。この体になってからというものの、日付の感覚がない。毎日のつもりでも私の一日はお前たち現世の人間が思っているより長いようだな」

「それでも構いません、マスター。お導きに感謝します」

クワイⅡガンはぼうっとした姿のままたたび顔をしかめ、「困ったものだ」とつぶやいた。

「お前はどうかやらよほど深刻な状況であるようだ。私が覚えている限りのお前は、こういうとき反応に困るほどの皮肉を返してきたものだが」

「子供だったからです。今は違います」

そう断言すると、彼は「そうか」と短く答える。

「まあそういうこともあるだろう。少なくとも、私が覚えているお前とはずいぶんかけ離れた存在になってしまったようだ。あのころのお前は辛辣だな。私だけでなく通りすがりのマスターたちをたびたびぎょっとさせていたよ」

「あなたはパダワンの批判ごときに動じるお方ではないでしょう。それより今日はいったいどんな

「ご用件で？」

大げさな昔話を持ち出してオビⅡワンの心をやわらげようとしていたのは明白だったから、早めに話を切り上げて彼の目をまっすぐに見つめた。しかし実体ではないからか瞳の色も輪郭も霞がかってぼやけている。突き上げるように懐かしいのに、本物でないことがひどく悲しくなる。

「分かっているだろう、オビⅡワン。なぜ今私が現れたのか。いったい何を話そうと言うのか。すべて分かっているはずだ」

彼はおごそかな声でそう言い、優しくオビⅡワンを見返してきた。

かつてのマスターに心を開いてすべてを打ち明けるのなら、21へ。

やめておくなら、33へ。

58

「……アナキン」

静かな怒りの声が聞こえてきた。だがこっちはごっそり魂を抜かれたみたいになっていて、このまま荒く息をつくだけの単純な生き物として一生を生きる覚悟さえ決めていた。

「……すみません。顔ですか、服ですか。目に入ってませんか」

「服だ。しかも洗濯したばかりの。このままで外を歩くわけにはいかないんだぞ。どうしてくれる？」
「その服はお詫びに僕が洗濯しておきますし、着替えを取りに行くならまた僕の服を着て行けばいい

いじゃないですか。どうせ後でシャワーを浴びに行くでしょう?」

それつの回らない口調でそう答えると、すさまじく不機嫌そうな顔でにらみつけられた。

「適当な言い逃れをするな。だいたいこれで何度目だ? なぜいつも予告しない?」

「すみません。たぶん四回目くらいです。でもあのままのどの奥に出すよりいいかなって」

「よくない!」

オビⅡワンは本気で怒っている。こんなことなら最初から全部脱がせておけばよかった。欲望に負けて焦りすぎた。

「そんなに怒らないでください、マスター。あなたの服問題は僕がどうかしますから」

「そんなものは当たり前だ。それよりも、」

顔をぶつけるようにしてキスをし、後ろに押し倒し、べとべとの口元を舐めてきれいにする。控えめな水音が響き始め、オビⅡワンはくすぐったそうに身をよじる。だんだん上半身の力が抜けていき、同時にまた太ももがこわばってくる。

「……それよりも?」

すっかり大人しくなったオビⅡワンを見下ろしてにやりと笑う。彼は不満げに息を漏らし、無表情に見つめ返してきた。

「いつも顔とか服とかを汚してすみません。でも、僕のをしゃぶってるときのあなたがやらしくてたまらなくなるんです。早く入れてほしそうで」

腕を後ろに回して片方の尻をつかむと、うあ、という声が聞こえた。柔らかな脂肪のすぐ下に筋肉があり、指を沈めるとびくびくとけいれんする様子まで伝わってくる。そのまま下だけ服を脱がせ、今度は肉の合わせ目に指を這わせる。そして少しずつ指を中にねじ込んでいく。肉の中はあたたかく、きゆうきゆうと蠢動し、さらに指を奥へと誘い込もうとしているようだった。オビィワンは懸命にあえぎをこらえているが、こっちもわりと限界だ。早く入れたい。一番奥まで突いて、この人を大声で泣かせたい。

ついに耐えきれなくなり、仰向けにしたまま脚を開かせる。硬くなったままのペニスの先端を何度か苛立たしげに当てると、オビィワンは死に瀕した小動物のような声をあげて腰を押しつけてきた。苛立ちが強くなり、早く癒されたいくなる。本当はもっとじらして半狂乱にしてやりたかったのに誘惑に負けて中にめり込ませてしまう。きつく締めつけられるたびに腰がびくびくと跳ねる。出したばかりなのに射精感がこみ上げてくる。このままでは情けないことになってしまいかねないの。で気を逸らすために態勢を変える。四つん這いにさせて後ろから貫くと、腰が跳ねるように高く上がった。そのまま前後左右にゆらめき、少しもじっとしていない。無意識にいいところに押し当てようとしているのだろう。その動きは恥ずかしいほど本能的だった。しかし軽くその尻を叩くとびたりと止まる。

「もう、自分ばかり気持ちよくなろうとしないでくださいよ。少しは我慢を覚えて。僕に文句言うくせに、自分ではやるんだもんね」

後ろ向きだから彼の顔は見えない。だが想像はつく。きつと死にたくなるほど自分を恥じている。「焦らなくてもちゃんといかせてあげますし、マスターの好きなこととしてあげますから。前にやった、立って壁に手ついてするのまたしたいでしょ？」

返事はない。だが中がきゅうと締まったから分かる。あのときはオビⅡワンが壊れたかと思うほど盛り上がった。

「だからちゃんと我慢してください。弟子に忍耐を教わってる場合じゃないですよ」

そう言いながら腰を動かすと、小さな悲鳴のような声が返ってきた。痛みと快楽を心から楽しんでいる声だ。いったんスイッチが入るとこういう侮辱の言葉に妙に反応するし、尻を叩かれても乳首を軽くつねっても喜ぶ。本当にやらしいな、と思う。ジェダイなのに、アナキンが教えるまでキスのしかたさえ知らなかったのに。

いったん抜き、尻をびしゃりと叩いてベッドから下ろして立たせ、すぐそばの壁に手をつかせる。そして予告も何もせずには挿入するとオビⅡワンは何かの冗談みたいに大声であえいだ。後ろから突くたびに額がこつこつと壁に当たる。痛いし氣になるだろうに、彼はその状態のまま言葉もなく絶頂を迎えた。

千切られるかと思うほど締めつけられ、中がけいれんして吸い出されそうになる。背中から後頭部にかけて肌が真っ赤に染まり、汗が玉になって浮かんでいる。しかも一度達するとかせがつくのか、その後彼は何度も同じことを繰り返してきてあと数ミリで限界、というところまでアナキンを

追い詰めた。

「すごい締まってる。ちょっと、いったん抜きます」

そんなことを宣言するのは情けなかったがどうしようもなかった。このままだと搾り取られて終わってしまう。オビⅡワンをベッドに横たえ、自分もその隣に寝転がる。

173へ。

59

それを見たたん、急に気が遠くなってラグの上に倒れ伏していた。目が覚めたときは夜中で、落とし戸も閉められていた。何が起こったのかさっぱり分からないし、途中の記憶もない。とりあえずきちんと眠ろう、と思い、オビⅡワンはのろのろと歩いて自分のベッドに潜り込んだ。

12へ。

60

オビⅡワンはまず扉の前に立って外の気配を探った。出会い頭にトルーパーと鉢合わせでもしたら面倒なことになるからだ。だが少なくともそばには誰もいない。ほっと息をつきながらボタンを押して扉を開け、廊下を少しずつ進んでいく。さほど長くはない廊下に沿ってキャビンが並んでいて、船尾に貨物室があり、船頭にコックピットがある。足音を立てずにコックピットへ近寄ると、

扉の向こうから何人かの話し声が聞こえた。

誰かに気づかれてはまずい。白い部屋へ戻ろう、と思うなら、**53** へ。
恐れず聞き耳を立ててみるなら、**22** へ。

61

すべきことは他にも色々あるだろうが、「したい」と思うことはひとつしかなかった。もう一度ベイダーのシャトルに行ってみることに。オビⅡワンは迷わずに落とし戸を開け、眼下に広がる白い部屋の中に身を投げ出した。清潔で涼しく、何の匂いもしない空間がオビⅡワンの全身を包み込んでいる。窓の外は今日も超空間で、ハイパージャンプ中であることが分かる。

チェックポイントEに数字が記入されているなら、**36** へ。

空欄のままなら、**63** へ。

62

オビⅡワンは顔を両手で覆い、しばらく息を整えてから両頬を自分で叩いた。しっかりしろ、と低くつぶやく。何が起ころうと義務を忘れてはいけない。それがジェダイの生き残りである自分の唯一の役目であり、グランド・マスターからの指示なのだ。守ってやれなかったアナキンとパドメに対する贖罪でもある。それに、この銀河には希望といえるものはもうルックしか残っていない。

きたるべき日まで彼を守ることこそ自分の運命だ。

二度と地下室に入れないよう落とし戸を溶接してしまおう。ライトセーバーはまた作ればいい。工具を片手に持ち、意を決して戸を開けると、奥に見えたのは白い部屋などではなかった。あの冷たく清浄な風の代わりに地下室特有のどんよりしたかびくさい空気が漂ってくる。そこに広がっていたのはいつもの地下室だった。食物とライトセーバーだけをしまっている、大きくはない地下室。オビワンはしばらくの間首をかしげていたが、すぐに落とし戸を閉めて工具を元に戻した。

あれは何だったのだろう。夢だろうか。ついに発狂してしまったのだろうか。

14へ。

63

白い部屋を中心に立って「今日は何をしようか」と考えるのはもはや条件反射になっている。だがいつもの思案をしかけた瞬間、壁と床が奇妙にゆがんだ。天井と床は平行であるはずなのに急角度で傾斜がついている。とっさに床に手をつき、バランスを崩さないようにしてから窓の外を見る。すると始まりも終わりもない直線となっていた星たちが徐々に形を取り戻し始めているのが分かった。まずい、と思った。シャトルが超空間から出ようとしているのだ。早く戻らないと繋がりが切れてしまうかもしれない。それだけならまだいいが、この空間のゆがみ方を見ると時空の隙間に取り残される可能性だってある。

オビⅡワンは急いで天井の換気口から飛び上がり、自宅へ戻った。すぐに落とし戸を閉め、ラグの上にへたり込む。危なかった。これはおそらく自分で思っているよりも不安定な繋がりなのだ。油断してはいけない。噴き出した冷や汗を拭い、オビⅡワンはゆっくりとその場から立ち上がった。

チエックポイントEに数字が記入されているなら、56へ。

空欄のままなら、3へ。

64

目が覚めると二つの太陽が中途まで昇っていた。これだけ長く眠ったのは久々だ。オビⅡワンはベッドから出て貴重な水でシャワーを浴び、服を着替えた。こんな風に当たり前の朝の身支度をするのも久しぶりの気がした。そしてきちんと食卓に座って食事をする。地下室が消えたせいで最低限の栄養しか取れないが、座って食べると心も体も落ち着く。オビⅡワンは手の中にある干からびたパンを見つめ、ため息をついた。こんな人間らしい生活をしばらく忘れていた。ルークを守ることでさえできれば、来たるべき日までただ生きていくだけでいいと思っていた。感情も感覚もすべて失い、人でなく機械になりたかった。それはもしかしたら、機械の力でどうにか生きている彼を差し置いて、彼をそうした張本人である自分が人間でいるべきでないと感じていたからかもしれない。食事を済ませ、家の中を軽く整理してから居室の中心に立つ。今日はまず何をしようか？

ベスティンに食料を買い出しに行くなら、19へ。

地下室に続く落とし戸からもう一度ベイダーの船に入ってみるなら、61へ。
今日は何もせず、何かが起こるのを待つのなら、12へ。

65

不安のあまり低くうなり、急いできびすを返した。もし本当にベイダーがタトゥイーンにいるのなら、差し違えてでも止めなければならぬ。彼ならオビ・ワンがタトゥイーンなどに隠れ住んでいる理由に簡単にたどり着いてしまうだろう。ほどなくしてルークの存在に行き当たり、ラーズ夫妻を惨殺してまだ三歳のルークを連れ去り、彼を殺すか皇帝に献上するかするはずだ。そうなければジェダイオーダーは今度こそ滅びる。しかし白い部屋にたどり着く前、がちゃ、という重たい金属音が背後から聞こえてきた。恐る恐る振り返ると、白いアーマーを着たストームトルーパーがブラスターを構えて立っていた。思わず唇を噛みしめる。頭に血が上っていたせいか背後を取られていたことにまったく気づかなかった。オビ・ワンは腰を探り、ライトセーバーを取り出そうとする。至近距離から撃たれても自分ならすべて弾ける。バトルドロイドが何十体いてもライトセーバーがあれば勝てたのだ。しかし腰には何も下がっていなかった。ライトセーバーは地下室の中だ。アナキンのものとまとめて隠してある。

オビ・ワンはブラスターの光弾が胸を貫くのをまるで他人事のように見つめた。死ぬのか、と思った。死ぬのは構わないが、これでルークを守る者がいなくなってしまう。悔やんでも悔やみきれ

ない過ちだ。アナキンを守りきれなかったのに彼の息子まで。しかし義務と愛と執着から解放される気分は決して悪いものではなかった。生きている間にはたどり着けなかった境地だった。最後まで義務を果たしたこともなく、愛を得られたこともなく、執着をきちんと捨て去れたこともない。だがそれももう終わりだ。何をどう悔やんでも死ねばすべて終わってしまうのだ。もう一度お前に会いたいと思うこともなく。オビⅡワンはゆっくりと目を閉じ、自分の命がフォースに溶け込んでいくのを感じていた。

(ED4・ライトセーバーのありか)

66

二つの夕陽が沈んだころ、オビⅡワンは簡単に食事を済ませてソファを兼ねたベッドに横になった。眠るには少し早い。しかし来るべき日までどうにか命をつなぎ、ルークを守ることに他にするべきこともない今の生活では夜がふけても起きている必要はいっさいない。それに、夜に一人いるとアナキンが子供だったころのことをつい思い出してしまう。

自分たちがまだ新米のマスターとパダワンだったとき、夜ふけに彼が遠慮がちに扉をノックする音がひそかな恐怖だった。眠れないんです、と素直に言ってくればまだよかったが、一言も口をきかずにオビⅡワンの部屋の隅でうずくまり続けることもあったし、まったく関係のない話を延々と続けてオビⅡワンが辛抱強く自分に付き合ってくれるかどうかを試すこともあった。あるいは「け

がをしたから手当をしてくれ」と言つて現れたり、自室の幽霊を追い払うのを手伝つてほしい、と半泣きで言いに来たりした。そのどれもがすべて言い訳だ。本当はひとりぼっちがさみしくて、マスターに構つてほしかっただけだ。しかし若くて愚かだったオビⅡワンは、彼のどうしようもない孤独を受け入れてやることはできなかった。赤ん坊のころに聖堂に連れてこられた子供たちは決してこんなことをしなかったから、自分のパダワンを困った子供だと思い込んで落ち込んだ。

もしできるなら、あのころに戻つてやり直したい。彼の孤独を受け止め、さみしさを受け入れ、嘘を許してやりたい。オビⅡワンは暗闇の中で目を開け、力を入れて虚空を凝視した。涙が流れそうだったからだ。しかし涙の気配はすぐに消え、ふたたび目を閉じた。感情は死んだ心の中に取り残され、後悔だけが全身を蝕んでいく。夜が来るたびに、眠りが訪れるたびに、悲しみが遠くなつていく。そのうち自分は機械になつてしまふだろう。何も感じることはない機械。彼と再会しても何の感情も覚え、悲しみと愛着の残骸の中で無表情に死ぬだろう。そうなる前に何か行動を起こさなければならぬのではないか。そのためにフォースは自分たちを繋いだのではないか？

そんな取り留めのない思考の中で、オビⅡワンは知らず知らずのうちに意識を失つていた。あまり心地のいい眠りではなかった。

67

きっかり半日後、オビⅡワンはもう一度落とし戸を開けてみた。しかしさっきと変わらない景色が広がっている。もう少し待つか、それともあきらめるか。どうしたらいいだろう。

さらにもう少し待ってから開けてみるなら、29へ。

もうあきらめて眠り、明日からはいつも通りの生活を送るなら、51へ。
しばらくその場において様子を見るなら、5へ。

68

足が自然と穴の真下に向いた。そのまま自室へ戻り、床にへたり込む。大嵐の中を行軍したわけでもブラスターの光弾が飛び交う戦場から戻ってきたわけでもないのにひどく疲れている。理由のない疲労感。オビⅡワンは足に力を入れてどうにか立ち上がり、コップに半分ほど水を汲んだ。

チェックポイントBに数字が記入されているなら、17へ。

空欄のままなら、13へ。

69

ベイダーに居場所が知られたということは、帝国軍に見つかったということだ。一刻も早く逃げなければならぬ。ルークを連れて行かねば意味がない。

オビⅡワンは荷物を持ってあわてて家を出た。急ぎたいのにスピーダーがないから通りがかったジャワのサンドクローラーに乗せてもらうことになった。はやる気持ちを抑え、できるだけジャワを急かしてラーズ農場にたどり着くと夜になっていた。ルークはすでに眠っている時間だ。

まず戸口に現れたのはオーウェンだった。いつも通り、オビⅡワンを見て嫌な顔をしている。「非常識じゃないか、こんな時間に」

挨拶もなしにそれだけ言うと、彼はオビⅡワンを中庭に招いてくれた。家の中では声が響くからだろう。夫妻は自分たち家族の人生からオビⅡワンやジェダイの影を消したがっている。しかしルークは、ひとたび存在を暴かれればいち家庭人として一生を終えることはとうていできない。オビⅡワンは声をひそめ、ここを離れなければならない理由をできるだけ簡潔に説明した。当然ながら彼の顔には驚きと拒絶の表情が浮かんでいる。

「……ルークを連れて行く?」

「申し訳ないがそれが彼の運命だ。彼はジェダイの、いやこの銀河の最後の希望だ。避難させることを許してほしい」

「運命だって? 生きている限り危険な目に遭い続けるのがルークの運命だっていうのか?」

それは信じられないほど悲痛な声だった。彼ら夫妻とルークは本物の家族なのだ。そのことを今さらながらに実感してひどく胸が痛んだ。

「それでなくともタトゥーインは危険だらけだ。おれの父も、母も、親戚たちも、シミもタスケン

に痛めつけられて苦しんだ。そして死んだ。ジェダイの粛正に遭ったあの子の父親だって似たようなものだ。ルークにだけはそうでない人生を送らせてやりたいと望むのは、あんたの言う運命とやらに反しているのか？」

「そうではないよ、オーウェン。家族を守りたいという君の純粋な気持ちは善良でかけがえのないものだと思う。しかし帝国はタスケンレイダーよりはるかに強大で邪悪だ。話など通じないし、私や君の力で追い払えるものでもない。だから避難しなければならないのだ。君やベルーも危険だからできれば一緒に逃げてほしいが……」

「お断りだ」

オーウェンの両目からは大粒の涙が次から次にあふれ出していた。

「あんたはあの子を銀河の希望だと言うが、ルークは他の誰でもなく、おれたちの希望だった」

「分かっているよ。君らがどれだけ彼を愛し、どれだけ彼に救われていたのかも」

「本当にそれが分かっているならオビ・ワン・ケノービ、あんたは銀河一の極悪人だ。どれだけ時間を経っても、そのことだけはタトゥーインの大地に刻み続けてやる」

「本当にすまない。もし落ち着く先が見つかったら極秘に連絡するよ」

彼が握手を望まないことは分かっていたが、それでも右手を差し出した。

どこからどこへ向かっているにしろ、暗黒卿が生きている限り恐怖と侵略は続くだろう。この船に暗黒卿が乗っているのなら差し違えてでも止めなければならぬ。それが彼の元マスターとしてのけじめだ。オビⅡワンは覚悟を決め、椅子に腰をかけた。そして船のナビゲーションシステムに侵入し、目的地をもっとも近くの恒星の真ん中へと設定する。大丈夫。ルークのことは心配はない。暗黒卿が死にさえすれば彼が利用される恐れもない。レイアだってオルデルンの姫として幸せな生涯を送れるはずだ。オビⅡワンは自分にそう言い聞かせるようにして全身の力を抜き、目を閉じた。

自分だけ逃げようと思えば逃げることはできた。天井の換気口から自室へ戻っていつも通りの暮らしをすることだってできた。だがオビⅡワンはそうはしなかった。けじめのつもりだ。本当ならともにムスタファで死ぬべきだった。なのに死ねなかった。果たすべき義務があったからだ。瀕死のパドメが助けを求めていたし、ジェダイの最後の生き残りとしてすべきことがあった。ルークを引き受けるとき、ヨーダに「つまらぬ自己憐憫に浸って死を選ぶでないぞ」と釘を刺されたことが頭をよぎった。もしかしたらこれもつまらない自己憐憫なのかもしれない。少なくともヨーダとクワイⅡガンは失望するだろう。オビⅡワンは死後も自我を保つ秘技とやらをまだ身につけていない。ジェダイとしてすべきことも果たしていない。けれど、もう誰にも何も言わせない。自分はきつとこのために生き永らえてきた。フォースもこのために二つの空間を繋ぎ合わせたのだ。

恒星の明るすぎる光と熱が眼前に現れたとき、オビⅡワンは生涯一度も流したことのない涙を頬

に感じた。無性に誰かに叱られたかった。目を怒らせ、「お前は間違っている」と言ってほしかった。一人ぼっちだ、という気がした。途方もなく、寄る辺もなく、取り返しうもなく孤独だった。

(ED3・差し違える覚悟)

71

ときは来た。永遠に自分を失うときが。後悔と虚無感に縛られたみじめな日々を失い、わずかに残ったジェダイとしての矜持を失い、あたたかな記憶も胸を締めつける感傷も丸ごと失ってしまうときが。それでも構わない。前に進みたい。オビⅡワン・ケノービという存在がこの宇宙から消え去ってしまったても、彼に手を差し伸べたい。裏切られてもいい。あざ笑われてもいい。彼を失った以上に失うものなど何ひとつないからだ。

オビⅡワンは落とし戸のふちに立ったまま目を閉じる。そのままジェダイコードを祈るようにつぶやく。ヨーダを、ドゥークーを、クワイーガンを、オビⅡワンを、アナキンを、アソーカを混乱から救い、同時に立ち直れないほど傷つけてきた言葉。そして未来の数多くのジェダイたちを救い、傷つけるであろう言葉。ジェダイコードは従うものではないし、かといって背くものでも、忘れるものでもない。それは生き方なのだ。ただそこにあるもの。そしてそこにあり続ける限り、自分たちを全身で肯定し続けるもの。

コードを暗唱し終わると、オビⅡワンは宙に足を踏み出した。あたたかいような冷たいような不

思議な感覚が湧き上がってくる。ふと懐かしさを覚える。久しぶりに聖堂に戻ってきたとき、柱の影に隠れていたアナキンが頬を紅潮させながら走り寄ってきたことを思い出す。アナキンと同時に同じことを思いつき、声が揃ってしまつて笑い合つたときのことを思い出す。間違っていない、とそのとき強く思った。大丈夫だ。きっと正しい。この選択は自分たちを思わぬ地平へ連れて行ってくれるはずだ。オビⅡワンは超空間の硬質なもやに呑み込まれながら、お前に会いたいよ、と小さくつぶやいた。

(第二章へ)

第二章

And who shall stand when he appeareth?

最初に感じたのは頬に触れる柔らかさとあたたかさだった。寝起きのときのぼかぼかした感じと幸せな気分、そして耳に響く足音と静けさ。思考が回り始める前に幸福感を覚え、思わずその場で丸くなった。こんな風に目覚めたのはいつ以来だろう。きっとまだタトゥイーンに引っ込む前だ。目を閉じて悪夢じみたビジョンを見ることはなく、銀河のどこから聞こえてくるフォースのうめきで眠りから覚めてしまうこともない。

ジェダイの朝は早い。時間が追いついて立てられる生活はしない。目が覚めたらまず瞑想をし、シャワーを浴び、着替え、ターボリフトの前まで迎えに来ているアナキンと連れ立って朝食をとりに行く。そして午前いっぱい道場で打ち合って汗を流し、瞑想をし、アーカイブで調べ物をし、次に向かう任地の話をしながら夕食をとる。考えてみれば何もしていないのも同然の日々だ。タトゥイーンにいるいまでもあまり変わりはない。だが平静で平穩でフォースと知識に祝福された幸せな時代だった。

いまだってできることならあの時代に戻りたい。あのときはただ自分とアナキンの心配だけしていればよかった。銀河のゆくすえに思いを馳せる必要はなかったし、アナキンより先に自分が一人前のマスターになるために必死だったし、アナキンが成長するたび天にも昇る気持ちになり、彼が何か大きな間違いを冒したときは明日とも知れない不安な心持ちになった。他のことは何も考えていなかった。アナキンのことしか考えていなかった。目を閉じたままため息をつく。未熟者、という言葉が頭に浮かぶ。あれから三年だ。オビ・ワンは四十一、アナキンは、二十六になる。ずいぶん遠くへ来てしまったような気がするが、自分たちの年齢はさほど変わっていない。

少しずつ目を開け、今いる場所を確認しようとする。あのわけの分からない超空間の渦に飛び込んだのに、とりあえず自我を保っていられているらしいのは何よりだった。自分が誰かも忘れてしまっていたら、オビⅡワン・ケノービの人生の物語はあの時点で終わっていただろう。霞む視界の中に周囲の景色を映し出そうとしたとき、肩に何か柔らかいものが触れた。小さくて丸くて、オビⅡワンの体よりも少しだけ骨ばっていてあたたかい。人の指だ、と気づいたときにはもう遅かった。「……マスター？」

72へ。

72

振り向くことはできなかった。肩をつついてるのが誰の指なのかはもう分かっていたし、その眠たげな声が誰のものなのかももちろん分かっていた。その指でつかれた自分の肩がなぜだかむき出しになっていることにさえ気づいていた。一気に筋肉がこわばる。彼の隣で、こんな格好で眠った記憶がないわけではない。だがよりによってこんな朝に飛ばされるとは思わなかった。記憶と照らし合わせ、さらに彼の声の感じから予想すれば、いまはクローン戦争の時代だ。彼はパダワンを卒業してジェダイナイトに昇格し、弟子までとっている。毎日毎日戦争に明け暮れていたときだ。そして毎日毎日アナキンのことばかり心配していた、未熟者の時代。

「マスター、起きてるんでしょう？ 何でこっち向いてくれないんですか」

その声は眠たげを通り越して不機嫌になりかかっている。

「僕のベッドで寝たことが屈辱だとしても？ それとも僕に怒ってるんですか」

「……怒る？ なぜだ」

返事をすまいと思っていたのについていってしまっただけ後悔した。声はますます低くなっていく。「そんなのこっちが聞きたいですよ。なんで僕がやるのはだめで、あなたがやるのはいいのか教えてください。僕が納得するまで懇切丁寧にね」

生身の方の右手で肩をつかまれ、強くシートに押しつけられる。心の準備ができてもないのに無理やり仰向けにされてあやうくパニックになりそうになった。

「……マスター？」

「な、何だ？」

アナキンだ、と思った。本物だ。幻でもなければ想像でもない。マスクの下の焼けただれた顔でもない。あのころのままの彼だ。その目は大きく見開かれている。しかしすぐに眉がいぶかしげに寄せられ、頭がかたむく。

「いえ、何でもないです。いつもと何か違うような気がしてたけど別に同じでした」

「そ、そうか？ それは何よりだ」

裏返りそうな声でそう返しながら、「いつもと違う」という言葉に少し引かなかった。「いつもと違う」。だが「別に同じ」。どういう意味だろう。アナキンはますます首をかしげ、「でもやっぱり」

違うな」とつぶやいた。

「何が違うんだ？」

「ううん、何だろ。何だか前に見たときより痩せたような気がするけど」

どきりとして顔を背けた。タトゥイーンで暮らし始めてしばらく経ったとき、止めようがないほどやつれていく自分に気がついた。そのままなくなってしまうのかと思ったほどだ。だがこのころはまだそんな兆候もなかった。疲れてはいたが、これほどやつれ果ててはいなかった。

「そんな顔するってことは心当たりがあるんでしょう。あなたって人は捕まるのが仕事みたいなものですしね」

「心当たりなどない。お前の気のせいだ」

「ふうん？　でも日焼けもしてますよ。髪の色がすっかり抜けてるし、首から上だけ焼けてる。さては縛られたまま延々歩かされたんじゃないですか」

オビⅡワンはついに観念してため息をついた。どうやら自分は自我どころか肉体まで保持したままこの時空に飛ばされてきたらしい。精神はもちろんだが、肉体だってあのころとは違う。三年ぶるん年を取り、弱くなり、丸々三年間「生きていさえすればじゅうぶんだ」と思いながら過ごしてきた体だ。オビⅡワンがいまだに彼の裸をはっきりと脳裏に思い描けるのと同じように、彼もまた隅々まで記憶しているだろう。知らんふりが通じるとは思えない。

それでも知らぬ存ぜぬを貫き通すなら、

とりあえずごまかしてみるなら、 98 へ。

とてもごまかし切れない。真実を告げるなら、 111 へ。

73

チェックポイントJに数字が記入されているなら、 120 へ。

空欄のままなら、 136 へ。

74

すると、部屋の奥から深い青色のガウンを羽織ったパドメがゆったりとした足取りで現れた。あまりの安堵に思わず膝から崩れ落ちそうになる。

「パドメ、無事なのか？」

「オビIIワン、いったいどうしたのです？ そんなに血相を変えて」

彼女はいぶかしげな目つきでオビIIワンを見つめている。それも当然だ。他人が真夜中にいきなりやってきて勝手に家をうろつき回っているのだから。

「こんな夜にすまない。君の身に危険が迫っているのではないかと思って……」

「危険？ いったい何のこと？」

さらに安心した。この口ぶりでは侵入者の影も見えていないだろう。もしペイダーが彼女を殺すと

したら、間違ひなく自分の姿を見せる。そして名を名乗る。いつかの暗殺者のごとく忍び寄って傷つけるようなことはするまい。ということは彼女は安全だということだ。

「……どうやら私の早合点だったようだ。こんな真夜中に騒がせて申し訳ない」

「それは構わないけれど、もしかして例の件に進展があったの？ 何だかあわてているもの」

さすがに鋭い。オビ＝ワンはこっそりと息をつき、「実はそうなんだ」と素直に答えた。

「ことさら進展があったわけではないが、アナキンをはめた人物に心当たりがあった。それで、もしかしたらその人物は次に君の命を狙うのではないかと思ってね。こんな時間に来てしまったというわけだよ」

「アナキンを狙っているのになぜ私の命を？ その犯人はまさか、知っているの？」

パドメは声をひそめ、不安そうな足取りでオビ＝ワンに近づいてきた。

「あなたにはお見通しでしょうけど、私たち一応秘密にしているのよ。いったい誰がこんなことを、」
「落ち着いてくれ、パドメ。おそらくの話だ。私の勘違いだったわけだし、君が不安に思うことはない」
「秘密が暴かれそうだから不安なのではないわ。私とアナキンのことを知っている、あるいは知る可能性のある人は限られる。もしかしたら……とても近い存在なのではないのかしら、その犯人は。そして私のことをとても憎んでいる人」

おそらく表情には出ていなかったと思う。アナキンが君を憎んでいるはずがないじゃないかとうっかり言いかけてしまったし、無意味な擁護をして一人で空回りすることもなかった。だがパ

ドメはオビⅡワンの無表情と沈黙を見て何かを察したらしく、「そう」と小さくつぶやいた。

「だったら私を心配している場合ではないわね。早く行かないと」

「ああ。だが最大の心当たりが外れてしまったばかりでね」

「大丈夫よ」

パドメはにっこりと笑い、足早にオビⅡワンの脇をすり抜けてスピーダーを停めてあるベランダへと向かった。あわてて後を追うとぎらつく夜景が目に入ってくる。

「よく考えればきつと分かるわ。考えが手に取るように、心が繋がっているみたいに分かる。頭で考えても分からないときは心で感じて、自分の感覚を信じて」

「素晴らしいアドバイスだ。君がジェダイでないのが本当に惜しいよ」

「あら、これはアナキンの受け売りよ。子供のころマスターによく聞かされていた教訓なんですって」
「彼のマスターは、さらにそのマスターに聞いたことをそのまま弟子に伝えただけさ。だが真実だ。ありがとう、パドメ」

振り返ることはしなかった。彼女に話しておきたいことがたくさんあったのに、それを口にする機会はもうないと直感的に思った。彼女に会うこともないだろう。もう二度と。だがパドメの破滅的な愛はいまだ完結せず、ルークとレイアの命となって続いている。オビⅡワンが残りの人生をかけて必ず守ると誓った命だ。だから言葉はもう要らないし、語り合うべきこともない。その代わりにつか二人に伝えよう。彼女がどんな人物だったか、どんな風に父親を語ったのか。いずれ死に

ゆく彼女に報いることができるとしたら、きっとそれだけだ。

137へ。

75

目下の懸案事項と言えば、もちろんアナキンの公金横領疑惑の一件だ。だがいち軍人であるコーディに追加予算についての意見を聞いても仕方がない。彼が知ってそんなことを尋ねるべきだろう。「君は最近レックスと話をしたか？ アナキンと501大隊が最近派手な金の使い方をしたか聞いていないかな」

「なるほど。スカイウォーカー將軍の件がご心配でいらしたのですね」

コーディは納得のいった顔で頷き、さりげなくオビワンを通路の奥へと促した。

「……どうやら何か知っているようだ。人目を避けるとは」

「何かと言うほどでもありませんが、あまり大声では言いにくいことなので。まず前提として、將軍や501大隊が予算を使い込んだなどという話は百パーセントありません」

「あ、ああ、そうだな。私も同意見だが、それは大声で言いにくいことなのか？」

「ただの前提です。ここからが本題だ。つい先ほどレックスから聞いた話をお伝えします」

素早く左右を見回し、彼は声をひそめてこう切り出した。

「昨夜遅く、501大隊のある兵士が妙な挙動をしていたそうです。クルーザーの周辺を見回って

いたはずなのにシャトルの裏に無表情で立ち尽くしていて、ぶつぶつとわけの分からないことを繰り返していたとか」

「巡邏は二人一組で行うものだろう。そのとき相棒はどうしていたんだ」

「相棒も同じです。二人ともその状態で発見されました。もっとも意識ははっきりしていましたが、その後すぐ任務に復帰できましたが大隊の皆は気味悪がっているようですな」

「よく分からないな」

オビⅡワンはあごひげに手をやり、ううむ、と軽くうなる。だが思い当たるふしがないわけではない。その症状も知っている。むしろ見慣れている。あれはオビⅡワンの得意技なのだ。ジェダイが心を操った相手は、たいていそうなる。

「しかしそのこととアナキンの金遣いがどう関係あるんだ？ その二人が錯乱してむやみにクレジットをばらまいていたというわけではないだろう」

「もちろんです。ですがその二人はスカイウォーカー将軍の旗艦の周辺を見回っていたんです。戻ってきたばかりの旗艦のブリッジにはまだ生のデータが残ってる。作戦の詳細や、通信記録が」

「……まさか」

ひやりとし、背筋が固くこわばった。

「ですが確たる証拠はありません。データにアクセスするにはスカイウォーカー将軍が設定したコードが必要ですし、システムが破壊された形跡もない。横領疑惑が報道されたのがその直後でなけれ

ば、特に問題視もされなかったでしょう」

「タイミングが噛み合っているのは不気味だな。何者かが忍び込んだ可能性があるならしっかり調査した方がいい」

「ええ。しかしスカイウォーカー将軍に報告して相談しようにもつかまらない、とレックスがこぼしていました」

それはそうだろうな、と思った。アナキンは朝一番で評議会に呼ばれ、そのまま議長のオフィスに連行されている。いまま監視下に置かれているだろう。この時代のオビ＝ワン・ケノービがアナキンにかけられた嫌疑を聞いて仰天し、説教じみた質問を浴びせて嫌がられているところだ。

「その件については私がアナキンに話しておこう。レックスにも調べを進めるよう伝えてくれ」

「分かりました。私も手を貸します。他人事ではありませんから」

「ああ。何か分かったらコムリンクでこの時代の私に報告しろ」

「……この時代のケノービ将軍、とは？」

オビ＝ワンはあいまいに笑ってごまかした。またやってしまった。

「それはともかく、頼むぞ。私の直感では見回りの二人の件と今回のアナキンの件は無関係ではない」
「同感です。まずはスカイウォーカー将軍をはめた何者かを探すところから始めるべきです」

それを聞いて笑みが浮かんだ。アナキン自身も同じ言い回しをしていたからだ。

「とにかくここはお任せを。将軍は将軍にしかおできにならないことをしてください。よい報告を

待っています」

コーデイはにやりと笑ってそう言った。そのとき急に懐かしさと悲しみが胸に押し寄せてきた。いまさら思い出すまでもなく、クローンは頼もしい友だった。互いを深く理解し、背中を預け合える存在だった。彼らにブラスターを向けられたあのとき、ジェダイはほとんど唯一の友を失ってしまったのだ。

ああ、そうか。あのとき悲しかったのか。裏切られて悲しかった。アナキンに刃を向けられときと同種の悲しみを本当は感じていたはずなのに、皆何も感じないふりをして、別離を受け入れているふりをして黙って殺されていった。生き延びたオビ・ワンでさえそれに気づかないまま過ごしてきた。三年間も。

「? どうなさいましたか、將軍」

「何でもな……くはないか。もしかしたら君らに何か大事なことを話す機会があるかもしれない」
「大事なことは？」

「秘密だよ。この一件が片づくまではな」

「そうですね。將軍にはスカイウォーカー將軍より大事なものはないでしょうから」

「私はジェダイだ。誰のことともどんなことも、すべて平等に大事なのだ」

チェックポイント「L・コーデイ」に0と記入し、
128へ。

日ごろから目をそちらにばかり向けていたからだろう。彼女が両手いっぱいホロブックを抱えて歩いているのが見えたたとん、「やばいな」思った。あんなに抱えていたらきつと何冊か落とす。年代物のホロブックは衝撃に弱いから、落としたらデータが破損してしまうものもあるだろう。そうしたら叱られるのは彼女だ。このアーカイブの主任司書は他人には静寂を強要するが自分が大声を出すことには何とも思わないたちの人物で、部下を叱るときは思い切り怒鳴る。

彼女に向かって走り出したのは「やばいな」思った一瞬後だ。こぼれ落ちるホロブックに向かって腕を伸ばしたのは、それから二秒も経っていなかったときだと思う。

だが受け止めたホロブックの数は思っていた以上だった。しかも一冊一冊がずっしりと重い。

「あの、ありがとう」

彼女のおずおずとした声が耳に響くと、重さも痛みもすべて遠ざかる。

「ああ、うん。落とさなくてよかった。ほら、古いものだから落とすと壊れるかもしれないだろ。貴重品だし、レポート書くときも困るし」

さりげなく答えたつもりなのに声がうわずってしまふ。しかし彼女は笑わず、一番上にあったホロブックをしっかりと胸に抱えてふたたび歩き出した。

「レポートの調べ物？」

「そ、そうなんだ。資料を探してて」

「このゾーンで何か探してるってことは、もしかしてあなた銀河近現代史を取ってるの？ 採点が厳しいから誰も取りたがらないって評判の」

「それとは違うけど、似たようなものかな。来週までに銀河帝国草創期についてのレポートを書くなくちゃならないんだ」

レポートのことは気の重い真実ではあったが、それはこのアーカイブにいる理由のすべてではなかった。けれど馬鹿正直に「君を見に来てるんだよ」なんて言えるわけがない。

「だったらちようどこにおすすめの本があるわ。『銀河帝国の興亡』。総論より各論ならこっちね。『デススター建設計画にみる銀河帝国都市社会学入門』、『希代の戦術家・スローン＝ターキン往復書簡』、『銀河帝国の思想Ⅱ・全体主義の源流』、あとは……」

「そ、それはもう読んだんだ。僕が探してたのはフォースについての本で、たぶん向こうの棚にある」斜め下から視線を感じて、顔から触覚の先まで熱くなった気がした。よりによって彼女にこんなことを言うのは恥ずかしかった。フォース学はたいいていの人からかびの生えた学問だと思われている。宗教学のカテゴリに入れられかけるたび「カルトすぎる」と弾き出され、心理学に統合されそうになると「うさんくさい」とにらまれてきた。とはいえ僕もフォース研究に一生を費やすつもりなんかない。こんなのはただの単位だ。フォース学の教授はもうろくしていて、授業を受けなくてもレポートを出すだけで単位をくれるから、そのぶんの時間を彼女を遠くから見ることができる。

しかし彼女はまたしても笑わなかった。あきれもしなかった。その代わり真剣な顔で「そうだった

たのね」とつぶやいた。

「私も学生だったときフォース学を取ったの。フォース感应者に実際に会って見たこともあるのよ。ジェダイの最後の継承者だって聞いたけれど、本当に魔法使いみたいだった」

「……ジェダイだって?」

思わず眉をひそめた。その言葉はうっかり同級生の前で口になどしたら爆笑されること確定の禁止ワードだった。なぜならこの銀河には十四歳病という恐ろしい業病があるからで、たいていのヒューマノイドは十四歳準歳くらいになるとどういうわけか自分をフォース感应者であると思い込んでジェダイの末裔を名乗る。そして日がな一日ローブのフードで顔を隠して生活し、「ブウンブウン」とうなりながら棒きれを振り、キーパッドとにらめっこをして自分の黒歴史をわざわざデータに残し、できもしない瞑想をし、必要のない断食をして家族を心底呆れさせる。十四歳病は僕までかかったほどの本当に恐ろしい病だ。十五歳になるとなぜか自然治癒するのだが、一度かかるとのちのちまで心に深い傷を残すことになる。

「ねえ、笑ってない? うわー十四歳病患者だーって思っていない?」

「思っていないよ。ジェダイって本当にいるんだなって思ってる」

しどろもどろにそう答えると、彼女は「ふうん」と言っただけをかしげた。

「あなたもやっぱり信じないのね。でもジェダイは本当にいるのよ。フォースもフォースが起こす奇跡も本当にある。ジェダイ騎士団が減ぼされたりしなければいままみんな信じてるはずよ」

「ええと、確か騎士団は共和国の衰退期にパルパティーン皇帝に滅ぼされたんだっけ？」

「いいえ、パルパティーンは単なる傀儡。彼を影で操り、ジェダイを一人で打ち滅ぼしたのはシスの暗黒卿よ。一説によると強力なフォースを持ち、『フォースのバランスを取り戻す』と予言された選ばれし者だったとか」

頭がくらくらしてきた。どうしよう。彼女のことは二ヶ月ほど物陰からそっと見ていただけだが、まさかこんな人だとは思っていなかった。僕より何歳も年上で、アーカイブの静かな空気が似合う人で、どこから見ても落ち着いた大人なのに、涼しい顔で僕が十四歳のころ好んで使ったワードを連発してくるあたり本当によく分からなくなってくる。

「もっともパルパティーン自身もシスで、突然現れた彼の足元にひざまずいて弟子になったとも言われているんだけどね。だから本当は二人でジェダイを滅ぼしたのかもしれない。でも反戦派の元老院議員を皆殺しにして事実上民主主義を壊滅させたのは間違いなくそのシスよ」

「そ、それって陰謀論ってやつじゃないのかな？ パルパティーンを影で操ってる奴が存在したなんて『銀河帝国の興亡』には書いてなかったけど」

「それはその本を編纂した銀河近代史学会がシスの存在を認めていないからよ。彼らはいなかったものとして扱われている。ジェダイの側から古代史をひもといっていけばシスの血脈が近世まで連綿と続いていたことが分かるのね。けれど、それでもパルパティーンを操っていた暗黒卿がいったいどここの誰だったのか分かっていないの。パルパティーンを従えられるほど強力なフォースを持って

いたならそれ以前にも名を馳せていたはず。なのに彼は……もしかしたら彼女かもしれないけど……は、突然歴史に現れジェダイも元老院議員も皆殺しにして銀河を我がものにしたのよ。そして帝国の興隆に一役買った。あれほどの権力を手にしながらパルパティーンがたった数年で衰弱死したのは、常に彼に脅されて使役されていたからではないの？」

めまいが強くなった。もう陰謀論どころではない。これは「妄想」と呼ぶものなのではないだろうか？しかし何となく笑い飛ばすことはできなかった。真実かどうかは分からないし、それどころか真実でない可能性の方がはるかに高いし、こんなことを近現代史のレポートに書いたら一発で単位を落としそうなのに、なぜか無視できなかった。彼女は僕のぼんやりした顔を見て笑い、腕の中のホロブックをテーブルに置いた。

「ありがとう。ここまででじゅうぶんよ。重かったでしょう」

「あ、ああ、うん。よかった、力になれて」

「いいレポート書けそう？」

「フォース学の？」

「フォース学の。それに、例年通りならそろそろシスについての講義が始まるころよ。先生の話がよく分からなかったらいつでも聞きに来て」

うれしそうに顔を紅潮させている彼女は遠くから見ているときよりもずっと生き生きしていて魅力的だった。もしかして今夜空いてたりしないかな、勇気を出して誘ってみようかな、とちらっと

思ったとたん、彼女はにっこり笑いながら大声で、よりによってこう言った。

「それじゃあまたね。フォースとともにあらんことを！」

(ED12・銀河帝国の真実)

77

「ようやく会えたな、ダース」

落ちていたライトセーバーをフォースで拾い上げ、青い光刃をベイダーの肩すれすれのところでぴたりと止める。

「運命の輪はいま閉じられた。決着をつけるときだ」

「……私を打ち倒すためにここへ？」

「そうではない。私とお前の物語を完結させるためだ。すべて閉じられてしまえば私もお前も、もう迷う必要はない。苦しむ必要も」

「そうか。だったらあんたは戻ってくるべきではなかった」

ベイダーは手足の拘束具を弾き飛ばし、思い切り前に腕を突き出してフォースの突風を作り出した。覚えのある攻撃だ。吹き飛ばされないように脚にフォースを込め、嵐に備える。だがベイダーが狙っていたのはオビⅡワンではなかった。アナキンは防御が間に合わず、屋根の切れ目まで飛ばされる。ぎりぎりのところで落ちなかったものの、片手で屋根にぶら下がるはめになっていた。

「アナキン！」

駆け寄ろうとしたときにはもう遅かった。オビⅡワンの視界に入ってきたのはフォースで首を絞められたまま数百メートル下に落ちていくアナキンと、アナキンのライトセーバーがまるで主人を恋うようにベイダーの手元に吸い寄せられていく光景だ。そのとき死の一字が頭をよぎった。自分の死ではない。アナキンの死だ。オビⅡワンがかつて愛し、パドメが最後まで信じた「アナキン・スカイウォーカー」の完全なる破壊。

オビⅡワンはすべての後悔を捨て、振り向いて立ち上がった。巨大な暗黒面のフォースが渦巻いているを感じた。おそらく自分は殺されるだろう。ベイダーがかつての自分を殺して得た力にあらがうすべはない。だがオビⅡワンが望んでいたのはこんな結末ではなかったか。ライトセーバーの一振りによってオビⅡワンとアナキンという二人の人物の物語は完結する。この後悔も執着も愛情も恋心も、一秒にも満たない時間の中ですべて終わってしまう。

これでよかったんだ、と思った。願った通り、運命の輪は閉じられた。いまこそ彼との長い長い因縁に決着をつけるときだ。

(ED 14・運命の輪)

78

だめだ。真実を話せない以上、誰かの知恵を借りることはできない。オビⅡワンは埃だらけの空

き部屋に忍び込み、寝具が撤去された寝台の上に腰を下ろした。とたんに埃が舞い、鼻の奥がむずむずし始める。だが目を閉じて意識を自分とフォースに向け、瞑想状態になると身体的な感覚は一気に遠ざかる。

まずは駆け回って集めた状況を整理するところからだ。時系列順に並べるところなる。

最初の最初はおそらく数ヶ月前のことだ。パルパティーン最高議長は元老院に補正予算案を提出した。多額の追加予算はほとんどすべて軍事費にあてられる旨が明記されていたから、当然モン・モスマやベイル・オーガナ、パドメなどの反戦派は猛反発した。議論はかつてないほど紛糾したが結局は彼の思い通りになったはずだ。思い返すと薄ら寒いがこのときは珍しくもない出来事だった。

そして昨日の夜、コーディによると戻ってきたばかりのアナキンの旗艦を見回っていたトルーパー二人が怪しげな行動をしていた。一時的に心身を喪失し、記憶を失っていたそうだ。二人はおそらくフォースの扱いに長けた人物に心を操られ、クルーザーから遠ざけられたのだろう。旗艦のコンピューターには作戦のデータがそのまま残っており、トルーパーを洗脳した人物がそれに手をつけた可能性は高い。だがアナキン自身が設定したアクセスコードがなければ見ることもできないはずのものだ。

さらにその後、ベイル・オーガナの知人である官吏が殺された。彼は共和国軍の財務全般を担当しており、証拠のすべてを握っていたと目される存在でもある。しかしライトセーバーに熟達した者に殺され、証拠のデータを奪われ、改竄され、残りはすべて消された。

そういったお膳立てが済むとすみやかに報道機関へのリークが始まった。この時代のホロネットニュース会社はアウターリムでの戦闘の様子を伝えたり共和国政府の発表をそのまま流すだけで、報道らしい報道をしていない。ほとんどの事実はバルパティーンの許可を得てからでないとい報道できなかったからだ。それなのにこの件に関してはそういった手が加えられた形跡はない。つまり、普段とはまったく別の情報源がいるということだ。共和国とも分離主義派とも関わりのない、戦争の利害から自由の立場にいる者。

背中にじつとりと汗をかいていることを認めざるをえなかった。考えれば考えるほど不気味に思える。これらの情報を総合すると、アナキンを陥れた人物は共和国軍、とりわけアナキンと501大隊をよく知っており、マインドトリックを使うことができるほどフォースに通じていて、ライトセーバーの扱いに慣れている、しかもこの世界と時代の狂騒の域外にいる、ということになる。そんな人物はこの時代にはいない。いるとしたらオビⅡワンくらいだ。この時代の自分ではなく、クローン戦争の終わりと帝国時代の始まりを見てきた、いまの自分。まさか、と思う。めまいがする。オビⅡワンがここにやってきたのは夜中だった。身ひとつでアナキンのベッドに飛び込んだのがすべての始まりだと思っていたが、もし違っていたら？超時空からこの世界へやってきてまっすぐに宇宙港へ行き、クローン兵二人を操り、旗艦に残されている作戦のデータを改竄し、財務担当官をライトセーバーで殺して記録を操作し、証拠を消し、捏造した情報を報道機関にばらまく。一晩で行うのは難しいことばかりだが、オビⅡワンなら数時間でできる。間違いない。動機もじゅうぶ

んだ。最高議長としてのパルパティーンの権威が揺らげば独裁制への移行を防げる。そしてパルパティーンにアナキンを疑わせれば彼の裏切りをも阻止できる。パルパティーンを倒す必要もむやみに人命を奪う必要もなくオーダー66の悲劇を回避できるとしたら？自分ならその道を選ぶだろう。もちろんそんなことをした覚えはないが、時空を超えてきたショックで記憶を失ったと言われたら納得してしまうかもしれない。

しかしながら自分が絶対にしそうにないことがひとつだけある。証拠を消すために官吏を殺したことだ。オビィワンはオーガナ議員の知人だというその人物を知らないが、文官が武装して襲いかかってきたとは思えない。だったら殺すことはありえない。つまり、データを改竄して報道機関にリークしてパルパティーンとアナキンを陥れたのはオビィワンではない。身に覚えがないのだから当然なのだが、容疑者探しはこれで振り出しに戻ってしまった。いったい誰なんだ。ジェダイ並の高い能力を持ち、内部事情を知り尽くし、未来すら知っているかもしれない人物。大隊のトルーパーを殺していないのになぜか官吏を殺したのになぜかトルーパー二人を殺さなかった人物。しかし皆から見えないところで暗躍する誰かのイメージはいつまで経っても像を結ばない。あと一步なのに。

いてもたってもいられなくなって意識を現実に戻し、目を開けた。自分が何か大きな見落としをしているような気がしてならなかった。

考えがまとまってきたと思うなら、
117へ。

さらに調べたいことがある、あるいはこの時代でやり残したことがあるなら、
130へ。

79

そこを目指すことに特に目的はなかったが、この先三年間の銀河でもっとも重要な人物といえば
パルパティーンだ。だから彼のオフィスをのぞいてみることにした。彼は今や銀河帝国の皇帝とし
て君臨しているが、このときはまだ元老院の最高議長という肩書きだった。彼は人の心を操るのが
うまく、他人の自尊心や隠された欲望をくすぐっては自分の信奉者に仕立て上げてきた。任期を過
ぎても最高議長の座に居座っていられるのはこのためだ。元老院には彼の熱烈な支持者が何百人も
いる。すべてパルパティーンによってひそかに陥れられ、その後彼自身に救い出された議員たちだ。
彼らが任期延長の法案を通したおかげでパルパティーンは「皆に望まれて仕方なく」といういで
この銀河での最高権力を手にし続けている。

「元老院オフィスビルの高層階まで頼む」

やっとの思いでタクシーを捕まえ、行き先を告げると運転手はにやにや笑いながらこう答えた。

「あんたも記者か？ 議長のコメントを取るには出遅れてるぜ。いまはみんなジェダイを追ってる」

「記者？ いや、私は違うが、議長の執務室を張っていた記者がそんなにいたのか？」

「ああ、スカイウォーカーの横領の件でな」

「なん、だって？」

一瞬で天地がひっくり返ったかと思った。スカイウォーカーの、横領の件。アナキンが横領。

「あんたニュース見てねえのか？ あの色男、どうやらとんでもねえ大金を使い込んだらしいぜ。たった三日で金庫をカラにしたとか。分離主義派のスパイだって話もあるらしい」

あまりに深く混乱していて、情報処理するだけで精一杯だ。アナキンが大金を使い込んだ。たった三日で。スパイ。まさか。

「……それはいつのニュースなんだ？」

「夜ふけだ。最後のひと稼ぎに官庁街を流してたら急に記者の客が増えやがってな。議長のオフィスだの議事堂だの行政府ビルだのジェダイ聖堂だのを一晩中駆け回らされたぜ、まったく」

「夜ふけ、か。私の知らない時間の話だ」

ぽつりとそうつぶやくと、運転手はわけが分からない、といったように首を傾げた。オビⅡワンがこの時空に飛ばされてきたのは、おそらく夜中のことだろう。だがそれはアナキンが見たというだけで自分自身の記憶にはない。オビⅡワンが意識を取り戻したのは日が昇ってからだ。ニュースの内容とは関係がないが、そのタイムラグが少し引かかった。

「議長のアパートにはいま誰がいる？」

「さあな。そのうちジェダイが詫びを入れに来るって噂だが、いつなのかは知らんね」

それを聞いて確信した。おそらくアナキンが来ている。一人で招かれているなら本気で疑われているはいないだろうが、別のジェダイ、具体的に言えばヨーダやメイスがいたら深刻な事態になってい

るかもしれない。もちろん根拠はない。ただの直感だ。とりあえずその場に向かわなければならない。「すまないが、できるだけ急いでくれ。議長のオフィスまで」

「規則を知らねえのか？ 最高層階までは行けないんだ。撃ち落とされちまう」

「スピーダーが行けなくても私は行けるさ。途中の階でいい。できるだけよじ登れそうな出っ張りがある場所を探して下ろしてくれ」

152へ。

80

考える前に体が動いた。ライトセーバーを持っていないとか、斬り殺されるかもしれないとか、そんなことはもう頭になかった。みすみす彼を殺させるわけにはいかない。かといってこの時代のアナキンを死なせるわけにもいかない。なら、ただ見ているという選択肢などありえないのだ。弟子を止めるのも、弟子を守るのも、師の役目だ。それはオビワンのしかできない。たとえ斬り殺されたとしても悔いはない。

はためくロープを手で払いもせず全速力で走り、屋根を蹴って飛び上がる。すると黒い影を端まで追いつめていたアナキンが驚いたように視線を向けてきた。

「……マスター？」

アナキンのライトセーバーは相手の真ん中あたりで止まっている。一瞬後には彼の胴を寸断して

いただろう。少しでもためらっていたら命はなかったということだ。オビⅡワンは大腿で歩み寄りながら二人のライトセーバーをフォースで奪った。危ないところだった。

「何するんですか！　というかけがはどうしたんです？　じっとしててくださいってあれほど、」

「アナキン、その男を捕らえろ。決して手を出させるな」

オビⅡワンのテンポに慣れているせい、彼の反応はスムーズだった。アナキンはノータイムで彼に襲いかかって両手を拘束する。

「あれ、こいつ両方とも義手みたいですよ。これじゃ縛ってもあんまり意味ないな」

「簡単に外すことはできないさ。お前の右手と同じだ」

彼は大人しくされるがままになっている。逆らっても無駄だと思ったのだろうか。まさか。アナキンはそれほどあきらめのいい男ではなかったはずだ。

「手だけでは足りないな。膝を折らせろ。ついでに脚も縛れ」

「はいはい。このヘルメットとアーマーみたいなのも取りますか？」

「だめだ。その胸のパネルにも触るんじゃないぞ。生命維持に支障が出る」

アナキンは肩をすくめ、「なーるほど」と低くつぶやいた。

「あなたがけがを押してまで何で僕を追いかけてきたのか分かりました」

「そうか？」

「ええ。僕にこいつを殺させないためでしょう。分かっているんですよ」

「想像力が豊かだな」

「ごまかさないでください。絶対そうでしょ。だってさっきから知ってるような口ぶりじゃないですか。こいつあなたの何なんですか？ まさか昔の恋人だって言うんじゃないでしょうね」

また馬鹿な妄想をして、と返そうとしたとき胸が詰まった。「昔の恋人」。恋人。聞き慣れないしむずがゆいし面はゆい言葉だ。今までの自分の人生の中でそんな言葉が登場する機会は一度もなかった。なぜなら「恋人」とは恋心を寄せる相手を指すからで、オビⅡワンは誰かに激しく恋したことなければそれが自分の本心だと自覚したことなかったからだ。だがこの時代の二人を目の当たりにしてしまった以上もう知らないふりはできない気がした。潔く、勇気をもって認めよう。アナキンがどう思っていたのかは知らないが、少なくともオビⅡワンにとつての彼はそうだった。彼は恋人だった。そして自分は長い間恋の熱狂の中にいた。本当はずっとそうだったのに、認めたくなくて気づかないふりをし続けていた。

「黙らないでくださいよ。本当にそうだって言うならそのライトセーバー返してもらいますからね」
「本当だよ。彼は昔の恋人だ。ライトセーバーは返さないがな」

さらりと言葉を返すと空気が凍った。彼が目を剥くところを見られないのが少し残念だった。きつと腹を立てているだろう。勝手に決めつけるな、と思っているはずだ。あるいは驚いているのか。どちらにしてもきつとその大きな目を剥くだろうが、ヘルメットに阻まれて見えない。代わりにヘルメットをしていない方のアナキンが思い切り目を剥いた。

「……嘘ですよ」

「本当だよ」

「嘘ですよ？」

「本当だよ」

「違います。嘘に決まっています」

「本当だと言ったぞ」

「嘘なんです！　だってマスター、僕が初めてだって言ってたじゃないですか。うれしかったのに。もしかしてあのとき僕に嘘ついたんじゃない、」

その声は震えていて、今にも決壊しそうだった。自分の弟子のことながら少し呆れる。ここにいるのは間違いない記憶しているとおりの彼なのにこうして見るとあまりにも幼かった。目の前にひざまずかせているのが仮に赤の他人であってもアナキンはこのどうしようもない痴話喧嘩を最後まで続けたすえに爆発するだろう。彼はいま今ごろきつと耳をふさぎたくてたまらないに違いない。オビⅡワンが三年前の自分の言葉をとても聞いていらなかったのと同じように、早くその口を閉じてくれと思っているはずだ。そう思うと唇の端に笑みが浮かんでくる。

「涙を拭いて少し落ち着け。お前に言った言葉は嘘じゃない」

「涙なんか出てません。だいたい嘘じゃなかったら何なんですか？　このヘルメット男が昔の恋人なのは間違いないでしょう？」

「その男はお前だよ、アナキン。だから私の昔の恋人なんだ。私を問い詰めたくてたまらないだろうが質問は後だ。しばらくそこで黙って見ていなさい。最後まで聞けばお前も納得すると思う」肩に手を置いてアナキンを黙らせ、縛られてひざまずいている彼の元にゆっくりと歩み寄った。最初に彼にかける言葉はもう決まっていた。あの超時空に足を踏み入れることを決断したとき、その言葉しか考えられなくなった。オビⅡワンは静かに息を吸い込み、黒いヘルメットを見下ろしてこう言った。

「ようやく会えたな、ダース」と言い放つなら、77へ。

「久しぶりだな、アナキン」と呼びかけるなら、144へ。

81

エアタクシーを降り、優美なベランダに一步足を踏み下ろすと胃の奥に金属の塊を流し込まれたような気分になった。最後にここに来たときのことを覚えている。フォースが二人の不信といさかいの記憶を伝えてきて、幸福だったときの思い出が徐々に薄れていく悲しさを空から感じた。

最後にここを去ったときのこととはつきりと覚えている。「お腹の子の父親はアナキンだね？残念だ」。出産を目前に控えた彼女がこれからどれほどの苦痛を味わうかと思うとやりきれなかった。シスの暗黒卿ダース・ベイダーはヨーダにとってはもはやアナキンではなかったが、彼女にとっては永遠にアナキンのままであり続けるだろうことは分かっていた。

オビィワンも、あれはもうアナキンではないと何度も思おうとした。これからこの手にかけるのだから、彼はもはやアナキンでないものになっていなければならなかった。けれどあのとき、パドメとともに泣くことができたなら、アナキンが変わってしまったことをともに嘆くことができたなら、オビィワンも彼の善性を最初から信じることもできたのかもしれない。だがとくに過ぎたことだ。同時に彼女にとってはまだ起こっていないこともある。

「オビィワン？ 珍しいですね。ここまで来てくださるなんて」

会えることを期待してはいなかったが、ベランダで迎えてくれたのはあのおしゃべりなC-3P0ではなく、パドメ本人だった。

「突然申し訳ない。お邪魔ではなかったかな」

下げた頭を戻してからそう言うと、彼女は「とんでもない」とほころぶように笑った。

「実はさっき議場から戻ってきたところなのよ。ちょうどよかったわ」

「そうだったのか。忙しそうだね」

「ええ、それなりに」

椅子を勧められ、座ると同時に3POがトレーに載せた茶を運んでくる。

「けれど明日から少しの間、帰省して家族の顔を見てくるつもりなの。ようやく会期が終わったところだったから。けれど来週からは委員会に詰めないとならなくて……」

「そうだったのか」

オビⅡワンはあごに手を当て、今朝のことを思い出した。

チエックポイントHに0、かつJとKに両方に数字が記入されているなら、85へ。

右記の条件を満たしていないなら、73へ。

右記の条件を満たしている場合でもパドメには何も話すべきでないと思うなら、同じく73へ。

82

アナキンはさっさとベッドから起き上がって身なりを整え始めたが、オビⅡワンの方はそうはいかない。なぜならこの部屋のどこにも服がないからだ。それどころかブーツもない。ベルトもない。ライトセーバーもない。本当に身ひとつで飛び込んできてしまったらしい。

「アナキン、頼みがある」

「何です？」

椅子に座ってブーツのかかとを合わせていたアナキンは、いぶかしげな声でそう答えた。

「やっぱりしたいって言うならお断りですよ。実は評議会の呼び出しを一晚中無視してたのをたたいてほしい出して、」

「そうじゃない。お前の服とブーツとベルトを貸してくれ」

「僕の？」

彼は目を丸くして動きを止めた。

「まさか、服がないんですか？」

「そのようだ」

「どこで服を脱いだんですか？ まさか丸裸で聖堂じゅうをうろつき回ったあげく僕の部屋に來たっていうんじゃないでしょうね？」

つかみかからんばかりの勢いでそう聞かれ、答えに窮した。イエスと答えたならオビ＝ワンはその時点で最低の犯罪者と化す。だがここに服がない理由は他に思いつかない。何と言ってごまかせばいいだろう。

「服を何者かに持ち去られた」と答えるなら、103へ。

「酒に酔ってテンションが上がり、服を外に捨てた」と答えるなら、99へ。

嘘についても仕方がない。最低の犯罪者になる覚悟を決めるなら、135へ。

83

何がなくともまずは自分の部屋だ。自分の服を着て自分のブーツを履いていれば奇異な目で見られることもないし、呼び止められて苦しい言い訳をしなくても済む。それにアナキンの服は大きいからもたついて動きづらいのだ。昔はむしろ少しきつかった覚えがあるから、この三年の間に相当筋肉が落ちたのだろう。そのぶん速くは走れなくなっし、ライトセーバーを振るうときの力強さもなくなっている。いまアナキンを止めなければならなかったらおそらく勝てない。それどころ

かグリーンヴァスやヴェントレスと互角に渡り合えるかどうかも怪しい。オビⅡワンは廊下を急ぎながらこっそり肩を落とした。

皆がイメージするオビⅡワン・ケノービは、たいていが「將軍」と呼ばれていたころの自分だ。未熟なバダワンのころの自分ではないし、ましてやすべてを失ってしょぼくれたこの姿では決してない。いまあのころの自分を目の当たりにしたら、もう二度と取り戻せないことを痛感するはめになるだろうか。分らない。アナキンやアソーカや他の皆には会えても自分にだけは会えないはずだからだ。自分に対してだけは後悔したり懐かしくなったりできない。

と黙っていたのに、最後の角を曲がって自室の扉が視界に入ったその瞬間、オビⅡワンは思わぬものを見た。億劫そうに首を回しながら部屋から出てきたその人物は、どこからどう見ても間違はなくオビⅡワン・ケノービその人だった。將軍と呼ばれていたころの。交渉人と呼ばれていたころの。油断のならない奴だとグリーンヴァスやヴェントレスに罵倒されていたころの。

とつさに角に身を隠したのが正解だったのかどうかは分からない。この時代のオビⅡワンは、軽くため息をつきながら反対側へ向かって歩いていった。拭い去れない重たい疲労が背中ににじみ出ている。それに自分で思っていたよりも年齢も感じさせる。それでも彼は今の自分よりずっと力強い。憎たらしいほどの余裕をさりげなく発していて、何をぶつけても跳ね返ってくるのではないかと人に思わせる姿をしている。オビⅡワンは息をもらして笑った。自分のことなのにおかしくて仕方なかった。あのころの自分はこんな風に見えていたのか。当の本人は少しも余裕がなくて、一日でい

いから立ち止まって考える時間が欲しいと絞り出すように願っていたというのに。

「ケノービ將軍」がとうとう向こうの角に消えてしまうと、オビⅡワンは恐る恐る陰から姿を現した。まさか自分までいるなんてまったくの想定外だ。自分と顔を合わせるとまずいのではないかという気もするし、自分にだけは真実を告げておくべきではないかという気もする。いずれにしろそれはいまではない。今はとにかく着替えが最優先だ。

服を着替えてかつての自分に戻ると少し気分が明るくなった。タトゥイーンで着ていた服は継ぎ接ぎだらけで細かな砂が入り込み放題だったから、清潔で手入れの行き届いた自分の衣服を着ているだけで人間に戻れた気がした。自由だ。とはいえそげ落ちてしまった肉は元には戻らないし、髪の色も肌の色もそのままだ。自分が思っている以上に慎重に行動した方がいい。（※チエックポイント「J・オビⅡワン」に0と記入すること）

この時代の自分のあとをつけるなら、**146**へ。

やめておくなら、**154**へ。

84

ずっとくすぶっているのを感じてはいた。できるだけ表に出さないようにしようとしているのも分かっていて。彼の我慢のきかない子供のようなところにうんざりしてきた覚えばかりがあるが、こうして時間を巻き戻してみると思っていた以上に大人だ。記憶に間違いがなければ、彼はこのと

きもうパドメと婚姻関係を結んでいた。こういうときに相手を思いやれるようになったのは、おそらく彼女との関係を持ったからだろう。

そんなことを冷静に考えている自分がおかしかった。さっきから驚かされてばかりだ。あのころは自分の知らないところで結婚までしたアナキンに心底失望していたし、それどころか「裏切られた」とばかり感じていて、とてもこんな風には思えなかった。

「アナキン、やめなさい。突然裸で潜り込んできたりなどしたことは悪かったと思わないでもないが」毛布をかき合わせるようにして穏やかに体を離すと、案の定アナキンは不満げに鼻を膨らませた。『『思わないでもない』？ 僕から毛布を奪ったり眠れなくさせておいて？』

「……分かった。悪かったと思っている。少しは。だが今はやめてくれ。朝だぞ。いつまでも起きてこないと不審がられる」

「じゃあ今夜なら？」

「お前が夜に時間があるなんて珍しいじゃないか」と続けるなら、319へ。

「いくら何でも早すぎる。また今度だ」と答えるなら、96へ。

特に何も言わずに了解するなら、115へ。

85

確か、アナキンは「明日から一週間ほど単独行動をする」と言っていた。表向きは休暇だ、とも。

その手の文言は過去に何度も聞いたことがあるし、おそらく彼女と過ごしたための言い訳だろう。

「もしかして何かあったのですか？ スカイウォーカー将軍か、あなた自身に」

「何だって？」

どきりとして思わず拳を握りしめた。しかしパドメは涼しい顔をしている。

「政治家嫌いで有名なあなたがわざわざ現職の議員に、しかも個人的に会いに来るのは珍しいもの。何かあったかと思うのが普通でしょう。しかも私のところに来るということは、共通の知人の件ではなくて？」

「……君は鋭い。議員にしておくのが惜しいよ」

「あなたをジェダイにしておくのは惜しいという評判をご存知？」

オビ＝ワンはぎこちなく笑い、3POが出してくれた茶を一口含んだ。熱すぎず、濃すぎず、心が落ち着くいい匂いにする。

「察しの通り、アナキンの件だよ。君に相談するのが適当かどうかは分からないし、彼のマスターだというのに何も知らないのも情けないが、アナキンはどうやら私に隠れて何かしようたくらんでいるらしい。明日から一週間留守にすると行ってきた。表向きは休暇だという話だが、内容を言おうとしないんだ」

「……そうなの」

彼女の顔がさっと青ざめた。政治家らしくうまくコントロールされた表情に一瞬だけ浮かん

は「混乱」と「疑念」だ。だがそれは話の内容ではなく、話し手であるオビⅡワンに対する感情だ。たいして親しくもないオビⅡワンが自分の弟子の個人的な予定を彼女に言いにくるのはどう考えてもおかしい。二人の関係がばれたのか、そうでないのか。もしや「アナキンと別れる」とでも言いに来たのか。君らの愛は破滅にしか繋がらないと冷たい声で言い放ち、ジェダイらしく人の心を介さない説得を始める。何をぶつけても動じないジェダイをうまくやり込めるにはいったいどうしたらいいだろう？

パドメの頭にちらとでも浮かんだのは、きつとそんなことだろう。だがどれも外的外れだ。オビⅡワンに彼女をなじる資格はまるでない。ジェダイでありながら、師でありながら、彼を守り導く立場にありながら、親しい友人でありながら、彼と彼女の関係を知っていながら、それでもアナキンを寝て、掟を破った。パドメはそれを知らない。目の前の相手にやましい気持ちがあるのは彼女ではなく自分だ。しかしどれほどやましくても相手の知らないことを知っているという事実は、決して覚えてはいけぬ優越感を人に覚えさせる。

「さて、どうだろう、パドメ。心当たりはあるかい？」

「ないわ。本当に。ごめんなさい。でも、あなたでも見当がつかないの？」

「ああ。情けない話だがね」

「そう……」

パドメは釈然としない様子でため息をついた。心の中で彼女に謝る。これは底意地の悪い揺さぶ

りであって本題ではない。本当に聞きたいのは、もちろんアナキンが追加予算を使い切ったという嫌疑をかけられている件だ。しかしパドメは心底アナキンのことを愛している。盲目になるほど愛している。もし何かを知っていてもアナキンをかばって話さないだろう。軽く揺さぶりをかけて心の枷を外さないと真実を口にさせるのは難しい。

「もしかしたら昨夜報道された疑惑に関連するものではないかしら。彼はどうしているの?」

「いまごろ釈明に追われているのではないかな。大軍を預かる将軍としては人々の声を無視するわけにはいくまい。ジェダイとしての立場もあることだし」

「まさかあなたは報道を信じているの? アナキンが本当にあんな莫大な額を横領したと?」

その必死な表情を見て確信した。彼女は何かを知っている。

「私がどう思っているかは関係ない。仮に信じていなかったとしても、私は公然とアナキンを擁護できる立場にはない。元老院議員たる君もそうだ。公益を守らねばならない立場なのだからね。だが、我々には真実を知る権利はある」

パドメはうつむき続けている。

「何か知っているなら話してくれないか、パドメ。最近アナキンが接触した中に怪しい人物がいなかったどうか、あるいは政治スキャンダルに巻き込まれなかったかを。君なら知っているだろう? 私はジェダイとしてしか彼と関わっていないが、君は私人としての彼のすべてを知っているはずだ」
「……なぜあなたが私とアナキンのことを知っているの、と尋ねるのは愚かなことなのかしら」

「愚かではないが不要な疑問だ。私は君らがナブーの湖畔で結婚式を挙げ、秘密の結婚生活を送っていることを知っている。これから君らに起こりうることもすべて。しかしそれを追及している時間はないし今さら興味もない。そもそも私にそれを責める権利もないのだから安心してくれていい」

一気にそう言って言葉を切り、バドメにまっすぐ向き合った。

「そんなことよりも頼む。教えてくれ。こんなやり方でアナキンを陥れた者がいたとすれば、それはジェダイや共和国軍だけでなく政治の世界をよく知る人物の仕業だ。しかもその人物はジェダイや共和国でなく議長とアナキンそれぞれの失脚を狙っている。君ら政治家の目から見ても、怪しい人物はいないか？」

これは議長のオフィスで話を盗み聞きしたときから感じていたことだ。だが言葉にすると現実味より奇妙さが際立った。パルパティーンは元々敵が多いからありえないことではないが、このときのアナキンは単なる將軍であり数千人いるジェダイの中の一人だ。ジェダイの失脚を望むなら狙うべきは一ジェダイナイトのアナキンではなくグランド・マスターのヨードだろう。もしアナキンが疑惑をかけられてオーダーを追放されたとしても困るのはオビ・ワンくらいで、大勢に影響はない。その点では他のジェダイもオビ・ワンもたいいていの評議員も同じだ。

「ということは、あなたはつまりアナキンの疑惑を晴らしたいのね？」

「公的にはそうあるべきではないが、真実を追及することが公益に反するとは思えないのでね」

「そんな言い訳は要らないわ。ここに来たときに『私のかわいい弟子は断じてそんなことをする男

じゃない。だから力を貸してくれ』と、最初に言ってくれたらすぐに答えたのに」

パドメは顔を覆っていた手を離し、哀れみの浮かんだ目を向けてきた。

「申し訳ないけど、私は本当に何も知らないの。本当よ。嫌疑のことも報道で知ったわ」

「まさか、」

「本当よ。何も知らない。私だって明日から彼と一週間ともに過ごすはずだったというのに、彼の口から事件のことを何も聞いていないのよ。これからのことも。正直言って不安だし不満もあるけれど、彼を信じているの。もちろん心配はしてる。けれど、もしアナキンが難しい状況に置かれていたなら必ずあなたが彼を信じて手を打ってくれると信じてる。だから彼を信じられる。それに、あなたが思っているほどあなたは彼のことを知らないわけじゃない。すべてあなた自身の記憶に答えがある。それをまず何より先に理解するべきだわ」

頭を抱えたくなったが彼女の前でそうするわけにはいかなかった。自分が恥ずかしくてならなかった。だがいまの自分でなく、この時代の自分だったら彼女に何を言われているのか理解するのとさえできなかっただろう。

「……パドメ、すまない。友人であるはずの君に無礼を働いてしまった。許してくれ」

「ええ、もちろんよ」

「アナキンのことは私がどうにかする。朗報を待っていてくれ。きっと不安を晴らしてみせる」
「そうではなくて、『ともに信じて行動しよう』と言ってほしかったわ」

彼女は口角を上げてそう言い、オビⅡワンの腕にそつと手を置いた。

「あなたがアナキンを心から信じると言ってくれるなら、私は彼のために何でもするわ。委員会なんて後回しでいい。彼とのことが報道されて、皆に後ろ指を指されてもいい。全銀河に向けて、アナキンが今までどれほど善を行ってきたかを喧伝したっていい。でもあなたが背を向けるならきつと誰も信じない。あなたが彼を信じてくれさえすれば、すべてうまくいくわ」

「信じているよ、もちろん」

パドメの最後の言葉を思い出して胸が痛くなった。「オビⅡワン、彼にはまだ善の心が残っている」。オビⅡワンが最初からそれを信じさえすれば、すべてうまくいったのだらうか。あれは暗黒卿ではなくアナキンなのだと信じさえすれば。

「分かった。ともに信じて行動しよう、パドメ。まずは議長と彼を陥れた人物を探るところからだ」
「ええ。実は主戦派のとある派閥に最高議長の不信任決議案を提出しようという動きがあるの。そこを探ってみるわ」

「頼む。私も何か分かったら教えるよ。それと……もしもう一度私が来て同じことを尋ねたら、何も知らないと言って冷たく追い返してくれないか」

「もう一度って?」

「戦術だよ。秘密だがね。だからまた君に同じことを言って思わせぶりに揺さぶりをかけてくると思うが、許してほしいんだ」

彼女は眉をひそめ、立ち上がって背を向けたオビ＝ワンを追いかけてきた。

「待ってちょうだい、どういうことなの？」

「すまない。ときが来たら教えるよ。それまでくれぐれも元気でいてくれ。元に戻る前に君に話しておきたいことがたくさんある」

そう言い捨ててエアタクシーに乗り込むと、パドメは怒ったような顔をしながら見送ってくれた。アナキンが怒ったときに似た、美しいしめ面だ。死の直前の悲痛な表情を忘れることなどできないと思っていたが、こうして動いて話している彼女を見ると徐々に痛ましい記憶が遠ざかっていく。だがルークとレイアは間違いなくパドメの子だ。あれは現実に残ったことだ。もしできることなら、彼女の生き生きした表情やしぐさを二人に見せてやりたいと思う。彼女はただの血ではなく、この激動の時代に力いっぱい生きていた人間なのだということを二人にもいつか知ってほしい。

チェックポイント「N・パドメ」に1と記入し、128へ。

86

物音を立てないようにそっと扉に手を当て、フォースを送る。そのまま空気の振動をフォースで捉えると苦笑いが浮かんできた。ここに飛ばされてきてから何だか盗み聞きばかりしているような気がする。

ほどなくしてヒステリックな声が聞こえてきた。アナキンのものだ。となると、話し相手は一人

しかない。この時代のオビⅡワン・ケノービ。アナキンはヨーダやパルパティーンの前でぎりぎり抑えた怒りをおつてのマスターにぶつけている。彼のマスターはアナキンの怒りと混乱をなだめるのがうまい。本来なら自分で処理しなければならぬ感情でさえマスターがあるべきところに収めてしまう。そのせいで彼は結局最後まで自制を覚えることがなかった。他人の前でうまく取りつくろうことだけはうまくなったが、中身は何ひとつ変わらなかった。もしアナキンの精神が未熟だったとしたら、それは自分のせいだ。どうしても放っておけなかった。いつも「アナキンが心配だからだ」と言い訳をしてきたが、オビⅡワンが一番大事だったのは自分のその気持ちだ。つまりは愛と執着だ。思い返してみると暗澹たる気分になる。

へたり込みたくなるのをこらえ、話の中身に意識を集中する。最初はただマスターに怒りをぶつけているだけでほとんど内容はなかったが、聞いているうちに徐々に意味のある言葉になってきた。「僕をはめた奴がいるってことは間違いないんです。そんなに僕が憎いならいっそ殺そうとしてくれれば立ち向かいようもあるのに」

「減多なことを言うものじゃない。狙われたものが命でないだけでした。名声などくれてやればいい」「名誉はともかく、ジェダイとしての自分を奪われたら死んだも同然ですよ」

アナキンはきっぱりとそう言い、しばらく口をつぐんだ。

「心配しなくとも評議会はお前を追放などしないさ。お前が確かにやったという証拠はなく、ましてやドゥークーと通じているという話は検討することさえ難しい。何しろお前はつい最近彼と派手

な艦隊戦をしたばかりなのだからな」

「ええ。しかも僕が勝ちましたしね」

「何でも勝ち負けにすり替える癖は大問題だが、今回に限って言えば当たらずしも遠からずだな。この状況を覆すもっとも有効な手はドゥーターを負かして捕らえることだ」

「無理でしょう、それは。僕があいつだったらしばらく雲隠れますよ。黙ってれば敵が勝手に仲間割れしてくれるんだから」

二人は同時にため息をついた。確かにそうだ。このタイミングで彼が動くとはとても思えない。

「となるとやはりお前を陥れた人物を捕らえるしかないな。見当はついているのか？」

「全然分かりません。僕を恨んでる奴は山のようにいると思いますが、そんな度胸のある奴がいるとはとても」

「そうか。困ったな」

自分のことながらあまり困っているようには聞こえないし、こうして客観的に聞いてみると自分は何を考えているのか分かりにくい話方をしている。だがもう一人の自分であるオビワンには分かる。彼は少し苛立っている。しかしその苛立ちを自覚することもなく、結果的に誰の前でも飄々とした態度を取っている、ように見える。

「では状況を軽く整理してみようか。まず昨夜のことだ。最初の報道は真夜中すぎだったというから、リークされたのはその少し前だろう。お前が評議会の呼び出しを無視してのんきに眠っている間に

ことが大きく動いたんだな」

「……ちょっとマスター。のんきになって、他人事みたいに言いますね」

「夜中に何があったにせよ呼び出しを無視したのはお前自身だぞ」

「それはそうだけど冷たいじゃないですか。今朝のこともう忘れたんですか？」

「背筋がひやりとした。まずい。この時代のオビ・ワンはアナキンのベッドに裸で潜り込んだりなどしていないのだ。彼はおそらく昨夜遅く今朝早くにコルサントに戻ってきて、今までアナキンには会っていない。二人の言動に食い違いが生じたら自分の存在を気取られかねない。」

「何を言っているのかは知らないが、自分の過失を私のせいにするのはやめなさい。よくない癖だ」
「はいはい。そう言うと思ってましたよ。マスターのことだから」

ふてくされたようなアナキンの声を聞いて、ほんと胸をなで下ろすどころか廊下に大の字になリたくなったが我慢した。まったく状況が分かかってないだろうに、彼はぎりぎり自分の言いそうなことを言ってくれた。どっちにしても自分だから当たり前なのだが、この時代の自分に謎の信頼感を覚えてしまう。

「話を戻すぞ。この件がホロネットニュース会社にリークされたのは昨夜のことだ。その前は追加予算の使い道が報道されたことはほとんどなかった。お前の金の使い方が元老院で問題になったことはないし、他の將軍にしても同じだろう。ドゥークーと通じているとなじられたことのある士官は他にもいるが、この戦争の象徴的存在たるジェダイの名が挙げたことは一度もない」

彼は一度言葉を切り、軽く咳払いをした。

「根拠のない噂や疑いなどいくらでも出てくるのにこれらが一度も言及されなかったのは、どれも最高議長の失点になりうるからだ。なのに今、彼の権威をおとしめる事実が白昼堂々報道され、元老院でも多くの議員が口になっている。私が思うに……、予算の件を捏造してお前を陥れた者がどこかにいるとしたら、その人物の標的はお前個人ではないのではないかな。どうもお前と議長の二人ともを狙っているのではないかと思うのだがね」

部屋の中に沈黙が広がった。彼がアナキンの反応を待っている間、オビⅡワンはこっそり息を吐いた。彼も自分なのだから当然だが、同意見だ。あのパルパティーンがあれほど疑心をむき出しにして怒っていたのは彼にとっても想定外の出来事だったからだろう。オビⅡワン以外は預かり知らぬことだが、この時代の銀河は共和国の中も外もパルパティーンの手の中にある。世の中のすべてがそうは見えない形で彼を利する方向に動き、巨大な転換点に向けて疾走する時代を彼自身がコントロールしている。そのパルパティーンと将来彼の弟子になるアナキンを同時に陥れるには、彼のコントロールを免れた存在でなければ難しいのではないか。共和国や時代とまるで関係のない存在。ただ問題は、そんな人物がこの時代のどこにいいのか、ということになる。

「僕も最高議長も、敵は多いはずですよ。でも僕らには特に共通点がない」

「そうか？ 同じ陣営に属してはいるだろう。彼は共和国軍のトップで、お前は共和国軍のもっとも有名な将軍だ」

「そうやって言うのもうやめてください。ちっともうれしくないし不愉快です。それに、そんなに頭のいい奴ならなぜ議長と僕を狙うんですか？　いくらホロネットに顔が出てたって僕はたくさんいる將軍の中の一人だし、たくさんいるジェダイナイトの一人でしかない。僕を追い詰めたってオーダーを追放されたらそれきりで、ジェダイオーダーにも共和国にも傷はつかないじゃないですか」

ううん、と彼はうなづいた。何も知らなければそのあたりが限界かもしれない。二人を狙う理由は三年後を知っているからこそすぐに思い当たるものであって、この時代ではまだはつきりとは繋がらないはずだ。将来彼らが師弟になると知っているのは、この中ではオビ・ワンだけなのだから。

「どうも分からないな。確かに前と議長を狙い撃ちする理由はないように思える。さては、私の知らないところで恨みを買ったんじゃないのか。どこかの星で誰かの婚約者や配偶者を奪ったりなどしてないか？」

「……まさかそれ本気で言っていないですよ？　僕がそんなことするような奴に見えるんですか？」

「冗談だよ、怒るな。煮詰まったから息抜きをしようと思っただけだ」

「息抜きに言うようなことですかそれ？」

「ほら、座りなさい。少し休憩しよう」

「反省してくれるなら座ります」

「分かった分かった。反省するから茶でも飲んで落ち着け」

オビ・ワンも扉から手を離しながら少しだけ反省した。自分のことながらひどい冗談だ。外で聞

いているからこんな風に客観的になれるが、同じ状況に置かれていたら自分も同じように言っているに違いない。まあこれからは少し気をつけよう、と思い、その場を離れる。だが「これから」が自分に訪れるかどうかは疑問だ。この部屋の中にいる、この時代の二人がうらやましくてならない。それがいつか失われてしまうことも知らずに、輝きを腕いっぱい抱えて持て余している。腕からこぼれ落ちたものは遠くから眺めて後悔するだけで、後から拾い上げることなどできはしない。

部外者のオビⅡワンにとって、この世界のものはすべてそうだ。見るものも聞くものも感じることも自分のものではない。時間という分厚い膜に隔てられ、とっくになくしてしまったものを懐かしむくらいが関の山で、現実のものとして感じることはできないでいる。いつかまたそれらを胸に抱えて笑ったり泣いたりする日は来るだろうか。後悔だけで生きるには、もしかしたら十数年は長すぎるのではないか。(※チェックポイント「P・オビⅡワンとアナキン」に1と記入すること)

考えがまとまってきたと思うなら、117へ。

さらに調べたいことがある、あるいはこの時代でやり残したことがあるなら、130へ。

87

「ふざけるな」

本気と演技が半々ほどの怒気を発しながらそう言うと、アナキンは美しい形の眉をつり上げた。「そこまで言わなくなつていいじゃないですか。よりによって裸なんかで僕のベッドに入ってきた

のは誰だと、」

「私だよ。だがもう少し気遣いができてもいい。お前は大人なんだぞ」

「ええ、僕は大人だから一晩中何も言わずに我慢しました」

そう吐き捨てる声には、悔しさと悲しさがにじんでいた。

「驚いたけどよく眠ってたから声もかけずにずっと寝かせておいてあげたし、あなたが目を覚ましたとたんいきなり襲いかかったりもしませんでした。あなたが思ってる以上に大人だから、あなたが気づかないほど完璧に気遣いをしたんです」

その声は悔しそうに震えていたがぎりぎりのところで取り乱してはいなかった。オビⅡワンはため息をつき、頬をそっと撫でた。

「……すまない。確かにそうだ。お前の言う通りだ。気づかなくて悪かった」

「別にいいです。マスターが僕のことを分かってくれないのはいつものことだから」

「そう拗ねるな。悪かったよ。裸で入り込んだこともこの通り、謝る」

彼はいぶかしげにじろじろとオビⅡワンの顔を見回していたが、しばらくするとため息をついて目の力を抜いた。

「もうしないでくださいよ」

「ああ。次からは自分のベッドであることを確認してから潜り込むことにするよ」

「そうじゃなくて、裸で入ってくるならそういう気分のときにしてほしいってことです。一晩中我

慢するのも起こすかどうか迷って眠れないのもつらかったから。次はちゃんと誘ってきてください」
 おずおずと顔が近づいてきて、彼がキスをしようとしているのが分かった。コンマ五秒も待てば
 その通りになっただろうが、脳が感情を処理するより先に体が拒絶した。無理だ。できるわけがない。
 「キスもだめなんですか？ 今日のはほんとに嫌なんですね」

アナキンは残念そうに言い、体をわずかに離れた。

「そういうわけじゃない。ただ、朝だからだ。そろそろ皆に顔を見せないと不審がられる」

「キスくらいでそんな時間かかるわけじゃないですか」

「万が一ということもある」

何がおかしいのかアナキンは声をあげて笑い出し、ひとしきり笑った後「なーんだ」とつぶやいた。

「今がだめなら、今夜なら？」

「今夜？」

「お前が夜に時間があるなんて珍しいじゃないか」と続けるなら、139へ。

「いくら何でも早すぎる。また今度だ」にするなら、96へ。

特に何も言わずに了解するなら、115へ。

もっとも嫌な思いつきだが、ベイダーはおそらくパドメの元に向かっている。暗黒面に堕ちても

なお、パドメは彼の弱点だ。アナキンは妻を失いたくないばかりにもっとも選んではいけない選択肢に手を伸ばした。そして彼女を殺しかけ……、その後のことは知らない。パドメの首を締め上げ、結果として胎児ともども彼女を殺したと知ったときのベイダーの心情はオビワンのには計り知れない。後悔したろうか。自分も死にたいと思っただろうか。あるいは、それでも生きたいと思ったのか。その激情を生け贄にして暗黒面に深く入り込み、生きるために彼女への執着すら差し出したのか。だとしたらここでパドメの命を奪ってしまおうと考えるのはおかしくない。そうすれば暗黒卿として完成できる。二度と戻ってこられない深さまで潜ることもできる。愛を憎しみに変え、あたたかさを灼熱に変え、ともに過ごした時間を悪夢に変えれば、彼は迷う必要さえもうないだろう。スピーダーを性能の限界まで飛ばし、もしアナキンの助手席で見ていたら口笛を吹きそうなほどのじぐぎな飛行でパドメのアパートにたどり着く。しかしベランダの奥のリビングは闇に包まれていて中の様子を窺い知ることとはできない。鼓動が早くなり、体が急に熱くなる。もしかしたら、もう凶行を終えてしまった後なのかもしれない。彼女の小柄な体が床に横たわっているところを思わず想像し、小さなため息が漏れた。それだけはだめだ、と心の中でアナキンに呼びかける。それだけはしてはいけない。彼女を手にかけて記憶などひとつでじゅうぶんだ。二度も同じことをしたら大事だった思い出さえ薄れる。彼らが愛し合った時間はきつと美しかったはずだ。何が起ころうと、その事実だけは決して消えない。三年間彼と過ごした時間の美しさに悩まされてきたオビワンはよく知っている。だがそれが薄れて美しくさえなくなったら、自分が生き延びている意味もな

くなる。

大股でリビングを横切り、明かりをつけて回り、大声で「バドメ」と呼びかける。

チエックポイントNに数字が記入されているなら、74へ。

空欄のままなら、102へ。

89

彼に抑制チップのことを話そう。もっとも信頼しているコーディになら言えるはずだ。だがそう簡単には決断できなかった。彼らは自分たちの脳に爆弾が仕込まれていることを知らない。チップのことが明るみに出かけたことは一度あるが、あのときは深く追及することができなかった。というより自ら真実に蓋をしたというのが正しい。チップの危険性を表に出せば全クローンの処分に繋がらうる可能性があったからだ。ジェダイはクロントルーパーたちを愛し始めていた。明らかに特別に思っていた。だからジェダイは滅びた。自らの執着によって。

オビIIワンは閉じていた目を開け、コーディにまっすぐ向き合った。

「どうやら深刻なお話のようですね、將軍」

「ああ。突拍子もない話だからできるだけ明らかにしたくはなかったが、君には率直に話そう。実は、君らの頭の中には自分ではコントロールできない命令書のようなものが仕込まれている」

沈黙が訪れた。コーディは瞬きもせずにオビIIワンを見つめている。

「驚いただろうな。というか信じていないな？　すまないんだがすべて本当だ。君ら全クローンの脳には生体チップが埋め込まれていて、ときがくると望まない行動をしようようにできている」
「望まない行動、とは？」

ようやく口を開いたコーディは、ぎこちなくそう聞いてきた。

「特定の集団、もっとはっきり言うと、ジェダイを殺すことだ。どんな残忍な方法を用いても」

あっぱは、という豪快な笑い声がドッグに響いた。彼がこんな笑い方をしているところを見たことがない。

「笑うことはないだろう。真実だぞ」

「いくら何でも馬鹿馬鹿しすぎますよ、將軍。この間の仕返しにしてはうまくない」

「仕返し？」

彼は手のひらで涙を拭い、「お忘れですか？」と返す。

「少々前のことです、酒の席でレックスと二人で將軍をからかったでしょう。スカイウォーカー將軍が戦地で女性と駆け落ちしかけたという嘘をでっちあげ、あなたが顔を青くするのを見て笑った事件です。ずいぶん怒ってらしたのでそのうち仕返しがあると思っていますよ」

「ああ、あのたちの悪い嘘か。だが私は仕返しのような真似はしないよ」

確かに記憶にある。思い出すたび惘然とするが、怒るほどのことではない。

「將軍の名誉のためにそういうことにしておきましょう。ではこれで。私もパーティーに出なければ

ばなりませんので」

あ、と思ったときにはもう遅かった。コーディは迎えに来たスピーダーに飛び乗りあつという間に宇宙港を飛び去ってしまった。オビⅡワンはがつくりと肩を落とし、その場に座り込みそうになった。覚悟が必要だったぶん落胆はしたが、こうなって当然だ。そう簡単に信じてもらえないわけではない。

とりあえず気を取り直してきびすを返し、オビⅡワンは宇宙港をあとにした。

128へ。

90

この格好なら評議會の間においてもおかしくはない。だが勘の鋭いマスターたちに観察されると正体を見抜かれるかもしれない。葛藤のすえ、オビⅡワンはできるだけ人目を避けながら評議會の塔を目指すことにした。確かアナキンは評議會に呼ばれているはずだ。何かの命令を言い渡されているのか、あるいは何かへまをやらかして呼び出されて注意されているのか。そのどちらなのかはオビⅡワンには分からないが、アナキンの元マスターだというのにその場にいないのはまずいような気がする。

大きく深呼吸をし、評議會の間に通じるターボリフトの前に立つと、ちょうど降りてくる音がした。とっさに物陰に隠れ、様子を見る。

「僕じゃありません、絶対に。誓います」

「分かっている。だが最高議長への説明は必要だ。それに私やマスター・ヨードにしても百パーセントお前を信じるわけではない」

「そんな！」

声の主はアナキンとメイス・ウィンドゥだ。顔をのぞかせてみると、後ろにヨードもいる。

「感情を抑えよ、スカイウォーカー。あの追加予算は議長が無理に横車を押してまで通したもののじゃ。彼の政治生命がかかっている。それが一気に空になったのなら、説明が欲しくもなるじゃろうて」
「では何度でも説明しますが、僕はそんなことをした覚えはありません。する意味もない。別のジェダイや、共和国軍の別の部隊にしてもそうです。だいたいどうやったらあの膨大な予算を一度の作戦で使い切れると思うんです？」

二人はそれには答えない。オビ・ワンがその場においても何とも言えなかっただろう。状況を知らないなりに話を整理すれば、どうやらアナキンは一度の作戦で追加軍事予算をすべて使い切った、ということになっているらしい。ヨードとメイスに付き添われてパルパティーンに釈明しに行かねばならないなら確たる証拠があつての嫌疑なのだろう。

だが正直言って疑わしい。アナキンは細かい金勘定などしたことはないし、たいていのことを勢いで済ませているが、それでも全クロン兵の食い扶持や艦隊の維持、そしてすべての作戦行動をまかなうほどのクレジットを無駄に使うような男ではない。そもそもそんなことは物理的に不可能だ。それだけの金を一気に動かせば銀河全体の経済活動に影響が出る。

真実が知りたい、と思った。しかし別の時空から来たオビⅡワンにできることなどないような気もする。さて、これからどうするべきだろうか。

真相を確かめるべく三人のあとを追うなら、
114へ。

聖堂に残って別の場所に行ってみるなら、
154へ。

91

頭に浮かんできた名は、ダース・ベイダーだ。この時代にはまだいないはずの暗黒卿、シディアスの弟子、オビⅡワンが誰より愛した男を殺した人物。

なぜ急にこの名前に思い当たったのだろうか。むしろなぜ今まで思い当たらなかったのだろうか。地下室とあの白い部屋が繋がったときのことを思い返してみればいい。オビⅡワンが白い部屋にいて間、ベイダーはオビⅡワンの家にいた。同じだけ互いの仮住まいを探索し、同じだけ感傷に痛めつけられ、同じだけ考えに沈み、同じだけ変化を味わった。だったら時空を超えてここにやって来たのは、自分だけではない。彼も来たのだ。そして同じだけこの時代の空気をかき、自分のものになることは二度とない輝きやあたたかさを目の当たりにした。だが彼がここでしようとしたことはオビⅡワンとは正反対だ。彼は未来を変えようとした。がむしろに挑むのではなく、必要最小限の力で。オビⅡワンは壁についた手を離し、拳を握りしめる。確かにあれはアナキンの仕業ではなかった。恐怖と不信と疑心の味を知り尽くし、人々のどこを押せば思い通りに動くかをわきまえている

者の仕業だ。

もうじつとしてはいらなかった。二本の足を懸命に動かし、廊下を駆け抜けていく。聖堂の庭に着くころには息が切れかかっていて、自分で自分にショックを受ける。しかし休むわけにはいかない。彼を止められるのは自分だけだ。長い付き合いだから、彼が次に取る行動が分かる。これだけでじゅうぶんだと思っても、必ず手を打ってくる。彼がまだ記憶している通りの男なら、こんな遠回しな策謀だけで終わらせるはずがない。この時代を崩壊に持っていく派手な一手。ベイダーは、いや、アナキンは、突然敵の懷に飛び込んでむちゃくちゃな攻撃を仕掛けるはずだ。

ベイダーが向かった先が元老院だと思ふなら、**101**へ。

パルパティーンのおフィスだと思ふなら、**94**へ。

パドメのアパートだと思ふなら、**88**へ。

宇宙港だと思ふなら、**127**へ。

ここジェダイ聖堂だと思ふなら、**137**へ。

92

アナキンの服を着て恐る恐る聖堂の廊下に出てみると、想像以上にがらんとしていて拍子抜けした。仕方ないとは言え弟子の服を着てそのへんをうろついていたら奇妙な目で見られただろうが、とりあえずその心配だけはなかった。戦争のせいで人が出払っているからだ。ほとんどのマスター

とパダワンは戦地にて、子供たちは一ヶ所に固められて一刻も早く戦力になるように鍛えられていた。オビワン自身もほとんど聖堂にはいなかったし、戻っていても評議会の間と作戦室に詰めていることばかりだった。

昔はマスターを訪ねてきたのに勇気がなくてノックができずうろろしているパダワンや、隅でひそかに雑談に興じている子供たち、ゆったりとした足取りでターボリフトに向かう大人たちで廊下がいっぱいだったものだ。だがそんな光景は二度と戻ってこなかった。戦争の狂騒に吞まれたままジェダイオーダーは滅び去り、大人も子供もマスターもパダワンも銀河のあなたに旅立ったまま永遠に戻ってこれなくなった。今やこの聖堂はパルパティーン皇帝のものだ。ジェダイの面影は入念に消し去られ、行政府として使われている。

廊下の壁に何気なく刻まれているジェダイコードの一文が焼き消されているところを想像してめまいがし、オビワンは小さく嘆息した。パドメの外交船に忍び込んでムスタファーに発つて以来、オビワンは一度もコルサントに戻っていない。戻ったら命がないのもあるし、そもそも戻りたくなかったからだ。出身星と両親を覚えていないオビワンにとって、この聖堂はまぎれもなく故郷だった。殺されたジェダイたちは唯一の家族だった。もしここに帰ることがあるとしたら、きっと生者としてではないと思っていた。その予感には当たっただろうか。外れているのだろうか。いまの自分がどういう状態にあるのか、こうして歩いていてもまだ分からない。

「マスター、何してるの？」

背後から鋭い声が出て、オビ＝ワンはぎくりとして足を止めた。ゆっくりと振り向き、少しづつ視界を確認する。

「……おはよう、アソーカ」

「あ、マスターじゃなかった。おはようございます、マスター・ケノービ。どうして私のマスターの服を着てるの、って聞いた方がいいですか？」

だから誰にも見られなくなかったのに、よりによってもっとも見つかりたくない人物に見つかってしまった。

151へ。

93

「何もない。私は何も知らない。今はいなくともアナキンはそのうち現れるだろうから君は道場で瞑想でもして待っていなさい」

「ちょ、ちょっとマスター！」

できるだけ追いつかれないように早足でその場を立ち去る。アソーカは何かと鋭いがアナキンはどしつくくはない。彼女が追いかけてこないことにほっとし、徐々に歩みをゆるめながら自室へと向かった。一刻も早く自分の服に着替えないとまた同じことが起こってしまいそうだ。

100へ。

94

彼が手にかけてようとする者はたくさんいるだろうが、もっとも手にかける価値があるのは一人しかない。この時代のシーヴ・パルパティーンは銀河元老院の最高議長という職にあり、混乱をきわめる共和国をうまくまとめながら独裁制への胎動を聞いていた。いま彼を殺してしまえば銀河帝国は誕生しない。シスの師弟も生まれる前に死ぬ。彼一人が死ぬだけで歴史は一変するだろう。共和国はこの先しばらくは共和制を敷き続け、ジェダイオーダーは千年先も存在し続ける。

そこまで考えたとき、頭の奥にちらりと違和感がよぎった。果たしてそれは、実現可能な未来だろうか？もちろん、ジェダイであるオビ・ワンにとっては望ましいし、そうであってほしい。シスの皇帝が銀河全体を支配する世界など悪夢でしかない。命をかけてもつかむ価値がある。だが彼にとっては？シディアス一人が死んだからといってアナキンが抱えていた葛藤は帳消しにはならない。それに、シディアスを倒すのはそもそも不可能なのだ。

猛スピードでパルパティーンのオフィスへ向かっていたスピダーを建物の影につけ、ゆっくりと停止させる。どうやら頭に血が上っていたようだ。もう一度よく考えてみなければならぬ。

150
へ。

95

こういう状況なのか分からないままではあるが、裸でベッドに入り込んでおいて知らんぷりする

のはさすがに難しいような気がする。だからとりあえず誘いに乗ってみることにした。だが朝から性交をするなどという自堕落な真似をした経験は一度もないし、自分らしくもない。どちらがより不自然かは分からないし、怪しまれないという確信ももちろんない。論理的にそう決めたわけではない。理性もない。陰惨と幸福に満たされたこの時代に戻ってきたという実感が欲しかっただけだ。そのまま何も言わずにおとなしくしていると、アナキンは少しづつ体重をかけてオビ＝ワンを仰向けに戻し、馬乗りになった。わずかに息が上がっている。重たげな欲望の翳りが表情に現れている。

「本当にいいんですかね？」

「……分からない」

「はあ？」

アナキンは顔をしかめたが、それこそが嘘いつわりのない素直な気持ちだった。分からない。これ以上どうしたらいいのか分からない。

「分からないって、自分がしたいかしたくないのかも分からないんですか？」

「ああ、そうだ」

自分を恥じながらそうつぶやいた。実感が欲しかったはずなのに現実感はずいぶん少ない。頭ではその行為を理解していても、体の方はちっともついていけない。彼と肌を合わせたことは何度もあるはずなのにそれはまるで後から植えつけられた他人の記憶のようで、肉体の欲望と感覚とともに思いつくことがなぜかできない。

「久しぶりだから入れられるのが怖くなったとか？」

「そうかもしれない。何しろ三、」

その先は咳払いでごまかした。「三年ぶり」という言葉はまずい。

「三ヶ月なんて大げさだな。あれから一ヶ月くらいしか経ってませんよ」

「日数の問題じゃない」

「もう、四の五の言わないでください。嫌なことはしないし、痛くなったらすぐやめますから、僕を受け入れて」

最後の言葉だけはささやき声だった。上半身がゆっくり倒れてきて、頬にキスが降ってきた。彼の唇はあたたかかった。すり寄ってくる頬も、大きな手のひらも、少年のころと比べてすっかり肉がついた体も、いつも自分自身を丸ごと投げ出してくる激しさも、すべて間違いなく記憶にあるものだった。だがどこかおかしい。強い欲望をこれだけの至近距離から受け止めているのにまともな感情が湧いてこない。感覚も遠い。知らないところで思い切りブレーキがかけられているような感じで、どうしてか恐ろしくて踏み出せない。

「アナキン、すまない。やめてくれ」

唇同士が触れ合いそうになったとき、オビィワンはついに耐えきれずに顔を背けた。

「やっぱり嫌になったんですか。何で？」

「分からない。とにかくすまない。また今度にしてくれないか」

やんわりとアナキンの腕から抜け出そうとすると、強く肩をつかまれた。しかも義手の方でだ。目つきも妙に鋭い。

「マスター、もしかして何かあったんじゃないですか」

「何かとは？」

「どこかの星に恋人ができたとか、僕より体の相性のいい相手がいたとか、そういうことですよ。だから僕としたくなくなったんじゃない、」

「突然お前は何を言ってるんだ」

オビⅡワンはため息をついた。いったい何を聞かれるのかと思ってひやりとしたが、いつも通りただのつまらない想像だ。

「まったく、その手の妄想もたいがいしろ。私はジェダイだ。恋人などいない。今後もできない。他人と軽々しくベッドをとめるようなこともない」

アナキンの体を押しのけて起き上がり、うんざりしながら前髪をかき上げると、ふてくされた空気を隣から感じた。姿勢はさっきと同じだが表情は変わっている。下唇を噛みしめ、大声で言い返したいのを必死でこらえている、といった感じだった。

「ひどいじゃないですか、そんな言い方」

「事実だよ。お前は悪い想像に耽りすぎる癖がある」

「僕が言ってるのはそういうことじゃないんです。あなたのさっきの言葉の中で一番ひどいのは

……、いや、もういいや。マスターに言っただけ分かんとは思えないから」

ベッドの上で体を起こし、彼は大きなため息をついた。

「まあ、確かにお前には悪いことをしたかもしれない。気を持たせるような真似をして振り回したことは謝る」

「ええ、そうですね。でもそっちは別に謝らなくてもいいです。ちゃんと態度で示してくれれば」
「だったら、」

そっと太ももに触れて頭の位置を下げていくと、アナキンはぎょっとしたように飛びのいた。

「やめてください！ 僕がそんなこと望んでると思ってるんですか」

「ただの謝罪代わりだよ。お前が嫌ならしない」

毛布にきつくくるまり、視線をそらす。顔が熱く火照っているのが分かった。恥と罪悪感と後悔が頭の中を駆け巡っていた。

「……キスもしたくないのに、口するのはいいんですか」

「さっきも言ったが謝罪代わりだ。いいも悪いもない」

「したいわけではない？」

「分らない」

早口でそう答えると、アナキンはこちらをちらりと見てからすぐに目を背けた。

「だったらやっぱりやめてください。したくもないのにこういうことされると、何とか、あな

たを『使ってる』みたいだから」

「いつも自分勝手なくせに妙に律儀だな。使われても私は何とも思わないが」

「少しは思ってください。相手が僕じゃないと本当に便利に使われるだけになりますよ。そっちはやたらうまいんだから」

小さなため息とともに頬にキスが落ちてきた。そしてそのままベッドに並んで仰向けになる。

「本当は、してほしいです」

アナキンはささやき声でこう言った。

「分かってるよ」

「頭をつかんで思い切り動かして口の中に出したい」

「分かってる」

長い指がそつと髪に触れ、もてあそぶようになると動く。

「でもしません。あなたが『分かる』ようになるまでは。感心したでしょ。褒めてもいいんですよ。想像以上に大人だって」

「感心はしないでもないが、それがいつになるか分からないぞ」

「定期的に試してみるのはどうですか？」

「定期的？」

思わぬ言葉に笑い出しそうになった。だがアナキンは真剣だ。

「だって試さないと分からないでしょう。そのとき嫌ならそれ以上はしません。一回試してみていい感じだったら、まず最初に口に出させてください」

「よく分からないがまあいいだろう。だがずいぶん先の話になるだろうな。お前と顔を合わせる機会がそれほどあるとは思えないし」

「じゃあさっそく今夜はどうです？」

「今夜？」

「お前が夜に時間があるなんて珍しいじゃないか」と続けるなら、139へ。

「いくら何でも早すぎる。また今度だ」にするなら、96へ。

特に何も言わずに了解するなら、115へ。

96

「いくら何でも早すぎる。また今度だ」

ベッドをとにもするということは、つまり裸をさらすことになる。だが半日で元に戻るとはとも思えない。自分が置かれている状況さえまだはつきり分からないのに安易に約束してしまっただけ困ったことにもなりかねないのだし。とっさにそこまで考えてから返答すると、アナキンは少し悲しそうな顔をした。

「今度って？」

「また近いうちに顔を合わせることがあったら、だよ。急ぐ必要などないだろう」

「あなたにはないかもしれないけど僕にはあるんです！ 言ったのに聞いてなかったんですか？」

いかにもとぼけている、という感じであごひげを触ると、彼はますます目を怒らせる。

「すまないが忘れた。いったい何だったかな」

「何度も念押ししたのにひどい人だな。明日から一週間ほど単独行動するんです。聖堂にはたぶん戻ってこれないし、しばらく顔を合わせる機会なんてありません」

「単独行動？ 休暇ではなく何かの任務でか？」

声をひそめてそう聞くと、彼は気まずそうに頷いた。

「そうです。……まあ表向きには休暇ってことになってますけど、別に休むわけじゃないです」

オビⅡワンは失望の色を隠しながら目線を下げた。なるほど、と思った。なるほど。そういうわけか。確かに、覚えがある。彼はコルサントに戻ってくるたび、休暇と称して消えたことが何度かあった。何をしているかはだいたい見当がついていたし、誰と会っているかも分かっていた。何も言わなかったのは彼への温情だ。それに、これ以上アナキンに恨まれたくなかったから。きっとそっちが本物の理由だろう。

「……なら一週間後、私が聖堂にいたら、だな」

「譲歩してはくれないんですね」

「お前への温情だよ。明日から休暇ならやるのがたくさんあるはずだ。よけいなことをしている

暇などないだろう」

アナキンはそれ以上食い下がってこなかった。代わりに眉を下げ、億劫そうに体を起こした。

チエックポイント「H・アナキン」に0と記入し、82へ。

97

ターボリフトに乗ったはいいが、ボタンを押していないからいっこうに動かなかった。そのときはたと気づいた。目的地が決まっていない。適当なレベルを押そうとも思ったがむやみに動くのも危険だ。また思わぬ人物に出会って必死で言い逃れをするはめになるかもしれない。オビIIワンは頭をフル回転させ、もっとも安全かつ行く意味のありそうな場所をひねり出す。最初にどこを指すべきだろう？

かつての自分の部屋に直行するなら、83へ。

道場に顔を出そうと思うなら、124へ。

中庭に出るなら、145へ。

聖堂の外に出てみるなら、122へ。

98

「私は四、五年後の未来からやってきたんだ。お前の専用シャトルと繋がっていた地下室が急に超空

間になってしまい、意を決して飛び込んだらこうなった。さあな。理由は分からないよ。おそらくフォースのしわざだ。物理的にも心理的にも隔たりができてしまった私たちを繋ぎ合わせるために……というのは都合がよすぎるな。うん？ なぜ隔たっているのか、だと？ ああ、この時代のお前はまだ知らないのか。実はお前はあと数ヶ月で暗黒面に転向し、シスの暗黒卿となってオーダーを滅ぼすんだ。私は死ぬまでお前の息子を見守ると決意し、タトゥイーンでわびしい暮らしを送っている。やつれたのも髪と肌が焼けてしまっているのもおそらくそのせいだ」……。

その説明の馬鹿らしさに肩を落とし、それを聞いたときの彼の反応を想像してさらに深く嘆息する。とてもじゃないが、こんなことは言えない。信じてもらえらると思えない。この時代にこんなことを口にすればアナキンは笑うどころか怒り出すだろう。ジョークにすらならない。

「どうしたんですか、マスター。捕まった言い訳を考えるに足らずいぶん時間がかかってるじゃないですか。まさか頭の中まで痛めつけられたんじゃないでしょうね」

「そういう笑えない冗談はやめろ。すべてはお前の想像通りだよ。私は任地でとある組織に捕まり、炎天下をさんざん歩かされたあげく投獄されて満足に食事も与えられなかった。痩せたのも日焼けをしたのもそのせいだろう」

淡々とそう答えながら毛布を鼻先まで引き上げた。少々癩にさわるがそれがもつともありえそうな可能性ではある。

「へえ、いつものことですね」

「まあ、そうとも言える。だからじろじろ見るな」

これ以上相違点を探されたくなくて、鼻どころか頭まで潜ってしまいたくなる。アナキンは納得しかねているのか、唇を尖らせて低くうなった。

「だからまっすぐ聖堂に戻ってきたんですか？」

「どういう意味だ？」

「どうもこうもないでしょう。あなたも僕と同じく戻ってきたのは昨日の夜だ。僕は常習犯ですが、マスターがあれだけでかい作戦の後始末を放り出してここに戻ってくるとは思いませんでしたよ」

「あ、ああ、そうだな。疲れていたんだ」

少ない情報を整理し、頭の中で必死にパズルを組み立てる。どうやらこの時代のオビⅡワンは、昨日まで大きな作戦のために銀河のどこかに遠征していたらしい。アナキンはおそらく別の星系に行っていたが同じタイミングで戻ってきている。とはいえそれが何の作戦なのかは分からないしアナキンがどこに行っていたのかも知らないし、オビⅡワンが本当に捕まっていたかどうか不明だ。「それにしてもあなたらしくないな。いつもは聖堂に戻ってきたら真っ先に評議会に報告しに行くじゃないですか。それなのに一目散に僕の部屋に来て服を脱いでベッドに入ってくるなんて、よっぽどだったんですね」

「……何だって？」

「どうやら酒を飲みすぎて正気を失ったようだ。そこの窓からすべて投げ捨てた」

「……」

「……」 以外に返答の仕方があるなら教えてほしい、といった表情を浮かべ、アナキンはしばらく黙りこくっていた。当然だろう。オビ＝ワンは薬を盛られて錯乱したことはあっても酒を飲みすぎて錯乱したことはない。はずだ。たぶん。

「何か言いたいことがあるのか？」

「ええ、あります。もう酒飲むのやめてください」

「そのつもりだよ。で、お前の服を、」

「やめるなら貸します。僕だけは信じてますからね。マスターは必ず立ち直るって」

徐々にいたわるような目つきになり、そっと自分の服を差し出してくる。うまくはいったが何となく釈然とはしなかった。犯罪者扱いだけは免れたかったのにこれでは何も変わっていないのではないかという気がした。

どこにも立ち寄らずに一直線に自分の部屋へ向かい、扉を閉めてしまおうと安堵のあまり座り込みたくなった。懐かしい匂いがする。何もない部屋の、何もない匂い。それでもここは自分だけの空間だった。

いったん目的を忘れ、ベッドに仰向けになる。ムスタファーへ発ったとき、またここに戻ってこられるとは思わなかった。だがウータパウへ発ったときも、まさか二度と戻れなくなるとは思わなかったのだ。本来ジェダイは旅から旅への人生だから、家には執着がない。戻ってくるべき場所だとも思っていない。なのにどうしてか悲しかった。永遠にこの場所を失ったとき、もはや自分が何者でもなくなってしまったような気がした。

ため息をひとつつき、感傷から浮上する。まずすべきことをしなければ。ぼうつとしている場合ではない。オビⅡワンはのろろと身を起こし、服を着替え始める。自分の服に袖を通すだけで身軽になった気がする。このまま一日「自分」に囲まれてぼうつとしていたいが、その前にアナキンの服を返さなければならぬ。服を雑にたたんで足早に部屋を出ようとしたとき、奇妙なことが起こった。ノックもなく扉が開いた。そしてまるで遠慮のない足取りで入ってきた者がいた。部屋を間違えているんじゃないか、と声をかけようとして、自分の声帯が凍りついたのが分かった。

そこにいたのはオビⅡワン・ケノービその人だった。オビⅡワンは薄汚れた服を着て、姿勢は少しおかしく、ブーツの先に乾いた泥がこびりついていて、目を見開き、愕然とした表情でオビⅡワ

ンを見つめている。

「……まさか」

震える声でそうつぶやいたとたん、頭の中に涼しい風が吹き抜けた。頭だけではない。急速に手足から肩、胴体を凍えさせていく。肉体が溶けても自我が失われても、これが破滅だということくらは理解できた。しかし「お前は誰だ」という言葉は最後まで声にならなかった。お前は誰だ。そして私は、誰なんだ。

(ED9・消滅③)

101

この時代の共和国を共和国たらしめているのは元老院の存在だ。すでにパルパティーンの専横が始まっていたが、元老院と民主主義のシステムがある限り共和国は共和国のまま存在できる。この時代を壊すなら元老院を破壊するところからだろう。

オビIIワンは聖堂に停めてあったスピーダーを勝手に拝借し、猛スピードで元老院議事堂までやってきた。ここは要人が一カ所に密集しているからテロの格好の標的になりうる。しかし今は深夜だ。職員も議員もとくに帰宅している。議事堂という容れ物だけを破壊してどうなるだろう。疑念がとめどもなくわき上がり、Uターンして聖堂に戻ろうかとも思ったが一応中を見ておくことにした。適当なところでスピーダーを乗り捨て、閑散とした議事堂の中に入っていく。すると、

またしてもベイル・オーガナとすれ違った。

「ケノービ將軍？　こんな遅くに何かご用ですか？」

そういう彼も一人だが、真後ろに護衛が控えている。

「あなたこそどうなされましたか、オーガナ議員。討議や会合ももう終わっているでしょうに」

「例の件を独自に調査しておりますね。とある星の研究者が、破損したデータを復元する技術を持っていると聞いたので、犯人によって破壊されたアーカイブマシンを見てもらったのです」

「では、すでにデータを復元できたのですか？」

長身のベイルは重々しく頷き、わずかに身をかがめた。

「しかし内密にしていたきたい。警察がまだ捜査中ですから」

「それで中身は？」

「將軍のおっしゃるとおり、スカイウォーカー將軍は陥れたようです。冤罪であることは元のデータから必ず実証できるでしょう。問題は、それが何者の仕業なのかということですが」

オビ・ワンはあごに手を当てて押し黙った。犯人はすでに分かっている。アナキンを陥れたのはアナキン自身だ。しかしこの時代の人々にそんなことを告げるわけにはいかない。

「貴重な情報を提供してくださって感謝します、議員。あなたの知人の身に起きたことは残念でしたが、必ずや私が決着をつけます。ご安心を」

「何を言われる。弟子が狙われたからといってすべてを一人で背負われることはないでしょう」

「すべてを背負えるのは私だけなのです。彼の一部でも私が放り出せば、残った部分はのちの人々を苦しめる呪いとなる」

「……それほどの覚悟がないとなれないもののですか、ジェダイの師というものは」

バイルは目を白黒させてつぶやき、オビⅡワンはそれにあいまいな微笑で応えた。もちろん、今までそんな覚悟はなかった。あのとき溶岩の星でオビⅡワンが放り出した部分が苦痛にもだえてのたうち回っていても、ずっと知らないふりを続けてきた。

だがもう他人のふりはできない。たとえ彼自身が拒んでも背負ってやらなければ。縁あって強く深く繋がったのだから、苦しんでいるときくらい助けてやらなければ。オビⅡワンがいまの自分になれたのは、百パーセント間違いなくアナキンのおかげなのだ。たった九歳の何者でもなかった彼が否応なくオビⅡワンに喪失を乗り越えさせ、得意でも何でもなかったことを得意にさせ、忍耐と機転と自信を与えてくれた。この時代の自分がすべてを跳ね返すほど強くなれたのは、いつも彼がそばにいたからだ。

「議員、申し訳ないがここで失礼。行かなければならないところがありますので」

黙って隣を歩いてくれていたバイルに向かって頭を下げ、小走りであたたきスपीダーに戻る。血だけが沸き立っている。早く彼を止めなければ、また放り出すことになってしまう。

最初に応えたのは全身金色のC-3POで、何やらあわてた素振りでおビィワンの進路をふさいできた。

「い、いったい何のご用でしょうか？ 今は真夜中でございますよ」

「ああ、君か。誰か怪しい者が入り込まなかったか？」

「怪しい者でしたら目の前におります！ 恐縮ではございますが、銀河標準のプロトコルと照らし合わせましてもあなたさまのなさっていることは少々不作法かと」

それを聞いて場違いな微笑が生まれた。確かにそうだ。

「君の言うとおりだ。失礼した。しかし君のご主人に危険が迫っているんだ。協力してもらえればありがたいが」

「パドメ様に危険ですって？」

彼の無表情な顔におびえが浮かぶ。

「ああ、そうだ。彼女は無事なのか？」

「もちろんでございます。つい先ほどお休みになられたばかりで……」

「先ほど？ どのくらい前のことなんだ？」

その不躰な質問に、彼は「五分ほど前です」と淀みなく答えた。オビィワンはあごに手を当てて黙り込む。

「マスター・ジェダイ、パドメ様の身にいったい何が起きたのです?」

「それは……分からない。すまないが、彼女の様子を見てきてもらえないか。本当に無事なのかをどうしても知りたい」

ささやくようにそう言うと、C-3POはそのままぎこちない動きで部屋の奥に消えた。そしてすぐに戻ってきて、「パドメ様はよくお休みでございます」と告げる。

肩を落としていないつもりでいたが、それでも落胆は伝わっていたらしい。金色のプロトコルドロイドはオビ1ワンのマナー違反を回りくどく責め立てた後、「間違いはどなたにもございます」と彼らからぬことを言って慰めてくれた。落ち込んでいる場合ではないが、少し落ち込む。

150へ。

103

「眠っている間に何者かに持ち去られたようだ。ここに置いておいたはずなのになくなっている」
おごそかな声でそう答えると、アナキンの顔が一気に緊張した。

「待ってくださいよ。ってことは、僕の部屋に侵入者が……?」

「大げさだな。サービストロイドが勝手に入ってきて片づけてくれたのかもしれないぞ」

「ありえませんが」

眉をぎゅうとしかめ、首を振る。

「聖堂のサービスドロイドはきっちり週三日、真っ昼間にしか僕の部屋に入ってこないことになってるんです。しかも床にものが散乱してても手をつけない設定にしてる。真夜中に来たあげく勝手に服を片づけるなんてありえないんだ」

何とも答えようがなかった。ドロイドがやってくる時間をこちらが勝手に決めることはできない。そもそもジェダイには私生活がないからいつ来られても困らないはずだし、私物を持ってないから手をつけられても困らないはずで、普通はそんなことを気にもしない。だがアナキンは気にする。彼は聖堂のドロイドというドロイドを捕まえて勝手に設定をいじっていたのだ。何度聖堂を抜け出した大ごとにならなかった理由が何となく分かった気がした。

「……今さら気づいても仕方ないがな」

「? 何の話ですか」

「いや、何でもない」

軽く咳払いをし、声を高くする。

「では私の服を持ち去ったのは新顔のドロイドの仕業だろう。大騒ぎするようなことではないさ」

「あなたをつけ回してる変態かもしれないよ。自分の部屋から何かなくなってるんじゃないかちゃんとチェックした方がいいと思うけどな」

「相変わらず想像力が豊かな男だ。いいからお前の服を貸してくれ」

あきれ顔でそう言うと、アナキンは仕方なさそうに立ち上がった。

「貸すのはいいですけど、もう少し危機感持ってください。あなたの体を狙ってる変態は実在しないかもしれませんが、あなたの命を狙ってる奴はそのへんにたくさんいるんですからね」

「私の命を狙っているのに間違えて服を持って行ったのか。きちんと命を持ち去ってくればお前に嫌味を言われずに済んだものを」

それはもちろんただの冗談のつもりだった。なのに「憎たらしくて仕方ない」というような目つきで見られ、ベッドの上に服を放られる。

「すぐに返してくださいよ。今、服の替えがこれしかないからすぐに戻ってこないと困るんです」

「分かった。助かったよ。そのうち何か礼をしてやろう」

「なら、もっと人の心を持ってください。マスターにはどんな風に言っても無駄みたいだけど」

怒っているというよりは、ひどく傷ついた顔だった。どう声をかけようと思っているうちにアナキンはくると背を向け、部屋を出て行ってしまふ。彼はいったい何に腹を立てているのだろうか。昔なら「まーたわけの分からないことで勝手に傷ついているらしいな」程度にしか思わなかったが、いまは妙に気になる。すぐつかまえて話を聞けたらいいが、あいにく裸だ。はあ、と重いため息をついて視線を下げる。フォースにどんな意図があるにしても、せっかく戻ってきたのだから昔とは違うことをすべきだ。そうすればこの三年で自分たちがどう変わったのかをまざまざと知ることができるだろう。きつと。そう信じていることこそ重要だ。

104

チェックポイントPに数字が記入されているなら、
116へ。

空欄のままなら、
131へ。

105

しかし首を引っ込めるのが一瞬遅かったのか、道場の中でライトセーバーを振っていた候補生たちはこちらに気づいて軽く頭を下げてきた。全員聖堂にやってきたころのアナキンと同じくらいのだ。オビワンの会釈を返し、仕方なく全身を物陰から出す。

「続けてくれ。邪魔はしないよ」

そうは言っても気にはなるだろう。指導教官でもないマスターがわざわざ候補生たちの訓練をのぞきに來ることはあまりない。

結局オビワンは小一時間ほど子供たちの相手になってやり、汗だくで道場を出るはめになった。子供の相手は骨が折れる。だがアナキンのように負けるたびに「もう一回！ もう一回！」とオビワンの取りすがってくる子はいないし、「マスターが勝ったのはまぐれだ」と言って泣いて拗ねる子もない。アナキンの聞き分けの悪さが懐かしくなり、同時に彼らの聞き分けのよさが少し悲しくなった。九歳のころのオビワンのきつこうだった。アナキンのようにもっと子供らしく振る舞っていたら、彼の気持ちを受け止めてやれるような大人になれただろうか。それを証明する手

段はない。

チエックポイントKに数字が記入されているなら、**130**へ。

空欄のままなら、**154**へ。

106

エアタクシーを乗り継いで聖堂へ戻ってくると、わずかに日が傾きかけていた。聖堂の周りは相変わらず記者でいっぱいだが、中は静かなものだ。オビⅡワンはこっそりと裏から入り込み、フードを深くかぶって足早に移動を始めた。一ヶ所に留まるのは危険だ。早く行き先を決めなければ。

チエックポイントKに数字が記入されているなら、**130**へ。

空欄のままなら、**154**へ。

107

反射的に木の陰に隠れ、現れた人物を観察する。女性の二人組だ。ルミナールとバリス。二人は歩きながらひそひそ声で何かを話していた。

「このことはまだあなたの胸にしまっておいて。公にするのは時期尚早よ」

「口答えをお許しください、マスター。いま、彼の行いのせいでジェダイすべてが疑われています。真実に蓋をすることは果たして正しいのでしょうか」

「正しくはないわ。それは分かっています。けれど、話すのはせめてオビワンが戻ってきてからにしましょう。スカイウォーカーの名誉に関わることももの」

この師弟に限っていきかいは珍しい。話の内容も気になるが、何よりも自分とアナキンの名前が同時に出てきたことに驚愕した。「彼の行いのせいでジェダイすべてが疑われています」。彼とは、アナキンのことだ。二人はアナキンの横領疑惑について話しているのだろうか。

「あれは私たちの勘違いかもしれないでしょう。スカイウォーカーのアクセス記録だけでは判断できないわ。他人が彼になりすまして彼の記録を消そうとしているのかもしれないのだし」

「聖堂のセキュリティシステムは共和国一固いのだと教えてくださったのはマスターです。データバンクに不正アクセスすることは不可能だ、とも。となれば、間違いなくあれはマスター・スカイウォーカーご自身のものです。聖堂の自分の記録を自分で残らず消したということは、彼はオーダーを離れるつもりなのでは？」

「減多なことを言ってはだめよ、バリス。まず彼のマスターに相談しましょう。その上でどうするか決めなければ」

もはや息もできなかった。彼女たちが見たものは、おそらくアーカイブのアクセス記録だ。聖堂のデータバンクにはそれぞれの個人情報や行動記録が収められている。しかし勝手に項目を追加したり消去したりされることを防ぐため、データ書き換えの際には特別なアクセスコードが必要になる。アナキンはそれに手をつけたのだ。だがおかしい点がある。もし彼が本心からオーダーを離れ

たかったとしても記録を消す必要はない。ただそのまま離脱を宣言すればいいだけだ。実際にオーダーを離脱したドゥークーもアソーカも個人データはそのままになっている。自分のデータを消す意味とはいったいなんだろう？ジェダイとして存在しなかったことにでもしたいのだろうか。アナキンはいったい何がしたいのか。

二人はまだ何かを話し合っていたが、中庭から姿が見えなくなると話し声も聞こえなくなる。オビワンはいつの間にかその場に座り込んでいた。あまりにショッキングな話だ。いつか話をしてみないとならない。(※チエックポイント「O・ルミナラとバリス」に1と記入すること)

チエックポイントKに数字が記入されているなら、130へ。

空欄のままなら、154へ。

108

変装は完璧だと思った。アナキンのローブを部屋から勝手に持ち出し、フードを深くかぶっているの一見オビワンだとは分らないし、アナキンの服を着ていることも分らない、はずだ。おかげで相互不干渉の慣習が身についたジェダイたちには声をかけられなかったが、聖堂から一歩出たとたん不愉快な飛翔音が聞こえてきた。うんざり顔を隠しもせず、ため息をつく。このことをすっかり忘れていた。毎日四六時中休みなく、カメラドロイドとホロネットの記者が聖堂の周りを取り囲んでいることを。

「ケノービ將軍！ 共和国軍がモン・カラ内戦への全面介入を再開した理由を教えてください！」

「ライロスでの戦闘に巻き込まれた住民がジェダイと212攻撃大隊のクローン兵から非人道的な扱いを受けたと言っていますか？」

「スカイウォーカー將軍と501大隊がたった一回の作戦行動で追加予算をすべて使い果たした不祥事に対するご意見は？」

「さる議員はスカイウォーカーが分離主義側と通じていると発言したそうですが本当ですか？」

四方八方からなりたてるような金切り声が襲ってきて頭が痛くなる。記者の隣に浮かんでいるカメラドロイドは遠慮なくオビ・ワンの顔のアップを撮り続け、ひとにらみすると今度は横から撮ろうとする。

「あ……。すまないが、とりあえず私を撮るのはやめてくれ。撮った映像もこの場で消してほしい。実はいま、任務のために変装していてね。この姿がホロネットに流されると困るんだ。議長とマスター・ヨーダに叱られてしまう」

記者たちからどっと笑いが起き、質問攻撃がいったんやんだ。

「それと、たくさん質問してもらって悪いがどれも今は話せない。何か聞きたいなら次に誰かが聖堂から出てきたときに頼むよ。そのジェダイはきつと君らの疑問に答えてくれると思う」

「ケノービ將軍、何か大きな作戦を実行中ですか？ 変装ということはどこかへ潜入する予定が？」

「そのあたりはまだ秘密だ。成功を祈っていてくれ」

にやりと笑ってそう言うのと、人垣がすっと引いていった。オビⅡワンの行き先を探るべくしばらくはあとを尾けられるだろうが、幸い尾行をまくのは得意中の得意だ。正面から堂々とエアタクシーに乗り、スカイレーンの混雑に乗じてこっそり別のスピーダーに飛び移る。もう一度同じことを繰り返した後、行列が動き始めた瞬間に真下に飛び降りる。運良くどこかのバルコニーがあり、片手でへりにつかまってよじのぼるとようやく一息つけた。

タトゥーインで暮らし始めてからホロネットとはすっかり無縁になってしまったが、たくさんの人とドロイドに囲まれて声を浴びせかけられてうんざりする気持ちだけはいつまでも忘れられない。我ながらよくやっていたな、と思う。あのころは毎日こうだったのだ。「將軍」としての生活はオビⅡワンの人生の中でもっとも派手で華やかで虚ろだった。いつも大事なものを置き忘れてきているかのように落ち着かず、空っぽの中心には暴力が居座っていた。アナキンはさらにそうだっただろう。彼は英雄で、クローン戦争のボスターボーイで、この戦争を楽しみ見せ物にしてくれるショーマンだった。なのに彼はホロネットに映ることが大嫌いで、やむなく映らなければならぬときはいつも苦虫を噛み潰したような顔をしていた。それは彼なりの精一杯の抵抗だったのだろうか。あるいは無意識の。

オビⅡワンは思考を振り払い、バルコニーからバルコニーに飛び移り、隣の建物に足をかけた。そしてふたたびエアタクシーを捕まえ、行き先を聞かれる。あのころの自分ならこれからすべきことをリストアップしてから「ジェダイ聖堂」あるいは「共和国軍の宇宙港」と答えただろうが、幸

いなことに今のオビⅡワンは將軍ではない。どこへでも自由に行けるし、用がないと思えば戻ることができる。さて、どの行き先を選ぶうか。

元老院議事堂なら、153へ。

パルパティーンのおフィスなら、110へ。

パドメのアパートなら、81へ。

デクスターのダイナーなら、113へ。

共和国軍の宇宙港なら、143へ。

聖堂に戻るなら、106へ。

109

こんなときに頼れるのはかのグランド・マスターしかない。ヨーダの助言はいつもあいまいだが、のちのち思い返してみるとぞっとするほどの確なのだ。三年前の自分には読み解けなくとも今の自分ならおそらく理解できるに違いない。

オビⅡワンは足早に聖堂の廊下を横切っていく、薄暗く簡素なヨーダの私室を目指す。廊下もターボリフトも奇妙なほど静まり返っていて、誰一人見当たらぬ。本当なら今ごろそこかしこで激論が巻き起こっているはずだ。何しろ將軍の一人が共和国に背信行為をして人々のジェダイへの信頼を地に落としたのだから。だが人の姿は見えないし、どこからも話し声は聞こえない。

不安を抑えつながらヨードの部屋にたどり着くと、ノックをする前に扉が開いた。驚くには値しない。彼はいつもこうだ。来訪者がやってくることを予測し、彼らのためらいまで感じ取る。そしてちょうどいいタイミングで扉を開く。

「……マスター・ヨード、瞑想をお邪魔して申し訳ない。少しお話が」
「構わぬよ。わしもお前に話があったところじゃ」

これも特に驚きはしない。オビ・ワンは身を屈めるようにして中に入り、フォースで扉を閉めた。「私がお話したいことはお察しの通り、アナキンのことです。彼がしでかしたと目される事件を私なりに調べてみました」

「確かに、今日一日飛び回っていたようじゃな」

「ええ。もし私の弟子が本当に共和国の資金をドゥークーに横流しをしたというなら黙ってはいられません。ですが、状況的にも彼の性格的にも彼がやったとは思えません」

ふむ、とヨードは言い、深くしわが刻まれた頭を撫でた。

「わしらとてそうじゃ。あやつがやったとは思っておらん」

「では評議会も黒幕探しに乗り出したのですね？」

それを聞いて少し安心した。アソーカが疑われたときにオードーがした最大の失敗は彼女を守らなかったことだ。だからこそ今度は自分で解決しようと躍起になっていたが、評議会が彼に全幅の信頼を置いてくれるなら異分子である自分が動く必要はない。

「勝手に納得するでない。『評議会が』というのは当たらん。黒幕探しをしておるのはわしだけじゃ。評議会の決定はまだまだ下されておらんからの」

「なぜです？ 評議会はいったい何をためらっているのですか？」

思わず眉をしかめてそう言くと、ヨードは難しい顔をしてオビⅡワンを見上げてきた。

「まずは座ることじゃ、オビⅡワン。心を落ち着け、頭を冷やしてみよ。しかししばらく見んうちに少々変わったの。まるでお前の師のようじゃ。それがよい変化であるといいが」

何を言っているのかよく分からない。しかしその静かな声には逆らえない迫力があつた。オビⅡワンは勧められるまま円形のソファに腰かけ、何度か深呼吸をする。

「無礼をお許しください。苛立つてマスターを問い詰めるなど、まるで年若いパダワンのごとき行いでした」

「そんなことはよい。それよりも大事なものは、状況をよく見ることじゃ。小さな世界に閉じ込められておったせいかどうかやら視界が狭くなっておるようじゃの」

ゆっくりを視線を上げる。真意をはかるために疲れたように下がったまぶたを見つめるが、何も読み取れない。この時代のオビⅡワンも、確かしばらくの小さな世界に閉じ込められていたはずだ。何者かに捕まって監禁され、ようやく解放されてコルサントへ戻ってきたばかりだった。彼の言葉はそれを指しているのだろうか。それともタトゥーインの小さな家にこもりきりだった三年後のオビⅡワン、つまり自分自身の状態を指しているのではないか？

その疑念を見透かしたように、ヨードはひゃひゃひゃ、と声をあげて笑った。

「だいぶましな頭になってきたようじゃな。疑いをすぐに口にせんあたりも上出来じゃ」

「私を試しておられるのですね？」

「物事に試しなどないわい。覚悟を決めよ。ここに來た時点で、お前はすでに終わっておるのだ。ならば早く頭を整え、心を開かねば損じやろうて」

ヨードは杖にすがって椅子によじ登り、オビⅡワンをまっすぐに見据えた。鼓動が早くなり、嫌な汗が背中を伝う。「ここに來た時点でお前はすでに終わっておるのだ」。まさか。

「マスター・ヨード、私が何者かをご存知なのですか」

「お前はオビⅡワン・ケノービじゃ。それ以上でもそれ以下でもない」

いったん言葉を切り、彼は仕方なさそうにため息をつく。

「しかしわしはつい一時間前に別のオビⅡワン・ケノービにも出会っておるのじゃよ。評議會の間でな。お前は真っ先に口を開き、『アナキンが我々を裏切るはずはありません。何かの間違いです』と発言しておった。しかしその後は何も言わなんだ。皆の煮え切らぬ態度に苛立っても、公然とあやつを怪しむ声があつても、お前は本心を押し隠して従順なふりを続けた」

「ええ。私のしそうなことです」

肩の力が抜けていく。なぜこの偉大なグランド・マスターに都合の悪い部分だけうまく隠しておけると思ったのだろう。見抜かれて当然だ。

「……真実をお伝えします。お察しのとおり、私は三年後からやって来た幽霊のごとき存在です。この時代に存在してはいけけないものだ。だから、こうしてお話した瞬間から私は消滅を始める」
 「最初から分かっておったよ、オビⅡワン。お前のいる時代が決してよい未来でないこともな」
 「ええ。しかしあなたがそれを知ったなら、未来を回避することができるかもしれません。パルパティーンのとくらみを阻み、アナキンの裏切りを防ぎ、共和国とジェダイオーダーをもう一度強く結びつけることも。もしかしたらアナキンを陥れた者がしていることは、未来を変えるためには必要なことなのかもしれない」

「未熟者め」

ヨーダは力なく首を振り、空気に溶け始めたオビⅡワンをほんの少し悲しそうに眺めた。

「過去をやり直すことに意味などない。そんなことを考えた時点でお前は後ろを向いておるのよ。前を向け、オビⅡワン・ケノービ。ジェダイともあろう者が恐怖と後悔にとらわれるでない。前を向くことを拒み、過去に手を加えようとするのは、己の苦痛に負けた者だけじゃ」

それを聞いてはっとした。ひょっとしたら、ヨーダはヒントをくれたのではないか。消えゆく者へのせめてもの手向けとして。しかしそれを考えている時間はなかった。オビⅡワンの体と自我は無慈悲なほどの速さで消えていく。前を向け、という言葉だけが最後の最後までオビⅡワンの耳に残っていた。

110

チエックポイントKに数字が記入されているなら、
133へ。

空欄のままなら、79へ。

111

「ど、どうしたんですか、マスター」

ベッドから体を起こし、軽く息を吸い込み、驚いた顔をしているアナキンにまっすぐ向き直る。彼が一人前になってからこんな風にきちんと向き合ったことはあまりないような気がする。居心地のよさを壊したくなくて真実から目を背け、そのくせ勝手に期待して勝手に失望してきた。パドメとの関係を知っていて黙っていたのも、彼ならきっとジェダイとしての将来のために執着を手放してくれると信じていたからだ。それは愚か者の望みだった。盲信だった。今度こそ真実と向き合わなければ、死を覚悟してまで超空間に飛び込んだ意味はない。

「何を聞いても驚かないと約束してくれるか？」

「え？ ええ、まあ。いったい何があったんです？」

それを聞いてかすかに微笑みが浮かんた。「いったい何があったのか」。一言で説明するのは、とても難しい。

「実は私は数年先の未来から来たんだ。未来の私はタトゥイーンの砂漠の真ん中に潜んでいて、お

前の息子を見守っている。おそらく死ぬまでそれを続けることになると思う。日焼けしているのも瘦せたのもそのせいで、この時代に飛ばされてきたのもおそらくそのことと関係があるんだろう」ひとしきり驚かれた後質問責めにされるかと思ったかと思ったが、どういうわけかアナキンはうんざり顔で「はいはい」と答えて肩に毛布をかけてきた。

「今まで聞いた中で最っっっ高につまんない言い訳でした。あなたがバダワンで僕がマスターなら『面白くない』の罰で一週間くらい謹慎を言い渡すと思います」

「言い訳じゃない」

「はいはい。もっと詳しく説明すると、僕の息子っていうあたりがつまらなかったです。意外性はあるけど全然マスターらしくない発想だから馴染んでない。タトゥーをネタとして使うならせめてこう、発情期のクレイトドラゴンにオスと間違われて監禁されてたかそういう方向の方が楽しいんですけど」

「どこが楽しいんだ。馬鹿馬鹿しい」

脱力しすぎてその場に倒れ込みそうになった。決意をして損した。だが当然だ。真実を話したところで信じてもらえるわけはなかったのだ。

「？ マスター、どうしたんですか」

「何がだ？」

「何がじゃないですよ。何だか色が薄くなって、」

とっさに自分の手をつかんだが、そこには何もなかった。つかもうとした手も、つかまれるはずの手もなかった。声をあげるより前にアナキンが馬乗りになってくる。

「上半身がない。顔が半分消えてる。……待ってください。行かないで。オビⅡワン、マスター！」

その先はもう聞こえなかった。あつという間に自我が霧散し、時空と実在すべてのものに飛び散っていく。驚く暇も悲しむ暇もなかった。なぜだと自問する暇も当然なかった。オビⅡワン・ケノービはこの宇宙から永久に消え去るのだという不思議な実感だけがあった。死より完璧な消滅。自分が消えた後に何が起きるのかを知りたい。いいや、違う。知りたいことはひとつだけだ。あの時代に残してきたままの彼は、いったいどうなってしまうのだろう。もしかしたら通じ合えたかもしれないという淡い期待だけが二人だけの小さな宇宙に残り、そこからは何ひとつ進まない。最後にお前に会えてよかった、と声にもならない声でつぶやき、記憶も自我も一粒も残さずに消えてしまう。

(ED7・消滅①)

112

まずい、と思った。こちらへ向かって歩いてくるのはベイル・オーガナだ。パルパティーンの独裁に最後まで抗い続けた数少ない政治家で、パドメの友人で、レイアの父親。彼のような善良な人間を邪険にはしたくなかったが、これ以上目立ちたくはなかった。彼が声を発しようとしたところを遮ってお辞儀をし、そのまま振り向かずに早足で先を急ぐ。やはり議事堂などに来るべきではな

かったのだ。ここには顔見知りが多すぎる。さっさと移動してしまおう。

128
へ。

113

惑星コルサントのたいていの場所は好きになれないが、ここだけは別だ。デクスターズダイナー。大勢の人でにぎわうコクタウンの中心にあり、いつでも人足が絶えない。ここに来るたびにジェダイでない人々のさまざまな生き方を目の当たりにして楽しくなる。しかし今日はどういうわけか、客の姿はない。扉にシャッターが閉まっていて、窓から中をのぞき込む限りがらんとしていた。いつも「オビⅡワン、我が友よ」と言って四本の腕を広げて出迎えてくれるデックスもない。

おかしいな、と思った。この店は休業日が決まっていて、五日ごとに一日の定休日を取る。臨時休業の場合でも店の前にホロ看板を出して知らせている。しかしどこにも「定休日」や「臨時休業」の文字はないし、何より扉にだけシャッターが閉まっているのが不気味だ。デックスの身に何か起こったのだろうか。そう思っていたら、後ろからいきなり強く肩を叩かれた。

「オビⅡワン・ケノービ！ 我が友よ！」

驚いて振り向くと、そこには懐かしい顔があった。デクスターだ。

「無事だったのか、デックス。店が閉まっていたから心配したよ」

「ちと急な用でな。あんたこそ何かあったのか？ ずいぶん痩せちゃったじゃねえか。それに白髪

が増えちまって、一気に年取ったな」

オビィワンは思わず苦笑した。彼には見抜かれるだろうとは思っていたが、こうも早いとは。

「それは聞かないでくれ。しかし君の方も何かトラブルに巻き込まれているんじゃないのか？」

ごまかすように笑ってそう聞くと、デックスは唇をゆがめて顔を掻いた。

「トラブルってほどもねえわな。ホロネットの記者がわんさか店に来やがって、あんまりうるせえから追い出したら逮捕されたってだけだ」

「逮捕!!」

「すぐ釈放されたけどな。だが次はねえってよ。まったく、どう追い出したらいいもんか。知恵をくんな、ジェダイさんよ」

「そうか。コクタウン屈指の人気店だからな、ここは」

店の扉を開けながらそう言うと、デックスは低い声でうなった。

「残念だが、あいつらが押し寄せてきた理由は取材じゃねえよ。あんたの弟子のせいだ、オビィワン」
「……アナキンの？」

一瞬呼吸が止まった。彼は言いにくそうに言葉を続ける。

「少し前、あんたら二人でうちの店に来てたる。客の中にそれを覚えてるのがいて、ホロネットニュース会社にたれ込みやがったんだ。二人とも難しい顔で深刻な話をしたとか何とか。そのうち俺があんたにつき合いがあるってことがばれて、記者どもが押しかけてきたってわけよ」

「それは、すまないことをした。迷惑をかけたな」

本心からそう言うのと豪快な笑い声が返ってきた。同時に四本の腕で肩を叩かれる。

「気にすんな。これで晴れて『ジェダイもひそかに通う名店』になったんだからな。二人とも寄りつかなくなるってのはなしだぜ。詐欺になっちまう」

「皆に勧めておくよ。しかし、営業妨害になるほど取材が来るとなると困るな。しばらく休業か？」
「いや、これから開店準備だ。この稼ぎどきに休んじゃいられねえからな。スキャンダルと政変はチャンスに変えろが信条だ」

デックスはそう言うのにやりと笑い、いつものエプロンをして厨房に姿を消した。ほどなくしていい匂いが漂ってくる。オビⅡワンは懐かしい思いでしばらくその匂いの中に立ち尽くしていたが、何となく声はかけずにそっと出て行く。あのときも結局彼には別れを言えなかった。いま何をしているだろう。ジェダイのクレーダーがでっち上げられたときも、パルパティーンの帝国が姿を現したときも、政変をチャンスに変えてたくましく生き延びてくれただろうか。身勝手な願いだが、そうであってほしい。

128へ。

114

オビⅡワンはできるだけ慎重に三人のあとをつけ始めた。アナキンと501大隊が追加予算を使

い果たした、という話がどうしても頭を離れない。なぜなら、クロン戦争の始まりから終わりまでをこの目で見てきたオビⅡワンの記憶にはないことからだ。もしかしたら叱られたくなくて隠していたのかもしれないが、ホロネットで報道されていたのなら耳に入らないはずがない。ということは、これは新たに起こった事件だということになる。オビⅡワンの知らない時空で今まで何があったのかを知るよしはないが、これから何が起こるのかを知ることができる。

裏口から聖堂の外へ出てエアタクシーに乗ったオビⅡワンは、運転手にこう告げた。「元老院のオフィスビルへ頼む」。元老院のオフィスビルは議事堂に隣接する建物だ。パルパティーンがオフィスを構えているのは最上階で、ジェダイたちは彼に用があるとよくこのビルに出向いた。だから勝手は知っている。だが彼の正体を知った今では近づくことさえ抵抗があった。

152へ。

115

つい何かを言いかけたがあわてて口をつぐみ、もう一度鼻にキスをしてごまかす。

「何も起こらなければ考えないでもない。聖堂にいる限り呼び出されたり急な用事を言いつけられたりすることがあるから、仮の約束ではあるが」

アナキンはおそらく前半部分しか聞いていなかっただろう。わずかに口角が上がり、毛布の上からぎゅっと抱きついてきた。

「よかった」

「そうか」

「そうかじゃないでしょう。他人事みたいに。で、何か用意しておくものは？」

「ないよ。ただ、明かりだけは消してくれ」

「珍しいですね、恥ずかしがるなんて。子供のころからあなたの裸なんか見慣れてるんだけどな」

別に恥ずかしがっているわけではない、と言いつ返したかったが我慢した。とりあえずアナキンから正体を隠し通すことはできたらいい。しかし彼が最大の難関であるとは言いい切れない。オビィワンはため息をつき、額に手を当てた。先が思いやられる。

チェックポイント「H・アナキン」に1と記入し、82へ。

116

この時代の自分は「少し休憩しよう」と言っていた。少しというのがどのくらいの時間を指すのかは分からないが、自分のことだからおそらく二十分から三十分程度だろう。そろそろ会話が再開されているに違いない。オビィワンは静かに廊下を歩き、ふたたびアナキンの部屋の前に立った。

とはいえ、この時点の二人ではたどり着ける答えに限界はある。二人は数多くの試練を乗り切ってきたがこればかりは難しい。共和国と分離主義派とジェダイオーダー、という枠組みを外せない限りは出せない解答なのではないかという気がする。それでもここに帰ってきてしまったのは、淡

い期待があったからだ。この時代の自分たちにできないことなどないはずだ、という願望。できるなら、二人で答えにたどり着いてほしい。いまのオビィワンが一人で越せない障壁を難なく飛び越えていてほしい。悠然と空を羽ばたく鳥を眺めるように、それを眺めていたい。しかしそれは馬鹿らしい慰めにすぎない。

ため息をつき、失望しないように心に予防線を張り、手をかざしてそっと扉に押し当てる。ふたたびフォースを通じて盗み聞きを始めた瞬間、手が感電したように離れた。

「……な、」

声だけはあげまいと思ったのに止められなかった。ごくりと音を立てて唾を呑み込み、もう一度フォースを送る。本当だった。幻聴ではなかった。気のせいでもなかった。中から聞こえてきたのは、話し声ではない。

もっとも大きい音は肉を打ちつける音だ。重たいものを重たいものでリズムカルに叩いている。たいてい一定だがときどき速くなったり思い直したように遅くなったりする。だがもちろん、音はそれだけではなかった。

次に目立つ音は吐息と苦しげなあえぎだった。しかも二人ぶん。ときおりぎょっとするほど大きな声をあげているのは、正直言って耳に入れたくもないし自分に暗示をかけて忘れ去りたいくらいだが認めるしかない。この時代の自分だ。他人の耳にはこんな風に聞こえていたのか。こんな、恥ずかしげもないような、媚びているような。今までまったく自覚がなかったから頭がくらくらした。

できることなら自分にこっそり耳打ちして「恥を知れ」と言ってやりたい。音を立てないようにため息をつき、手を離そうとしたときアナキンの声が聞こえてきた。

「すごい締まっている。ちょっと、いったん抜きます」

限界まで切羽詰まったような調子だが裏返らないように気をつけているのが分かる。重いものがどさりとベッドに落ちた音がし、二人とも荒く息をつき始める。

「やっぱり欲しかつ、たんじゃないですか。今朝あんなだったのは何なんですか？ 駆け引き？」

また今朝の話だ。だが二人とも呼吸の間に声を発しているからなかなか会話が再開されない。

「何、の話だ」

「キスもしたくないくらい嫌がってたのにすごい乗り気じゃないですか、って言いたいんですよ」

「……そういえばお前は昔からいつも突拍子もない妄想をしていたな」

「あなたは昔からいつも苦しい言い逃れしてましたね」

扉の向こうのオビワンは欲望が入り交じったため息をつき、ベッドをきしませた。

「何だか分からないが、再開する気がないなら話の方を再開しよう。あれからずいぶん経っているぞ」

「は？ 冗談ですよ？ このまま終われっていうんですか」

「ああ。お前は口を使う方が好きなんだろうからな」

「ある意味ではね」

唇かどこかに吸いつく音がし、重たいものがごろんと転がる音がそれに続いた。ほどなくして鼻

にかかった声が響き、アナキンが笑う。

「中がぎゅうぎゅう動いてる。待ちきれなかった?」

感極まったような短いあえぎがそれに応えた。

「続きをしてほしいなら拗ねてないでそう言うってくださいよ。僕がほんとにやめたらどうするつもりだったんですか」

「、拗ねてない」

「はいはい、分かっていますよ。もう途中で抜いたりしませんから集中してください」

安堵したような長い息と、肉と肉がぶつかる遠慮のない音が聞こえ始める。自分の声がだんだん熱を増していき、ついには形を取り始める。彼はアナキン、と何度も呼ぶ。呼んだからといって何か起こるわけではないし、彼をこの時空に永遠に繋ぎ留められるわけではないし、彼が去った後の傷が浅くなるわけでもない。彼の名を呼び続ける自分が途方もなく哀れだった。そして幼く愚かだった。もはや取り返しのとこないところにいることを知らず、失いたくないと駄々をこねて泣いている子供のようだった。オビィワンは今度こそ手を離し、その場を離れた。もう戻ってくることはないだろう。この時代、この扉の中にあつたものは、あまりに浅ましく滑稽な恋人たちの姿だった。

(※チエックポイント「P・オビィワンとアナキン」に記されている数字を消し、2と記入すること)
 そろそろ考えがまとまってきたと思うなら、
 117へ。

さらに調べたいことがある、あるいはこの時代でまだやり残したことがあるなら、
 121へ。

相変わらず事件のことを考えながらあてもなく廊下を歩いていると、突然雷に撃たれたように身動きができなくなった。急に頭に浮かんできた名があるからだ。それはひらめきと呼ぶには重すぎ、その衝撃は激しすぎた。廊下の真ん中でいきなり立ち止まったら不自然なのに、自分の考えに打ちのめされて動けない。単なる思い込みか勘違いであってほしいと思う。しかしそれにしては符合しすぎている。そう考えるとすべてのピースがびったりと型にはまってしまう。

オビIIワンは細く長く息を吐き、壁に手について呼吸を整えた。気づいてしまった以上、どうにかするべきだろう。この手で決着をつけないとならない。

※事件の真相が分かったなら、このパラグラフ番号からアナキンを陥れたと思われる人物の現時点(19BBY)での年齢を引き、その数のパラグラフ番号へ飛ぶこと。パラグラフ番号の算出方法については次の二つの例を参照のこと。

・例1・自分自身(元の時代のオビIIワン)が犯人だと思ったなら、このパラグラフ番号117から41(現時点での年齢)を引き、パラグラフ番号76へ飛ぶ。

・例2・ハン・ソロが犯人だと思ったなら、このパラグラフ番号117から10(現時点での年齢)を引き、パラグラフ番号107へ飛ぶ。

飛んだ先のパラグラフで話が繋がらない、あるいはまだ事件について調べたいなら、130へ。

「全部アナキンのせいだ」

「……はい？」

オビⅡワンは咳払いをし、衝動的に口をついて出た言葉をもう一度繰り返した。

「つまり、これはアナキンのせいなんだ。君のマスターはいつも突拍子もないことをするだろう？」

「ええ、まあ、します。でもそれって説明になってないと思うんですけど」

「うまく説明できないほど突拍子もないんだ。理解してくれ」

これはもう全然だめだな、と思った。アソーカの言うとおり、何の説明にもなっていない。アナキンは突拍子もない行動をする。そしてオビⅡワンはアナキンの突拍子もない行動のせいでいつも迷惑をこうむっている。なのでオビⅡワンがよく分からない状況に置かれていたとしたらそれはアナキンのせいだ。以上、証明終わり。ということには、まったくならない。

「確かに色々と破綻しているが、そのあたりを突っ込まれると困るからとりあえず何も言わないでくれ。ちなみに君のマスターは評議会の間にいると思う。しばらくは解放されないはずだ。念のため言っておくが、私がここにいることを誰にも言わないように」

「つまり、誰にも言えない秘密がいっぱいあるってことね」

得意そうに笑い、アソーカはオビⅡワンの腕を取って跳ねるように歩き出した。

「どこへ行くんだ」

「リフトの前までついていってあげます。途中で誰かにぼったり会ってまたそういう変な言い訳して変に思われないように」

「気の回し方が独特だな、君は。ずいぶんアナキンに苦勞させられているようだ」

「マスターは私にさんざん苦勞かけられて大変だって言うけど」

「どのマスターもそういうものだよ。なぜだか自分の過ちを認めようとしななんだ」

「あなたも？」

「ああ。骨身に染みてるよ。私も長い間自分の間違いを認められなかった。だが、痛い目に遭ってようやく気づいた。そのときにはもう遅かったがね」

「ふうん？」

思わず笑みが浮かんだ。それは本心だった。この三年間誰にも言えなかった、混じりけなしの本心だ。つらい経験を他人に話せば気持ちが楽になるという当たり前のことを今の今まですっかり忘れていた。もっと早くそうしていたらよかったのかもしれない。アナキンと自分のことを知っている誰かに聞いてもらえたら、そうしたら少しは楽になれたのかもしれない。

「あーあ。私のマスターも早く自分の間違いを認めてくれたらいいのに」

「君は師の何が間違っていると思うんだ？」

「間違ってるというか、いつも私の構えに文句ばかりつけるんです。それじゃ低すぎるとか、上段の攻撃に対処できないとか、力が入りにくくて非効率的だとか。私とマスターじゃ背丈が違うつ

てことが分かってないのよ」

何となく懐かしい気分だった。アナキンが十五、六歳のときに同じようなセリフを聞いたような気がする。

「それが間違ってると思うなら、実力でマスターを見返すしかない。自信はあるか？」

「もちろん！ そのうち……ううん、一ヶ月後には絶対負けたって言わせてやるんだから」

「その意気だ」

かつてクワイーガンが言った言葉を思い出す。弟子の弟子は孫のようなものなのだと。師であるドゥークーは自分には厳しかったが、弟子の弟子であるお前には甘いに違いないと冗談めかして言っていた。クワイーガンの予想は思わぬ形で外れてしまったが、言いたいことは分かる。弟子であるアナキンに対してはとても冷静になれないが、彼女なら一歩離れたところから観察できる。アナキンには説教を挟まずにいられないのに、彼女のことには素直に応援できる。弟子の弟子だからだ。リフトに乗り込むオビーワンに一度大きく手を振り、くるりときびすを返して駆けていくアソーカの背中を見ていると、さみしいような誇らしいような悲しいような複雑な感情が一気に押し寄せてきた。あるべきだった未来の姿が脳裏に浮かんでくる。

アソーカはアナキンが思っているよりも早くにパダワンを卒業し、ジェダイナイトになる。さみしくてふてくされているアナキンを外に連れ出し、「そんなに早く卒業させなくてもいいのに」「あいつはまた未熟です」などというやくたない愚痴に付き合ってやる。「お前も胸を張れ。パダ

ワンを育て上げたマスターじゃないか」とオビⅡワンが慰めるとようやく機嫌を直す。そして昇格の日、アソーカはブレードをアナキンに手渡しに来る。彼が泣き出さないようにこらえているのがオビⅡワンにもアソーカにも分かっていて、目を見合わせて無言で作戦開始の合図を送る。アソーカはオビⅡワンに向かって小さく頷き、おもむろに口を開く。「マスター、今までありがとう。短気で無鉄砲だった私に辛抱強く付き合ってくれて本当に感謝してる。これから一人前になって、いつかパダワンを持っても、あなたが教えてくれたこと絶対忘れないからね」。それはマスター殺しとも呼ぶべきのとおっておきのセリフだ。アナキンを泣かせるために二人で考えた。誰が聞いても感動しそうな言葉で、もちろん効き目はじゅうぶんにあった。だが少し離れたところで見ていたオビⅡワンがにやにやしすぎていたせいで作戦は失敗し、その後長くアナキンにもアソーカにも恨まれるはめになる。そしてアソーカはほどなくしてパダワンを持って、そのパダワンもパダワンを持って、「師と弟子」の歴史は連綿と続いていく。

オビⅡワンは片手で顔を覆って吐き気をこらえた。それはもはや想像の範囲を逸脱していた。おそらくフォースが見せたビジョンだ。この宇宙に存在するたくさんの可能性の中の、いっとう幸福な時空での話。二度と取り返しがつかない過去の話。オビⅡワンを苦しめるために見せたのか、それとも何か意味があるのか。フォースのすることは分からない。

チエックポイント「Ⅰ・アソーカ」に1と記入し、97へ。

「どうも分からないな」

オビⅡワンはそう言い、軽く首をひねった。

「さては、私の知らないところで恨みを買ったんじゃないのか。どこかの星で誰かの婚約者や配偶者を奪ったりなどしてないか？」

「……まさかそれ本気で言ってるんですかね？ 僕がそんなことするような奴に見えるんですか？」

冗談だろうと思いたいのが彼のことだから本気かもしれない。最大限に不快感を表現した声色を発すると、オビⅡワンは思い切りアナキンの肩を叩きながらごまかし笑いをした。やっぱり、と思った。半分くらいは本気だったのだ。

「冗談だよ、怒るな。煮詰まったから息抜きをしようと思ったただけだ」

「息抜きに言うようなことですかそれ？」

「ほら、座りなさい。少し休憩しよう」

ほうら、「座りなさい」が来た。次はたぶん「落ち着け」だ。聞かなくても分かる。

「反省してくれるなら座ります」

「分かった分かった。反省するから茶でも飲んで落ち着け」

予想を少しも外れてくれないオビⅡワンをにらみつけ、苛立ちまぎれにどすんと音をさせてベッドに腰かけた。細かなほこりが舞っている様子が夕陽の赤い光に映ってきらきらしている。

「いい加減に機嫌を直せ。本気で腹を立てるような冗談ではないぞ」

「マスターの冗談は冗談に聞こえないんですよ」

「まったくしつこい奴だな。分かった。謝るよ。私が悪かった……のかもしれない。見方によっては」

「もう一回言ってくれますか? 『私が悪かった』のところだけ」

「私が悪かった。気が済んだか?」

「あんまりですね」

「そんな小さなことはもう忘れろ。そして頭をリフレッシュさせなさい。でないといい考えも浮かばないぞ」

「どうやってですか?」

「どうせ瞑想しろとか外の空気を吸ってこいとかつまらないことを言うのだろうが、一応聞いてみる。だが予想と違い、オビⅡワンは肩をすくめただけで何も言わなかった。

「へーえ、なるほど」

「何がなるほどなんだ」

「分からないんですか?」

「分からない」

今度はアナキンが肩をすくめる。そしてさりげなくオビⅡワンとの距離を詰め、顔をのぞき込むようにして見つめる。

「約束、覚えてくれたんですね」

「約束？」

「恥ずかしいからってとぼけなくていいです。あなたが約束を覚えてるのもびっくりですけど、こんなに分かりやすく誘ってくれるのにも驚きましたよ。今朝のことよっぽど気にしてたんですね。やっとその気になった？ それとも……期待してた？」

オビⅡワンの顔に無数の「？」が飛んでいる。いつもながら神業じみたとぼけ方だ。

「マスターの言い訳は回りくどいから何も言わなくていいです。でも『分かる』ようになってくれたよかった」

恐る恐る顔を近づけ、唇に唇をそっと押し当てる。今朝拒否されたばかりだからまた顔を背けられたらと思うと少し怖い。しかしオビⅡワンは脱力したようにキスを受け入れ、ときどき角度を変えてくれさえした。ああ、よかった。いつもの彼だ。

浅いキスを繰り返しながらベッドの上に押し倒し、まずベルトに手をかけると彼は何か言いたげに見上げてきた。

「……嫌ですか？」

ベルトから離れようとする手を上から押さえられる。その手つきには余裕らしきものがなかった。欲しがってるんだ、と思った。それだけで心だけは何となく満足してしまふ。

「よかった。じゃあ今朝の約束どおり明かりを消します」

「つけたままでいい。だが三十分で終わらせると約束してくれ。こんなことをしてる時間はない」

その言いぐさが何だかおかしかった。本心から時間がないと思ってるなら断れればいい。ということは、本当に欲しいのだ。すべきことや義務の柵の間からこっそり手を伸ばして、快楽をかすめ取りたいと思うほど。

そう思うとたまらなくなってキスを深くしながらきつく脚を絡ませた。ベルトを抜き取り、上をだけさせ、あたたかい胸やみぞおちに顔を擦りつけながら遠慮なく下半身に手を伸ばす。いつもは柔らかい太ももがこわばっている。興奮して筋肉に力が入っているからだ。膝から上に向かって撫で上げ、服ごしに軽く股間をつかむと彼は小さくあえいだ。その顔はつらそうで、同時にうらやましくなるほど気持ちよさそうだった。今朝は触られることすらあんなにためらっていたのに。とても同一人物とは思えない。よく見ると肌にもつやが戻っているし、髪も色を取り戻している気がする。あれは見間違いだっただろうか。朝だったから今と光の加減が違っていたのかもしれない。しばらくの間優しく触っていたら、オビIIワンは恥ずかしそうに「服が汚れる」とつぶやいて体をよじった。それでも同じことを続けているととうとう手を剥がされ、そっと仰向けにされる。そして彼の頭がだんだん下がってくる。

そのとき唐突に今朝的一幕を思い出した。そういえば朝にもこんなことがあった。裸でベッドに潜り込んできたくせにずっと寝ていたことに文句を言ったら「謝罪代わりだ」とか何とか言っておいて抜いてくれようとした。まるでボルノみたいな非現実的な展開だがちゃんと現実の出来事だ。

「そうだった。約束のこと忘れてました」

「まだ何かあるのか？」

オビⅡワンは苦々しげにそう言い、落ちかかった前髪を片手でかき上げた。

199へ。

120

オビⅡワンは今朝の出来事を思い返し、体の奥の奥から安堵の息を吐き出した。出かける前にきちんと服を着替えておいてよかった。アナキンの服を着た状態でパドメと顔を合わせるはめにならなくてよかった。しかも、彼女が議会から戻ってきたばかりのタイミングで。もしそんなことになればいたたまれないし、生きていたくなるかもしれない。

「オビⅡワン？ どうしたの？」

「い、いいや、何でもなし。そろそろ失礼するよ。忙しいところすまない」

「もう？ 今来たばかりなのに」

ソファから立ち上がり、オビⅡワンはもう一度「すまない」と答えた。

「顔を見たかっただけなんだ。久々にコルサントに戻ってきたものだから懐かしくてね」

「そう。何か私に話があるのかと思っていただけ」

意味ありげな視線を向けられてどきりとした。しかしあまり長居をするとまた日焼けや体格や白

髪の有無を発見されて面倒なことになるかもしれない。

オビⅡワンはあいまいに笑ってその場を立ち去り、エアタクシーの中でこっそりと脱力した。彼女と顔を合わせるときは、決まって独特の緊張を覚える。

128へ。

121

そろそろ頃合いだ。集めた情報を整理し、精査し、推測を立てなければならぬ。一人で考えるよりも他人と情報を共有して会話をしながら考えをまとめるのが理想だが、別の時空から来た身ではなかなか難しいかもしれない。これからどうするべきだろうか。

一人でじっくり考えをまとめるのなら、78へ。

ヨードに助言を求めてみるなら、109へ。

アナキンの部屋に戻るのなら、104へ。

この時代の自分と連携してことに当たろうと思うなら、149へ。

122

聖堂にいと顔見知りに出くわす可能性が高い。なら、外に出ればいいのだ。オビⅡワンはなるべく目立たないように隠れながら大回廊を進んでいた。

「チェックポイント」に数字が記入されているなら、
空欄のままなら、
108へ。
140へ。

123

「ケノービ將軍？ 珍しいですな、こんなところでお会いするとは」
目が合っただけなら別人のふりをして逃げることもできたが、大声で話しかけられては応えないわけにいかない。

「これはどうも、オーガナ議員。ご健勝で何よりです。では失礼」

「どこかへお急ぎですか？」

足を速めて歩き去ろうとしたのに方向を変えてついてくる。オビⅡワンは顔をしかめかけ、あわてて抑えて「ええ」と応えた。

「一刻も早くこなさなければならぬ用事がありまして」

「なるほど、例の件ですな」

ベイルは上品な口ひげを手で擦り、痛ましそうな表情を作った。例の件。オビⅡワンは一瞬間を置いてから彼に顔を向けた。

「ご存じでしたか、あの件を」

ベイルは真剣な顔で頷き、声をひそめてこう続けた。

「もちろんです。昨夜殺されたのはオルデラン出身の者ですからな」

「殺された？　そういえば、共和国軍の財務担当官が殺されたとか……」

「その殺された被害者が私の知人なのです。旧友の弟で、妻の父が名付け親でした」

思わず額に手を当てた。何ということだ。

「……そうだったのですか。お悔やみを申し上げます、オーガナ議員」

「感謝します。一刻も早く捕まえたいところですが、犯人は手がかりをほとんど残していないのですよ。データも消されたようです」

「ライトセーバーで斬られていたと聞きましたが？」

「傷は一直線で、ためらった跡もなかった。ライトセーバーでどのくらい深く斬れば人が死ぬのかを知り尽くした者の犯行だ、と警備隊は言っていました」

彼の視線が痛かった。確かに、それは明らかにライトセーバーで人を殺したところのある者の仕業だ。ということは犯人はドゥークーやアサージ・ヴェントレスのどちらかだろう。そうでなければジェダイだ。むしろジェダイである可能性の方が高い。そしてジェダイの中でもっと疑わしいのは、スカイウォーカーは犯人ではありません」

オビ＝ワンはきっぱりとそう言った。

「彼の元マスターとしてこれだけは保証します。彼が横領などする理由がありませんし、ましてやそれを分離主義派に流す動機もない。証拠を消すためにあなたのご友人を手にかけるなど論外です」

「私とて旧知のスカイウォーカー将軍がこれほど非道な真似をするとは思っていませんよ。ですが、他に挙げられそうな名がないのです。遠い星系で艦隊を率いているドゥークー伯爵にこれだけ派手な動きができるはずもない。これがすべて誰かの陰謀だと言うなら、その誰かを特定しなければ容疑は晴れないでしょう」

深くため息をついた。彼の言うとおりだ。そしてアナキン自身も議長オフィスの同じことを言っている。「まずは僕をはめた奴を探すところから始めるべきなんだ」。

「八つ当たりをしてしまって申し訳ない、ケノービ将軍。あなたには何の責任もないのに」

「当然の感情ですよ。万が一にでもスカイウォーカーが犯人なら元マスターである私に責めが及ばないはずはありません。そんなことはありえないと信じたところではありますが」

ベイルはそれを聞いて「そう願っています」と力なくささやいた。彼はいかにも育ちがよく、知的で、いつも背筋が自然に伸びているような人物だ。今ごろ三歳になっているレイアの父親として彼ほどふさわしい者はいない。なのに今は肩を落とし、猜疑と悲しみの中に沈んでいるようだった。彼のためにも早く真相を明らかにしなければならぬ。

チェックポイント「M・ベイル」に0と記入し、
128へ。

124

ジェダイが起きてすぐ向かう場所と言えば、道場だ。聖堂にいるときは夜明けと同時に起き、朝

食の前に道場で軽く汗を流すのが日課だった。だがあの場所は今はもうなくなってしまっただろう。パルパティーンがジェダイ流教育の名残をそのままにしておくとは思えない。

いくつかリフトを乗り継ぎ、いつも使っていた道場をのぞくとすでに人がいた。とっさに首を縮こめる。また見つかって質問責めにされると思うと一歩踏み出す勇気が持てないからだ。

チェックポイントJに数字が記入されているなら、105へ。

空欄のままなら、129へ。

125

オビⅡワンは反射的に身を隠し、そのまま中庭の反対側に歩いていった。この状態で人と会うのはリスクが大きすぎるし、いつ正体を見抜かれるか分かったものではない。

チェックポイントKに数字が記入されているなら、130へ。

空欄のままなら、154へ。

126

それが誰なのかはすぐに分かった。特徴的な白い服と砂色の髪にところどころ血がにじんでいた。彼は床に倒れ伏し、荒く息を吐いている。この人物が動けないほどだからよほどのけがを負っているのだろう。オビⅡワンは血のついた彼の後頭部に手を当て、フォースの流れ方を調べて容態を確

認した。頭を強く打っているし、出血はしているが生死に関わるほどではない。折れている骨は肋骨だけだから走って戦えないほどではない。だがこのまま放っておいたら危ない。みるみるうちに体が弱っているのだ。

血だらけの体を抱えてそっと仰向けにし、さりげなくローブで彼の目を隠した。これなら正体を見破られる心配はない。

「聞こえるか、マスター・ケノービ」

自分**は**びっくりとまぶたを動かし、息だけの声で「ああ」と応えた。窓に大きな穴が空いているせいで風がごおごおと吹き込んできていて、よく耳を澄まさないで声が聞こえない。

「、れらを追わないと」

「彼ら？ いったいここで何があった？」

次の返答はなかなか言葉にはならなかった。よく見ると胸に透明なものが突き刺さっている。窓の破片だ。しかもぎよっとするほど大きい。

「その窓を破って何者かが入ってきたんだな？　そして戦闘になった。壁にもコンテナにもライトセーバーの跡があるからしばらく斬り合ったんだろう。しかしその人物は君をライトセーバーで打ち倒すことはかなわなかった。その代わり、荒っぽい方法で殺そうと試みた」

「そうではない」

ぜいぜいという音が言葉の合間にうるさく響く。肺に穴があいて気胸になっているのだ。破片を

抜いてやりたいが、うかつに抜くと死ぬ。

「君が誰だか分からないが聞いてくれ。侵入者の標的は私ではない。奴は私など目に入っていないかった。目当ては私の弟子のスカイウォーカーだ。奴は一目散に彼に飛びかかり、斬り殺そうとした。だがライトセーバーを振り回せる広さがないと分かると部屋じゅうを暴れ回ってさまざまな方法で彼を殺そうと……。それで、彼の前に立ちふさがったらこの有様だ」

「二人は今どこへ？」

とはいえ、部屋の様子を見れば何となく分かる。おそらく侵入者は逃げた。アナキンは後を追った。いや、オビ・ワンが後を追わせた。「私のことは心配ないから早く行って捕らえろ」と。いかにも自分が言いそうなことだ。誰かに発見してもらわなければ危なかったというのに。

「相手は黒いドロイドだ。いや、ドロイドじみているだけで何かの知覚種族だろうが危険な存在だ。力強く、技術に長けている。それに暗黒面のフォースを感じた」

「分かっている。だが君は何も心配せずに休め。ドクターを呼んでおく。彼のことは、私がどうかするから」

「知り合いなのか？」

オビ・ワンは微笑を浮かべ、自分の額に手を当てる。大量出血しているせいか額も頬ものっぺりと白い。そのまま手のひらからフォースを送り込もうとすると、ゆっくりとした動作で手首をつかまれた。馬鹿馬鹿しいほど弱い力だ。しかし自分ではまだ力強いと思い込んでいる。まだ動ける、

まだ耐えられると信じ切っている彼の姿は、まるで今の自分を映した鏡のようだった。

「私を眠らせる前に、ひとつ頼みを聞いてくれ」

「言わなくても分かる。君の弟子は私が守るよ」

「そうじゃない」

彼は目隠しをされたまま首を横に振り、手首をつかむ手に力を込める。

「私はこの有様だが、アナキンは私よりずっと強い。忍耐を発揮してくれると信じてはいるが、あの調子ではアナキンは奴を殺すかもしれない。だから、」

「分かっている。必ず彼を止める。殺せば相手は何者なのか分からなくなってしまいうからな」

「頼む。できるだけアナキンを殺人者にしたくないが、何が起きるか分からない。首尾よく奴を捕らえられたらアナキンと引き離しておいてくれ。そして私の容態も彼には秘密に……」

とても最後まで聞いていられたなかった。自分のことながら背中がむずがゆくなる。この男は自分の命が危ないということをまるで理解していない。口を開けばアナキンのことしか話さなし、興味も関心も彼にしか向けられていないのが丸分かりだ。そのことに改めて気づいてくさくさした気分になった。何たる未熟者だろう。このとき、この時代、オビⅡワンは本当に他のことを何も考えていなかったのだ。アナキンのことしか頭になかった。なのに大事なものを手から取りこぼし、喪失の痛みにすら気づかないふりをしていられたのか。

オビⅡワンは彼の後頭部をそっと床に下ろし、血の気のない腕につけられたコムリンクを起動さ

せてからその場を離れた。すぐに救助が来る。命は助かるだろう。だが彼が目を覚ましたときに真っ先に考えるのはアナキンのことで、それは彼を失って三年も経った自分ですらそうで、いつかそれも変わるのか、時間が経てばもっとまともな生き方ができるのか、今のオビ・ワンには分からない。

141へ。

127

アナキンを陥れた者が官吏を殺したのに501大隊のトルーパーを殺さなかったと知ったとき、明らかに何かおかしいと思った。戦争の後、共和国軍の代わりに帝国軍が誕生してからレックスやコーディ、顔なじみのクローンたちがどうなったのかは知るよしもない。だがこの時代のアナキンは彼らを間違いない大事に思っていた。それほど大事に思っていたのに、躊躇なく虐殺の道具に使った。見回り二人を殺さなかったのはその罪悪感からだろうか。まさか。シスの暗黒卿ともあろう者がそんなことにいちいち罪悪感など覚えていたら生きていくことすらできない。手を止めた悔いを残さないよう、彼らを皆殺しにしようと考えてるのは不自然ではないことにように思えた。

しかしスピーダーを飛ばして夜の街を疾走し、宇宙港が見えてきたときすでにここまで来たことを後悔した。艦隊がコルサントに戻ってきて丸一日経っている。ということは、彼らはもうここにはいない。街に繰り出すなり宿舎に戻るなりしているはずだ。スピーダーから降りてみると、案の定ドッキングベイには見回りの兵士とセキュリティドロイドがいるだけだった。目的地を間違えた。

意気込んでいたぶんショックは大きい。しかしオビールワンはできるだけ普段通りの足取りでス
ピーダーに乗り込み、普段通りに聖堂に戻った。

150
へ。

128

中心街に戻ってくると頭の芯に軽い疲労を覚えた。記憶以上に巨大な街だ。タトゥイーンに三年も引っ込んでいた身からすると異様ですらあり、初めてコルサントにやってきたときのアナキンの
気持ちの方が今さら理解できたような気分になった。しかし立ち止まっているわけにはいかない。せっ
かく時空を超えてきたのだから、何か行動せねばならない。

パルパティーンのオフィスのあるビルへ行くなら、
110 へ。

元老院議事堂に足を踏み入れるなら、
153 へ。

パドメのアパートを訪ねてみるなら、
81 へ。

デクスターのダイナーに寄ってみるなら、
113 へ。

共和国軍の宇宙港をのぞくなら、
143 へ。

聖堂に戻るなら、
106 へ。

「やっぱり今日は体術訓練にしておらおうよ。ライトセーバーを使う訓練になったら一本足りないのがマスターに分かつちゃう」

「それは私たちのせいじゃないでしょ。来たときから一本なかったんだもの」

「でも怒られるのは僕らだよ。こないだだってライトセーバーで壁を傷つけて一週間テストを延ばされたじゃないか！」

オビⅡワンはさっと物陰に隠れ、できるだけ目立たないように道場を出た。中にいたのは子供たちだ。指導担当のマスターが来るまで自主練習をしに来たのだろう。どうやらトラブルに遭っているようだし中に入っていったら間違いない質問攻めにされる。正体を見抜かれる可能性だってある。ひとつ息をつき、来た道に戻るべく角を曲がると人にぶつかった。背丈が同じくらいの人物だ。顔と顔がぶつかりかけ、手と手も触れ合った。いったい誰だろう、と思ったとたん、驚愕している自分の顔が目に入った。

最初は鏡を見ているのかと思った。オビⅡワンも同じくらい驚いていたし、とっさに取ったしぐさがまったく同じだったからだ。口を半開きにし、目を見開き、右手を中途半端に前に出す。しかし何か違う。まず髪の色が違う。肌の色も少し違う。頬がつややかで、少しもやつれていない。これは鏡ではない。自分だ。この時代のオビⅡワン・ケノービ。

口を開いたのは同時だった。向こうの自分は「お前は誰だ」というようなことを言いかけ、こち

ら側の自分は「驚かないでくれ」と言いかけた。しかしそれは言葉にはならなかった。気づいたときにはもう半分なくなっていた。体も自我も細かな砂となり、空気に溶けて消えていく。目の前にいる三年前の自分は驚きのあまり後ずさりをし、尻もちをつきそうな態勢になっていた。自分が何が起こったのかを知る時間はなかった。消滅はあまりに急で、そしてすみやかに行われたからだ。こうして、オビⅡワンの人生の物語は幕を閉じた。元の時代に戻ることもなく、何かをなし遂げることもない。真っ先に頭に浮かんだのはルークのことだが、最後に思い浮かべた顔はアナキンだった。しかしどの時代の彼でもない、抽象的な姿だ。救ってやりたいなどとは言えないが、できることならもう一度会いたかった。この時代の彼ではなく、互いにそれぞれの三年間を過ごした後の、本物のアナキン・スカイウォーカーに。

(ED 10・消滅④)

130 チェックポイントL、M両方に数字が記入されているなら、121へ飛ぶこと。

事件に関してさらに調べたいこと、行きたいところがあれば次の表から行動を選んでよい。

道場に出すなら、124へ。

中庭に寄るなら、145へ。

もう一度聖堂の外に出るなら、128へ。

131

自分の部屋ではなくなぜアナキンの部屋に戻ってきてしまったのは、最初にここに飛ばされて来たからだ。しかしよりによってなぜアナキンのベッドだったのだろうか。自分の部屋でもなく、評議會の間でもなく、道場でもなく、この場所に。オビIIワン自身が訪れた回数はこの部屋よりも彼がパダワンだったときの部屋の方が多い。今よりも狭苦しかったがよく説教をしに行ったものだ。アナキンが昇格したときは戦争が始まっていたし、やたらに説教をする必要もあまりなくなったり、何より彼自身が新しい自室に寄りつかなかった。自分の部屋というよりは仮眠室程度の認識だっただろう。彼の本当の家は別の場所にあったからだ。

思い出して胸がちくりと痛み、波立った気持ちをあわててなだめる。すべて終わったことだ。もう傷つく必要などない。これ以上何かが起こるわけではないし、結局一番傷ついたのはオビIIワンではなく彼ら自身だったのだから。

目線を上げ、アナキンの部屋の扉の前に立つ。ノックをしかけたが手が止まった。フォースが危険を伝えてくる。具体的にどんな危険なのかは分からないが、中に誰かがいたらまずいことには変わりはない。ひとまず室内の様子を探るべきだろうか。

聞き耳を立てるなら、86へ。

部屋から去るなら、121へ。

タトゥーの二つの太陽は昇っているときは暑くて熱くて憎たらくてたまらないが、沈むときは言葉にもできないほど物悲しくて美しい。水分農家の労働者たちは一日の労働が終わるとき夕陽を見て、存分に物悲しくなってから夕食の支度を始める。

アナキンは夕陽の方向に向かって思い切りスピーダーを飛ばしていた。どこかにぶつかったら即死するスピードなのに時間が気になって仕方なかったからよそ見ばかりしている。無人の荒野で助かった。ここがコルサントだったら怒号と悲鳴の嵐だろう。アナキン自身は目をつぶっていても対向車に衝突どころかかすりもせずによろけろと走れる自信があるが、周囲の人々はそうは思わない。

こんなことなら船で直接乗りつければよかった。だが目立つことはやめろ、と厳命されている上レール用の船をそばに着床させるわけにはいかない。モス・アイズリー宇宙港からスピーダーの性能の限界まで飛ばして二時間、取って返してまた二時間。どんなに頑張っても船に戻るのには夜だ。船ごと盗まれたり全壊していることはさすがにないだろうが、エンジンがなくなっていたり高価な部品が安物と入れ替わっていたりするくらいのこととは覚悟しておくべき時間かもしれない。うっかり泊まってしまったたりなどすればとても飛び立てるような状態ではなくなるだろう。

なぜこれほど盗難を警戒しているかと言えば、前にも同じことが起こったからだ。丸一日モス・アイズリーに船を置いたらエンジンと翼部分とナビコンピューターがごっそり失われていた。もちろん宇宙港の警備員にチップを弾み、サービスドロイドにおべっかまで使い、各種警報装置を設置

しておいたのにだ。警備員を問い詰めても「夜は働かねえ主義なんぞな」とへらへら笑うだけだからあかない。「そんな船を置いとく方が悪いぜ」。

分かつてはいる。アナキンが自分用に使っているのは最新技術の粋を集めて跡形もなくぶっ壊した後自分好みに改造しまくった乗り心地最悪の小さな船なのだが、スピードだけはどんなファイターよりも出る。そのことは銀河じゅうの人々が知っている。もっとも機体損耗率の高い銀河惑星間レース五連覇中の船を知らぬ者はいない。だから、そんなものを普段使いする方が悪いのだ。アナキンだって普段からこんな目立つ船を乗り回したくはない。きゃーすごーいなんて言われたくない。子供じゃあるまいし。だが「一番スピードが出る船で迎えに来て」と強硬に主張する二人のギャングのせいでタトゥーインに来るたびにこんなぎりぎりのチキンレースをするはめになっている。

「ルーク、レイア！」

スピードを降りて駆け出していくと、まず迎えてくれたのはブルーだった。彼女はアナキンがなぜあわてているかを知っているので挨拶もせず一目散にルークとレイアを呼びに行く。次に出てきたのは夫のオーウェンで、「相変わらず騒がしい奴だな」と言いたげな顔で手を差し出してきた。「今日は早かったな。もっとゆっくり来てもよかったんだぞ。いっそ泊まっていくか？」

「いいや、すぐ帰る。いつもすまない。子供たちの面倒を見てくれてありがとう」

手みやげを渡しながら矢継ぎ早にそう答えると、オーウェンはすさまじく残念そうな顔をした。「そうか……。今度はポッドレースがないときにも遊びに来させてほしいもんだが、ポッドレース

でもなきや何もないからな、ここは」

「まあ、正直言ってそうだな。ポッドレースはタトゥイーンの宝だ。しかも、ポッドレースは生で見えてこそ意味がある」

二人同時ににやっと笑い、腕を腕をぶつけて交錯させる。

「あんたが話の分かる奴でよかった。ジェダイには大声で話にくいことだからな」

「元、ジェダイだよ。それに子供たちに違法なポッドレースを見せたなんてことがパドメにばれたらまずいから彼女のの前では言わないでくれ。ルークとレイアにも『叔父さんのところに遊びに行っただ』ってことだけ言わせてるんだ」

「まったく悪い父親だな。ばれても義兄弟に罪をかぶせるなよ」

家の中からどたと大きな音がし、まるで弾丸のように小さな影が飛び出てくる。のんきに世間話をしている二人を見て、ベルーは思い切り顔をしかめた。

「エンジンはかけてある？」

「ああ。いつもありがとう、ベルー。おかげで子供たちも楽しかった、」

「挨拶はいいの。早く行っつて。できたら盗みの現場を押さえて、こそ泥どもにきつーくお仕置きをしてやって。強面のジェダイが脅せばこころ辺の盗賊も大人しくなるわ」

「強面だっつて!？」

そのまま背中を押されて運転席に飛び乗ると、二人はかがみ込んだベルーに同時に抱きついた。

「二人とも、また来るのよ」

「うん」

「待ってるからね。いつでも待ってるから」

スピードは来たときと同じくらいのスピードを出している。夕陽はすでにひとつになっいて、物悲しいどころか闇の時代の到来すら感じさせる刻限に差しかかっている。ルークとレイアはポッドレース観戦で疲れたのか、お互いに寄りかかるようにして眠っている。

こんなとき、ふと昔のことを思い出すことがある。まだ自分がジェダイだったところで、オビⅡワンが生きていた時代のことだ。オビⅡワンと最後に会ったとき、彼はわけの分からないことを言った。「お前がジェダイでなくなればすべての重荷が消え失せ、ルークとレイアをその手に抱くことだってできる」。あのとき彼は間違いなく「ルークとレイア」と口にした。それが誰のことかしばらく分からなかったが、オビⅡワンが死んでオーダーを離脱し、パドメが双子を授かったときようやく理解した。アナキンがジェダイでなくなったのは彼の不可思議な遺言のせいではなく、あの後オビⅡワンが自分を置いて死んだからだ。だがいまの自分は奇しくも彼があのと時言ったとおりの人生を歩んでいる。オーダーを離脱し、パドメと二人で家庭を持ち、ルークとレイアをこの手に抱き、日々の生活に追われて銀河のゆくすえを気になけなくなった。今お前は幸せなのかと問われたら、たぶんそうだと答えるだろう。だが悔いがないわけではないし、残念だと思っていないことがないわけでもない。その中の一番は、あなたがいま生きていないことだ、オビⅡワン。

お前の幸せだけを願っている、と言ってくれた彼に、心の中で何度こう言い返したか分からない。僕だって同じくらいあなたの幸せを願ってたんだ。あなたに笑っていてほしかった。あなたが幸せそうに笑ってくれたら、僕はそれだけで幸せだった。

ハンドルを握る手に力を込めすぎて関節が白くなっていた。あのときのことを思い出すと今でも呼吸ができなくなる。

オビIIワンは聖堂での治療中に自死をした。自分のライトセーバーで胸を貫いて絶命しているところをドクターに見えされた。葬儀の後誰も彼もがアナキンを慰めにきたが、一言も返事ができなかった。人の形を保っているのが不思議なほど頭の中がぐちゃぐちゃだった。だが心当たりがひとつもなかったわけではない。あんな謎めいた遺言を残したのは、そのためだったのだろう。だが死んだ理由は分からない。いったい何がトリガーだったのか、なぜ死にたいと思ったのか。自分に何かしてやれることはなかったのか。弟子だったのに。たったひとりの彼の身内だったのに。幸せになっただけだったのに。もしかしたら自分と一緒にいて幸せじゃなかったんだろうか。重荷だったんだろうか。死を選ぶほどアナキンから逃げたかったのか。

彼が死んでから何度もそれを考える。もちろん答えなど出ないし、気持ち収まるわけでもない。だが彼が最後に望んだことだけはかなえたいから、やればちになっしまいたくない。

大きく深呼吸をして手をゆるめ、幸せそうに眠るルークとレイアを横目で見る。新しくて古い世界を眺める。ここはオビIIワン・ケノービがいない世界だ。自分がいない方が幸せだと彼が思った

世界。そこで生き延びなければならぬアナキンのことを少しも思い出してくれなかった、一番大事な、あなたのいない世界。

(ED 13・あなたのいない世界)

133

もう一度行ってみるべきだろうか、と思った。パルパティーンが一人のときにしか見せない顔もあるだろう。だがふたたびあの壁に取りついて彼の気配をまともに浴びることを考えると寒気がした。しばらくは離れていたい。

128へ。

134

押されているとは言っても二人ともアナキンなのだ。簡単に負けるわけがない。本当は二人の間に割って入りたくてたまらなかったが最大限に自制心を發揮してその場に留まる。今のオビIIワンはライトセーバーを持っていない。丸腰の人間にライトセーバーの使い手同士の高度な戦いを止めることはできない。オビIIワンは下唇を噛みしめ、十メートルほど先から二人の戦いを見守り続けた。本当は何かできないのか。本当に何もできないのか。このままでは、アナキンは……。

そう思ったとたん、嫌な予感がフォースの嵐となって襲ってきた。あまりの圧に息もできない。

目を凝らしても何も見えなくて思わず駆け寄ると、目の前にアナキンの背中があった。そしてその先にはアナキンの、アナキンだったものの、真っ二つになった黒い肉体があった。

「……マスター？ 何しに來たんですか？ 動かない方がいいって言ったのに！」

がくりと膝をついた音を聞きつけ、アナキンがあわてて走り寄ってきた。

「いい加減にしないと近いうちに死にますよ。こいつのことは僕が片づけましたから早く聖堂に戻ってください。待っててもあなたの出番はないですから！」

「アナキン、」

「はい？」

ぴくりとも動かない黒い物体に向かってもう一度「アナキン」と呼ぶ。いつかまた彼に会えたら、真っ先に「アナキン」と呼びかけようと心に決めていた。ダース・ベイダーでもなくて、暗黒卿でもなくて、アナキン、と。それで何かが起こるわけではないし、過去をやり直せるわけでもないし、事態が好転するわけでもないと分かっていたけれど、それでもそう呼びたかった。今でも彼をそう呼んでやれるのはオビ・ワンだけだからだ。だが彼はそれを聞かずに死んだ。自分をアナキン・スカイウォーカーだと認めてくれる者を一人も知らないままこの世界から消えた。道なかばで倒れた、歴史上の一人の暗黒卿として。

「どうしたんですか、マスター。僕はここですよ。出血多量で幻覚でも見てるんじゃないでしょうね」彼の声はだんだん心配そうな色を帯びてきた。アナキンはかがみ込み、真正面からオビ・ワンを

のぞき込んでくる。

「ほら、僕が見えますか？ どこからどう見てもあなたのかわいい弟子でしょう？ 違ってもマスターを殺そうとしたあの黒い奴じゃないです。それにしても侮辱だな、あんなドロイドもどきと間違われるなんて」

違うんだ、と声に出してつぶやく。お前はドロイドもどきなんかじゃない。肉体がある。人の心がある。不完全さは人間性を奪ったりなどしない。誰かが、オビⅡワンが、彼にちゃんとそう言うてやらなければならなかった。

「うーん、いよいよおかしいな。いまアソーカを呼びますからすぐにドクターに診てもらってください。ちゃんと治療を受けて休めば元に戻ります。いつも無理するからそうなるんですよ」

「アナキン」

肩に置かれた手をつかむ。その手はぎょっとしたように引っ込められかけ、しかしすぐに手の中に収まった。

「やっとな僕を見分けられるようになったんですね？ でもそれが聖堂に戻らなくていい理由には、」
「アナキン、消える前に話しておきたいことがある。質問は受け付けないから黙って聞いてくれ。私の遺言だと思って」

オビⅡワンが大きく息を吸い込むのと、アナキンが息を止めたのはほとんど同時だった。

「この死体は私が引き受ける。お前は先に市街に戻れ。そして聖堂でなくパドメのところにまっす

ぐ行ってくれ。彼女を連れて外縁部に逃げ、落ち着く先が決まったらコムリンクで私に連絡をくれ。そうすればこの時代の私もすべてを察する。お前の知らないところですみやかにオーダー離脱の手続きが取られる。お前がジェダイでなくなればすべての重荷が消え失せ、ルークとレイアをその手に抱くことだってできる」

「……ルークとレイアって誰です？　そもそも何で僕がパドメと、」

「もうごまかさなくていい。嘘をつく必要もない。自分の心に正直に生きろ。戦争のことなら大丈夫だ。もうすぐ終わる。予言のこともクワイーガンの顔も思い出さなくていい。そして私は、いつでもお前の幸せだけを願ってる。不可能だと思える未来でもお前なら必ず実現してくれると信じてるよ。だから言うとおりにしてくれ」

それだけ言ってゆっくりと立ち上がり、動転してうるさく追いつがってくるアナキンを無理やりスピダーに乗せる。「本当にけがは大丈夫なんですか」と泣き出しそうな顔で聞くアナキンに向かって「最後くらい私の言うことを聞け」と笑う。

スピダーが行ってしまうと、オビワンは二つになってしまったアナキンの体を両手いっぱい抱えて屋根を歩いていった。最後に小声で彼に呼びかける。

お前に会いたかったよ。

「ああ。どうやら裸でここまで歩いてきたらしい」

「……」

「だが安心してくれ。誰にも会わなかった」

それは本当だった。超空間の渦に飛び込んでからここに来るまでは誰にも会わなかった。とはいえその記憶は怪しい。飛び込んだ後、どこで裸になったのかすら覚えていないからだ。

「……マスター」

「何だ？」

「笑ってすみませんでした」

「何の話だ」

「あなたが捕まって監禁されてたことを、です。いつものことだと思ってからかったです。でも、ものすごくストレスだったんですね。気づきませんでした」

突然肩と背中を強く抱かれた。思いつめたような息づかいを耳と肩で感じる。

「瘦せたなとは思ったけどどんな目に遭わされてもいつも通り平気な顔してると思った。だって日常茶飯事じゃないですか、監禁。デックスの店に行くより日常でしょう。だから全然平気なのかと」

「一般的に監禁は強いストレスになりうると思うがな」

「一般的な人は縛られて死ぬほど痛めつけられてずっと閉じ込められてたら笑ったりジョーク言っ

たりにやにやしなから弟子に嫌味を言ったりできません。でも今回ばかりは強いストレスになったんですね。裸で聖堂を歩くほどには」

「あ、ああ、まあそうだな」

腕の力がさらに強まる。思わぬ方向に勘違いをさせたような気がするが、納得してくれたならとりあえずはいいとしよう。

「服くらいいくらでも貸します。でもストレスのせいでどうしても裸でいたいというなら僕も付き合いますから」

「付き合う？ お前も裸になるのか？」

「もちろんですよ」

アナキンは体を離し、真剣な顔で領いた。

「マスターだけに恥はかせません。オーダーを追放されてもお供しますから」

全身の力が抜け、こんな馬鹿馬鹿しい言い訳をしたことを全力で後悔した。アナキンのいいところは情にほだされやすいところだが、悪いところはいったん情にほだされると明後日の方向に暴走して止められなくなるところだ。もっとまじな返答を考えればよかった。少なくとも「同情」方面に舵を切ることだけはやめればよかった。

そのあとオビⅡワンは「自分も服を脱いで生活する」と言い張る彼の説得に一時間ほど費やし、ようやく服を借りられたときには身も心も疲れ果てていた。嘘はよくない。だが正直でいることに

固執して思考を放棄するのはもつとよくない。

92へ。

136

しまった、と思った。まずい。これ以上にまずいことは他にはない。なぜ聖堂を出る前に自分の部屋に立ち寄って服を着替えてこなかったのだろうか？なぜよりもよってアナキンの服を着てパドメに会いにくるなどという愚かしいにもほどがある行動をしてしまったのだろう。オビ＝ワンはさりげなくアナキンのローブでアナキンの服を隠しながら顔を背けた。今すぐこの場を去りたい。そうでなければ彼女に暗示をかけたい。効かないと分かっているが、試す価値はなくてはならないだろうか。いいや、だめだ。

「す、すまない、パドメ。用を思い出した。これで失礼するよ」

「えっ、もう？　今来たばかりでしょう？」

ソファから立ち上がり、オビ＝ワンはもう一度「すまない」と答えた。

「顔を見たかっただけなんだ。久々にコルサントに戻ってきたものだから懐かしくてね」

「そう。何か私に話があるから来たのだと思っていたけれど」

意味ありげな視線を向けられてどきりとししかけたがいつアナキンの服を着ていることに気づかれるかと思うとそれどころではなかった。

「忙しいところ失礼した。それでは」

「また来てくださる？　話したいこともあるし」

「話したいことは？」

思わず振り向くと、パドメの手が素早くローブをかき分けた。一瞬遅れてざあっと血の気が引く。

「……やっぱり」

「ち、違う、違うんだこれは、これにはちょっとした事情があって、」

声が甲高くなってしまうのを抑えられなかった。この程度のことであわてふためく自分が情けない。だがあわてるのはやましいからだ。相手がパドメでなかったら適当にごまかして終わりだった。パドメはやがてローブから手を離し、「ごめんなさい」と言って照れ笑いをした。

「さっきから気になってはいたのだけど、まさか本当にアナキンの服だとは思わなくて」

「普通は疑問に思うだろうな。だが本当にこれには事情があって、」

「ジェダイの師弟はよく服を貸し借りをするの？」

「よく……？　いや、あまりしない。おかしいと思うだろうがしかしこれには事情が、」

「そうだったの。前にアナキンが警護の任務でナブーについてきてくれたとき、着替えとしてあなたの服を持ってきたからジェダイにはそういう文化があると思っていただけ」

初めて知る事実に絶句した。アナキンはよく服を汚す。すぐ泥だらけにしたり袖を破いたりする。なので必然的に着替えが足りなくなることがよくあるのだが、まさか代わりにオビ＝ワンの服

を持って行っているとは思わなかったし今の今までまったく気づかなかった。

「……パドメ、アナキンのしでかしたことには驚いただろうが私のこの件はまったく別なんだ。さっきから言いかけていることだがこれにはじじよ、」

「不思議ね。あのときアナキンも泡を食って言い訳をしようとしていたのよ。いつもマスターが無理やり持たせるから仕方なかったんだ、って。でもきつと違うのね」

「無理やり持たせたことなど一度もないしそもそもそんなことを知らなかったしそれとこれとは話が別なんだ。最後まで聞けば分かってもらえると思うがこれにはじ、」

「その言い訳は今度ゆっくり聞きます。あなたがその服を着替えて、元の精神状態に戻ったら、ね」
情けなくて泣きたくなかったがジェダイなので涙など流せるわけがなかった。オビⅡワンはふらつく足取りでペランダを横切り、彼女に会釈をしてエアタクシーに乗り込む。「なぜ着替えてこなかった」と自分を責める自分の声が頭の中に響き続いていた。

128へ。

137

彼の考えは手に取るように分かる。もうフォースの繋がりは無いのに、彼が感じていることも分かる。なぜならオビⅡワンもずっと同じ思いだったからだ。この世界から早くいなくなりたいかった。煙のように消えてしまいたかった。最初から生まれてこなければよかったのと思ったことは何度

もあった。「頼むからこの場で殺してくれ」とつぶやくたびにまだ生きている自分の肉体が呪わしくなった。痛みも感じないほど痛めつけられたくてたまらなくなった。

その感情は当然オビィワンにも弱さをもたらしたが、暗黒面に堕ちてなお強くそれを感じなければならぬ彼はもはや取り返しがつかないほど弱くなってしまったのではないか。弟子の弱みと迷いは師にも伝わる。シディアスは暗黒面にふさわしい強さを持たない弟子をそのままにしてはおかないだろう。利用されて飼ひ殺されればまだいい方だ。下手をするとな生涯に閉じ込められる。だがどれほど憎んでも師を殺すことはかなわず、ジェダイに戻ることもできない。未来永劫無意味な苦痛だけを味わい続け、長い年月をかけてゆっくりと死ぬ。低くうめく彼の声が聞こえるようだった。「頼むからこの場で殺してくれ」。苦痛を知る前に。孤独を知る前に。何も知らない少年だったころの自分を、ただ幸福で愚かなまま殺してくれ。

感情の渦に飲み込まれかけ、足が止まってしまふ。暗黒面の荒々しい力に染まりきっていない、生のままの激情が襲ってくる。それはただの怒り、ただの苦痛だ。そのことに気づいて悲しくなった。彼はまだ自分の感情を暗黒面の力に変えるすべを会得しきっていない。怒りや恨みをどれほどひねり出しても力に変わらなければ霧散するだけだ。これだけの感情をいつまでもただ放出していたらそのうち彼自身が乾き切ってしまうのではないか。想像してぞっとした。誰より美しい肉体と、誰より豊かな心を持っていたアナキンが、体だけでなく心まで機械になってしまう。オビィワンは奥歯を噛みしめて顔を上げた。走り続けなければ。これを止められなければここまで来た意味はな

い。お前の存在は意味のあるものだと言ってやれなくて、弟子を破滅から救ってやれなくて、何がマスターだ。見ていっただけで何ひとつできないなら、もう二度とマスターを名乗る資格はない。

オビⅡワンは飛び出すようにしてリフトを降り、廊下を一目散に駆けていって乱暴な手つきでアナキンの部屋の扉を開けた。しかし、部屋の中には血まみれの人間の体が転がっているだけだった。

126
へ。

138

ライトセーバーを持たないオビⅡワンに二人の殺し合いを止めることは不可能だ。だがアナキンのライトセーバーを使用不能にすれば少なくとも彼が殺されることはない。オビⅡワンはフォースに働きかけてアナキンの手の中のライトセーバーのスイッチを切り、思い切りこちらに引き寄せた。アナキンが驚いたようになにこちらを見る。

「……マスター？」

彼の子供じみた、無防備な絶望を忘れることはきつとないだろう。どうして、と言いたげな、悲しげな顔。アナキンが聖堂に來たばかりのころ、オビⅡワンが他の子供に稽古をつけたりけがの手当をしてやったりするたびにこんな顔をした。僕のマスターなのに何で？という顔だ。だが彼はどんなに幼くてもその不満と不安を直接マスターにぶつけることはしなかった。代わりに彼は悲しみと怒りと苦痛を心の奥にため込んでいき、やがて爆発させる日のための糧にした。

急にそんな場違いなことを思い出したのは、彼がその一秒後に死ぬとオビⅡワンにも分かっていたからだろう。ライトセーバーと注意を奪われたアナキンはそのまま大上段から斜めに斬られて屋根の上に崩れ落ちた。人形のようにがくりと膝をつき、抵抗らしい抵抗もしないまま今度は胸と首を貫かれる。

その瞬間、オビⅡワンは反射的に両手を目に当てた。アナキンが絶命するところを見たくなかったからではない。爪を立て、目玉をえぐり出そうと思ったからだ。オビⅡワンは死にゆく彼の最後の表情を永遠に覚えておくべきだった。もはやそれ以外のものを目に入れるべきではなかった。殺人者め、と自分を罵りながら目玉に爪が食い込ませかけたとき、いきなり体が言うことをきかなくなった。手も足も腕も頭も動かない。まぶたさえ動かせない。オビⅡワンの体は空間に固定されたかのようにぴたりと止まり、自分以外の世界が刻一刻と形を変えていくのを無表情に眺めるしかなかった。

前からゆっくりと大きな影が近づいてくる。指の間から見えるその影は黒一色だ。胸の制御パネルだけが不気味に光っているが、ヘルメットもアーマーもマントも黒く、まるで夜そのもののような姿だった。そして思った。彼の姿をこの目で見るのは初めてだ。何度かすれ違いはしたし、夢やビジョンやの中ではいつも会っていたけれど、それでも彼に会うのは久しぶりのことだった。

「ナキン」

なのに満足に声すら出せない。もしかた会えたら自分から呼びかけようと思っていたのに名前も

呼べない。

「はな、し、てくれ。、しは、どうしても自分が、」

そう言うとは今度は両腕を真横に開かされた。信じがたいほど強力なフォースだ。暗黒面の荒々しさを体現したようなエネルギーに満ちている。迷いと後悔を知って弱体化したなど一度でも思った自分の浅はかさに腹が立った。いや、違う。元から彼はここまでではなかった。ジェダイだったときに比べればむしろ中途半端で、暗黒面の力をどう得たらいいかを理解してすらいなかった。彼が強くなったとしたら、いまだ。過去のアナキン・スカイウォーカーをその手で殺したとき。不器用にでも愛し、納得する形でなくとも愛され、帰る場所を持ち、笑顔で自分の名を呼んでくれる人たちに囲まれ、ためらわずに善をなせたころの自分をたった一人のマスターが見捨てたとき、シスとしての彼は完成した。目の前にいる暗黒卿はオビ＝ワンが作ったのだ。最初からそうだった。こうなるように運命づけられていただけだ。

「ア、ナキン、すまない」

謝ったってどうしようもないことなのに、それでも言わないわけにはいかなかった。

「ただお前を守りたかっただけなんだ。今度こそお前の助けになってやりたかつ、」

ひゅう、と情けない音を立てて喉が締まった。もう声すら出せない。これがいつかの夜にパドメを殺しかけた技だということは分かっていた。しかしそれよりもはるかに強力で、一寸の迷いもなく、ジェダイであるオビ＝ワンでさえ逃れようがなかった。視界がちかちかと点滅し、徐々にかす

んでいく。涼しい風が脳天から足先に駆け抜けていき、穏やかな心地よさが全身を包む。その溶けていきそうな快楽の中ではっきりと悟った。私は死ぬ。

そして遠のいていく五感が、完全に消え去る前に最初で最後の彼の言葉を聞いた。

「オビⅡワン、やはりあなたは私のマスターだ。本当の師だ。シディアスなどではなかった。誰にでもなく、あなただけが私に完全なる力をくれたのだから」

76へ。

139

「お前が夜に時間があるなんて珍しいじゃないか」

「、え？」

身乗り出そうとしていたアナキンは、ぎくりとした様子で動きを止めた。

「な、何でそんなこと言うんですか。僕はいつも、」

「聖堂にいるときはたいに夜に出かけているだろう。彼女とのことを今さら隠すことはない」

気まずい沈黙が訪れた。このときのアナキンはまだパドメとの結婚を誰にも知られていないはずだったのだ。だがもちろんオビⅡワンは初めから気づいていたし、彼と親しい者はほとんど知っていた。これで秘密にしているつもりなのか。とんだ茶番だ。オビⅡワンは何度も心の中でそうつぶやいたし、彼があまりにあからさまに振る舞ったらこの言葉をぶつけてやろうと思ってもいた。だ

がそんな機会は一度もなかった。

「いつ、知ったんですか」

数分ぶりに口を開いたのはアナキンだった。ぽつりとそうつぶやく声がひどく悲しげに聞こえた。「お前がナブーから戻ってきたときだよ。すぐに分かった。後ろめたさと同時に、ある意味で覚悟を決めた顔をしていた」

「どうしてそのとき何も言わなかったんですか」

そう聞かれると思っていたからため息をついた。どうして、いつも自問していた。答えはこうだ。肉親を失ったばかりの彼からこれ以上何かを取り上げたくなかった。マスターとして一度も彼に幸福を与えてやれなかったくせに、この手でそれをぶち壊しにはしたくなかった。しかし後から振り返ってみれば分かる。本当は違う。これ以上アナキンに恨まれたくなかっただけだ。弟子からすべてを奪った師になりたくもなかった。ただそれだけだ。臆病だったただけだ。

「つまりは、私に勇気がなかったんだ」

「勇気？」

「お前に一生恨まれ続ける勇気だよ。最初から勇気を出してマスターとしてしっかり対処していればこんな事態を招かなかった」

「こんな事態って、」

突如不安そうな顔になり、アナキンは少し距離を取ってオビワンをまじまじと見つめ始めた。

「僕はオーダー追放ですか？」

「真実を評議会に話せばな。しかしそんなことにはならない。私がそうしない。もちろん、条件はあるが」

腕を伸ばしてアナキンの顔に触れ、額から頬にかけてそっと撫でる。彼の頬は不安と緊張のためにこわばっていて、ときどき小さく震えていた。

「怒ってるんですね。僕が掟に背いたから。あなたに嘘をついたから」

「怒ってなどいないよ。だがこうなったからにはあきらめることだ」

「そんなの無理です」

みるみるうちに両目から涙があふれ始めた。苦くて熱くて透明な悔し涙だ。

「僕は彼女を失ったら生きていられない。生きてることに何の意味も感じられなくなって、きつと暗黒面に堕ちます」

「その思い込みがすべての元凶だぞ。お前には他にも大事なものが他にもたくさんある。お前は彼らに見捨てられたと思うているだろうが、アソーカもレックスも死んだわけではない。今でも生きてお前のことを思っているんだ」

涙が引っ込み、代わりに疑問が彼の顔に浮かんた。まづいことを言ってしまった、とそのときようやく気づいた。アソーカとレックスが彼の元を去るのは、おそらくこの先の未来での話だ。このときのアナキンは彼らがずっとそばにいないことを疑いもしていないだろう。

「すまない。妙なたとえ話をした。忘れてくれ」

「いいえ、忘れるつもりはありません」

目に強い光がともった。まるで反応炉のような光だ。アナキンは肉食獣のような動きで体の上に覆いかぶさってきて、両手を強くつかんだ。

「今と同じことを言ってください、もう一度」

「本気で取るな。ただの想像だよ。不適切だったことは謝る」

「違うでしょう。マスターはすぐ不適切なことばかり言うけど、親しい人間同士がやがて離れていくのは当然だと思ってるからごまかしたり謝ったりはしない。ごまかしたいのはやましいことがあるからだ。最初から何か変だと思ってた。早く気づけばよかった」

どきりとしたのを見透かされなくなかった。だがアナキンの勘のよさは自分の弟子ながら惚れ惚れするほどだ。彼はオビⅡワンに馬乗りになったまま首を絞め、ゆっくりと脅すようにこう言った。「お前はオビⅡワン・ケノービじゃない。僕のマスターじゃない。何者なのか言え、今すぐに」

首を絞められていたら言えない、と答えようとしたが声が出なかった。代わりに腕を叩いて伝えようとする。降参、という合図だ。二人で手合わせをするときによくこれをやる。

「僕のマスターの真似をするな。小ざかしい」

ふっと力がゆるみ、肺に一気に空気が流れ込んだ。だが激しくせき込んでしまうせいで落ち着いて呼吸ができない。

「言わないとまたやるぞ。お前はいったいどこから来た？ 不吉な予言もどきの嘘をついて人を動揺させるのは趣味か？」

「嘘じゃない」

せきの合間にそれだけ言うと、アナキンは息を止めた。

「驚かないで聞いてくれ。私は数年先の未来から来た。お前やアソーカのことはもちろん、銀河がこれからどう変化していくのかもすべて知っている。別に信じなくてもいい。忘れてもいい。何ならこのまま首を絞めて殺せ。それが一番幸せだ。私にとっても」

「……それはいったいどういう、」

「どうもこうもない。残念ながら私はオビIIワン・ケノービだ。だが厳密にはお前のマスターとは違う。私はお前が知っている私ではない。数年先の私は、そもそもお前のマスターでもない」

驚きと当惑の色が彼の目に浮かんた。嘘だ、とつぶやくおずおずとした声が入ったとき、いきなり世界が弾けた。自分という存在がさらさらとした砂のようになって大気に溶けていき、肉体も存在も記憶も消えてしまう。あっという間に数万分の一のかけらになり果てながら、オビIIワンは力の限り叫んだ。待ってくれ。だかもちろん声にはならなかった。なぜ突然こんなことになるのか分からなかった。まだ来たばかりだ。何ひとつ成し遂げていない。それなのにもう終わりなのか。苦すぎる後悔だけがもうどこにもない自我を包んだ。しかし破壊は不可逆だ。すべてがもう遅い。

「おや、マスター・ケノービ」

背後から声をかけられ、オビ・ワンはぎくりと足を止めた。身を隠しながら歩いていたはずだったのに、見つかってしまったらしい。声のした方をこわごわ振り向くと、顔見知りのジェダイが悠然とその場に立っていた。

「ご無沙汰しています、マスター・ビラバ」

深々と下げていた頭をゆっくりと戻す。彼女と視線が合うと強く見返され、内心でひるむ。デパ・ビラバはアナキンが特に苦手に行っているタイプのマスターだ。規律に厳しく、若いパダワンたちにも容赦がない。

「お戻りだったのですね。存じ上げませんでした」

「急な用で一時的に戻っただけです。あなたもそうなのでしょう。評議会に帰還の連絡が届いていませんから」

「え。ええ、まあそうです。これから報告に行こうかと」

「今はだめですよ。マスター・ヨーダとマスター・ウィンドゥがスカイウォーカーを連れて最高議長のおフィスへ向かうところを見ました。しばらくは戻ってこないでしょう」

「最高議長のところには？ 何かの秘密任務ですか？」

思わずそう聞くと、彼女は少し不愉快そうに眉をしかめた。

「知らないふりはおやめなさい、ケノービ。当然、追加予算の件です。たった一度の作戦で彼と彼の大隊が予算を使い果たしたことをマスターであるあなたが知らないはずはないでしょう。ホロネットのニュースでも元老院でも大問題になっていますよ。マスター・ヨーダも頭を抱えているはずです。反対派を押し切って予算案を通した最高議長の面目をジェダイが潰したのですからね」

頭を下げながら記憶を必死に掘り起こす。そんなことがあっただろうか。アナキンは金遣いとはかく物遣いは相当荒い方に入るし、目的のためなら知人の面目など頭から吹っ飛んでしまうに違いない。だが一度の作戦で膨大な予算を使い切ってしまうほどとなると大ごとだ。

「……ということは、聖堂の外にはホロネットの記者たちが大勢待ち受けているわけですか。うかつに外に出られませんね」

「もちろん。だからあなたを呼び止めたのですよ。渦中の人物のマスターなんて記者にとってはい生け贄でしょう?」

ビラバはほんの少しだけ口角を上げて笑った。オビィワンはこの厳格なマスターが笑うところを初めて見た、かもしれない。そのとき、彼女のローブの陰に彼女の四分の三ほどの大きさの人影が隠れていることによく気づいた。

「マスター・ビラバ。もしや、後ろに控えている少年はバダワンですか?」

「ええ、そうです。ケイレブ、挨拶をなさい」

少年はおずおずと前に進み出てきて、声変わりしたばかりかと思わせる声で「こんにちは、マスター・ケノービ」と言った。どこかびくびくしたような表情の中に、アナキンとは違う方向性の負けん気を感じる。だが幼い。おそらく十三、四歳だろう。アソーカよりもさらに子供だ。

「賢そうな少年だ。マスターがついに弟子を取られたと噂は聞いておりましたが」

「情勢が落ち着いたら、と思っていたけれど、待っていてもらちが明かないですから。けど、戦争が終わってくれたらもっとじっくり教える機会を持ちたいわね」

二人とお辞儀をし合って別れ、オビⅡワンはきびすを返して裏口へと向かう。一步外に出たとたん記者に囲まれるのだけはごめんだ。部外者が知らない出口から出て、身軽に行動したい。はじめにどこへ行こうか？

アナキンとヨーダたちの後を追うなら、**114**へ。

元老院議事堂なら、**153**へ。

パドメのアパートなら、**81**へ。

デクスターのダイナーなら、**113**へ。

共和国軍の宇宙港なら、**143**へ。

聖堂に戻るなら、**106**へ。

破られた窓から壁を伝って降りていくと、ぶつかり合うフォースの残り香が色濃く漂ってきた。だが彼らはもうここにはいない。おそらくスピーダーを使って聖堂から遠く離れ、ここからは見えないところで殺し合っている。順番としてはベイダーがまずスピーダーを盗んで逃げ、それをアナキンが追いかけているという構図だろう。銀河一のパイロット同士だからさぞや見応えのあるスピーダーチェイスになっているだろうが、それをのんきに観戦することはできない。この時代の自分の言うとおり、放っておけばアナキンは侵入者を殺しかねない。それにベイダーも標的をあきらめたわけではない。もっと自分に有利な場所に移動し、過去の自分の未熟さにつけ込んで始末する気だろう。だめだ、と思った。どちらの彼も殺させるわけにはいかない。止めなければならない。それができるのはオビワンのだけだ。二人に「どちらのお前もお前だ」と言ってやれるのは、この時代の自分ではなくいまの自分だけだ。

アナキンのスピーコンをたどって追跡を続け、ようやく近づいてきたことが分かると鼓動が速くなった。そのまま進み、やがて広大な貨物倉庫が視界に入ってくる。屋根の上に二つの人影が見え始め、安堵と不安の両方に胸を締めつけられてオビワンはわずかに顔をしかめた。

明かりがないからはっきりは見えないが、二人がライトセーバーで戦っていることは明らかだった。線状の強い光が交錯し、ときおり激しくぶつかり、ときおり離れる。光刃の色はどちらも青だ。本来なら片方は赤のはずなのに。彼は自分のライトセーバーをどこにやったのだろう。なくしたの

か、落としたのか。いずれにせよ彼があの手ライトセーバーをどこかで調達したのは明らかだった。扱い慣れていないからだ。グリップが短すぎるのか、手首を回すたびに落としそうになっている。

アナキンの方は危なげがない。頭に血が上っているせいか踏み込みすぎる癖が顔を出しているが、相手がシディアスでもない限り攻撃を防ぎ切れないだろう。夜と同化した大きな人影は、アナキンに一太刀浴びせられるごとに一歩後退している。決して力では負けていないし、技術も劣っていない。むしろ体が大きいぶん有利にことを運べるはずなのに防戦一方で、下手をすると防御が間に合わずに一刀両断にされそうだ。猛烈な不安が胸を突き上げる。だがライトセーバーを持たない自分にいったい何ができるというのだろうか？

二人の間に飛び出してベイダーの前に立ちふさがるなら、80へ。

アナキンのライトセーバーを奪おうと試みるなら、138へ。

もうしばらく様子を見るなら、134へ。

142

言い訳などしても無駄だ。オビⅡワンがそうであるようにアナキンにもたいいの嘘はお見通しで、ごまかせばごまかすほどぼろが出る。かといって真実を告げるわけにもいかない。「実は私は未来から来た。タトゥーインで三年も暮らしたせいですっかりやつれてしまった」なんて馬鹿馬鹿しくてとても言えないからだ。間違いなく自分が経験したことなのに、現実味がまるでない。この

三年間は夢だったと言われた方がよほど信じられる。そこまで思考が及んだとき、むしろ頭をかきむしりたくなり、毛布を頭からかぶった。

あれが夢だと？なんて身勝手な。なんて独りよがりな。

「捕まったことをそんなに言いたくないんですか？ ものすごい顔してましたよ、マスター」

アナキンはおかしそうにそう言い、毛布の上から軽く頬をつまんできた。

「今さら恥ずかしがるようなことでもないでしょう。どうせいつものことなんだから。むしろ自力で抜け出してこられたことを褒められてもいいくらいじゃないですか？」

「からかうのはやめてくれ」

うなるようにそう答えると、アナキンは肩をすくめた。

「望みをかなえてあげてるだけです。だって、こうやって笑われたかったし早く僕の顔を見たかったんでしょ。一人で聖堂に戻ってきてまっすぐ僕の部屋に来たくらいなんだから」

「……何だって？」

147
へ。

143

途中から輸送用のシャトルに乗り、しばらく揺られていると懐かしい威容が見えてきた。共和国軍の宇宙港だ。巨大な離着床パッドが数え切れないほどあり、そのほとんどすべてにクルーザーが

停泊している。昼夜問わず物資の積み込みや修理が行われ、準備のできた船は別れも早々に銀河のかたへと飛び去っていく。

ジェダイはどこへ行くのも命令次第だから自分の船、自分の部隊という認識はない。それでも愛着は湧くもので、よく乗っていたクルーザーのキャビンや艦橋を今でも楽しく思い出す。船内でのあまり美味しくない食事や、暇つぶしのためのちょっとしたゲームや、クローン兵たちと交わした軽口も。港をあわただしく行き交っているのは様々な部隊のクロントルーパーだ。義務に忠実だがそれぞれに個性があり、自分だけの名を大事そうに抱えていた彼らのことを忘れたことはない。その彼らがいつせいにブラスターを向けて何千というジェダイを皆殺しにしたことも、この三年間で頭から消えたことは一度たりともない。風のうわさではブラスターでなく大勢に取り囲まれて素手で殴り殺されたジェダイや、逃げる途中ではぐれたパダワンをなぶり殺しにされ、弟子を助けるために飛び出てきたところを蜂の巣にされたマスターもいるという。それらは彼らのせいではないが忘れろというのは難しい。

宇宙港の喧噪を眺めていると、ウータパウのことを否応なしに思い出してしまふ。だがオビ＝ワンもおそらく殺された他のジェダイたちも、彼らに銃口を向けられたときさほどショックを受けなかったはずだ。あれだけ長く一緒に戦ってきたコーディが一斉射撃を命じたときも頭の中にあつたのは「どう生き延びるか」だけだった。彼を信じていなかったわけではないし、いつか裏切るだろうと疑っていたわけでもない。それが裏切りであれ死別であれ、別れを常に受け入れようとする

ジェダイのさがだ。たった数秒で信頼が機械的な憎悪に切り替わる光景を目の当たりにしてもそれを受け止めることしかできない。

恨まれるわけだな、と今さらながらに思った。ジェダイが思っている以上にジェダイを憎む人々が多いということをオーダーが消滅して初めて知った。衝撃というほどではないが、心の奥底に隠していた自尊心を削り取られる思いではある。

「ケノービ將軍、お体はもうよろしいのですが」

立ち尽くしてぼんやりしていたら、後ろから声をかけられた。振り向かなくても分かった。全員同じ声をしていったって分かる。

「……久しぶりだな、クーディ」

「ええ。数時間ぶりですね、將軍。しばらくお休みになると聞いていたので何の用意もありませんが、またご命令ですか？」

「まだだよ。戻ってきたばかりなのだしすぐには発てないさ。修理や補給をしないと。それに君らのパーティーもたった数時間というわけにはいかないだろう？」

眉を釣り上げながらそう言うと、クーディは声をあげて笑った。

「お見通しですね。將軍のおっしゃる通り、皆は飲みに行っています。いまごろ近年にない盛り上がりを見せているでしょう。向こうではひどい目に遭いましたから」

「そうだな」

訳知り顔で頷いてみせたがコーディの言う「向こう」や「ひどい目」とやらが何を指すのかは分からない。出会い頭に体調を心配されていたということはオビⅡワン自身も何か大変な目に遭ったのだろう。記憶を掘り起こそうとしたが心当たりがありすぎるのでやめた。

「それにしても、ここへはいつたい何のご用で？ 無理を押してまで足を運ばれるほど気になることでもありましたか」

オビⅡワンはわずかに目線を下げて押し黙った。彼に答えるべきことを考えていたからだ。

クローンの脳内に埋め込まれた抑制チップのことを話すなら、89へ。

彼と話すことは特にない。この場を立ち去って元の場所に戻るなら、128へ。

あるいはチェックポイントJとK両方に数字が記入されているなら、75へ進んでもよい。

144

もしまた彼に会えたら、こう言おうと最初から決めていた。オビⅡワンにしか言えない言葉、オビⅡワンにしか呼べない名前を口にする。畏れとともにもうひとつの名を呼ばれる者は星の数ほどいるだろうが、この広い銀河で彼をこの名で呼べる者はもう自分しかない。

オビⅡワンはそっと手をかざして両足の拘束を外し、平坦な声でこう言った。

「久しぶりだな、アナキン」

ヘルメットのせいで彼がどんな顔をしているのかは分からなかった。だが何を感じているのかは

分かった。戸惑いだ。暗黒面に身を置く者にとってのもっとも危険な感情。

「手足を縛らせて悪かった。ゆっくり話をする時間が欲しかったんだ。しかしこんなものは最初から必要なかったな」

ライトセーバーの光刃で拘束を断ち切り、彼の両腕も自由にする。

「お前がここに来ているとは思わなかった。こんなわけの分からないことに巻き込まれたのは私だけだと思っていたよ。相当悩んでから飛び込むことを決断したはずなんだが、まさか同じタイミングだったとはな。お前は知っていたのか？」

返事はない。アナキンはうつむいたまま、まるで首を差し出すかのように黒いヘルメットの頭頂部をさらけ出している。

「だが事態が急に動き出したのが昨夜だと知ったとき、そして黒幕がこの時代のお前だけでなくパルパティーン皇帝をも狙っていると気づいたとき、私もようやくこのことに思い当たった。我々は同時にこの時空に飛ばされてきたんだということに。そして、それぞれ別の場所に降り立った」

この時代のアナキンが斜め後ろからいつの間にか真横に移動してきて、口を開きたそうにしているのが分かった。疑問と驚きが膨れ上がって破裂しそうになっている。

「私は飛ばされてしばらくの間のんきに眠りこけているだけだったが、お前はすぐに精神的に活動を始めたようだな。未来を知っているという強みを最大限に生かし、裏で動いてパルパティーンの権勢を削ぐとした。彼が将来自分に及ぼす影響力を弱めるために」

次に立ち止まったら口を挟むぞ、と言いたげなアナキンを一瞥し、ゆっくり息継ぎをする。

「お前の行動は迅速だった。ここに飛ばされてすぐに現状を把握し、道場で訓練用のライトセーバーを手に入れた。しかし私のように聖堂でぐずぐずせず自分の旗艦へと急ぎ、見張りのトルーパーを穩便に排除してこの時代の自分がどこで何をしているのかの情報を手に入れた。そしてその場ですばやく作戦を練り、すぐに担当官のオフィスへ向かってデータを改竄した。計算違いだったのは、官吏が遅くまでオフィスに居残っていたことだ。だから彼を殺さざるをえなかった。ああ……、いや、殺すことにためらいなどなかっただろう。ただ彼が邪魔だったから殺したんだ」

「その通りだ」
初めて彼が口を開いた。その声は後ろにいるアナキンのものとはまるで違っていた。ほとんどが発声器を通した音で、彼の声帯が致命的に損傷していることは明らかだった。

「そのわりには501大隊の見張り二人を殺さなかったようだな」

「奴らに騒がれると困るからだ」

「現場に残っていたフォースからは、どこかの誰かの迷いと苦しみが伝わってきたよ。まあ、それはいい。お前がここに来てたった一晩でパルパティーンとこの時代のお前の間には埋められない溝が掘られ、パルパティーン一色だった元老院では最高議長の不信任案が提出される流れにまでなった。見事だよ。謀略と奸計と不信の跋扈する世界で三年も揉まれただけある」

彼はこれを褒め言葉とは受け取っていないいらしかった。不満げに黙ったままうなだれている。し

かし皮肉を言ったつもりはなかった。曲がりなりにも彼は権謀術数の網が張り巡らされた政治の世界をうまく泳いで生き抜いてきたのだ。あのアナキンが。本音がすぐに顔と態度に出るから交渉ごとにもまるで向かなかったアナキンが。

「この時代の自分とジェダイオーダーを巻き添えにしたとはいえ、バルパティーンに大きなダメージを与えたことは事実だ。彼が元の力を取り戻すにはしばらくかかるだろう。あるいはもう戻れないかもしれない。さらに世論に働きかけ、ドゥークーと秘密裏に手を結べば彼を永遠に葬り去ることも可能だからな。だがもしそれが実現したら、その後どうするつもりだったんだ？ お前が彼に成り代わるとでも？」

「当然だ」

絞り出すようなその声は、発声器によって色を消されていた。

「その未熟者とお前をまとめて殺せば私のマスターをはるかに凌ぐ力が入る。そうなれば手強いのはシスとしての奴ではなく、『銀河最大の権力者』というもうひとつの顔だけだ。だが民主主義はもろい。最高議長の権勢など、針の一突きで崩れ去る」

頷くことはできなかった。その計画は完璧だと思ったし、実現する可能性も非常に高かった。あと二日もあればバルパティーンから完全に力を奪うことができるだろうし、ここで昔の自分を殺せば彼がシディアスに成り代わることもじゅうぶんできただろう。だがそれは、とても納得できるような答えではないと思った。

「で、パルパティーンの代わりに力を手に入れたらどうする気だ？」

「まずジェダイを滅ぼし、元老院を破壊する」

「その後は？」

「……私の思い通りに銀河を支配するだけだ！ なぜ分かり切ったことを聞く？ まさか、私にできないとも思っているのか？」

オビⅡワンは、アナキンが激昂したときの美しい顔が好きだった。怒ると目と眉がつり上がり、獲物を捕らえる寸前の肉食獣のように頬が輝く。もちろんそれをうっかり口にしてしまったことなどない。ヘルメットに隠されているのにまるでその表情が見えるようだ、なんて言うつもりもない。「できないとは思っていないよ。きつとすぐにその通りになる。だがお前の支配する帝国は驚くほど短命だろうな。三年もてば万々歳だ。皇帝の椅子に座ったとたん、為政者としてのパルパティーンとの格の違いに愕然とするだろうさ」

「挑発しようとしても無駄だぞ」

ヘルメットの奥からかすかな歯ぎしりの音が聞こえてきた。手元にライトセーバーがあれば彼はすぐにでも襲いかかってきただろう。丸腰ではオビⅡワンに勝てないと分かっているからじっとしているだけだ。成長したな、としみじみ思った。あのときは勝てる見込みがなくてもオビⅡワンの懐に飛び込んできた。そして手足を斬り落とされ、焼け焦げて死にかけた。その教訓が身にしみているのだろうか。それとも二十年近く経ってやっと自制心が身についたのか。

「ふむ、すさまじい殺気だな。そんなに私を殺したいか？」

「ライトセーバーさえあれば二度とその口を開かせない」

「お前にしては出来のいい冗談だな。笑えるよ。だが何度やっても私の勝ちなんだ。私は何度でもお前の手足を斬り落とす。そうして次は火山の火口に放り込む。二度と蘇らないようにな」

「だったら私のライトセーバーを寄越せ！　口だけでなく本当にやってみろ、この老人め！」

アナキンが勢いよく立ち上がると、ついに耐えきれなくなったのか隣で大人しくしていたこの時代のアナキンが腕を取ってきつくつかんできた。少しづつ事態を理解し始めたらしく、顔から血の気が失せ大きな目が見開かれている。オビ＝ワンは「心配するな」と彼に向かってささやき、そっと体を押しのけた。

「……本当に大丈夫なんでしょうね？」

「大丈夫だよ。私を信頼して、そこで見ていなさい。私はお前のマスターだ。いや、お前、たち、の、か」彼の腕をとんと叩き、ふたたびアナキンと向き合う。大丈夫だ、と自分にも言い聞かせる。きつとうまくやれる。今度こそ。

155へ。

145

特にあてはなかったが、何となく中庭に向かうことにした。パダワンだったころからよく中庭に

来ていた。たいていは愚かな失敗をして落ち込んでいて誰にも会いたくないときだが、自分が嫌いになりそうなきにもここに座って瞑想をした。そして考えがまとまったころはかったようにクワイⅡガンが現れ、「腹が減ったろう」と言って食事に誘ってくれる。

毎回あまりにタイミングがいいから、彼はもしかしたら魔法使いなんじゃないかと何度か考えたものだ。フォースに熟達すれば人の心を読める魔法が使えるのだ、と。だがマスター稼業を一通りやった今なら分かる。彼は物陰からずっと見ていたのだ。オビⅡワンの顔色の変化やオビⅡワンを取り巻くフォースの様子からどの程度落ち込みから立ち直ったかを推測し、ここぞというときに姿を現した。種明かしをすれば簡単だが、分かっているも常人にはできないものだ。少なくともオビⅡワンには無理だった。アナキンが一番眉間のしわを深くしているときにわざわざ出て行って、無理に話を聞き出そうとして嫌がられた。アナキンはどうだろう。アソーカが一人で立ち直るのをじっと待っていてやれるマスターだろうか。

幸いなことに誰もいなかったので堂々とベンチに座り、あごひげを撫でながらぼんやりと中庭を眺める。そよ風が吹き、木々がざわめき、鳥が木の実をついばみ、虫たちが花と花の間をせわしく行き交う。そして遠くに見えるホロ看板にはどぎつい色合いの商品広告が映し出され、繁華街からは笑い声と音楽が聞こえてくる。いかにも日常、といった光景だ。だがこの星の平和と繁栄はコアワールドの外で今も絶え間なく流されている血を吸って命を繋いでいるにすぎない。それがなくなれば飢え死んでしまう。戦争が終わるちようどその日に平和が死ぬ。それをこの目で見たのは自

分だけだ。

どうにかしなければ、とは思う。しかし部外者の身で何ができるだろう。ヨードやメイスに事情を話し、パルパティーン最高議長がシスの暗黒卿ダース・シディアスであることを知らせ、皆で彼の企てを止めるべきだろうか。あるいはクローン兵たちの脳内に埋め込まれた制御チップをひそかに摘出し、やがて来るオーダー66に備えるべきだろうか。いっそ政治家に転身し、元老院に大きな派閥を作って政治の力でパルパティーンを追い落とすべきか。そんなことよりもアナキンを奪わないようにするべきだ。説得してオーダーを離脱させ、どこかに連れ去り、シディアスの手の届かない場所でパドメとともに暮らさせる。そしてルークとレイアが生まれ、二人は命をおびやかされることなく幸せに一生を終える。それ以上に幸福に満たされていて、そして実現不可能なハッピーエンドはきつとない。

大きく息を吸い込み、そしてまた吐く。運命は大河だ。さまざまな要素が混じり合って大きな流れになっていく。銀河の運命を変えるのはそんなに簡単なことではない。それにオビィワンはフォースに選ばれた者ではないし、特別な能力を持ち合わせてもいない。いつも振り回されてばかりの、ごく普通のマスターだ。たった一人で何ができる？ 味方もなく、世界を変える力もない。せめてお前がいてくれたら、と小さくつぶやく。自分がどれほど無力でも、アナキンと二人でなら何でもできる。二人が一緒ならどんな運命でも変えられる。ああ、そうだ。二人なら。

オビィワンは反射的に目を閉じ、フォースとの繋がりを求め始めた。彼への執着を断つためだ。

消滅を覚悟し、時空を超えてやってきてまで、こんな風に瞑想をするはめになるとは思わなかった。しばらくして心が鎮まると、少し離れたところから話し声が聞こえてきた。誰かがやってきたのだ。

チエックポイントKに数字が記入されているなら、107へ。

空欄のままなら、125へ。

146

自分を尾行する、というのは奇妙な感覚ではあるが、オビⅡワンはこの時代の自分のあとをつけることにした。自分のことだから行き先は何となく分かる。朝起きて部屋から出て行ったなら、まずは道場だ。いつもライトセーバーを振るって一汗かいてから活動していた。アナキンがいるなら相手になってもらうが、いないときはそばにいた誰かか、あるいは一人だ。どうも一人である可能性が高いような気がする。

ターボリフトを乗り継いで道場に到着すると、案の定自分が扉を開けて中に入っていくところだった。扉が閉まってから耳をつけ、中の様子を探る。しかし不規則な足音とライトセーバーの音くらいしか聞こえない。

オビⅡワンはああ、と息を吐いてその場に座り込んだ。聖堂の外、いやこの道場の外でもさまざまなことが起こっているだろうに、何も知らずのんきにライトセーバーを振り回している自分が情けなくてならない。だが出てくるころには否応なしに大波に吞まれているだろう。あわてている

自分を想像するとさらに情けなかった。

154へ。

147

思わず毛布から顔を出し、眉をしかめてアナキンを見た。

「こっちのセリフですよ。気づかなかった、みたいな反応やめてください。わざとでしょう？ しかも裸でベッドに入ってきてそのまま朝まで寝るなんてひどいじゃないですか。起こしてくれればいいのに」

「裸でベッドに入ってきた？ 私がか？」

「自分が裸か裸じゃないかくらい分からないんですか？」

ほら、と言いながらアナキンは毛布をめくり、冷たい空気が入り込んできたところで手を止めた。

「でも全部出さないであげます。あなたの元パダワンはあなたと違って思いやりがありますからね」

「いつの話だ？」

「あなたが裸で僕のベッドに入ってきたのが、ですか？」

毛布を戻しながら大きく頷くと、彼はまたび首をかしげた。

「さあ。正確な時間は分かりません。明け方、目が覚めたら裸のマスターが隣にいました。絶対誘ってと思ったのにいつまでも起きないから何もできませんでしたよ、まったく」

「お前が眠るときは一人だったんだな？」

「もちろんです。僕だって遅くに帰ってきたばかりだったし、昨日は何もしないで寝ました。マスターが聖堂に帰ってきてくることすら知りません」

はああ、とため息をつき、仰向けになったまま頭を抱えた。どうして、よりによって、こんなところにこんな状態で飛び込むことになったのだろう。身も心も原子レベルにまで分解されてこの宇宙の塵になり果てたり、恒星のコアにジャンプして即死したり、誰も自分を覚えていない時代にたどり着いて死ぬまで自分の選択を悔やむはめになったりするくらいなら、当然覚悟していた。何しろ得体の知れない超時空に生身で飛び込むのだ。何が起こってもおかしくない。だがこんなことが起こると思わなかった。覚悟もしていなかった。一番戻りたくて一番戻りたくない時代に帰り、一番会いたくて一番会いたくない人物に会い、一番裸を見せたのに今は一番見られたくない相手のベッドに裸で入り込むなんて。裸云々はどうでもいいが、この時代のアナキンと顔を突き合わせ、この時代の自分として生きなければならぬのは正直言っただけが重い。恒星に飛び込んで焼け死ぬ方がましなくらいだ。

「何だか本気でショック受けてるって顔してますね」

頭を抱えたまま動かないオビワンを見て、アナキンはほんの少しいぶかしげな声でそう聞いた。
「当然だ」

「もしかして本当に覚えてなかったんですか？ 泥酔してたとか？」

「まあ、そうかもしれないな」

正体をなくすまで酒を飲んだことはないはずだが、未来からやってきたなどという世迷い言よりはずっと通りがいい。アナキン以外の誰かに何か聞かれてもそう言おう、と心に決める。

「なーんだ。だったら誘ってくれたわけじゃないんですね」

「残念ながらそうだ」

「まじめに答えないでくださいよ。悲しくなるから。でもまあ、僕の部屋に来てくれてよかった、かな」隣に寝そべっているアナキンの大きな手がひげを軽く引っ張り、髪のを束を引っ張った。

「だって、マスターが僕以外の人のベッドに裸で潜り込んでたらちょっととした事件ですからね」

『『ちょっとした』どころじゃないだろう。犯罪だ。最悪オーダー追放だぞ』

「他人事みたいに言っていないでちゃんと反省してください。ところで今回の監禁生活はずいぶん過酷だったみたいですね？ 髪にもひげにも白髪ができてる。迷惑なほど頑丈なマスターをここまで

変えるなんて、相手は銀河一骨のある奴だったんだな。僕じゃとても無理ですよ」

反射的にアナキンの手を振り払い、毛布を頭までかぶる。無性に腹が立った。「僕じゃとても無理ですよ」？ いったい誰のせいだと思ってるんだ。やつれ果てたのも、白髪が増えたのも、未来永劫変えられることなどないと思っていた自分がこれほど変わってしまったのも、すべてお前のせいだ。お前がオーダーの皆に、パドメに、子供たちに、銀河に、私にあんなことを……。

そこまで考えたとき、全身の力が抜けた。このときのアナキンは何も知らない。純粋に自分の能

力が他人のためになると信じ、他人を助けることに心から喜びを感じていた。ずっとそうであるはずだった。なのにそうならなかったのはオビⅡワンの過ちのせいだ。アナキンを責める資格はない。

「ちょっと、そんなにシヨック受けないでくださいよ。すぐ戻りますから、たぶん」

「たぶん、か。そうかもしれないな」

「ええ、そうです。そうに決まってるんです」

毛布の上から鼻をつままれ、たまらずに外に出る。

「やめてくれ、窒息する」

「少しは元気出しましたか？」

「出るわけないだろう。こんないい加減な慰め方で」

「慰めてほしいなら最初から素直にそう言うてください」

アナキンのふてくされた顔がまるで作り物みたいに思えた。記憶と幻覚をこねて作った人形のようだった。あれだけ毎日眺めていた顔なのに、いざ目の当たりにしてみるとまるで現実感がなかった。胸が痛くなるほど懐かしくて、記憶の通りかそれ以上に完璧な造形で、ときどきうんざりするほど子供っぽくて浅はかだった。これが現実のわけがない。だがどんな結果になっても前に進むと決めたのだ。受け止め、受け入れ、だが幻想に染まりきらずに冷静に行動しなければ。オビⅡワンは彼の顔を両手で包み、鼻の頭に軽く口づけた。

「……もしかして、そういう慰め方をお望みですか？」

彼の中に小さな火がついたのが見えるようだった。

正体を見抜かれるわけにはいかない。拒絶し、マスターらしくアナキンを叱るなら、87へ。
もう少しやんわりと断るなら、84へ。

誘いに乗ってみるなら、95へ。

148

「それは、あー……」

間抜けに語尾を伸ばしたまま、オビⅡワンはあごに手を当ててどう言い逃れようかを考え始めた。彼女は自分のマスターであるアナキンを探している。本人を差し出せばとりあえずアソーカは納得するだろう。しかもアナキンの居場所なら分かっている。評議会の塔だ。さっき別れ際に「一晩中評議会からの呼び出しを無視していた」などと言っていたし、おそらくただでは解放されないだろう。評議会の間の中央に立たされて長々しい説教をされたり嫌味を言われたり裁定が出るまで待たされたりしているに違いない。

だがそうなるとひとつ疑問が浮かんでくる。評議会の間で何やら重要そうな聴聞が行われているというのに、評議会の一員であるオビⅡワン自身はいったい何をしているのか、ということだ。こんなときなぜだか弟子の服を着て廊下をうろうろしているのはいかにもおかしい。オビⅡワンはこっそりと肩を落とした。何を言おうと結局最初の問題に立ち返らないとならないのだ。

「……非常に言いにくいことなのだが、実はこれにはわけがある」

「わけって？」

彼女の語気の強さにひるみそうになり、咳払いでごまかす。

「私はここ数日とある殺し屋を追っていたんだが、ついに昨日追いつめたんだ。だが戦った場所がよくなってね。水たまりにはまっただけで濡れになってアナキンの服を借りたというわけだ」

「……」

あきれた、と言いたげな視線を全身に感じた。彼女に見損なわれたことは間違いない。確かにあまり信憑性のない言い逃れではあった。それは認めよう。だが三年ぶりで腕がなまっている上に即興ではこの程度が限界だ。

「分かりました。何が何でも言いたくないってことだけはすぐ分かりました」

「言いたくないわけではないがね」

「はいはい。で、私のマスターは？」

「評議会の間だよ。おそらく何かの聴聞に参加している」

「え？　なのはどうして、」

オビィワンは自分の唇に指を当て、声をひそめてこう付け足した。

「会議が退屈だからさぼっているんだ。私とここで会ったことは皆に黙っていてくれ」

楽しげに笑うアソーカを見て少し後悔した。この時代のオビィワンは評議会を「さぼる」ことな

ど考えたこともなかった。ときどき退屈になりはしたし彼らの考えに納得がいけないことも多々あったが、それでもできる限り自分の責務を果たそうとしていた。単なる嘘とはいえ、今の自分があのころの努力を無にしてしまうような気がした。とっさに胸に手をやる。オビⅡワンは「努力」という浅ましい言葉を心の中で呑み込んだ。

努力？ あれは本当に必要な努力だったのか？ 評議会員としての責務とはいったい何だったのだ。評議会の決定に黙って頷くたびにクワイⅡガンのことを思い出した。彼は自分の考えを押し通すことに少しも後ろめたさを抱かなかった。ヨードやメイスを前にして一步も引かず、悪評が立つことを気にもしなかった。オビⅡワンはそんな師とは違う。評議会の一員でありながらアソーカを、そしてアナキンを守ってやれなかった。本当に自分が正しいのかいつも自信が持てなかったからだ。「オビⅡワン？ どうしたんですか」

気がつくとき、アソーカが心配そうにのぞき込んでいた。あわてて手を戻し、にやりと笑ってみせる。「ああ、すまない。良心の呵責に耐えかねていたんだ」

「今からでも行けば一人で立たされてるマスターに恨まれずに済むかもしれませんよ。ひとりぼっちにすると後でねちねちうるさいんだから」

「そうだな。考えてみるよ」

アソーカに礼を言っただけ、悠然とリフトに乗る。一人になるとほっとした。三年間も一人で暮らしてきたせい、一人が当たり前になってしまっている。だがアナキンはそうではないのだと言

う。「ひとりぼっちにするとうるさいんだから」。それは今でもそうだろうか。彼をひとりぼっちにしたのはオビⅡワンだ。あんな場所に一人にした。手足を斬り、炎に吞まれたアナキンを一人で置いていった。あのとき彼をひとりぼっちにしなければ、もっと違う未来があったのだろうか。

チエックポイント「I・アソーカ」に0と記入し、97へ。

149

もし真実を打ち明けるなら、自分が一番かもしれない。しかしあまり気は進まない。オビⅡワンは誰よりも自分が頑固だということを知っているからだ。もしこの時代の自分の前に姿を現したら事件のことよりも自分がもう一人いることに対する驚愕と疑問と混乱が先に立ってしまうだろう。自分が話し相手として適当なのかも分らない。オビⅡワン・ケノービはアナキンのこととなると頭に血が上るのに思い切った手を打てない男なのだ。アナキンのことで右往左往している自分を客観的に観察するはめになるのもできれば避けたい。自分のことだけにうんざりするに違いないし、何より他人にこんな風に見られていたのだと思うと恥ずかしくなるに決まっている。

そんなことをぐるぐる考えながら自室の前に立ったとき、よし、やめよう、と心に決めた。今後も彼に会うことは避けることにする。それに、中からは何の気配も伝わってこない。おそらく留守にしているのだろう。評議会の間に詰めているのかもしれないし、事態の収拾のために走り回っているのかもしれない。いずれにせよちょうどいい。自分との対話がしたければ頭の中で行えばいい

いのだ。

121へ。

150

大急ぎで聖堂に戻り、ふたたび考える。ベイダーはどこを襲う気だろうか？

元老院だと思ふなら、101へ。

パルパティーンのおフィスだと思ふなら、94へ。

パドメのアパートだと思ふなら、88へ。

宇宙港だと思ふなら、127へ。

ここジェダイ聖堂だと思ふなら、137へ。

151

久しぶりに見るアソーカは記憶よりもずっと幼かった。戦争が彼女をずいぶん大人びて見せていただけで、実際は相当に無理をさせていたのだろう。戦争さえなければもっとマスターや大人たちに甘えたかっただろうし、たくさん子供じみたつまらない行動をして叱られたり落ち込んだりする経験をすべきだった。なのにアソーカはそれらをすべてすっ飛ばし、三段飛ばしで駆け上がって大人になってしまった。

とはいえオビⅡワンは彼女のその後を知らない。皇帝の手の届かないところで幸せに暮らしているかも知れないし、ジェダイ狩りの標的になってとくに殺されたかもしれない。いずれにせよ何もしてやらなかったオビⅡワンには彼女を心配する資格はない。もし生きて再会できたら、互いに少しは救いになっただろうか。それとも救いようのない泥沼に足を突っ込むはめになっただろうか。オビⅡワンはあわてて首を振り、物思いから浮上した。目の前にいるアソーカがいぶかしげな視線を送ってきている。

「何か困ったことでもあるのかな？ どうやら君は自分のマスターを探しているようだが」

「そうです。朝一番で道場に来い、絶対寝坊するなよって言われたから行ったのにずっと来なくて」
「相変わらず仕方ない奴だな。アナキンが時間にルーズなのは昔からなんだ。顔を合わせたら注意しておくよ」

アナキンが遅刻した原因は絶対間違はなく自分にあるのだが何も言わなかった。オビⅡワンが裸でベッドに入ってきたりしなければ時間どおり起きられただろうし支度もすぐにできただろう。しかしこんなことはアソーカには言えない。しかしこんなことだからこそ、勘のいい彼女に隠し通すことはできなかったらしい。

「……マスター・オビⅡワン、こういうときすっごく早口ですよね」

「そ、そうかな？ そうでもないと思うがな」

「そうです。声も高くなるし。マスターの服を着てるってことは今朝一緒にいたんでしょ？ 何か

あったなら教えてください」

何も答えずにこのまま去るなら、 93 へ。

適当にごまかすなら、 148 へ。

全面的にアナキンのせいにするなら、 118 へ。

152

覚悟を決め、息をつき、適当なところでエアタクシーを降りて目もくらむほどの高さにあるオフィスの壁に取りつく。そしてフリークライミングで上まで登る。こんな高さから落ちればもちろん死ぬが、その手の恐怖はなかった。何より恐ろしいのはこの壁の向こうにいるシスの暗黒卿に正体を暴かれることだ。彼はただの穏やかな老人ではない。十数年にわたって銀河のすべての民をあざむき続け、アナキンを思うがままに操り、ヨーダさえ打ち倒した存在だ。自分一人で相手ができるはずもない。彼が最高議長としての仮面を脱ぎ捨て、牙をむき出しにすれば、このオフィスの中にいるヨーダとメイスとアナキンを加えても勝つことは難しいだろう。心が重い。手足も重い。自分には何もできない気がする。どうやっても倒せない巨大な敵を知ってしまうと、自分の力どころか善性を信じることもできなくなる。

落ち着け、と自分に言い聞かせる。ここでシディアスを倒す必要はないのだ。彼はまだ尻尾を出していない。そんな状態でこちらから仕掛ければ奴の思うつぼだ。怒りも絶望も忘れ、冷静に観察

せねば。主題はパルパティーンでなく、アナキンなのだ。

強い風が吹きつける空の中、耳を冷たい壁につけ、フォースの助けを借りながら中の音を聞く。一般的には盗み聞きと称される行為だがとがめる者はいない。オフィスの中からは案の定、アナキンの怒りのままに抗弁している声が聞こえてきた。

「僕は無関係です！ だいたいあの作戦は三日で終わったんだ。たった三日でこの膨大な追加予算を使い切れるわけがないでしょう？」

「だがこれらの請求は君の名ですべて通っているのだぞ、スカイウォーカー將軍。内訳を見ると現地の兵や賞金稼ぎを大量に雇っていたり、交渉のために大金を用意したり、分離主義側の將軍を寝返らせるための工作に使ったりと、たった三日の作戦にしてはバラエティに富んでいるようだが」

「すべて実際にしたことです。でも共和国軍に要求した額は何桁も違う。財務官だって覚えていません。彼はどこへ消えたんですか？」

「死んだよ。今朝、ライトセーバーと思われる武器で袈裟がけに斬られて息絶えていた。犯人は警備隊が目下捜索中だ」

全員が息を呑む音が聞こえるようだった。まずい展開だ。

「彼のことはよからう。非常に疑わしい死に方ではあるが、証言ができないことには変わらない。それよりも予算のことだ。君の話を聞けば、君が要求した額と実際に手にした額には相当な開きがあるということになる。余ったクレジットはどこに消えた？ 作戦の間、何か報告していないこと

があるのでは？ 君自身がどこかに隠しているのか、あるいは……ドゥークー伯爵の手元にあるという可能性もある。もちろん、君を信じないわけではないのだがね」

だん、とデスクを叩く音が聞こえた。アナキンの怒気が壁を突き破りそうな勢いで伝播してくる。「いいですか、最高議長。僕は作戦の一部始終をすべてリアルタイムで評議会に報告しています。通信記録も何もかも聖堂に残っています。その怪しげな帳簿と突き合わせていただければ出入金の記録自体が改竄されているとすぐに分かる。ドゥークーにクレジットを渡したなんて疑いは言語道断です。まずは僕をはめた奴を探すところから始めるべきなんだ！」

「落ち着きたまえ。君の怒りはもつともだ。それが本当だとすれば、な」

「当然本当です。議論するまでもないことだ」

「確かに、こうして私と君が話していても水掛け論にしかならないようだ。時間の無駄とも言える」壁越しだというのに鳥肌が立った。演技ではなく、本気で苛立っている声だ。パルパティーンは疑っている。怒っている。最初はアナキンの不安を駆り立てるための茶番かと思ったが、案外本当に彼を疑っているのかもしれない。

「そろそろあなたがジェダイ評議会のご意見をお聞きしましょうか、マスター・ヨーダ？ スカイウォーカー將軍の嫌疑についてご意見は？」

間を置かずにあふむ、とうなる声が聞こえてきた。ヨーダのものだ。

「わしらはスカイウォーカーの話信じざるを得ない立場におる。何しろじかに報告を受けていた

者の一人じゃ。評議會は大隊の動きも交渉の流れも把握しとった。ひとつ口を挟むなら、評議會への報告はこやつでなくパダワンがしたことじゃが」

「彼のパダワンと501大隊が口裏を合わせているという可能性は？」

「ない、とは言えん」

「正直ですな。それこそがジェダイの美德だ」

パルパティーンの声にはさらなる苦々しさが加わっていた。

「じゃがジェダイが使い切れんほどの大金をくすねてどうする？ この若造が何を欲しがる？ 皆の信頼を捨てて共和国のクレジットを持ち逃げし、ドゥークーと手を組むほどのしたたかさはこやつにはない」

「それは間違いありません」

ずっと黙っていたメイスが重々しくそう言い、同時にかすかな衣擦れの音がした。

「残念ながらスカイウォーカーに嫌疑をかけるのは的外れでしょうな。それでも疑うというなら彼の行動や身边を徹底的に調べさせますが」

「それはスカイウォーカー将軍が果たすべき当然の義務です。最高議長の私とて市民であり納税者の一人だ。嫌疑が晴れるまで彼の拘置を元老院に要請せざるを得ませんぞ」

「拘置だって？」

その声は怒りを通り越して悲しげにも聞こえた。落ち着け、と壁の向こうのアナキンに呼びかけ

る。我を忘れたままではパルパティーンの思うがままだ。

「いま少し待たれよ、最高議長。拘置などせずとも聖堂における限りどこにも逃げられはせん。それに聖堂にはマスター・ケノービがおる。もしこやつが悪事を働こうとなどすればマスターが黙ってはおらんよ。……まあしばらく捕まっておったようではろぼろじゃが弟子に遅れは取らんじゃろ」

「悪事など働きません。僕はすべてをジェダイオーダーと共和国に捧げてきたつもりだ」

限界まで膨らんで破裂しそうなほどの悔しさをフォースから感じた。だが錯乱しないように抑えてはいる。戻ったら話を聞いてやらねば、と反射的に思い、急いで首を横に振った。それはこの時代のオビ・ワン役目だ。自分ではない。

「ではあなたがたにお任せしますかな。しかし調査は元老院が主導しますぞ」

「ご自由に。しかし情報は共有してもらわねば困ります」

メイスの厳しい声にかぶさるように、パルパティーンが「もちろん」と答える。

「何か分かったらお知らせしましょう。それまで將軍の監視を抜きなく頼みます」

二人が頷く姿が見えるようだった。だめだ、と心の中で強く思った。奴に調査を任せてはためだ。パルパティーンは一度疑った者をふたたび使うことはない。彼がいまから真っ先に打つ手は、調査結果を偽造してでもアナキンの地位と名声を奪うことだ。オビ・ワンは氷のようなデュラクリートに顔をくつつけた。どうにかしなければ。

もしかしたらこの数限りない選択肢の先に「ドゥークーがパルパティーンの真意を知り、アナキ

ンと手を組んで自分の師を打倒することを決断する」という可能性があるのかもしれない。だがドゥークーであれアナキンであれ、追加予算を一度に使い切るなどという馬鹿げた行動をするほど愚かではない。パルパティーンもそのくらいは分かっているだろう。が、別の可能性が出てこない限りは彼を疑わざるを得ない。疑惑が濃くなればアナキンが二度とライトセーバーを振るえないようにするところまで一気にやるかもしれない。

それを食い止めるためにすべきことは、その「別の可能性」とやらを一刻も早く見つけることだ。本人が言っている通り、おそらくアナキンははめられた。それが誰なのかは分からないし、目的も分からない。この時代の人々の三年先を先取りしているオビ・ワンにさえ見当がつかない。だが部外者であることのメリットは、しがらみを気にせず自由に動けることだ。しかしパルパティーンに先を越される前に動かなければならない。

チェックポイント「K・パルパティーン」に0と記入し、128へ。

153

特徴的なドーム型の建物が目に入ると少し緊張した。この議事堂がいまどうなっているかは知らない。元老院はまだ存在しているはずだから建物自体は残っているだろうが、かつてのような面影はないだろう。活気があり、よくも悪くも猥雑で、ホロネットの記者たちが遠慮なく周りを取り囲み、古いスピーカーを改造したジューススタンドが彗星のごとく現れては警備ドロイドに追いつ

れ、抗議活動を行う市民グループが入れ替わり立ち替わり姿を見せる。銀河共和国が銀河帝国になつたいま、とても生き残ってはいないだろうと思う光景だ。やたらに懐かしむほど愛着はないが、すべて失われたと思うと残念でならない。

オビⅡワンはさっさとコンコースから離れ、顔を隠しながら裏口に向けて足早に歩いていった。この時代のオビⅡワンは有名人だから、正面から入れば見とがめられる。かといって議員や職員が行き交うプラットフォームも危険だ。誰と顔を合わせるか分かったものではない。だが物資搬入用の裏口から入って数分と経たないうちに、真正面から顔見知りか歩いてくるのが見えた。

チエックポイントKに数字が記入されているなら、**123**へ。

空欄のままなら、**112**へ。

154

これからどこへ向かうべきだろう？

道場に顔を出そうと思うなら、**124**へ。

中庭に寄るなら、**145**へ。

聖堂の外に出てみるなら、**122**へ。

評議会の間へ行ってみるなら、**90**へ。

しかし奇妙な光景ではあった。オビⅡワンに挑発されて激しく怒り狂っているくせに彼は腕ずくでライトセーバーを奪い取ろうとはしない。ことさらに距離を詰めようとはしないし、かといって背中を向けて逃げようもしない。

オビⅡワンはあごに手を当て、「ううむ」とうなった。

「せっかく顔を合わせたんだ。ここで決着をつけるか。お互い自分のライトセーバーではないの？ どうにも締まらないが」

「上等だ」

「ではお前は聖堂から盗んできたこの小さいライトセーバーで、私はこの時代のお前のものを借りるとしよう。何なら短くしてやってもいいぞ。道場に置いてあるライトセーバーはどれも長さを調節できないからな」

にやりと笑って子供用のライトセーバーを差し出すと、アナキンはそれに手を伸ばしかけた。手は空中で止まっている。

「どうした？ 私が憎いんだろう。だったら戦え。お前の負けと決まった勝負でも、またしても立ち向かわず逃げ続ければお前はさらに弱くなるぞ」

「何だと？ シスでもないくせに、いったい何を知ってる」

「暗黒面の力のことは知らないさ。だがお前のことは何でも知っているんだ。私はお前のマスター

だからな」

アナキンはふてくされたように手を引つ込め、横を向いてうなだれた。

「……あんたが憎い」

「そうだろうな」

「顔も見たくなかった。今からでもあんたをムスタファアの溶岩に埋めてやりたい」

「そうか。簡単に焼け死にそうになくてすまないな」

マスクから漏れ出る小さな吐息が昔の彼を思わせた。もしかしたら笑い声かとも思ったが、それを意を決して口を開く前の強い呼吸音だったことに気づいたのは、その一瞬後のことだった。

「なぜあのとき殺さなかった？」

その声はきつと小さかったのだろう。ささやき声だったのだろう。どうしても聞きたくて、なかに口にするべきではなくて、答えを知るべきでもなくて、それでも彼にとっては何かなければならなかったことなのだと分かる声色であるはずだった。だが実際に出てきたのは機械でできた人工声帯を通してきた平坦な声で、彼が込めた感情を何ひとつ伝えてはこなかった。

「殺したよ。あのとき完膚なきまでにお前を殺した」

「嘘だ。本当にそうしていたら私はここにいない」

「お前の死を願った私より、それでも生きたいと願うお前の方が強かったというだけのことだ。何もかも失っても生きたかったんだろう？ 皆に拒絶されても、全銀河から呪われても、もう二度と

誰かに愛されなくても。そのことだけは誇るべきだ。お前は強かった。私の想像をはるかに超えていた。少なくともお前の命だけは、怒りと悲しみと苦痛を寄せつけなかった」

馬鹿馬鹿しい、と吐き捨てる声が聞こえた。そうかもしれない。シディアスが間に合ったのはたまたまなのかもしれない。生きてたくなかったのに生を誇れとは何だ、と思うかもしれない。オビⅡワンもベイダーの存在を知ったときは愕然とした。「なぜ生きているんだ、あのとき殺しておけばよかった」と口に出してつぶやいた。だがどんな人物であれ死んだら物語はそこで終わりだ。どんなに幸福でも、どんなに悲惨でも、死の瞬間に運命の輪が閉じられてしまう。あんな風にシャトルと地下室が繋がることもなく、互いを知ることもなく、勝手に期待を抱くこともなく、こんなわけの分からない場所に飛ばされてくることもなく、そしてふたたび顔を合わせることもなかっただろう。これはすべて、彼が生きていたからこそ続いた物語なのだ。

「オビⅡワン、あんたが憎い」

「分かっているよ」

「あんたが生きていることが、何より憎い」

「分かっているから、もっと言いなさい、ほら」

「あんたが憎い。殺してやりたい」

「ああ」

「私を殺さないなら死んでくれ。ムスタファアの溶岩に飛び込んでくれ。一刻も早く」

「ああ」

「あなたが憎いんだ、オビィワン。憎い。憎くて仕方ない」

「それしかないのか？ ボキャブラリーが貧困だな」

「あなたを愛してた」

アナキンはついに膝を折り、屋根の上に膝立ちになった。嗚咽に似た不規則な呼吸がマスクごしにはっきりと聞こえた。

「愛していたんだ。愛してた。なのにあなたが思い通りにならないのが我慢ならなかった。何度寝ても愛してると言ってくれないし、私の気持ちを知ってるくせにすぐに一人で死のうとする」

金属で補強しているはずの骨格が、小さく細く、頼りなく見えた。

「あなたにとって一番大切なのは常にジェダイらしくあることで、誰かのことを特別に愛してるわけじゃない。だから私のことで心乱されることも、不安になることもない。そのことを認めるのがつらくて、どうやったら思い知らせてやれるかいつも考えていた。そんなことをしても愛されるわけじゃないのに」

まるで糸がほどけていくようだった。ヘルメットで表情は見えないのに、きつく縛られていたものが解放されていく様子がはっきりと見て取れた。彼自身が自由になり、同時にもう弱くなる。オビィワンは彼のすぐそばに膝をつき、そっと黒いアーマーの肩に手を置いた。

「分かったよ。すまなかった。お前がこうなったのは、私のせいだ」

「あなたのせいじゃない。これは自分で選んだ道だ。あなたの助言もなく、自分で決めた」

「そうか。選んでみてどうだった？」

「苦しかったが、ある意味では楽だった。もうあなたに愛されようとして無駄な努力をしなくていいし、あなたの期待に応える必要もないから」

アナキンの体からどんな力が抜けていく。胸のパネルの点滅が遅くなり、呼吸が落ち着いてきたのが分かった。だが膝から下が自分のものでないからか脱力すると姿勢が不安定になる。オビⅡワンは両手を広げ、思い切って大きな体を抱きかかえた。

「……支えなくていい」

「それは知っている。だが過去の自分の前でバランスを崩して倒れるのは恥ずかしいだろう」

「こっちの方が恥ずかしいです」

立ち上がろうとするアナキンの背中を軽く叩き、蒼白から立ち直りかけているこの時代のアナキンを振り返った。彼はもう驚いてはいなかった。代わりに、何らかの覚悟を決めた顔をしていた。

「いい子にしていたようだな」

「悪いけど、あなたが思ってるより僕はいい子なんです。で、そいつをどうするんですか？ あなた自身も。話から推測すると、あなたもこの時代に二人いるんでしょう？」

「そうだよ。今ごろ彼はけがの治療を受けている。処置が終わったらすぐにでもバクタタンクに入ることだろう」

「なるほど。だからここにいるマスターはぴんぴんしてるんですね」

アナキンはほっとしたようにため息をつき、オビⅡワンが投げて寄越したライトセーバーをうまくキャッチした。

「だいたいのところは分かっただろうが、念のため種明かしをしておくよ。私とアナキンは数年後の未来からそれぞれやってきた。なぜなのかは分からない。フォースの仕業かもしれないし、ただの偶然かもしれない。お前のベッドに裸で潜り込んだのがわざとでないことだけは確かだ」

「あれもあなただったんですか？ だからあるときマスターに妄想扱いされたのか」

「できるなら彼に説明して誤解を解いてやりたいが、まあしない方がいいだろう。そんなことを聞いたら卒倒するだろうからな」

「へえ、自分をよく分かってますね」

隣にいるアナキンにさりげなく視線を戻す。次に自分の指先を見る。そして少しだけ大人の顔になったアナキンを、懐かしいその姿を目を細めて眺める。

「お前にも自分にも、この時代の皆に会えてよかったよ。これから先も皆としっかりやってくれ。未来を知っても何も不安に思わない。何があっても私がついてる。お前がどこへ行っても何者になっても、必ず私がお前を取り戻しに行く。私はいつもお前の幸せを願ってる。それだけは信じてほしい」

「僕だってあなたの幸せを願ってたんですよ、オビⅡワン」

アナキンはふっと笑い、もう空気に溶けかけているオビワンの手を軽くつかんだ。

「あなたに幸せになってほしかった。いつもあなたに笑っていてほしかった。あなたが笑ってくれたら僕も幸せだから。そいつが最後まで言わなかったから、僕が代わりに言っておきました。気が利く弟子でしょう？ だから安心して戻ってください、マスター。あなたも早く自分の幸せに気づいてくれたらいいんだけど」

(第三章へ)

第三章

For he is like a refiner's fire.

このまま二度と目覚めることがなくても、あるいは自分の存在が完全に無に帰してしまっても、それはそれでいいと思っていた。ここで物語が完結してしまえば、向き合わなければならない義務も解決されるべき問題も、すべてがなかったことになるからだ。

それにあのまま二人が消滅しなかったとして、どこに放り出されるのか、どんな風にふたたび形を取るのか、自我はあるのか、記憶はあるのか、どれもまったく分からなかった。想像もつかないし、大丈夫だと保証することもできなかった。また別の時空に放り出されるかもしれない。アナキンが小さかったときとか、まだ出会っていなかったときとか。もしくは二人ともまるで別の生き物となって生きることになるとか。オビⅡワンとしては当初の目的を達成したわけだからそれでもまあいい。ルークを守る必要がないならオビⅡワン・ケノービとしての生に未練はない。だが問題はアナキンのことで、彼が今後安心して生きられる保証がなければだめだ。ここまできて放り出すわけにはいかない。いったい何のために彼のたくらみを止めたのか分からなくなってしまう。

つまりはそれが生への未練だったのだろう。オビⅡワンはあの時代から消え去る寸前、同じく消滅しようとしているアナキンを見た。そして強く思った。どこに飛ばされようと、どんな存在になろうと、二度とお前を置いていかない。その決意のすぐ後に意識が薄れ、快楽と言ってもいいほどの喪失感が訪れた。自分という存在が無限に引き伸ばされた感覚を覚えた、のが最後だった。次に意識のスイッチが入ったときには、急速に縮んでいく自分をどこか遠いところから感じていた。

頭蓋骨が膨らみきり、亀裂が入ったような気がした。不安をかき立てる感覚だが目覚めるにはま

だ弱い。今度は背骨がぎいぎいときしみ、一気に空気が流れ込んだ肺が破裂しそうになる。不快を通り越して命の危険すら感じるのに、それでも目は覚めない。しかしすぐそばの耳元から異様にテンポの速い電子音が聞こえてくると、眠りと半覚醒の間を漂っていた意識が突然現実に取り上げられた。

「アナキン、」

それが何の音かも分かっていなかったのに、目を開けきる前にそう呼びかけた。かすむ視界の中に映し出されたのはびくりとも動かない黒い物体だった。動かないばかりか独特の呼吸音もしない。生命維持パネルが異常を伝えてうるさくさえずってさえいなければ、彼の周囲だけ時間が止まっているのではないかと勘違いしたかもしれないかった。

まだうまく動かない体を起こし、あわてて胸のパネルに目をやる。初めて見る機械だ。パネルの見かたも操作のしかたも分からなかったがこれだけは分かった。「心肺停止、蘇生が必要」。驚く前に体が動いた。機械がアラームを鳴らしているなら、まだ心臓が止まって間もないはずだ。まだ救える。まだ助けられる。

パネルをよく見ると、生命維持システムの中に緊急用の除細動装置が内蔵されていることが分かった。そのすぐ下に緑のランプがついていて、とくにチャージされていることを示している。心肺機能の停止を感じしたら自動的に作動する仕組みになっているのだらう。だがチャージされているのに動いていないということは、除細動器に何らかの故障が起きているということになる。

鋭く息を呑み込み、覚悟を決め、生命維持装置の電源を切る。そして恐る恐る胸の操作盤を外すと、細かくて複雑な配線が中から現れた。色とりどりのコードをそっとかき分けて除細動器に繋がっている線を探す。直せる自信はもろくなかった。だがこれは命に関わるものなのだし、周囲にいる人が修理できるようになっていないはずだ。その証拠に、パネルの内部には修理用の小さな工具が収納されている。だからと言ってアナキンでもあるまいしそんなに簡単に直せるわけが……。オビⅡワンは一瞬だけ目を閉じ、大丈夫だ、と強く自分に言い聞かせた。冷静になってひとつずつ見ていけばいい。焦って手元が狂って失敗しては元も子もない。これは時間との勝負なのだ。一刻も早く蘇生させられなければアナキンはこのまま死ぬ。

断線してショートを起こしている箇所を片っ端から繋ぎ直し、工具を戻し、パネルをはめ、祈るような気持ちで電源を入れる。装置はすぐに動き出した。ふたたびけたたましいアラーム音を鳴らしながら除細動器のチャージが始まる。すぐにランプは緑になり、チャージが完了したことを伝えてくる。その緑を凝視しながら、頼む、と声に出してつぶやく。頼む。直ってってくれ。アナキンを救ってくれ。そうでないとまた、

びたん、と大きな音がした。アナキンの体が跳ね、背中が床に叩きつけられた音だ。そして人工呼吸器がおおと音を立て始める。数秒するとまた跳ねる。チャージされる。跳ねる。オビⅡワンはその狂騒をそばで見ていることしかできなかった。いま懸命に彼の命を救おうとしているのは機械だ。機械のすることに手出しはできない。それなのに、何もできないと分かっているのに、祈

ることだけはやめられない。

それから数秒も経たないうちに胸のランプはほとんど緑になり、彼の鼓動と呼吸が復活したことを知らせてくれた。安堵のあまりうずくまりたくなったがこらえた。いつの間にか全身から汗が噴き出していて、久しぶりに自分のあごを触るとぬるりと汗で滑る。

「……アナキン？」

指がびくりと動いたから思わずその手を取った。すると黒いマスクから不規則な呼吸音が聞こえてきて、やがて彼が「オビⅡワン」と平坦な声で応えた。

175
へ。

156

考えるまでもなかった。オビⅡワンは音を立てないように崖を飛び降り、自分のスピーダーにまたがる。そしてエンジンをかけて一気にモス・アイズリーの方角へとスピーダーを走らせる。

何をやっているんだ、という心の声はだんだん大きくなっていく。衝動に任せて行動するべきではないぞ、という静かな声はクワイⅡガンのもので、まったくお前はまだ未熟よの、とため息をつくのはヨーダで、あなたが心配性すぎるせいで色々台無しですよ、と苦々しく吐き捨てる声はアナキンのものだ。しかしそれらの声の中に自分のものはない。自分の中の自分は、自分の行動を少しも諫めていない。自分はただ一言、「行け」と言っている。頭だけでなく心で考え、決して後悔し

ないように行動しろ、と。

どんよりとした空の下、峡谷を抜けるとモス・アイズリー宇宙港が見えてくる。その蜃気楼じみた視界の端に赤いものと青いものがきらりと光っていた。ライトセーバーの光刃だ、と気づいたときには刃同士は離れ、赤い方が砂の上に消えた。だが青い方も遅れて落ちる。心臓がどくんと跳ねる。スピーダーの限界を超えて飛ばし続け、ようやく人の輪郭が見えてくると、黒い人影が立ち上がろうとしている様子がはっきりと分かった。アナキンだ。

オビⅡワンが到着したときにはもう決着はついていた。だが砂漠に倒れ伏しているのは誰か知らない男で、シディアスではない。妙な形のライトセーバーが彼の三メートルほど先に落ちている。

「アナキン、無事か？」

スピーダーを乗り捨て、駆け寄って肩を貸すと、彼はうっとうしそうに首を振って「無事に決まってるでしょう」と答えた。

「あまり無事には見えないぞ」

「無事です。ご心配なく。持ち場を離れて作戦を台無しにするほどのことはありません」

言われると思ったが、本当に言われた。オビⅡワンはごまかし笑いの代わりにあごを撫でる。

「私がいなくても作戦はうまくいっているよ。必要以上に。帝国軍は陸路でお前を追いかけることをそろそろ断念するころだろう」

「言い訳がましいな」

「そう言うな。お前の危機が伝わってきたんだ。相当な強敵だったのだろうな、彼は。きちんと葬ってやらねば」

遺骸の上にかがみ込み、パウアン特有の赤い眼窩を閉じさせてやる。そして腕を体の上で交差させてその上に自分の手を置く。軽くフォースを送り、宇宙のフォースに溶けゆく命を静かに送り出した。

「そこまでしてやることはないでしょう。そいつは邪悪だ。すでに何人もジェダイを殺してる」

「罪は罪、命は命だ。顧みられなくていいということはない」

「あなたはいまでも、結局骨の髄までジェダイなんですね」

彼のため息が聞こえ、微笑が浮かんだ。持ち場を捨ててここにやって来るまで、オビ・ワンがジェダイコードをいくつ破ったかを知ればきつと呆れるだろう。

「ともかく、ここを離れる前にどうするべきか考えねばな。部隊の集結だけはどうにか防げたが、ここから先が問題だ。この作戦の最大の目的は、パルパティーンを単身でおびき寄せて対峙することだからな。しかし使いを超越したということは、本人はタトゥインに来ていないのかもしれない」
「それはありません」

アナキンは淡々とそう言い、ヘルメットの側頭部を手のひらで押さえた。

「奴はここに来ている。途轍もない大部隊を連れて、そこにいます」

彼がほんのわずかにでもあごを上げてくれなければ、いつまでもそれを雲だと思い込んでいたこ

とだろう。毎日迷惑なほど晴天が続くタトゥイーンにしては珍しく分厚い雲だと。しかしそれは雲ではなかった。巨大な戦艦だ。

「……スターデストロイヤーがなぜこれほど低い位置に？」

目を凝らすと、戦艦の周りをファイターが蠅のごとく飛び交っている。だがこれほどの嚴重警備を敷かなければならないほどの軍備は、そもそもタトゥイーンには存在しない。

「皇帝の専用シャトルを近くで警護してるんだ。撃墜を恐れているんでしょう。私が敵に回ったから」ということは、彼はいま単独行動中なんだな？」

「間違いなく。私を殺しに来るためかもしれません」

二人同時にため息をつく。作戦は成功した。そのときがやって来る。死を迎える、そのときが。

「では彼が来るのをおとなしく待つしかないな」

「それよりもいい手があるかもしれませんが」

「？　どうということだ」

にやりと笑った顔が見えるようだった。アナキンは軽く咳払いをし、スピードに寄りかかって腕を組む。

「いまここで、わざと投降してデストロイヤーに乗り込むんです。そしてファイターを奪い、単独行動から戻ってきたシディアス卿のシャトルを撃墜する」

「さっきお前自身が『皇帝は撃墜を恐れている』と言ったじゃないか。相手も警戒してるぞ」

「だからあなたを残していくんですよ。あなたがいないとなれば、私だけに注意を払えなくなる。背後から襲われる危険を考慮せざるをえなくなるでしょう」

「また私は留守役か？ 冗談じゃない」

憤然とそう言い、アナキンの前に立ちふさがる。

「いつもいつもお前はそうやって勝手に飛び込んで無茶苦茶にかき回してくれるが、取り残された方のことを考えたことはあるのか？ 今までうまくいってきたからいいが、そうでなかったら、」

「大丈夫、今回もうまくいきます」

その声は静かだった。本当に自信があるというより、すでに死を覚悟している声だ。そしてオビⅡワンを死なせることすら覚悟している。

もしかしたら、アナキンは今でも死にたいのかもしれない。超時空から戻ってきたときから、あるいはその前から、ずっと変わらずに死にたいと思っているのかもしれない。自分を許せなくて、許されることが許せなくて、受け入れられることが許せなくて、この世界で起こることの何もかもを許せないでいるのかもしれない。

オビⅡワンは彼の前に立ったまま、彼の両方の腕を取った。

アナキンの提案を受け入れるなら、
203へ。

受け入れないなら、
169へ。

「アナキン」

心の中で小さく決意し、腕の中のヘルメットに呼びかける。

「少し眠っていろと言いたところだが、ひとつ聞きたいことがある」

わずかに頭が動き、腕も動いた。

「タトゥイーンにはろくな医療施設がない。それどころかこの星系のどこにもない。だが、お前のいまの状態では本格的な処置がどうしても必要になる。そういうとき、どこか連れて行ってほしい場所はあるか？ 特定の医療ステーションや拠点のような場所があるなら教えてくれ」

それはぎりぎりの質問だった。アナキンがこれからどうしたいのかはまだ分からない。早く戻りたいのかもしれないし、もう戻りたくないのかもしれない。オビⅡワン自身もこれからどうしたいのか、どうするべきなのかを考えていない。彼を置いていかないと決めたただけだ。具体的な方針はまだない。だが命に関わることならいつまでもあいまいにはしておけない。

「どうした。ないのか？」

「……追われる身で首都星に行く勇氣があるなら」

「コルサントのメドセンターだな。分かった。まず宇宙港で船を探してくるからお前はここで待っていてなさい」

オビⅡワンが立ち上がりかけると、突然腕を思い切りつかまれた。義手だからか遠慮のないつか

み方だ。

「行かなくていい」

「よくない。命がかかっているんだぞ」

「まだいい。まだ死なない。三年も付き合ってきたのだから、自分の体のことは分かっている」

「本当だな？」

彼は億劫そうに頷き、ふたたび全身から力を抜いた。目を閉じ、速い呼吸を繰り返している。そのヘルメットに手のひらを当てたくなり、思いとどまってため息をつく。

それが嘘だということくらいオビⅡワンにも分かっていた。おそらく相当に危険な状態だ。なのに彼は嘘をついている。戻りたくないのか、戻っても間に合わないと分かっているのか、あるいはたくらみがうまくいかず絶望しきってしまったているのか。

オビⅡワンは力を込めずにアーマーの肩を抱き、アナキンをどう説得したらいいかを懸命に考え続けた。だが彼を納得させられそうな理由を見つけないのは難しかった。もし首尾よくコルサントにたどり着いて医療センターで処置を受けられたとしても、彼の立場は微妙になる。突然シャトルから消えたうえに仇敵に付き添われていたことを皇帝が知ったら叱責では済まないだろう。信用を失い、地位も失い、シディアスの飼犬として汚れ仕事をするだけの存在になる。あるいはいまもそうかもしれない。だったらやはりコルサントへは戻らない方がいいのだろうか。

何か別の方法を考えなければならぬ。二度と置いていかないと誓ったなら、彼を一人で死なせ

るわけにもいかないのだ。

ともに死のうと思うなら、**182**へ。

もう一度地下室の扉をのぞくなら、**177**へ。

しばらくこのまま様子を見てみるなら、**166**へ。

158

そして新しい朝が来た。その日はタトゥイーンには珍しく太陽が二つとも隠れていて、空を見上げるとごく薄い雲が帯状に広がっていた。水分農家が喜びそうな日だ。農民たちも朝から大忙しだろう。すべての水分凝結機をフル稼働させ、湿った空気から穫れるだけの水分を搾り取るべく働いているはずだ。ラーズ家でさえも。

一足先に目が覚めたオビIIワンは、手早く身支度と食事をしてから装備品を家の中からかき集めた。二本のライトセーバー、救急医療セット、中身が半分ほど減っているフードカプセル、エネルギーカプセル、ロープとフック、タトゥイーンで必要になるとはとても思えないが、水中呼吸用マウスピース。すべてを身につけていると、まるで昔に戻ったような気分になる。アナキンが子供のころはよく二人で声に出して確認したものだ。「よし、すべて揃っているな」と言うとな彼はうれしそうにした。オビIIワンにしてみればただの確認だったのに、まるで褒められたみたいにした。しばらくしてアナキンが起きてくるころには陽はだいぶ高く昇り始めていた。だが彼が無線を改

造して作った警報装置はいまだ何も告げてこないし、遠くからウォーカーの足音も聞こえてこない。

「おはよう、アナキン」

「おはようございます。何か変化は？」

「いまのところないよ。とはいえ、今日は曇っているからデストロイヤーの機影を確認しづらいな」

「それは珍しいですね。水分農家が大喜びだな」

なので水をもらいます、とつぶやき、アナキンはふたたび居間へと消えていった。

ここに二人で戻ってきてまだ一日しか経っていないのに、ずいぶん馴染んだものだ。少し前まではビジョンの中であの黒ずくめの影を目にするだけで冷や汗をかいていたのに、いまでは当たり前風の風景のひとつになりかかっている。あと二、三日も過ぎれば本物の日常になるだろう。このまま何も起きなくて、誰も来なくて、シディアスはついに彼を見つけることができなくて、オビ＝ワンは世間から忘れ去られ、何年も何年も経ち、そうしたら、二人で過ごす日々は日常どころではなくて、人生そのものになる。やがて衰えて老いるころには「結局誰も襲ってこなかったじゃないか」と笑い合い、手を取り合って息絶える。

もしそうであってくれたら、アナキンは幸せだろうか。それとも無意味な人生だと断じるだろうか。では自分は？ そうなったら幸せなのか。不幸なのか。そもそもオビ＝ワンは「幸せ」が分からない。自分がどうなりたいたのか、いまだによく分からない。

ため息をついて立ち上がり、アナキンの後を追いかける。何が起るにしろ、とりあえず今日生

き延びるためには戦う以外にすべきこともたくさんある。

チェックポイントRに記入された数字が1以下なら、205へ。

2なら、187へ。

3以上なら、196へ。

159

ちょうど十九歳になる誕生日の朝、ルークは静かなエンジン音で起こされた。さらにその直前、目が覚めきる前、ぞわりと嫌な予感が全身を駆け抜けた。誰かが自分に警告しているような感じだが、その誰かには声もなければ言葉もない。だが不思議と気味悪くはなかった。いつも自分だけ先に危険を知ることができるし、ポッドの故障箇所も直感で分かる。それでも嫌なことはあって、何かが起ころうとしているのに止められないときや逃げられないとき、自分がどうなってしまうのかまでは分からない。

ルークはそのとき真剣に身を隠すことを考えた。まだベッドの中にいい加減な寝間着のままでブーツも履いていないのに、窓を割ってここから逃げ出そうと思ったくらいだ。しかし奴隷の身分でそんなことをしたら体内に埋め込まれた爆弾を起動させてしまう。死にたくなければおとなしく待つしかない。

軽く目を閉じ、足音が近づいてくるのをじっと待つ。奴隷用の住居は狭く、謎の人物がここまで

到達するのに何分もかからない。ルークは寝たふりを続け、ついに扉が開けられると息を殺して気配を探った。

敵意は、ない。たぶん女性。タトゥイーンの住人ではない。厳しい雰囲気。とは言っても怖いのではなくて、教師のような感じだ。

「ねえ、起きてるでしょ？ 早く支度してほしいんだけど」

侵入者はいきなり手も触れずに毛布を剥いできた。体温が閉じ込められていた下半身がすうっと冷える。

「ちょ、ちょっと何するんだよ！ というか、君、誰」

あわてて起き上がってそう言くと、部屋中央に立っている突然の侵入者は「あなたの所有者」と何でもない口調で答えた。

「所有者？ 違う。僕の所有者は、」

「もうジャバじゃない。あいつは死んだの。言っておくけど私が殺したわけじゃないからね。おおかたハット族の抗争に巻き込まれて殺されたんでしょ。それで財産の分与が行われて、私が晴れてあなたの所有者となったわけ」

内容の物々しさとは正反対の静かな声だ。背が高く手足は鞭のように細くて長く、年齢はルークよりだいぶ上、頭を動かすたびに揺れる長いヘッドテールは彼女がトグルータであることを示している。だがジャバの手下にトグルータはいなかった、はずだ。怪しい。しかしそう悪い人でもない

いように見える。

「へえ、けっこう肝が据わってるのね。驚いた顔してないじゃない」

「ご主人様が変わったくらいじゃ驚かないよ。三歳で孤児になってから五回は変わってる」

「火事から救い出されたんですってね。ご両親を亡くして主人の元を転々とするのは怖かったでしょう。私のことは怖くない？」

「怖いと思えるほど君のことを知らないから」

のろのろとベッドから抜け出てブーツを履く。本当は服も替えたかったが彼女の前で着替えるわけにはいかない。

「それで……、まずはどこに行くのか聞いていいかな」

「モス・アイズリーよ。ドッグに船が停めてあるからまずそこを目指しましょう」

「船？ まさか、宇宙に出るの？」

限界まで目を見開いた顔を見て、彼女は静かに微笑んだ。

「そうよ。宇宙は初めて？」

「もちろんだよ。生まれてこのかたタトゥーインから出たこともない。で、宇宙に出てどの星に行くんだい？ 君の故郷？」

「まさか」

彼女が首を横に振ると、腰より長いヘッドテールが上品に揺れる。

「場所はまだ言えないけど、ここからとてもとても遠い星よ。覚悟はできてる?」

「宇宙旅行をする覚悟?」

「新しい世界に足を踏み入れる覚悟よ」

急に体が動かなくなった。驚いて彼女を見ると、両手を軽く前に突き出して目を閉じ、何かしている。

「あなたはいまから奴隷ではなくなるの。私が爆弾を取り除くから、その代わり約束して。ジェダイになる、と」

「ジェダイ?」

驚いて聞き返しても無駄だった。わき腹に激痛が走り、手足の先までびりびりとしびれる。

「終わったから力を抜いて。とりあえず起爆装置だけは破壊した。これなら誰が何をしてても爆発することははずよ。本格的な除去は船に着いたら、医療ドロイドにしてもらいましょ」

彼女が手を下ろした瞬間に痛みとしびれが収まり、不思議を通り越してだんだん気味が悪くなってくる。いったい何者なんだろう。魔法使いなのだろうか。そう言えば昔、タトゥーインにも魔法使いが住んでいたと聞く。

「どうしたの? まだ痛い?」

「痛くはないよ。でも……君は誰? なぜ僕を解放してくれたんだい?」

長い影がゆっくりと近づいてくる。そして彼女は長い腕を差し出し、少し恥ずかしそうに笑った。

「そういえば自己紹介がまだだった。私はフルクリム。もちろん本名じゃないけど、もっと仲良くなったらちゃんと教えてあげる。よろしく、ルーク。ルーク・スカイウォーカー」

機械じみた動きでこくこくと頷き、その手を取る。彼女の素肌に触れたとき、雷に打たれたみたいに懐かしさがこみ上げてきた。

「……君は、誰？」

「だから、フルクリムよ」

「違う。きっと知ってる人だ。どこかで会った。会ったどころか、何か……」

「会ったことは本当じゃないけど、その既視感を否定することはできない。あなたはフォースが強いから、ビジョンで何か見たんでしよう」

握ったままだった手が離され、肩に置かれる。

「あなたはきつと、死んだお父さんと同じくらい強いジェダイになる。少なくともオビワンはそう信じてたはずよ」

『「死んだ父さん」？ オビワンて誰？」

その名を口にするのと、どうしてか胃が締めつけられて吐きそうになった。僕はその人を知っている。名前だけでなく、存在だけでなく、彼の願いや呪いまで。なぜだろう。なぜ知っているんだろう？ 「おいおい分かる。必ず。だからとにかくいまはついてきて。私たちにはあなたが必要なの。あなたが唯一の希望なのよ。あなただけが光を取り戻せる」

それと同じ言葉を聞いたことがあるような気がする。「唯一の希望」。ルークは思わず足元を見た。地面にぽっかりと穴が開き、渦を巻き、自分を飲み込もうとしているみたいに思えた。

彼女に手を引かれて狭い廊下を歩きながら、ルークは見たことのないはずの光景を思い出していた。泣きわめく自分を抱き上げる誰か。いつも悲しそうな笑顔を向けてくる誰か。まるで神を見るように自分を見る、誰か。顔を思い出すことはできない。面影もない。だが思い出すべきでなかったことを思い出してしまったという実感だけは強く残った。

あなたは誰。

その疑問を、きっとこれから先の人生を丸ごと使って問いかけ続けることになるだろう。オビ＝ワンという名の誰か、顔のない誰か、救世主を信じた、愚かな誰かに。

(ED17・救世主を信じた男)

160

とはいえ改めて考えてみると、わざと捕まってデストロイヤーに潜入する作戦は無理があるように思えた。それほどパイロットとしてのアナキンを警戒しているなら、ファイターを奪われないようにすでに手を打っているだろう。捕まった方がいいが結局空には出られず、丸腰でパルパティーンと対決するはめになるのがおちだ。

だがアナキンは却下されてもまったくくめげずに即座に代案を出してきた。宇宙港で船を盗み、空

からパルパティーンのシャトルに近づくという作戦だ。正直何を言っているんだと思った。あれほどの警戒態勢を敷いている戦艦に民間船で忍び寄るなんてはつきり言って無茶だし、死にたいとは思えない。

「……アナキン」

「何です？」

「さっきの会話は何だったんだ？ 何も変わっていないじゃないか、何ひとつ！」

「どんな点がですか？」

「自殺行為を提案してくるという点だ。自覚がないのか？」

「自殺行為なんかじゃありません、むしろいい案ですよ」

「なら別の言い方をしよう。お前は自分の力を過信をしすぎている。お前が銀河一のパイロットであることは認めるが、さすがに無理だぞ。あの空域にいったい何機ファイターがいると思ってる」

「あれを全部撃ち落とそうなんて思っていない。劣勢だからこそ作戦が必要なんだ。すべてあなたの言葉ですよ、オビ＝ワン。きちんと私の話を聞いてください」

「またそれか。卑怯だぞ」

ため息をつき、またがっていたスピードラーから降りると彼はわずかに声をひそめてこう言った。「いいですか。シディアス卿は近くに来ています。早く私を殺したいが、あなたが邪魔だから動けないでいる。いくら奴でも二人を相手にするのは避けたいはずだ。その心理を逆手に取るんです」

「どういうことだ？」

「我々が考えていることと同じですよ。ライトセーバーで戦いたくないなら乗っている船を撃ち落とせばいい、と奴も考えるはずだ。盗んだ船で奴のシャトルに近づけば確実に撃ち合いになる。もちろん、ファイターが雲霞のごとく殺到してくる前に素早く片をつけないとなりませんが」

「なるほど」
オビィワンはあごに手を当て、視線の先の宇宙港を眺めやった。

「確実に墜とすためにはできるだけあのデストロイヤーと引き離しておくことが必要だな。そして彼の正確な位置を把握することも」

「任せてください。異音の大小でだいたい分かります」

「それは正確ではないが、まあいいだろう」

二人同時にスピーダーに乗り込み、宇宙港を目指す。最初の作戦でモス・アイズリーを目指して逃げることにしたのは単にラーズ家から遠ざかるためだったのだが、もしかしたらこのためだったのかもしれない。

171
へ。

161

新たな警報装置作りを手伝い、家から数キロ離れた場所に設置しに行き、ひととおりテストして

戻ってくるすでに陽が暮れかかっていた。普段ならこっそりルークの様子を見に行く時間だが、この状態のアナキンを一人にしてはおけない。水分と栄養を取らせ、体を清潔にするのを手伝ってやり、彼をふたたび椅子に座らせる。そのころには外はすっかり暗くなっていて、さんざめく星々が窓から見えるほどになっていた。

家の中は静かだった。アナキンは風呂に入られているあたりから妙におとなしく、一言も口をきかないしほとんど動きもしない。膝を抱えたまま黙っていると置物のようだ。だが彼がこうなった理由にまったく思い当たらない、というわけではなかった。

アナキンは子供のころから風呂が嫌いだった。暴れ回って泥だらけになっても自分からは入浴しようと思わず、オビⅡワンがうるさく言っても泥まみれのままでいようとすることからよく首根っこをつかんで引っ張って無理やり風呂に引きずっていったものだ。だが体も服も清潔になるとどん底まで不機嫌になった。膝を抱えて座り込んだまま自分の部屋から出てこないこともざらだった。その態度に腹を立てて呼びつけて説教をするようにいにくれる。いまのアナキンは、そのときの様子に似ている。

「そろそろ機嫌を直せ。他人に世話を焼かれるのは恥ずべきことではないぞ」

とはいえオビⅡワンにだって分からないではないのだ。昔は意識もせずできていたことが、いまは何ひとつ満足にできない。人の手を借りないと自分の世話すらできず、常に気遣われなければならないことに負い目を感じている。子供だったアナキンは無理やり風呂に入れられてむくれたのも、

幼児でもないのにマスターに裸を見られて洗われたのが嫌だったからだろう。分かってはいる。分かってはいるのだ。そのくらい。

「まあ、確かに……悪いのは私だという見方ができないわけでもない。有無を言わさずお前を風呂に入れたのはよくなかったかもしれない、とは思っている。少しはな」

「……なぜ素直に自分が悪かったと言わない？」

「全面的に私が悪いわけではない。お前のその皮膚は定期的に清潔を保つことが必要だ。だが専門的な医療施設ならいざ知らず、ここには簡単なシャワーといい加減な洗浄剤しかない。となれば普通に風呂に入れるしかないじゃないか」

「一人でできると言ったのに、聞く耳を持たなかったことについては？」

「すまなかったな」

オビⅡワンは肩をすくめ、火花のような怒気をやり過ぐす。

「だが今さら恥じることもないだろう。何度泥だらけのお前を抱えて裸に剥いて風呂に放り込んだと思ってるんだ」

「そういう問題じゃない！」

困った。彼はどうやら本気で怒っているようだ。

とりあえず黙らせるなら、181へ。

じっくり話を聞いてやるなら、165へ。

眠る前に、明日生き延びるために必要なことをしなければならぬ。パルパティーンがいつここを見つけたすのかは分からないが、万全な手を打っておかなければならぬ。でなければ死ぬ。クローン戦争のころの自分たちならきつと勝てただろうが今はとても無理だ。暗黒面から力を得られなくなったアナキンは走ることさえ難しいだろうし、オビⅡワンもしばらくライトセーバーを振っていない。体力も著しく落ちている。となれば作戦を練るしかない。

「……オビⅡワン、あなたが何を考えているのか分かる」

「ああ。私も分かる。お前は襲撃される前にタトゥイーンを出るつもりだな」

「あなたは留まるつもりだ」

アナキンは体を起こし、苦々しい声でそう言った。

「なぜですか。フォースの繋がりを切った以上、追跡を妨害してもいつか必ず居場所を嗅ぎつけられる。奴はたくさんのトルーパーを連れ、陸戦兵器で武装し、我々を殺すつもりでやって来る。だったら迎え撃つことなどせず、黙ってこの星系を離れた方がいい。目くらましにもなるはずだ」

「それはだめだ。我々が逃げればこの星ごと火の海になる。ジェダイをかくまっていた罪を周囲の住民たちに着せ、見せしめのために皆殺しにするだろう」

その中にはルークが含まれている。ルークを守り育ててきたラーズ夫妻もだ。決してそんなことをさせるわけにはいかない。

「少なくとも私はここから逃げない。隠れもしない。彼が寄り道をせず一直線に私に向かってこられるよう、目立つところで迎え撃つさ」

「まったく、損な性格だな」

重いため息をつき、彼はゆっくりと立ち上がった。

「しかし何の作戦もないというわけにはいきませんよ。目立つところに陣取ってもウォーカーの砲撃を浴びたら意味がない。いくらあなたでも骨も残らないほどばらばらになります」

「分かっているよ。そもそもそんな巨大なものに正面から挑むなど愚策中の愚策だ。トルーパーの集団をすべて倒すつもりもない。だが倒さなくてもどうにかすることはできる。劣勢だからこそ、作戦が必要なのだよ」

オビIIワンは片目をつぶり、さまざまなものが乗ったテーブルを二人の間に移動させた。水の入ったボトルがウォーカー、薬のパックが砂丘、細々した医療器具がトルーパーだ。

「作戦会議ですか。懐かしいな」

「お前はいつも遅れて来ていたな」

「ええ。退屈だったもので」

「真正面から突っ込む案しか出せなかったからだろう？ 三年経ってお前が成長していることを期待してるぞ」

「せっかくあなたを見直したところだったのに、皮肉ばかり言わないでください」

その後二人は数時間かけてシディアスに見立てた機械の残骸を動かしながら作戦を練っていた。これは敵を倒すためのものではなく、どうにかするためのものだ。いくらあがいても勝利はできない。敗北をまぬがれることもできない。かろうじてできそうなのはこの地から敵を追い払うことだけだ。だが、目的を果たすためにもっとも大事なことがまだ残っている。

戦える体力を取り戻すために眠るなら、195へ。

ルークとラーズ夫妻をタトゥインから避難させるなら、176へ。

アナキンを地下室に案内するなら、180へ。

163

だめだ、と思った。アナキンに自分の子供たちの生存を教えてやりたいのはやまやまだが、それだけは言えない。彼の双子は銀河最後の希望と言っていい存在だ。パルパティーンに居場所を突き止められてあえなく二人とも死んだら、誰もシスや帝国に刃向かえなくなってしまう。切り札は残しておくべきだ。失敗する確率が高いのだから。

「期待しているところすまないが、引きこもっている私にはこれ以上の世間話は思いつかないよ」

ごまかすように笑顔を浮かべ、椅子から立ち上がって寢床を作り始める。アナキンは不満げに腕を組んだがそれ以上何も言わなかった。

チェックポイント「R・フォースボンド」に1と記入し、158へ。

いつか話してやれたら、と思つてはいた。パドメが命がけで産み落とした双子のことを。生まれたときにパドメが名づけたこと、いまは別々の場所にいて、それぞれに暮らしているのであらう二人のことを。ルークに関してだけならオビⅡワンが見てきた限りのことを伝えられる。生まれたばかりのルークを抱えてラーズ家にたどり着くまで目も回るほど大変だったことや、抱き上げるとうれしそうに笑ったことや、農場の周りで遊んでいるとき頭から滑り落ちそうになって思わず助けてしまったことや、目元や顔の輪郭が幼かったころのアナキンに似ていること、そして血の繋がらない叔父夫婦に目一杯愛されて育っていること。だから、何も心配することはないということ。

オビⅡワンはアナキンの真正面に座り、まっすぐに彼を見た。マスクに隠れた目を見透かせるほど見つめて小さく息を吐き、そして吸い込む。

「アナキン、実はお前に黙っていたことがひとつある」

彼は驚いた様子を見せなかった。当然といえば当然かもしれない。いまは敵と味方に分かれてい

るのだから、隠し事があって当然だ。

「パドメとお前の間の子は生きている。知らなかっただろうが、双子なんだ。男女一人ずつでそれぞれルーク、レイアという。この名はパドメがつけた。ルークはいまタトゥーインにいて、お前の母のゆかりの水分農家に、」

「なぜだ」

それは今までで一番大きな声だった。もしマスクを通してなければ叫び声に聞こえたかもしれない。アナキンは身を乗り出し、もう一度「なぜだ」と言った。

「なぜ何も無い。隠していた理由は明らかだろう。彼らはフォースが強い。皇帝に利用されないよう守るためだ」

「そうじゃない！　なぜいま言った？　誰かに利用されることを危惧するなら、こんなときに言うべきじゃなかった」

オビⅡワンはしばらくその場から動けなくなった。こんな秘密を聞かされたのだからびっくり驚いたり戸惑ったりするものだと思っていた。だが違う。彼は必死だ。

「私の子が生きていることをシディアス卿に疑われたら終わりだ。弟子の嘘はマスターには通用しない。私はマスターに嘘をつくことができない。彼らの存在を隠しておくことはもうできなくなる」
「落ち着け、アナキン。いかに皇帝とは言え、お前が先に明かさない限りそう簡単にはばれない」
「それは違う、オビⅡワン。あなたはシスを甘く見すぎている。シスの師弟の支配関係は絶対だ。コルサントから遠く離れたタトゥイーンにいても、私の動揺はマスターには伝わっている」

「解決法はある。彼との繋がりを切ればいいんだ。それほどブルークとレイアに危険が及ぶことが心配なら」

誘惑の言葉をささやいているような罪悪感を覚え、つい声をひそめてしまう。いつかのシディアスも、こんな風に耳打ちしたはずだからだ。ジェダイを疑え、オビⅡワンとの繋がりを切れ、と。

だがアナキンは首を横に振り、「無理だ」とつぶやいた。

「シスの場合は繋ぐも切るも、すべて力と支配によってなされる。私にはまだ彼を打ち倒す力はない。支配を拒む力も」

「だったら、」

だったら、シスでなくなればいい。戻ってくればいい。そう言うべきだったのに言えなかった。アナキンは義手の手のひらを思い切り開き、胸のパネルをわしづかみにしている。

「アナキン、何をしている?」

「あなたは自分の命よりも息子を守ることに大事だと言った。だったらあなたが守るべきものを私も守る。命を賭けて。そうしたら、あなたは自分の命に価値がないなどとはもう言えないはずだ」
「やめろ!」

止めようとしたときにはもう遅かった。制御パネルは引き千切られ、体に埋め込まれた人工呼吸器はフォースで握りつぶされた。オビIIワンの呼びかけを聞くこともなく、すぐに死が訪れる。

オビIIワンは床に倒れ込んだアナキンの体を抱き上げ、頭を膝に乗せた。心臓はかろうじて動いているが、もう呼吸もしていない。涙は出なかった。その代わりに何度も何度もヘルメットを撫でた。彼がつるりとした頬を持っていたころのことを思い出しながら撫で続けた。そして彼の最後の言葉を頭の中で繰り返す。「そうしたら、あなたは自分の命に価値がないなどとはもう言えないはずだ」
……。彼の言いたかったことはよく分からない。だが、これで何が何でも死ねなくなったことは間

違いない。どんな形でも生き続け、最後までルークを守り切らなければならない。またしても守ることができなかった、最愛の弟子の代わりに。

(ED 16・価値のない命)

165

「分かった。お前の気持ちを無視して悪かった。私に世話を焼かれたくなかったんだな」

声のトーンを落としてそう言うのと、彼は両方の義手を組み合わせて不規則に呼吸を繰り返した。

「お前が子供だったときもいつもうるさく言って嫌がられた。無理に風呂に放り込むと『勝手に裸にされた』と言って怒っただろう。あのころと同じことをしてしまったな」

「違う」

「そうか？ 同じだと思いがね」

「違う。全然違う。見ただろう、あれを」

フォースから彼の強い恥の感情が伝わってきた。焼け焦げるような恥ずかしさだ。真正面から受け止めるには重たすぎるほどの、激しく深い恥。

「子供のころとは違う。大人になってからとも違う。もう私は人間ではない。この肉体自体が醜い傷痕のようなものだ。あなたの知ってる私とはもう違う」

「何を言ってるんだ。何も変わらないさ」

「違う！」

ああ、と思った。やっと分かった。彼が何をそんなに怒り、そして恥じていたのかようやく理解できた。

一歩ずつ歩み寄り、彼のそばにかがみ込む。顔が近づくと、アナキンはおびえたように息をひそめた。

「アナキン、聞いてくれ」

声をさらに落とし、幼い子に言い聞かせるように肩に手を置く。

「いまに戻る前、お前に言おうとしていたことがあったんだ。あの時代のお前とお前を追いかけるとき、何があっても必ず言わなければと思っていた。なのに戻ってきたら忘れていた。いや、忘れてなどいなかった。ただ心変わりを恐れていた。知っての通り私は頑固者だから、いつ自分を許せなくなるのか分からなくて恐ろしかった。だが、そろそろ前を向かなければな」

その手を広げてヘルメットに触れると、肩がびくっと震えた。意志の強そうな眉があった場所から、形のいい耳のあった場所、そして後頭部に手のひらをすべらせる。

「どんな姿になろうと、何と名乗ろうと、お前はお前だ。私が知っているアナキン・スカイウォーカーだ。前と何も変わらないし何も違わない」

上半身がおずおずと倒れてきて、ヘルメットの張り出した部分が鎖骨に軽く当たった。

「待たせてすまないな。戻ってきてから何度もチャンスはあったのに」

目を閉じて頭を抱く。人に抱かれるようにはできていない形のヘルメットを両手で抱える。

「何もためらうことはなかった。もっと早くに言うべきだった。だがさっきお前の裸を見て確信を深めたのは事実なんだ。お前は間違いなくお前だよ。何ひとつ変わってはいなかった」

「……あなたはいつも一言余計なんだ」

手が後ろにが伸びてきた。手はオビⅡワンのローブをつまみ、つかみ、ようやく手のひらが押し当てられ、そのうち腕で背中を抱かれた。全身保護服に包まれていて体温など感じないはずなのに、それでもあたたかかった。

「あなたのそばに戻りたくない」

その言葉はマスクから吐き出されるあたたかい息とともに発された。

「あなたのそばにいと、きつといま以上に自分が嫌いになる。あなたが振り向いてくれないことが悲しくなる。あなたが憎くなる。いまの私はもう、あのころと違って何も持っていないから」

「あのころのお前は何か持っていたのか？ 知らなかったが」

「たと言えす」

アナキンが腕の力を強め、両手でオビⅡワンの体を抱きすくめた。

「昔の私にはあなたの背中を守る強さがあった。誰もがうらやむ才能があった。あなたがマスターとして誇れるようなジェダイだった。それに、あのころの私は人間だった。そして美しかった。あなたの目を何秒かでも奪えるくらいには」

「たいそうなうぬぼれだな」

笑いながら背中を撫でると、マスクから奇妙な呼吸音が響いた。

「もうあなたにキスできない」

まるで独り言のような口調だった。

「あなたと裸でベッドに寝そべることもできない。あなたを抱くことも。あなたが泣いて喜ぶ顔を見ることも」

「泣いたことなど一度もないぞ。それに、どれもそんなにたいしたことでは……」

慰めを遮るように、ふたたびひきつけるような息の音が聞こえた。そのときはっきりと分かった。これは嗚咽の音だ。

「どれもたいしたことず。いまの私が満足にできるのは生きていることくらいだ。昔のようにライトセーバーを振ることも、あなたが好むような正しいことももうできない。ジェダイとしてのものを考えられない。そんなことをする資格もない。だから戻りたくないんだ。あなたのそばに、戻りたくない！」

あー、と大声をあげて彼は泣いた。だがマスクに隠れたその泣き顔を見ることはできなくて、ただときどき頭部が上下するのが分かるくらいで、べたべたの頬を両手で挟んでやることも、顔を寄せて涙を吸い取ってこともできなかった。オビIIワンにできるのはただ黙って彼の頭を抱え続けることだけだ。

アナキンは泣かない子供だった。どんなにさみしくても、どんなに母親に会いたくても、皆に仲間外れにされて陰口を叩かれて悔しくても、マスターに冷たくされて悲しくても、彼は人前で涙を流すことはなかった。もちろんどこかで隠れて泣いてることくらい、オビ・ワンにも分かっていた。さみしさや悔しさや悲しみを一人で抱え込み、いつか爆発するんじゃないかと不安だった。あのときもこんな風に気持ちをぶつけてくれたらよかった。もしできるならもう一度時空を超え、隠れて涙している彼をかつての自分の元へ連れて行くだろう。そして泣かれてあわてふためいているくせに「感情を抑えろ」とお決まりの説教を始める昔の自分の口を思い切りふさぐだろう。黙って彼の怒りや悲しみを受け止めてやるように言うだろう。だって、そうしなければだめだ。そんなことでもしなければ、本当の意味で互いを理解することはできないからだ。

「……すみません」

数分ぶりに聞く彼の声は、少し鼻声だった。涙と鼻水を拭いてやれないのが残念でならなかった。「今の話は忘れてください。気の迷いだ」

泣きすぎて疲れたのか、妙に呼吸が速くなっていた。心拍数も跳ね上がっている。

「やはり私はジェダイには戻らない。自分でしたことへの報いは受けます。だから、」
「戻ってきなさい」

マスクの頬の部分をもっと撫でる。アナキンが固まったのが分かる。

「……だから『戻らない』と、」

「戻ってきなさい。ジェダイとしてではなく、ただ私のそばに。何もできなくていい。何かできるようになればいい。これからどうしたらいいか、どんな風に生きたらいいかを一緒に考えよう。一緒に迷い、一緒に苦もう。そのためにお前にはマスターが……いや、友がいるのだよ」

もう一度頭と背中を抱き、腕をとんと叩いて離れた。

「後悔しますよ、必ず」

「もう後悔したよ。この三年間、後悔しない日は一日もなかった」

「さらに後悔するかも」

「そうかもな。だがなるべく後悔しないように生きることにはできるさ。私もお前も。すべてはこれからの選択次第だ」

こつ、と音をさせて額をくっつけ合い、浅く息をつく。

「本当に、いいんですね？」

「ああ」

「私が裏切るとは思わないんですか」

「思わないし、裏切られてもいい」

「あなたらしいな。だから思い知らせてやりたくなくなるんですよ」

両方の手のひらを合わせるようにして指を絡ませて繋ぐ。オビ1ワンは目を閉じる。きっとアナキンもマスクの下で目を閉じている。互いの間のフォースの流れを全身で感じ、やがて瞑想状態に

なり、精神の世界へと入っていく。

204へ。

166

単純な教訓だ。大事な人の命が危ないからと言って、焦って行動するべきではない。アナキンに何度も言ってきたことでもあるし、自分でもそうしようと努めてきた。もちろんよくない結果になったこともあるが焦って動くよりはまだよかったと思う。こういうときに必要なのはがむしゃらな行動ではなく思考だ。そして忍耐。ジェダイにもっとも必要なことであり、オビ・ワンがもっとも得意とすることでもある。

まず冷静に彼の容態を観察し、単なる予想や想像から事実だけを摘出しなければならない。「もしかしたら〜かもしれない」という思考法は根拠のない妄想に繋がるし、妄想は現実の問題を解決する役にはまるで立たない。

オビ・ワンは一度彼を膝から下ろして床に横たえ、両手をかざしてフォースを送った。フォース治療の真似事はもちろん少しもできないが、フォースを介して人体を観察することはできる。アナキンがムスタファーでどれほどの身体的な障害を負うはめになったのか、どこからどこまでが機械なのかを正確に知らないとならない。

まず深刻なものとしては、皮膚がない。表皮どころか真皮まで焼けただれ、ケロイドとなったま

ま戻っていない。定期的にバクタタンクに入っていたとしても常に痛みがある状態だろう。さらに命に直接関わりがあるのは呼吸器だ。気道と肺がほとんど失われていて、自発呼吸はできず、人工呼吸器と人工肺に頼っている。この二つの機械が故障すればなすすべもなく死を迎える。だが彼が動けないほど弱り切っているのは呼吸機能がうまく働いていないからだ。機械は今のところ問題なく動いている。なのに体力がなく、機械が手に入れた酸素をすべて受け取ることができないせいで衰弱している。となればいまは休ませてやるのが一番いい。水分を取らせつつ体力が戻るのを待てば動けるようになる、はずだ。

そうと決まれば話は早い。オビⅡワンは自分のベッドから毛布を持ってきて体の上にかけてやった。砂漠の夜は凍えそうなほど気温が下がるから本当ならベッドで寝かせてやりたいが無理に動かすわけにもいかない。

自分のぶんの毛布も持ってきて隣に座り、そっとヘルメットに手を当てるとアナキンは少しだけ動いて聞き取れない言葉をささやいた。

「どうした。寒いか？ それとも何かして欲しいことがあるのか？」

わずかに首を振る。

「だったら黙って少し休みなさい。この様子なら急変することもないだろうから安心して眠るといい。私もそばにいる」

最後にそう付け足すと、アナキンはいきなりごろりと転がって反対側を向いた。相変わらず苦し

げな呼吸が聞こえはするが、ぴくりとも動かず静かにしている。

彼が眠ってしまったことを確認すると、オビⅡワンは毛布にくるまってひとつ息を吐いた。奇妙な状況だ。家の中で暗黒卿が眠っている。この家に住むことになったのは彼から隠れるためだったはずなのに、今では彼を隠すためにここにいるかのような状況になってしまっている。

168へ。

167

最初に感じたのは頬に触れる柔らかさとあたたかさだった。ぽかぽかした感じと幸せな気分、そして耳に響く足音と静けさ。こんな風に目を覚ましたのはいつ以来だろう。きつとタトゥーインに引込む前のことだ。アナキンが隣にいて、そのさらに隣にアソーカがいて、振り向くとコーディとクローン兵たちがいて、ジェダイの仲間たちがいて、いつも夢中だった。少なくとも孤独ではなかったし、役に立っていると思えたし、つまりは幸せだった。なのにあのときは少しも幸せだと思えなかった。一人で何かに耐えているような気になって、目の前の幸せを感じ取れなかった。あのころアナキンのことしか考えていなかったのは、結局のところ愛ではない。自分を愛せない代わりに彼の幸福を求めたに違いない。押しつけられたアナキンは迷惑だっただろう。こんな風に振り返ることができるようになるなんて、あのときは思いもしなかったけれど。

体をもぞもぞと動かし、少しずつ目を開ける。もやのような視界に朝の光が映し出され、次第に

はつきりと形を取っていった。光はアナキンの形をしていた。彼の寝顔はたいい静かで美しかったが、たまに夢の中で誰かに殴られているのかと思うほど苦悶の表情を浮かべることがあった。眉がびくびくと動き、唇がゆがみ、毛布をつかむ手がせわしなく動く。かと思うと波が引くように収まり、ふたたび塑像じみた無音の寝顔に戻る。胸が大きく上下している。やはりよくない夢を見ていたのかもしれない。あるいはフォースのビジョンか。どちらにしても平和な眠りを妨げるものだ。オビIIワンは彼のむき出しの腕を枕にしてひたすらその寝顔を見つめ続けた。そんなことをしているといつもならず眠くなるのに、今朝はなぜだか少しも睡魔が訪れなかった。鼻の形も、眉の色も、肌の質感も血管が透けているまぶたも、すべてが目新しくて見飽きなかった。美しいな、と思う。彼が九歳のときも同じように思ったし、十二歳のときも、その後も、それぞれに同じことを思った。なのに彼は一度として同じ形に留まることはなく常に変化し続け、少年から青年になり、青年から大人になった。オビIIワンが最初に彼の中に認めた美しさは大人の彼にはもうなかった。当たり前のことだ。それを愛しいと思うから、いつまでも見続けていられる。

「……マスター？」

うつすらと目が開き、何度か瞬きし、顔がこっちに向いた。まだ眠たいのか、眉も口角も下がっている。

「もう陽が昇ってるじゃないですか。起きてたんならどうして起こしてくれないんですか」
「起きたとたんに文句か。よく眠れたようだな」

「よく眠れすぎて寝過ぎしました。どうしてくれるんです。今日、アソーカと競争してたんですよ。どっちが早く道場に着くかで」

「何を賭けているんだ？」

「デックスの店の新作デザートです。山盛りのフルーツと山盛りのゼリーが乗ってるらしくて大人気らしいですよ。マスターもどうですか？ いまからじゃあなたに勝ち目はないけど」

「そのくらい自分で出せ。私やパダワンにたかるな」

起き上がりながらそう言うのと、アナキンは不満げにため息をつきながら仰向けに転がった。

「もう服着るんですか？ もったいない」

「夜が明けたなら当然だ。お前も勝ち負けに関わらず起きて着替えなさい。いつまでも裸でいると風邪を引くぞ」

「その程度で風邪引くわけないでしょう。でも腹が減ったので起きます」

「そうしろ。私も食事に行く」

「昨日のマスター激しかったですからね。あれだけ運動したらそりゃ、」

「そういう話はやめなさい。もう朝だぞ」

あわてて言葉を遮り、アナキンの顔に服を放る。

「……やめてくださいよ。恥ずかしいなら恥ずかしいって口で言ってほしいな」

「無駄口を叩かず早く着替えろ。お前も空腹なんだろう」

はいはい、と唇を尖らせ、アナキンはおとなしく服を着始めた。オビⅡワンはこの間抜けな時間が少しだけ、好きだ。性交した次の日、ともに働かない頭でぼんやりした会話をし、ともに動かない筋肉を駆使して服を着る時間が。これを幸せだと思う。きっと永遠には味わえないだろうけれど、それでも幸せだ。

「あれ？」

ベルトを締め終わりブーツを履き終わると、アナキンは素っ頓狂な声をあげてベッドの枕元に視線を移した。

「どうした？ ライトセーバーでもなくしたか？」

「そんなわけないでしょう。これ、どこから持ってきたんですか？」

彼はわずかにうれしそうな顔をして、こぶし大の生の果物をつかんでいる。思わず首をかしげる。オビⅡワンは部屋に食べ物を持ち込む習慣がない。こんな、どこでも買えそうな何の変哲もない果物ならなおさらだ。

「覚えがないな。お前が持ってきたんじゃないのか？ まさか食堂からくすねてきたんじゃないだろうな」

「そこまで飢えてません。マスターが気を利かせて持ってきてくれたのかと思ったのに」

「それはない。が、腹が減ったなら食べていいぞ」

「本当ですか？」

アナキンは子供のころと同じように頬を紅潮させ、「うそみたい」という顔をした。確か彼はそろそろ二十三歳で、弟子もいて、どうやら秘密にしているつもりらしいが配偶者がいて、多くのクローン兵たちに「將軍」と呼ばれている身分はずだ。なのにまさか果物ひとつで大喜びするとは思わなかった。

「そんなにうれしいのか？ よく見ると少ししなびているじゃないか」

「そんなのたいしたことじゃないです。これはマスターが僕を忘れなかった記念なんだし」

「……何だって？」

ふわふわとした幸福感が一気に冷やされた。頭から冷や水をぶっかけられた気分だ。ようやく回転し始めた思考回路がかすかな違和感を告げ始める。何か忘れているような気がする。何か、とても大切なことを。

「アナキン、」

「何も言わないでください。あのとき、きつとまた不思議なことが起きたんです。それで僕らはまたここに戻ってきた」

「お前が何を言っているか分からない。それが一番の問題なんだ」

「分からなくていいんだ。あなたは生きていて、いまを幸せだと思ってくれているから。あなたは僕の幸せだけを願ってくれたけれど、僕はあなたをこそ幸せにしたかった。だから、もういいんです。これがお互いにとって一番幸せなんだ」

真正面から口づけられた。そのとき、彼とキスがしたかったことを何となく思い出した。いてもたってもいられなくなり、中途半端に服を着たままのアナキンを押し倒す。すると彼はにやっと笑って「やっぱり」とつぶやいた。

「したくなったんでしよう、『もったいいいこと』。僕に乗っかって動いてもいいですよ」

「もう朝だ。誰か来るかもしれない」

「あなたが声を抑えてくれるなら大丈夫です。いつもひやひやするんですよ。特に後ろから突いてるとき。死ぬほど幸せって感じで叫ぶから」

「私は叫んでなどいないぞ」

「別に叫んでもいいですけどね。どうせ誰も来ないし、せっかくなんだから痛いより恥ずかしいより気持ちよくなってくれた方がうれしいし」

アナキンの太ももにまたがったままもう一度口づけ、時間をかけて服を脱がせ合う。若者らしい張りつめた手のひらが素肌を滑る。手のあたたかさを感じる。手触りを感じる。確固たる繋がりの中から、彼が伝わってくる。

(ED 21・夢の終着点)

168

いつの間に眠ってしまっていたのか、首と背中での痛みで目が覚めた。どうやら座ったまま眠りに

落ちていてしまったらしい。目覚めた瞬間に血の気が引いた。一晚中起きて様子を見ているつもりだったのに、何をやっているんだ。あわてて目の前の床に目をやると、彼は仰向けの格好で眠っていた。起こさないように耳を近づけ、呼吸音を聞く。昨日よりはずっと静かだ。心拍数も落ち着いている。異常を知らせるサインもない。

はああ、と息を吐いた。その場にうずくまりたいと思うほどだった。とりあえず一命は取り留めた。これから先何もしないというわけにはいかないだろうが、それでもしばらくは安心だ。

オビⅡワンは音を立てずに立ち上がり、毛布をたたんで冷却ユニットのスイッチを入れに行った。暑くて仕方がない。二つの朝日もたらす熱気が簡単に壁をすり抜け、さっきまで凍えるほどだった室内の空気を限界まで熱している。これほどまでに昼夜の寒暖差が激しいのに空調が自動で切り替わらないところには本当にいらさせられるが、古い建物だから仕方がない。

部屋の中が徐々に涼しくなってくると、今度は食事がしたくなった。めでたく地下室が本来の機能を取り戻したことだし、何か胃に入れるべきだろう。アナキンが眠っている居間を横切って地下室の落とし戸へ向かおうとすると、重たげな金属が擦れ合う音が聞こえた。

178
へ。

169

「だめだ」

短くそう言い、さらに強く腕をつかむ。

自分を二度と許せないなら、少しでも受け入れられる自分を新たに作ればいい。だがそのためには「生きていること」が何よりも必要なのだ。死んでしまったら何もできない。勝手に癒えていく傷を苦々しく思うことも、奇跡を味わうことも、感傷に浸ることも、二度目の破滅に向かって勇気を振り絞ることもできない。

「行っってはだめだ。死ぬだけだぞ」

「死ぬことは最初から覚悟していたでしょう。だったら生きている時間を数分引き延ばすより、いちかばちかに賭ける方がいい。それで失敗しても後悔することはありません。あなたがそう言ってくれたんじゃないか。二度と後悔しない選択をしろ、と」

オビⅡワンは幼児のように思い切り首を横に振り、もう一度「だめだ」と言った。

かつてオビⅡワンも「頼むから殺してくれ」と強く願ったことがある。だがそのとき、脳裏に浮かんだのはその場で誰かに殺されるのではなく、自死でもなく、都合よく訪れる死の妄想だけだった。アナキンはそれと同じことを望んでいる。

「だめだ。一人で行くな」

「嫌です。これは私の選択だ」

「お前の選択だろうと何だろうとだめだ。行かないでくれ。私のそばにいてくれ」
「なぜです？ いったい何のために？」

「私のためだ！」

その大声は、あたり一帯に響き渡った。声を荒げたことを少しも恥に思わなかったのは初めてだった。後悔もない。オビ＝ワンは目に力を入れてアナキンを見つめ、噛んでいた下唇を解放した。

「……頼むから、そばにいてくれ。私はもう死にたくない。心を殺したくない。生きていたい。もう二度と悲しみと後悔の中で生きたくない。お前が生きていてくれたらそれがかなうんだ。もう師弟でなくていい、友達でなくていい、どんな形でも、ずっとそばにいてくれたら、」

両腕をつかんでいた手を剥がされ、代わりにそっと抱き寄せられた。つるりとした素材のアーマーに顔が押しつけられたとき、ようやく自分が涙を流していることに気がついた。

「よかった」

「、何がだ」

「あなたがわがままを言うてくれてよかった」

目を拭いたかったが強く抱きしめられているのでそれできない。アナキンはマスクごしにふふ、と笑い、少しだけ力をゆるめた。

「子供のころ、あなたはいつも他人が一番で私のことを後回しにしていると思っていたけれど、本当は違うんだ。いつだって私を一番大事にしてくれた。クワイ＝ガンに託されたときから、ずっと今まで。けれどそれを少しも実感できなかったのはあなたが自分のことをいつも後回しにしていたからだ。自分だけはいつ死んでもいいと思っていて、私が幸せになりさえすれば自分はどうでもいい

と違ってたから。あなたのことが大事な私のことを少しも大事にしてくれないから。ここにきててもあなたは私を救うことだけに夢中で、あなた自身を救おうとはしてくれなかったから。でもあなたはやっとな『生きたい』と言ってくれた。自分の望みを言ってくれた」

体が離され、両肩に手を置かれる。

「だから……、一人で行くのはやめる。あなたのそばにいます。最後まで」

「アナキン、」

「そんな顔しないでください。あなたのわがままを私が受け入れなくて、いったい誰が受け入れてやるんですか。それにこれは私の選択なんだからどんな結果になっても後悔しません。あなたも自分を貫き通したことを、決して後悔しないでほしい」

真剣な顔で頷く。本当はもう一度抱きつきたかったが、格好が悪いからやめた。

「分かった。一緒に行こう」

「ええ。ひと思いにあいつを撃墜してやりましょう」

「お前と飛ぶのは三年ぶりだな」

「またあなたが危なくなったら助けます。空でなら足手まといにはなりませんからね。だからあのときみたいに『私のことはいいいから行け』なんて言ったら怒りますよ。こんな会話までしておいて」
「分かっているよ」

アナキンの手をつかんで立たせ、二人で空を見上げる。高く上がった二つの太陽を遮るスターデ

ストロイヤーは、地上の者たちにその姿をますますはっきりとさらしていた。

160
へ。

170

最悪その場で銃殺されるかと思ったが、さすがにそんなことはなかった。アナキンはライトセーバーを取り上げられ、後ろ手に縛られてデストロイヤーの通路を延々歩かされていた。拘束されているとはいえそばにいるのはトルーパーだけだから抜け出すことは容易だ。だが問題は盗み出すべきファイターがどこにあるかだった。入ってきたハンガーには船らしきものもなかったし、どのハンガーにもシールドだけでなくシャッターが下ろされている。いつもならうるさくパイロットや整備士が行き来しているはずの通路にも人影はない。うまく見張りを倒して自由になれても、これでは飛行可能なファイターを探しているうちにバルパティーンが戻ってきてしまう。

まずいな、と思った。対策が取られているのは明らかだ。アナキンの考えることなど、バルパティーンにはお見通しだったに違いない。そうか、分かった。だったら別の作戦だ。ようは彼と対峙できればいいわけだから、空での撃墜にこだわる必要もない。

シディアスと一対一になるなよ、というオビ・ワン忠告がふと蘇った。一人では勝てないことくらい、アナキンにも分かっている。だが一人で奴に挑むことには大きな意味がある。三年前の出来事とこの三年間とすでに失われた未来にけりをつけることができる。そのためなら何が起きても

構わない。たとえ殺されてもオビⅡワンが覚えていてくれる。アナキンが何を思いながら死んだのか、遠く離れていても彼には必ず伝わる。そう思うと気が楽だった。いまの彼ならすべて受け止めてくれるだろう。どんな愚かな選択でも、どんな未来でも。

体の力を抜き、心を落ち着ける。ジェダイだったときのやり方で力を呼び起こす。感情と混乱を鎮める。平静と調和を求めていた人々の顔を思い出す。アナキン自身が殺した人々の、最後まで気高かったたくさんの姿を。力をくれとは言わない。殺人を許せとも言わない。帰還を受け入れろとも言わない。だがオビⅡワンのそばにいただけは許してほしい。彼から正しさを、優しさを、勇気をもらうことだけは、どうか認めてほしい。いまの自分がシディアスに対抗できうるものがあるとしたらそれだけだ。

扉が開き、たったいま戻ってきたばかりのバルパティーンがゆっくりと振り向く。かつての師に別れを告げる。たとえ偽りであっても、腹黒い下心があったとしても、だまされていたとしても、彼に救われたのは本当のことだ。だからこそけりをつける。自分の愚かさをただの弱さにしないために、ここで決着をつける。見ていてくれオビⅡワン、と心の中で呼びかける。これが最後の戦いだ。フォースに選ばれた者としての、ジェダイとしての。

拘束を外し、トルーパーの手の中から自分のライトセーバーを取り返す。すぐに光刃を起動させて両手で構えると、彼は長いすから何かを抱き上げた。そのとき、決意も覚悟も何もかもすべてが吹き飛んだ。それは人間だった。人間の子供だった。年齢で言うと三歳ほどの男児だ。シディアス

は昔最高議長と呼ばれていたところを思わせるような慇懃な笑顔を浮かべ、ぐったりと眠りこけている幼児を大事そうに抱えてこう言った。

「父親に似てフォースの強い子だ」

あやすようなその声がまるで死神のようだった。

「息子に感謝しないとならんぞ、ベイダー卿。彼はお前の苦痛だらけの人生に終止符を打つ存在としてこの世に誕生したのだよ。それが運命だったのだ。運命なら、おとなしく受け入れんな」

(ED20・苦痛の終焉)

171

ほどなくして港に着くと、街は異様に静まり返っていた。住民たちの姿はなく、普段騒がしいカントリーナや雑貨屋も営業していない。帝国軍がやってきてあちこちで戦闘をしていることは一目瞭然だから身を潜めているのだろう。人々を巻き込まなくて済むのはありがたいが、このさみしい街がタトゥーインの見納めだと思うと少々残念な気がする。

ジャバの手下も見張りもないドッキングベイに押し入ったとたん、アナキンは一目で盗むべき船を決めた。古いシャトルだが機銃だけは最新式で、シールドがついている。シールドの有無は死活問題だ。圧倒的劣勢ならシールドの強度が生存を決める。アナキンは慣れた手つきで船に不法侵入し、勝手にエンジンをかけ、勝手にナビコンピューターを起動した。

「エネルギーの残量はどうか？」

「まあまあですね。今からコルサントに行って戻ってくるというなら微妙なところですが、タトゥー
イーン上空を飛ぶだけなら問題ありません」

「そうか。なら操縦は任せるぞ。私は銃座につく」

「あなたの腕がなまってることを祈ってます」

その軽口を聞き流し、狭苦しい通路を抜けて後方の銃座に陣取った。ドーム状の屋根から機銃が
突き出している、懐かしいタイプの銃座だ。操作方法を確認しているうちに船はあわただしく浮か
んでいき、すぐに空の中に飛び出した。

三百六十度の視界の片隅に、素っ気ない色のシャトルが浮かんでいるのが見える。一瞥しただけ
で分かる。あれは、パルパティーンの船だ。

『いたぞ、アナキン。十時の方向だ』

『見えます。向こうにも分かっているはずですよ。でも変だな。撃ってこない。ファイターを呼んでる
気配もない』

マイク越しのその声は、ほんの少しおびえているように聞こえた。

『アナキン、気に病むな。読みが外れて作戦が失敗しても死ぬわけではないぞ』

『気に病んでないません。それにまだ失敗したわけでもない。何かたくらんでいるんだ、きっと』
『我々をどこかに誘い出したんじゃないのか？ あるいは何か奥の手を隠しているのか』

そう自分で口にしたことにぞっとした。奥の手。まさか、と思う。

『何か心当たりがあるようですね、オビⅡワン』

『……ああ。すまないが、お前の作戦は失敗だ。私の読みも外れた。彼の方が一枚上手だった。いや、一枚どころではないな。はるかに上だ』

『どういうことですか？』

それを口にしていいものか迷う。いつかは打ち明けるつもりではあったが、こんなタイミングで明かしたくはなかった。できたらゆっくりと話ができる場所で、二人が生まれたときのことやパドメの最後の言葉やルークの成長の様子などを順を追って話してやりたいと思っていた。

『オビⅡワン、答えてください。いったい何なんですか？』

『いまは言えない。すまない。だが彼が手にしている奥の手は、私にとってもお前にとっても大事なものだ。これ以上なく。だから……、私は行く。罠だと分かっている、自分の命が取り引きの材料として使われると分かっている、私は行く。お前もついてきてくれ』

『勝手な言い分だな。黙って言うことを聞けなんて』

深い深いため息が聞こえてきた。呆れと怒りが入り交じったような息づかいだ。

『アナキン、もし嫌なら、』

『いいですよ。行きます。だって、あいつを撃墜したらまずいでしょう？』

『ああ。それだけはよせ。おそらくシャトルの中にいる』

『だったら船に乗っていても意味がない。あなたと行きますよ』

アナキンは船を旋回させてゆっくりと巨大な戦艦へと近づいていった。さらに船についている武装をすべて格納し、丸裸の状態になって恭順を示している。オビⅡワンも銃座からコックピットに戻り、副操縦士席に腰を下ろした。

「丸腰で奴の懷に飛び込んで生きて戻れると思いますか？」

「少なくとも私はそのつもりだよ」

「私も、と言いたいところですが、今日一日で無駄になった作戦の数を思うとついてる日だとは言いかねますね」

「まったくだ。だが完全についてないとも言えない。直接見れば納得するさ。きっと混乱するだろうが、戻れたら私が子細を話すよ。だから何を見ても動揺せずに落ち着いてくれ、私を信じて」
「……そこまで言われると少し怖いな」

「大丈夫」

腕を伸ばし、アナキンの肩に置く。

「私がついてる。お前が跳ね返せない攻撃でも、私なら弾ける。それぞれ一人では乗り切れない難局でも、二人なら乗り切れる。いつでもそうだったろう」

彼は息をもらすように笑った。最初は機械的で平坦だと思っていた発声器ごしの声や息づかいが、だんだん表情豊かになってきている。これならフォースで繋がっていなくても彼が何を考えている

のか分かる。いまは「仕方ないな」といったところだ。

「生き残りましょう、オビⅡワン」

「ああ」

「あなたにも私がついてる。いつものようにあなたが便利に使われそうになっても、私がきっぱりノーと言う。だから安心して交渉に臨んでください」

「頼もしいことだ」

船はトラクタービームに引っ張られ、ほとんどデストロイヤーの鼻先に触れんばかりになっていた。やがてレイシールドで遮られた小さなハンガーが見えてくる。ここが終着点だ。落とし戸と白い部屋に始まり、時空を超え、心を通わせ、二人で戦った不思議な日々の終わり。ハンガーに吸い込まれてしまう前、オビⅡワンは一瞬だけ目を閉じてその日々に別れを告げた。ここからどこへ行くのかは分からない。だが、もう後悔だけはしたくない。

191へ。

172

応答してはまずいことになる。そんな予想は子供にでもできる。パルパティーンはまず失踪の理由を彼に尋ねるだろう。そして当然の帰結として現在地を知りたがる。その二つを聞かれたら、彼の弟子であるアナキンにごまかし切ることはできない。弟子はマスターに嘘をつくことなどできな

いからだ。オビⅡワンもたいいの嘘を嘘だと知りながら目をつぶってきた。クワイⅡガンはオビⅡワンが嘘をつくとき決まって微笑したし、アナキンはアソーカがついた小さな嘘をいつまでも覚えていた。だから、ここは無視するのが一番いい。

ヘルメットに当てた手をそっと押さえ、胸のところに持ってきて握る。そして強く彼を見つめる。応答するな、とフォースを介して伝える。それだけで分かったのか、アナキンはしばらくの間ぴくりとも動かずに電子音をやり過ごしていた。頭が痛くなりそうな音だ。通信機器はヘルメットの中で完結しているのだから本来なら外に聞かせる必要のない音なのに外に響く設定になっているのは、周囲に命令者の存在を知らせて回るためだろう。そして自分が誰の意志で動いているのか、彼自身に思い知らせるためでもある。

何分か経ってようやく音が途切れると、二人は同時にため息をついた。彼の手を解放し、その場に座り込むと、アナキンは戸惑ったように口を開いた。

「なぜ、」

その先に続く言葉は明白だ。なぜ、皇帝の呼びかけに応えさせなかったのか。「それは……私の都合だよ。ここに攻め込んでこられたくないからだ」

「私がシディアス卿に何を言うと思ったんだ？」

「分らない。しかしリスクは避けたい。お前を微妙な立場に置いてすまないが、私にも守りたいものがある」

「なるほど。それほど命が惜しいか」

「私の命など、ここで穫れる水一滴ほどの価値もないさ。もはや私が生きている意味などない。守るべきものがなければな」

そう言い切ると、アナキンは怒ったように息を短く吸い込んだ。何かに思い当たったのか。「守るべきもの」という言葉が指し示すものを知っているのかもしれない。

ルークとレイアのことを正直に話すなら、

164へ。

やめておくなら、

193へ。

173

「やっぱり欲しかつ、たんじやないですか。朝あんなだったのは何なんですか？ 計算？」

今朝軽いキスすら嫌がり、あいまいな言葉で逃げていた人だとは思えない。もしかしたらじらすことでその後のあれこれを盛り上げようとしていたのではないか、と一瞬思ったがオビワンにそんな駆け引きができるわけはなかった。

「何、の話だ」

「キスもしたくないくらい嫌がってたのにすごい乗り気じゃないですか、って言いたいんですよ」

「……そういえばお前は昔からいつも突拍子もない妄想をしていたな」

「あなたは昔からいつも苦しい言い逃れしてましたね」

オビⅡワンは重たいため息をつき、体を横向きにして起き上がった。

「何だかさっぱり分らないが、再開する気がないなら話の方を再開しよう。あれからずいぶん経っているぞ」

「は？ 冗談ですよ？ このまま終われっていうんですか」

「ああ。お前は口を使う方が好きなんだろうからな」

「ある意味ではね」

唇、あご、胸ときて最後に硬くなりきったペニスに吸いつき、無理やり脚を開かせてゆっくりと挿入する。あれだけ達した後なのに欲望と期待のせいか目つきがぼうつとしている。

「中がぎゅうぎゅう動いてる。待ちきれなかった？」

奥まで収めきってしまうと、オビⅡワンは何度も短くあえいで足先で宙を掻いた。

「続きをしてほしいなら拗ねてないでそう言うてくださいよ。僕がほんとにやめたらどうするつもりだったんですか」

「、拗ねてない」

「はいはい、分かっていますよ。もう途中で抜いたりしませんから集中してください」

今度は態勢を変えずにひたすら腰を動かして快楽を味わう。オビⅡワンはときどき目を開けたり閉じたりし、ときどき絶頂を挟みながらアナキンの体にしがみついてこようとした。なのに手が届かないから言葉になる。アナキン、と呼ぶ声がひどく不安に聞こえる。

子供のころ、けがをするたびにあわてたマスターがこんな風に自分を呼んだ。だがあのとときと違って呼びかけは終わらない。その後何らかの言葉にもならない。たった九歳だった自分を守ってくれ何かにつけて心配してくれた厳しいマスターを、十何年も経った今こうやって組み敷いて犯しているのがいまだに信じられなかった。彼の中で達するときはいつも、聖堂に来たばかりのころごくたまに見せてくれたぎこちない笑顔が頭に浮かんた。その顔を見ると不安と恐怖が溶けだしていき、さうなほど安心した。マスターはきつと鏡のようなものなのだ。彼が笑ってくれたらうれしくなつて、彼が悲しい顔をしていたら落ち込んで、彼が怒ったら自分も腹が立った。彼が自分を受け入れてくれたら彼のどんなところでも受け入れたいし、彼が少しでも優しくしてくれるなら全身全霊をかけて優しくしたい。甘ったれてることくらい分かっている。けれど、弟子というものはきつとずっとそうなのだ。あなたに優しくされたい。厳しく叱ってほしい。そして、どんな過ちでも受け入れてほしい。

(おわり)

174 死にかけているアナキンを前にして、いったい何をするべきだろう。

ともに死のうと思うなら、182へ。

もう一度地下室の扉をのぞくなら、177へ。

しばらくこのまま様子を見てみるなら、
166へ。

175

どうやら起き上がることまではできないらしかった。仰向けになったまま力なく首をこちらに向けてくる。

「よかった、意識が戻ったんだな」

「ここは？」

そう聞かれて初めて気がついた。周囲を見回すことさえ忘れていた。

「ええと……そうだな、どうやら私の家のようだ。タトゥイーンのもの。我々は元の時代に帰ってきたらしいな」

「どうして分かる？」

「つい最近ジャワにスキヤナーと交換してもらったばかりの酒がそこに置いてあるからだ。内装も物の配置も出たときのままになってる」

とはいえ首しか動かせないアナキンには見えない。オビⅡワンは彼の重い頭部と肩を持ち上げて自分の膝に乗せた。

「私と入れ替わりで来ていたんだからお前も知ってるだろう。見えるか？ 特に、その脇に立ってかけてあるパイプだ。お前がいつも倒して帰っていたから置き場所を邪魔にならないところに変え

たんだ。気づかなかっただろうがね」

「それくらいは分かっていた」

「お前が一度も椅子やソファに座らなかつたことも分かつたよ。座られたらおそらく重みで壊れた」
両腕で頭を抱え直しながらそう言うのと、どこことなく拗ねたような空気が伝わってきた。

「どちらも一から私が作つたんだ。プラステイルの廃材で。だがどうにも繋ぎ方が悪くて、私の体重でさえ座るたびぎいぎい音を立てる。重いものを置いたら間違ひなくばらばらになるだろう」
「……こっちにもいつも砂だらけの足跡が残っていた」

つい笑い出しそうになった。拗ねたよう、ではなく、彼ははっきりと拗ねている。

「私の椅子にも通路にも細かい砂が残っていて掃除に苦労させられた」

「お前が一人で掃除しているのか？ あの大いシャトルを？ 感心だな。シスの暗黒卿ともあろう者が人をあごで使わず自ら掃除とは」

「砂が見つかつて部下に怪しまれたら困るからだ！ 誰のせいだと思つてる？」

そのまま勢いあまつて体を起こそうとし、彼は弾かれたようにせき込んだ。

「まだしばらくは興奮するな。お前は死から蘇つたばかりなんだぞ」

「だったら興奮させるようなことを言わないでください。意地の悪い」

顔は見えないのに、目を閉じたのが分かつた。疲れているのだろう。胸のランプが伝えてくる彼の心拍数は妙に速く、体内の酸素の量も足りていない。背すじがひやりとした。もしかしたら、ア

ナキンの弱り切った肉体は超時空のワープに耐えられなかったのかもしれない。

アナキンを医療施設に連れて行くなら、**157**へ。

ここでしばらく休ませるなら、**166**へ。

176

もっとも大事なのは、ルークに危険が及ばないようにすることだ。アナキンはかの双子の生存を知らない。知ればおそらく自ら死地に飛び込もうとするだろう。だから、まだ彼には教えられない。だがルークをみすみす死なせるわけにはいかない。この問題は、オビⅡワンが責任を持って何とかしなければならぬのだ。

その夜、アナキンが寝ついたのはとうに夜半をすぎた時間だった。オビⅡワンはそっと寝床を抜け出し、立ったまま眠っていたイオビーを叩き起こしてラーズ農場へと急いだ。

クレイトドラゴンでさえとくに眠っている時間だ。ルークもオーウェンもブルーもすでにベッドの中だろう。そのときようやく気づいた。こんな真夜中にこの星から逃げる手段はない。行動を起こすにしても、せめて朝にならないとまずい。

オビⅡワンはしばらく考えを巡らせた挙げ句、ホロメッセージを残すことにした。「もしかしたら明日かあさって、この星に帝国軍がやってくるかもしれない。君たちに危険が及ばないように行動するつもりだが、念のためこの星から脱出してほしい」。改めて言葉にすると馬鹿馬鹿しい

ほど冗談じみていた。だが真実だし、切実な願いでもある。

どうか私を信じて言うとおりにしてほしい、と付け加え、オビⅡワンは足早に農場を立ち去った。

チェックポイント「R・フォースボンド」に2と記入し、158へ。

177

シディアスに知られずに彼を治療することは、オビⅡワンにはできなくてもフォースにならできるかもしれない。フォースのおかげで今まで不可思議なことが何度も起こってきた。フォースは地下室の落とし戸をアナキンの乗っていたシャトルと繋げたり、自分たちを戦争中のあの時代にワープさせたり、用が済んだら元に戻したりしてきたのだ。だったらアナキンの命を救うことくらいお手の物だろう。いま地下室に繋がる落とし戸を開けたらコルサントのメドセンターと繋がっているかもしれない。それとも都合よく様々なものが揃っていて従順なドロイドがやっている診療所か。

オビⅡワンはアナキンの上半身をそっと床に横たえ、静かに落とし戸へと向かった。心臓がどきどきする。不思議なことが起こるのはいいが、オビⅡワンの想像の範囲を超えたことだったらと思うと少し恐ろしかった。何をしてるかまわらないが、この状態のアナキンを一人にするようなことだけはほしくない。オビⅡワンがいなくなったら彼は一人きりで死を迎えることになる。他のことなら何でもいい。だがそれだけはだめだ。どうか頼む、と小さくつぶやき、思い切って落とし戸を開ける。ぎゅうとつぶっていた目を恐る恐る開け、光の洪水に備えようとする。

が、予想に反して中は薄暗かった。かびくさくて埃くさくて風が入ったせいで細かい砂が舞い上がっている。

「まさか」

グロロッドで照らしながら中を巡ってみると、そこには拍子抜けするほど何でもない光景が広がっていた。まず貯水タンク。タンクから飲料用にくつか瓶に分けて詰めた水。硬いパン。干し肉。怪しげな多肉植物の漬け物。それに秘蔵の酒と、いつかに買ったまま放置していた珍しい果物。手作りのみずぼらしい作業台。そして二本のライトセーバーが入った金庫。これはどこからどう見ても元の地下室だ。元に戻ったのだ。

はああ、と息を吐き、明かりを消す。戻ったのは何よりだが、魔法の力が働いてくれないとアナキンを助けることができない。いや、違う。そもそも奇跡に頼るのが間違いだ。自分の力でどうかしなければ意味がない。

オビIIワンは不思議にまだ腐っていない果物だけを手に取り、外に出て落とし戸を閉めた。とにかく今は彼のところに戻らなければならない。

174へ。

178

音がして振り向くと、目覚めたらしいアナキンが立ち上がろうとしているところだった。急いで

駆け寄り上半身を支える。

「無理をするな」

そのまま抱き起こすと頭がぐりと下がりがけた。ヘルメットが重いのだろう。これを支えるだけの首と肩の筋力がまず必要だ。

「まだ休んでいたいなら眠っていていい。それとも床では寝づらいか？」

「……そうでもない」

「だったらいい。眠いなら寝ていなさい。眠くないなら座っている。いま水を持ってくるから」

一瞬だけローブを強くつかまれ、すぐに離された。どきりとする。子供のころのアナキンがよくやっていた仕草だ。眠りに落ちる寸前や不安なとき、オビⅡワンとしばらく離れる前、たいていマスターに大っぴらに甘えられなくて、口では何も言えなくて、ローブをつかむという行動に出ることがあった。そんなことを思ったとき、急に不思議な気分になった。マスクの下に九歳のころの彼がいるような気がする。母親から離され、故郷をあとにし、たった一人で聖堂に飛び込まなければならなかった子供がそこにいるような気がする。ひとりぼっちになった二十五歳のオビⅡワンと、ひとりぼっちになった九歳のアナキンが、ふたたび眼前に現れたような気がする。

しかしそのぼやけた幻覚は耳障りな電子音のおかげで破られた。オビⅡワンの家にそんな音を出すものはない。この家の元の持ち主が取りつけた警報装置は壊れたままだし、故障したとき警告音を鳴らしてくれるような文化的な機械もここにはない。だから自然と目の前のアナキンに目がいつ

た。また胸のパネルだろうか。だがバイタルはいたって平常だ。マスクの視線が反射的といった様子で自分の腕へと向かい、すぐ戻った。そして手でヘルメットの側頭部に触れ、おずおずとオビⅡワンに目をやる。それを見て悟った。そのけたたましい音の元は、コムリンクだ。通信機器は彼のヘルメットに内蔵されているからわざとなくすことも無視することも許されない。

誰からの呼び出しなのかは聞かなくても分かっていた。皇帝だ。彼は、突然姿を消した弟子を探している。

応答するように勧めるなら、189へ。

無視を続けさせるなら、172へ。

179

「……やはり眠ろう。いつここが襲撃されるか分からないし、やることがたくさんあるからな」

アナキンをベッドの上に追い立て、無理やり寝かせて毛布をかける。すると彼は怒ったように深く息を吐き、仰向けのままオビⅡワンをにらみつけてきた。ような気がする。

「また怒っているのか」

「さっきと何も変わってないからだ」

「分かった分かった。悪かった。お前の体が心配なのだよ。それに、せめて走って逃げられるくらいの体力を取り戻してほしいという気持ちもある。向こうにはフォース感应者やライトセーバーの

使い手もいるんだろう？ 乱戦になったら必ずお前を守り切れる自信はない」

「守ってもらわなくても結構だ。自分で戦えます。暗黒面の力を失ったとしても、ずっと訓練をさぼっていたあなたよりはまだ強い自信がある」

指の背でヘルメットを撫で、手のひらでとん、と軽く叩く。

「そうか。少しでも戦力になってくれることを期待しているよ」

「それはこっちのセリフですよ」

彼がふっと笑った顔が見えるようだった。しかし徐々に平坦な寝息が聞こえてくると、少し後悔した。無理をさせすぎたのかもしれない。

チェックポイント「R・フォースボンド」に1と記入し、158へ。

180

作戦を成功させるためのもっとも大事な鍵は、言うまでもなくライトセーバーだ。いまの自分たちは二人でも半人前以下だが、ライトセーバーさえあればどうにか大軍を相手にすることができ。だがアナキンは自分のライトセーバーを持っていない。時空を旅したときになくしてしまったのかシャトルの爆発に巻き込まれたのかは知らないが、とにかくいまの彼は丸腰だ。それを解決する手段は地下室にある。

かつての彼のライトセーバーは、あれ以来一度も使われる機会がないままずっと金庫にしまわれ

ていた。いつかルークが成人して彼の運命の輪が回り始めたら渡してやろうと思っていたのにまさか本人に返すはめになるとは思いもしなかった。だがその方がいい。ずっといい。灰は灰に、塵は塵に、アナキンのものはアナキンに還るべきだからだ。

オビⅡワンは落とし戸に手をかけ、一気に開けた。自分たちをさんざん思わぬ場所へ導いた穴からは魔法の代わりにかびと埃が舞い上がり、鼻の奥をむずむずさせる。無言でアナキンを振り向き、ひとつ頷いて地下室へと降りていくと、まるで二人を誘導するかのようにはうっと明るくなった。終点はライトセーバーが入っている金庫だ。

キーパッドを操作してトラップを外し、金庫の扉を開ける。とたんに冷たく濃密な空気が流れ出し、ぴりぴりと肌を刺激していく。その風は否応なく何か大事が起こる予兆を感じさせ、もう元には戻れないことを言外に告げる。オビⅡワンは中から二本のライトセーバーを取り出して扉を元通り閉める。目に見えない粒子はますます強く鼓動を速めさせ、声をかすれさせる。

「お前のだ、アナキン。さあ、受け取りなさい」

かつてのアナキンのライトセーバーはクロームの銀色に輝いていた。明るいところで見るとそれ自身が発光したようになり、ぐんぐん光をたくわえて放出し続ける。その光はまぶしすぎるほどで、彼を強く照らすと同時に影を濃くした。

そのせいか、アナキンは少しうろたえているように見えた。強すぎる光は弱いものを焼き尽くしてしまう。オビⅡワンでさえ触れているだけでひりひりと痛い。早く手放してしまいたくなる。「お

前が持つな」とでも言いたげな痛みだ。

そのときはっきりと分かった。このライトセーバーは意志を持っている。自らの意志で主人の元に戻ろうとしている。

「分かるか？」

「、ええ」

「彼はお前の元に帰りたがっている。一刻も早く。さあ、取りなさい」

「いいや、だめだ。受け取れない。私にはそれを持つ資格はない」

アナキンは小さな歩幅で後ずさり、力なく首を横に振った。

「それはあなたが使ってください、オビⅡワン。私はブラスターでじゅうぶんだ」

「今さら恐れるのか？」

「当然です」

ついに後退できなくなり、背中が壁にぶつかる。

「私には後ろめたくないことなどない。過去に対して胸を張れることなどひとつもない。なのに、それは私を容赦なく暴き立てる。すべてを照らし尽くし、白日のもとにさらそうとする。それを使えば、私は一瞬で消し炭になるでしょう」

「お前の心が、だな」

オビⅡワンはため息をつき、掲げていたライトセーバーをさらに前に突き出した。

「いまのお前がこれを使うに値しないかどうかは分からないよ。それはお前自身が決めることだ。だが受け入れたくないと言うなら、どのみちお前は死ぬしかない」

手の中のライトセーバーは身もだえるようにびくりと震えた。それは誰のものより優美な形をしていて、とても彼らしい。

「心が死ぬか、体が死ぬかを選べと？」

「私の経験から言えば、体が生きている限り心が死ぬことはありえない。どれほど心を痛めつけられても、とても生きていられないと思っても、命さえあればまた蘇るチャンスはあるのだよ。この地下室がお前の船と繋がるまではとても信じられなかったが」

壁を背にしているアナキンにゆっくりと近づき、手袋をした義手にライトセーバーを握らせた。

「勇気を出して、心を開いて受け取りなさい。過去の自分に責められるようではつらいなら、いま、これから誇れるようになればいい。そのために命があるんだ。生きてさえいれば何度だってやり直せる。何度だって選べる。戻れぬ道などない。もし迷うことが怖くても、私がいる。私がついてる」

ライトセーバーを握った手に力が込められた。その瞬間、途方もない光が彼を包んだ。見たことも感じたこともないほどのフォースのうねり。しかし驚きはなかった。彼はフォースに選ばれた者だ。フォースの意志は運命を凌駕し、現実の因果を壊す。そうしてオビ＝ワンとアナキンを、過去と現在を、予言と現実を、ふたたび繋ぎ合わせたのは、この巨大な力なのだ。

「なぜあなたの住まいと私のシャトルが繋がったのか、分かった気がします」

きらきらと発光する粒子に包まれたまま、アナキンは独り言のようにそうつぶやいた。

「私がこのライトセーバーを手取るために、あなたの導きが必要だった。私が自分の意志で運命をまっとうするために、あなたの存在が必要だった。私が苦しみから自由になるために、あなたの力が必要だった。あなたは私の半身なんだ。私は、あなたから離れてはいけなかった」

まばゆい光が少しずつ収束し、強すぎる光点となって彼の手の中に収まる。

「最後までそばにいてください、オビⅡワン。あなたの力が必要だ」

「ああ」

「シディアス卿にどれほどあらがえるかは分かりませんが、できるだけやってみるつもりです。命を賭して。私が起こした不始末は私が片づける。のちの世代に禍根として残すわけにはいきません」

ライトセーバーを握る彼の手にそっと自分の手を重ねる。目を閉じ、息を整える。それが望みだったのか、と心の中でフォースに問いかける。彼に予言をまっとうさせるためにふたたび自分たちを結びつけたのか。

フォースのバランスが戻るのには喜ばしいことであるはずなのに、どうしてかそのことが腹立たしかった。オビⅡワンは彼の幸せを願っていた。本当は予言のルールではなく、自由に飛べる空を見つけてほしかった。あれほど可能性に満ちあふれていたのに、苦しみ抜いた挙句最後には予言を成就して死ぬだけなんて間違っただけじゃないか。こんなことのために今まで奮闘してきたのか？

オビⅡワンは両手を広げて彼のマスクの頬を包み込み、ぎこちなく微笑んだ。それが高望みであ

ることは分かっていた。望み通り再会し、心を通じ合わせ、フォースを繋ぎ直し、こちら側に帰還までさせたのだ。オビⅡワンにとってはそれ以上はない。むしろ報われすぎたくらいだ。だがアナキンにとっては違う。彼にはもっと幸福な人生があったはずだった。なのにかりそめの幸福しか知らないまま彼は死ぬ。明日死ぬ。オビⅡワンはそのことが悲しくて仕方ない。

チェックポイント「R・フォースボンド」に3と記入し、158へ。

181

「分かった分かった。つまり、私に世話されたくないんだ。だがお前は命を保持するためにしばらく人の手を借りるしかない。そして残念ながらここには私しかない。人を呼びつけることも不可能だ」

「そんなことくらい分かっている」

その畳みかけるような返答のせい、アナキンの怒りは一気にしぼんだ。そのとき少しだけ後悔した。もしかして怒りにかこつけて何か言いたかったのかもしれない。何かは分からないが、とても大事なことを。

「そう落ち込むな。私のことは今後、サービストロイドだとも思え」

「ドロイドなら私が作る」

「いや、いくらお前でも無理だろう。技量的な問題ではなく部品が手に入らないという意味でだ」

「なら、何かと交換してくれ」

「ジャワとか？ まともに動くドロイドだけでも貴重品だぞ」

むきになっていいるな、と思った。そもそもタトゥイーンでサービスドロイドを見かけることは皆無と言っている。彼にもそのくらい分かっているだろう。オビⅡワンはアーマーの肩に手を置き、子供に言い聞かせるように声をやわらげた。

「アナキン、少しの間我慢してくれ。私に世話されたくない気持ちは分かるが、せめてあと数日はしっかり体調を整えないと危ない」

「……分かってる」

「だったらいい。私を信用しろとまでは言わないが、自分の命を大事にしろ。それを一番に考えるなら、何も恥じることはないはずだ」

アナキンは何も応えなかった。代わりにすっかり寢床のようになってしまったラグの上に寝転がり、ほどなくしてから寝息をたて始めた。

それでいいんだ、と心の中でつぶやく。とりあえず体の方をどうにかしなければ前に進むこともできない。オビⅡワンは彼の体に毛布をかけてやり、少しでもマスクの横顔を見つめてからふたたび立ち上がった。

前提となる条件は三つある。彼のいまの境遇を考えるとこの星からは出られないし、となるとアナキンを死から救う手段はないし、オビⅡワンはもう二度と彼を置いていかないと決めている。

深呼吸をし、アナキンの頭と肩をもう一度強く抱いた。オビⅡワンの考えていることが分かったのか、彼はほんのわずかに、身をすり寄せるようににもぞもぞと動いた。

そっと手を伸ばし、胸のパネルの上に置く。緊急待機モードをオフにし、バイタルモニターを切り、最後に体内にある人工肺をフォースで断ち切る。

モニターをすべて切ってしまったからアラームは鳴らない。除細動器も動かない。アナキンは苦しげにうめいているがもはやオビⅡワンを弾き飛ばすほどの力もない。義手がロープをつかみ、オビⅡワンの腹のあたりにマスクの顔面を埋め、死にゆく者の最後の苦痛に耐えていた。そして彼は最後に小さな声でこう言った。「マスター」。

「……あのときもこうすればよかったな」

涙は出なかった。オビⅡワンはもはや残される者ではないからだ。彼のなきがらを抱いたままフォースを呼び起こし、最小限の力で気道をふさぐ。二分もすると苦しくて力をゆるめなくなるが、同じ苦しみを味わって死んだアナキンのことを思うとやめることはできない。のたうち回りたくてもこらえ、見苦しくないよう最後まで耐え切って、彼と同じように死ななければ。

死にもぐり耐えているうちに、彼の肩を抱いていた力が徐々に抜けてきた。ずっと苦しかっ

たのにいまは涼しくて心地がいい。そうして倒れ込んでしまう寸前に、つるりとしたヘルメットに唇が触れた。その瞬間、彼にまだ伝えていない言葉を思い出した。フォースになれば言えるだろう。か。それとも、この後悔は思わぬ形で負債として残り、のちの世代を呪い続けてしまうのだろうか。

(ED 15・後悔)

183

あごから手を離し、両手を膝の上で組み合わせる。覚悟を決めなければならない。マスターとして、友として、彼の決断をきちんと引き受けなければならない。アナキンが唯一の希望を差し出したなら、自分も同じものを返すべきだ。誠意には誠意を、信頼には信頼を、そして、虚無には虚無を。「オビⅡワン、あなたが何を言おうとしているのか分かる」

「言ってほしくないのか？」

「分らない」

彼の口調にはおびえが混じっていた。

「真実を知ることが怖いんだな。私も怖いよ。だがお前が勇気を出したのなら、私も出す。お前とパドメの子供たちは生きている。双子だ」

アナキンはがくりと頭を落とし、顔を伏せた。

「双子は男女一人ずつ、名はルークとレイア、それぞれタトゥーインとオルデランにいて守られて

いる。つい先日、二人とも三歳になった。ルークは毎日農場のそばで暴れ回っていてやんちゃだ。お前と同じくらいフォースが強い。レイアの家族とは連絡を取り合っていないが、彼女もきつと元気だと思う。お前とパドメに似て、気が強くて頑固な子供になっている予感がする。何となくだがね」

部屋の中には彼の呼吸音だけが響いている。

「二人が生まれたとき、私は彼女のそばにいた。ルークが先に生まれ、レイアが後だった。二人とも元気に泣きわめいていたよ。パドメは赤ん坊を一目見て、すぐにそれぞれを名づけた」

「では、パドメは、」

「……産み落としてすぐに亡くなった。苦しかったろうに、最後までお前のことを気にかけていたよ」

彼女の最後の言葉を思い出す。「彼にはまだ善の心が残っている」。いまなら分かる。パドメがオビィワンにその言葉を残したのは、「彼を頼む」、そして「彼を見捨てないでくれ」と言いたかったからだ。救えなかった彼女に少しでも報いることが、これから先できるだろうか。パドメが命がけで遺した言葉を最後の最後まで信じることができたのなら。

アナキンはいくら何でも言わなかった。うなだれたまま、ぴくりとも動かなかった。しかしフォースで繋がったオビィワンには彼の内心の変化も考えていることも手に取るように分かる。

「馬鹿なことを考えるなよ、アナキン」

「でも、」

「だめだ。お前は嘘がうまくない。彼の元に戻ればまた同じことの繰り返しになる」

「いまは違います。必ずやり遂げられる。迷いもない。私の手で決着をつけないとならないんだ」

「アナキン」

歩み寄ってそばにかがみ込み、こわばった腕にそっと手を置く。

「二人を守って死のうとするのはよせ。本当に彼らのために何かしたいなら物心がつくのを待って正体を明かし、顔を見せてやりなさい。きっと一生の宝物になる」

「なりませんよ。むしろ呪いだ。私が父親だと明かすことだけはできません。それをしたらきっと一生苦しめる。だったらせめて子供たちの役に立たなければ。そして役に立って早く死ななければ。それが私の運命だ。子供たちの存在を知ったのに何も行動しないのなら、私の人生に意味すらなくなってしまう」

その腕をさすりながら、彼とまったく同じことを考え続けた三年間を思った。オビⅡワンはいつかルークを守って死ぬことだけを夢見ていた。そして成人したルークがこの銀河の救世主となり、すべての希望を背負って光と平和を取り戻す。しかしその壮大な物語の中に自分はいらない。オビⅡワンは彼を運命の入り口まで導き、彼の役に立ち、そして早々に死ぬべきだった。それが銀河の、ルークの、自分の運命だと思っていた。しかしそれは盲信だ。盲信で痛みをごまかすしか、生きる方法がなかったから。

「アナキン、聞いてくれ」

震えそうになる声を必死で抑制し、彼の手を強くつかむ。

「私の経験から得た教訓を聞いてほしい。まずひとつは『焦るな』だ。焦るとたいいてい失敗する。その気持ちは分かるが、むやみに行動していいことは何もない。二つ目は『運命を信じすぎるな』だ。そんなものは自分の行動次第で変わる。そして三つ目は『自分を許せ』だ。自分を許せなくなると他のことが何も考えられなくなる」

「……『経験から得た教訓』？」

「そうだ」

必死な顔のまま頷くと、アナキンはふふ、と笑って手を握り返してきた。

「あなたがする説教にしては、確かに泥くさいな。妙にえらそうだし、たいした含蓄もない」
「悪かったな」

「どんな経験から得た教訓なのかは聞かないでおきます。きつとひどい目に遭ったんでしょね？」
「それなりにはな」

祈るような気持ちでマスクの目を見つめる。行かないでくれ、と心の中で叫ぶ。どんなに泥くさい説教でも、どんなに愚かな言葉でも、彼を死に追いやらなくて済むのなら何度でも続けたかった。死なないでくれ。死に行くのはやめてくれ。頼むから。アナキンはもう片方の手を頬に当ててきて、「分かりました」と小さくつぶやいた。

「やはり繋がっていると厄介だ。あなたの気持ちがすぐに伝わってくる」
「考え直したんだな？」

「そんなに必死に思われていたら行けません。とりあえずは保留にしておきます」

手を離し、思い切り両手を広げて彼の上半身を抱きしめた。安堵のあまり息もできない。なのに、よかった、よかった、と壊れたプロトコルドロイドのようにささやくのを止められなかった。

「あなたは変わりましたね、オビⅡワン。まさか抱きついてくるなんて思わなかった」

首に巻きついた両腕をそっと剥がし、中腰になっているオビⅡワンを自分の膝の上に座らせる。

「昔はこんなに素直に感情表現をするあなたを想像することもできなかった。私が何をしてもしつてもあなたは同じ顔をして、同じ態度を取っていた。どうやったら大笑いさせられるのか、何をしたら本気で喜んでくれるのか、どうしたら傷つけて泣かせることができるのか毎日考えてた。でもいくら考えても答えはなかったんだ。昔はただ、本当のあなたがそこにいないだけだったんだから」

「……本当の私はこれじゃない。時空を超えてお前が見てきた通りの私が本当の私だ」

「ええ。そう信じたいでしょうね。私に抱きついたことを後悔してるし、いま私の膝に乗ってることを恥ずかしいと思ってるくらいだから」

オビⅡワンは唇を曲げて低くうなった。繋がっていると本当に厄介だ。

「もっとちゃんと乗ってください。恥ずかしがらずに」

「恥ずかしがってなどいない」

「はいはい。昔のようにあなたの体重や体温を感じられないのは残念ですが、それでも伝わる。『あなた』が伝わる」

恐る恐る体重を乗せ、肩と頭を彼の上半身に預ける。アーマーとスーツの抱かれ心地はよくないし、ときどきマスクの尖った部分が頭に刺さって痛い。けれど伝わる。『彼』が伝わる。あたたかさや郷愁、たくさんさんの痛み、たくさんさんの後悔、たくさんさんの罪、二度と戻れない道、焼け焦げるような孤独、なくしてしまった希望、感情を放出しすぎて乾いた心、底流のような羞恥、死への憧れ。オビⅡワンは目を閉じ、それらのひとつひとつを抱き、ひとつひとつにキスをする。それで何が変わるわけでもないし、奇跡が起こるわけでもない。ただの感情表現だ。素直な感情を、素直に表現しただけの。アナキンの体から力が抜けてくる。オビⅡワンもつられて眠くなってくる。ようやく長い一日が終わろうとしている。だが目覚めたら今日以上に長い一日が始まるだろう。もしそれが最後の日なら、できるだけ後悔しない一日にしたい。

チェックポイント「R・フォースボンド」に2と記入し、158へ。

184

スピーダーを手に入れた二人は、大砂原を横切って危険なジャンドランド荒野に敵をおびき寄せることにした。荒野のどこかには必ずタスケンレイダーが集落を作っているし、クレイトドラゴンの巢もたくさんある。特に雄の鳴き声は咆哮に近いからいい目くらましにもなるだろう。

作戦はこうだ。まず二手に別れる。オビⅡワンは囷となって姿をさらし、アナキンは引き寄せられてきたトルーパーたちを背後から襲って挟み撃ちにする。それを何度か繰り返して大部隊を荒野

のただなかに誘う。そこそこいい作戦だ、と思った。まだ万全でないアナキンを囷にするわけにはいかないし、人けがほとんどないジャンドランド荒野は最終決戦の舞台としても悪くない。

しかし、その作戦は最初の一步を踏み出す前にすでにつまづいていた。行動を起こす前に気づくべきだったのだ。昨日の昼、彼は何と言っていた？「私のマスクに内蔵されているコムリンクは電源を切っても壊しても特殊な信号を出し続けている。近くの星系まで来て追跡装置を作動させれば、簡単に居場所が知られてしまう」……。オビⅡワンはともかく、アナキンはその意味をじゅうぶんに理解していた。いくら手持ちの機械で追跡を妨害したとしても、物量にはとてもかなわない。それなのに彼は一人になった。オビⅡワンが一人にした。

ライトセーバーで五人ほどのストームトルーパーを斬り伏せたとき、初めて「おかしい」と思った。作戦通り彼が飛び出してこないからではない。フォースを介して彼の不安と緊張が強く伝わってきたからだ。

すぐにアナキンを探しに行くなら、
さらにフォースの気配を探るなら、
197190へ。

185

この後は作戦通り二手に分かれてアナキンに敵を引きつけさせるだけだが、通信機がない以上連絡を取り合うことはできない。一応綿密に作戦を立ててはいるものの互いに何か危険が巻き込まれ

たらフォースの繋がりで何となく察し合うしかない。

なのにスピーダーにまたがったアナキンは不安そうな様子を見せずに去っていった。別れの言葉もない。また会おうという確認もしない。だが昔はいつもこうだった。別れも言わずに別れ、軽口を叩き合って再会した。いつか失われることを心配したことはないし、二度と会えなくなると思ったこともなかった。

オビIIワンは名残を惜しむようにあごをひと撫でしてから顔を上げた。感傷に浸るより先にすべきことがある。まず作戦を成功させなければ本当に二度と会えなくなる。

スピーダーを隠してフリークライミングで断崖の上によじ登り、もっとも見晴らしのいい場所に陣取る。ここからならオビIIワンの元住居も、ラーズ家も、少し首をひねればアンカーヘッドやモス・アイズリー宇宙港まで見渡すことができる。アナキンは作戦通りモス・アイズリーに向かっていて、大砂原に散らばったトルーパーたちを引き連れ蛇行しながら宇宙港を目指している。オビIIワンの役目はこの兵士たちの数を減らすことだ。だが一人で全員を相手にはできない。できるわけもない。だから人の手を借りることにした。機械と、ドラゴンと、タスケンたちだ。

昨日アナキンが作った警報装置は思った以上に凶悪なもので、誰かが近くを通ると大音声でクレイトドラゴンの雌の鳴き声を発するようになっていた。クレイトドラゴンの雌には滅多に発情期が訪れず、その生涯を通じて雄を誘う鳴き声をあげる機会もほとんどないらしい。そのせいか雄は繁殖できるチャンスを決して逃さない。となれば雌の声がしたところに血気盛んな雄たちが殺到し、

雷のような咆哮とともにあたり一面が血の海になるのは当然の帰結というわけだ。

さらに荒野にはタスケンレイダーがいる。彼らはクレイトドラゴンを心底恐れており、繁殖期の雌の鳴き声を聞くといっせいに臨戦状態になる。出くわした者は容赦なく半殺しにされその場に縛りつけられて、猛り狂ったクレイトドラゴンを足止めする生け贄として使われる。

タトゥインならではの恐ろしい連鎖反応だが、敵の数を減らすのには役立つ。オビⅡワンはその殺戮を高みから見物し、機械とドラゴンとタスケンが血祭りに上げそこねたトルーパーたちから武器と足を奪えばいいだけだ。楽な仕事だと思う。アナキンよりはよほど。彼は命をかけている。いつ無惨に刺し殺されるかわからない状況で平静を保ち、一人でシディアスをおびき寄せている。

クレイトドラゴンの雄が半分になってしまった人体を放り投げる様子を眺めながら、オビⅡワンはきつく唇を噛んだ。双眼鏡を構えている手が不安にこわばる。とくに覚悟は決めたはずなのに、それでも恐ろしくなる。嫌な予感が次々にわき出て止まらない。アナキンを一人にしてはいけないような気がする。彼を一人でシディアスに立ち向かわせたら、間違いなく彼は死ぬ。それどころか何か悪いことが連鎖的に起こってしまうような……。

オビⅡワンは古びた双眼鏡を下ろして目を閉じた。通信機がないなら現状確認などできない。ただ自分が安心したいだけのための確認にだって意味はない。するべきことは選択だ。そして行動。何をしたら一番いいのか、それに、自分が何をしたいのか、それがますます問題だ。

アナキンを追いかけるなら、

アナキンを信じて作戦をやり遂げるなら、
 ルークの様子を見に行くなら、
 192へ。
 202へ。

186

その戦いを目で追うことはほとんど不可能だった。アナキンはシディアスの縦横無尽の打ち込みをひとつずつ正確に受け切っている。怒濤のようなフォースの流れを読み、無理のない動きで受け流し、そしてその間隙をついて攻撃に転じる。しかし深追いはせず、相手が態勢を立て直し始めるとふたたび強力な一太刀を防ぐことに集中し始める。スタンスは広く、昔ほどの力強さがないぶんよく見えているし技巧にも長けている。

違う、と思った。これはアナキンではない。少なくとも、オビⅡワンの知っているアナキンの戦い方ではない。昔の彼は相手が隙を見せようと見せまいと、力強さと押し切りで体力を削っていた。踏み込みは深く、相手がひるんでいなければ容易に戻れないところまで飛び込もうとする。受けは浅く、そのぶんを打ち込みにつぎ込む。相手の攻撃を受けるより前に反撃できなくなるまで叩くのが彼の防御のセオリーだった。

なのにいまの彼はまるで違う。いまの彼は、むしろオビⅡワンが乗り移ったかのようなのだ。一撃で首を落とすような戦い方はせず、受けながら相手の出方を探り、太刀筋どころか性格や好みまで見切って反撃する。アナキンはその戦い方をもっとも嫌っていた。「マスターらしい消極的な手ですね」

「いつも笑っていた。彼に何が起こったのだろう。この短い時間で何を身に着けた？」「力を借りる」などと言っていたが簡単にできることではない。彼の中にいったいどれだけの「オビ・ワン・ケノービ」が蓄積されていたのだろう。そして、それが発揮される日をどれだけ待っていたのだろう？

しかしそれでも隙はできる。いまの彼には分かっている見えない箇所、反応できないタイミングがある。アナキンは大きな体を生かして思い切りシディアスを弾き飛ばし、広い歩幅でステップを踏み、追撃に向かった。当然シディアスはその膝を狙っていて、信じがたいほど低い位置から赤いライトセーバーが飛んでくる。視界の狭いアナキンにはその軌道が追えていない。まずい、思ったとき、無意識に手が出ていた。アナキンの両膝から下を両断しようとしていたライトセーバーはフォースに遮られてぴたりと止まり、急に興味を失ったように床に転がった。

「……見ててくださいと言ったのに、もう」

「すまない。因縁の師弟対決を邪魔する気はなかったが、約束したことは守る。お前が跳ね返せない攻撃は私が弾くと言っただろう？」

笑い声が静かな室内に響いた。シディアスはゆっくりと笑いを収めて立ち上がり、ライトセーバーをもう一本出して起動させた。

「これはこれは、気が利かなかったようで失礼した。せっかくの祝宴に参加させられないまま殺してしまふところだったよ」

「無理をしなくていいぞ、ご老人。アナキンの相手だけで手一杯だろう。無力と侮っていた弟子が

予想以上に成長していて焦ったか？」

「ふん、貴様はそうやって相手を侮辱し怒りを煽って冷静さを失わせる戦い方が得意らしいな」

「おや、『ご老人』は侮辱だったようだな。失礼した。それでは正々堂々戦うとするか」

視線を向けて頷くと、アナキンも返事の代わりに頷いた。スペースを空けて横に並び、それぞれに構える。フォースを通じて彼の感情、彼の思考、彼の怒り、彼の悲しみ、彼の静かな覚悟が伝わってくる。同じように彼にもオビ・ワンの心情が伝わっているだろう。伝わったものを互いに受け入れ合うことでひとつになり、ひとつの生き物として動くことができるようになる。懐かしい感覚だ。だがもっと強い。昔よりもさらに深いところで繋がっている。自分たちがこれほどかたくひとつになれるなら、これから何が起きたとしてもきっと大丈夫だという気がした。

198へ。

187

まず変化に気づいたのはアナキンだった。そのとき彼は電子双眼鏡を手にしていて、家の窓から峡谷の向こうを眺めていた。窓の横に常備してある双眼鏡はジャワに交換してもらったもので、昔使っていたものに比べると性能は格段に落ちる。だがここでオビ・ワンが見たいものはひとつしかないから何の問題もなかった。つまり、ラーズ家の周囲の様子がはっきりと見えればいいのか。逆に言えば、この双眼鏡ではっきり見えるのはラーズ家の周囲までということになる。

オビⅡワン、と静かに呼ぶ声が聞こえ、オビⅡワンは作業の手を止めて駆け寄った。

「どうした？ 何か見えたか」

「峡谷の向こうに煙が上がってます。二、三、……複数だ」

瞬きもできなかった。アナキンが見ているのは、ラーズ家のある方向だ。

「……まずい」

「ええ。どうやら周囲の農家を焼き払って我々をおびき出す作戦にしたようですね」

胸に手を当て、動悸を鎮める。あわてるな。分かっていたことだ。パルパティーンのやり口は知っている。

「大丈夫。私をおびき出したいなら、いきなり住民を殺したりはしないはずだ。むしろ餌にする」

オビⅡワンは自分に言い聞かせるようにそう言った。

「ええ、そうだと思います。捕まってることには違いありませんがね」

「だったら逆にこちらにおびき寄せねば」

大きく深呼吸をし、アナキンと目を見合わせる。

「で、どうするんです？」

「ここにも火の手をあげるんだ。いい目印になる」

一瞬遅れてひきつったような笑い声があった。マスクから漏れ出る笑いは嗚咽にも聞こえる。

「あなたのそういう、何事にも執着のない性格は大きな武器だな」

「皮肉か？」

「まさか。生き残るためにもっとも必要なことだ。あなたから離れて、ようやく分かりました。だからこそあなたは強いのだと」

アナキンは工具を手に取り、ラグをどかして落とし戸を指した。

「まず必要なのはこの扉の溶接ですね。あの金庫の中から取り出すべきものや他に入れておきたいものはありませんか。ジェダイの秘密を誰かに伝えたいなら、文献だけでは不十分では？」

「ライトセーバーは取り出したしもうない。それより、私の意図がよく分かったな。地下室に本を隠しておいたのが分かったのか」

「当然でしょう。あなたの考えていることくらい分かる。あなたが日記に書きそうなこともね」

まぶしすぎるほどの光を発しながら、アナキンは素早く落とし戸を固めてふさいでいく。なるべく継ぎ跡が目立たないように均等に、床の模様であるかのように一定に。まるで熟練した職人の技だ。とてもオビールワンに真似はできない。だが見惚れている場合ではない。よく煙が上がるようにするためには火をつけるだけでなくさらなる工夫が必要だ。

194
へ。

188

扉を閉め、ローブを脱ぎ、ブーツの底についた砂を落としてから居間に入ると、アナキンがすで

に起き出していた。椅子に座り、何かの機械を熱心にいじっている。

「起きていたのか。体調はどうだ」

返事はない。他の音は耳に入らず小さな工具で何らかのねじを留めているその姿は、まるで昔の彼そのものだった。

「アナキン、返事をしなさい。悪い癖だぞ」

ついそう言ってしまったから後悔した。まるで彼がバダワンだったころのような叱り方だ。しかしアナキンは素直に顔を上げ、機械を脇に置いてからうつむいた。目を擦りたくなった。マスクとアーマーの下に彼が見える。

「体調は、悪くない」

「それはよかった。休んだ甲斐があったな」

「ああ。それと、地下室にあった工具を勝手に出した」

「構わないよ。いったい何を作っているんだ？」

黒い手袋が手のひら大くらいの装置を撫でた。見たところ、何かの通信機器のようだった。

「これは信号の追跡を妨害するためのものだ。私のマスクに内蔵されているコムリンクは電源を切っても壊しても特殊な信号を出し続けている。近くの星系まで来て追跡装置を作動させれば、簡単に居場所が知られてしまう」

そのセリフには致命的なほど主語と目的語が欠けている。誰が彼を追跡をし、誰が誰に見つかっ

てしまうのか。しかしアナキンはそれを語ろうとはしない。

「悪いがこの家の警報装置を取り外して使わせてもらった」

「どうせ壊れているし、私には要らないものだ。他に必要な部品は？」

「長距離通信アレイの部品があればもっとしっかり妨害できるようになるが」

「そんなものは置いていない。何しろ誰とも通信する必要がない生活を送っているのね。だが、いまちやうどよく手に入れてきたばかりのものがあ

る。背負っていたバックパックを下ろし、ジャワと交換してきたばかりのものを取り出して居間のテーブルに置いた。

「そういう用途に使えるところならこれだ。原始的な無線機だが一応通信機として使える。惑星内ならなんとか通信可能だ、とジャワに言われたよ」

「あなたはジャワを信用しすぎだ」

マスク越しの声は聞いたこともないほど苦々しかった。

「奴らはものを売りつけるためならどんな嘘でも言う。こんなアンテナじゃ惑星内どころか半分にも到達できない。化粧カバーもついていないんだから、言い値の半額でも高いくらいなんだ」

「半分でじゅうぶんだ。それにカバーも要らない。通信機ではなく分解して改造し、遠隔スキャナーとして生まれ変わらせる予定だったんだ。音声だけでも常時このあたりをモニターできれば敵の接近にいち早く気づけるだろうからな」

彼はあっけに取られた顔をしたように見えた。オビⅡワンは肩をすくめ手から無線機を奪い返す。「使えそうな部品がないなら、当初の予定どおり私が使う。お前ほど手際はよくないかもしれないが楽しく改造させてもらうよ」

「待ってください」

無線機をバックパックにしまおうとした手を強くつかまれた。

「私がやる。モニターするだけでなく足止めができるようにもする。この家に余分なパワーセルは？」
「古い部品だが、一応ある。もっと欲しければライフルを分解すればいい。いざとなれば水分凝結機も使ってくれ。長居する必要がなければ不要だ」

アナキンは無言で頷いた。ほんのかすかとはいえ、もしかしたら同じ目的を持っているのかもしれないと思うと、彼をこれ以上なく頼もしい存在に感じた。わざわざ口になくても互いの言い合いことが分かるし、どれほど無茶を言っても大丈夫だと思えてしまう。だが何だか奇妙な感覚だった。まるで昔に戻ったかのようにだった。「マスターとパダワン」を卒業して、互いが誰より信頼できる相棒になっていたところが蘇ってきたようだった。

それをうれしいと思う気持ちと、どうせあとで失望するのなら期待したくないという気持ちが混じり合っている。二度失うのはきつとつらい。しかし同じ重さの絶望でも、二度目なら耐えられるかもしれない。オビⅡワンは頭を振り、荷物を整理するために地下室へ向かった。

無視できないと分かっているのにコールを放っておくのは愚策だ。なぜ応答しないのかと思われ、さらに怪しまれるだろう。オビⅡワンは厳しく首を横に振り、ヘルメットを指でこつんと叩く。するとアナキンは観念したように深く息をつき、何かをして音を止めた。

「……マスター」

彼はそう言い、深く頭を下げる。だがオビⅡワンには何も見えない。一般的なコムリンクと違ってホロ映像がマスクの中にしか映されないからだだろう。マスクの外の人間には音声も聞こえない。

「はい。想定外の事態でした。私は助かりましたが、乗員は皆、」

その言葉は力なく途切れた。そしてこぶしを床についてこうべを垂れ、何かを聞いている。

「分かりませんが、おそらく海賊のたぐいでしょう。私があのシャトルに乗っていることと任務の内容は誰にも知られていなかったはずです」

次の沈黙は長かった。うなだれている間じゅう、畏れたように息を詰めている。

「仰せの通りに。これからすぐにでも目的地に向かいます。必ずやジェダイの首を挙げ、かくまっていた者たちを皆殺しにし、近隣の星系への見せしめにする」と誓います」

ぎょっとしたが驚きはない。皇帝と黒装束の大男がジェダイ狩りを行っているのは有名な話だ。

「いえ、相手は一人です。尋問官の援護は不要かと」

その後すぐに通信が切れたらしい。アナキンはぎこちなく体を起こし、ため息をつきながらふた

たび壁にもたれかかった。

しばらくの間、何とも言えなかった。さっきの話をまとめると、彼はどうやらどこかの星にかくまわれているジェダイの生き残りを始末しに行くところだったらしい。なのに乗っていたシャトルが大破し、彼は生死不明だと思われていた。だがこうして応答した以上、命令を遂行しないわけにはいくまい。問題は、これから彼がどうするかだ。そのジェダイの元に行くというなら止めないわけにはいかない。

「私を斬り殺そうかどうか、考えている顔だ」

立ち尽くしたまま黙っていたら、ふいにそんな言葉が聞こえた。

「斬りたければ斬ってもいい。私にはライトセーバーがないから、応戦することもできない。好きにすればいい」

「意味もなく斬りつけたりはしないさ。本当にそのジェダイを殺しに行くと言うのならそうするが」
「確かにあなたはそういう人だ」

アナキンはそのまま立ち上がろうとし、ふらついて背中が壁にぶつかった。

「無理に立つな。船が撃ち落とされて命からがら逃げ延びたことになっているなら、お前がすぐに行動できないことも向こうに伝わっているはずだ。焦る必要はない」

「船を爆破したのは私だ。あの超時空に飛び込む前、爆弾を仕掛けて全員殺した。証拠隠滅のためだ。だからもう私を気遣うな」

一瞬呼吸が止まった。あの白い部屋も、あのトルーパーたちも、もうこの世にはない。だから彼はここに飛ばされてきてしまったのだろうか。入り口も出口もうないから。

「……どちらにしろ、決断も行動も起き上がれるようになってからでじゅうぶんだ。その体では大砂原を横断して宇宙港にたどり着くことさえできないぞ」

「なぜそこまでのんきに構えていられる？ 私が命令を守ろうとするとは思わないのか？」

「分からないよ。五分五分だ。もし本当に命令を実行する気なら私の前で作戦の詳細を話したりしないだろうし、私を試すようなことを言ったりもしないはずだ。だがパルパティーンの元に戻りたいというなら止める権利は私にはない。もちろん積極的にそうして欲しいと思っているわけではないし、殺人を見逃してやるつもりもないがね」

言ってしまった、と思った。ついに言ってしまった。今まであいまいなままにしておいたことを、ついに口にしてしまった。これで彼は自分の身の振り方を決めないとなくなる。何となく、で済ませてきた居心地のよさももう終わりだ。

数秒間呼吸もせずにアナキンの返答を待っていたが、彼は何も言わなかった。代わりにオビ・ワンのベッド兼ソファに腰をかけ、ふたたび横になる。機械的な寝息が聞こえてくると、ようやく息を吸い込むことができた。苦しくて死にそうだった。いったい何なんだ。

チェックポイント「Q・呼びかけと応答」に1と記入し、

201へ。

オビIIワンは胸に手を当てながら、彼が潜んでいるはずの岩陰までスปีダーを走らせた。冷や汗が止まらない。嫌な予感が収まらない。砂の上に転がったヘルメットと、ヘルメットから飛び出した首と、ライトセーバーを握りしめたまま倒れ込んでいる胴体が脳裏に浮かんで消えない。それが妄想だということくらい分かっている。分かっているのに、どうしても安心できない。

谷と谷の間を全速力で駆け抜け、目的の場所にたどり着く。スปีダーを下りて恐る恐る岩陰へのぞき込むと、そこにいたのは頭を抱えてうずくまっているアナキンだった。

「アナキン、無事か？」

すぐにかがみ込むと、彼は苦しげにあえぎながら大きく頷いた。

「私は無事です。でも作戦は失敗だ。シディアス卿がやって来る」

「例の追跡装置が働いているんだな？ 到着まであとどのくらいだ？」

「すぐです」

アナキンはそれだけ言い、上空を指さした。

空は相変わらず薄く曇っている。白くて大きな雲が低いところを漂っていて、太陽を完全に遮っているから涼しいを通り越して寒くなってくる。

「……違う。あれは雲じゃない」

「ええ、もちろん。あれはデストロイヤーだ」

思わずアナキンの腕を強くつかみ、肩を貸して立たせる。

「歩けるか？ 早く逃げないと」

「それはいいですが、どこへ逃げようと言うんです？ シディアス卿は私が生きている限りどこまでも追ってくる。どこへ逃げても必ず殺されます。あなたも私も」

「それでも今すぐ死ぬよりはましだ。スピーダーに乗れ。操縦できないなら私の後ろに乗りなさい」
ぴしゃりとそう言って無理やり歩かせる。だがアナキンは乗り気でないのか、腕を振り払って「だめだ」と吐き捨てた。

「生きている時間を数分引き延ばすだけのための選択には賛成できません。ここは二つに一つだ。思い切って単独行動を取るか、このまま二人とも死ぬか」

「お前を置いて私だけ生き延びろとでも？ 冗談を言うな」

肩を壁に押しつけて思い切りにらみつけると、アナキンは首を横に振った。

「どちらかを置いていくとか見捨てるとか、そんな段階はとくに過ぎたでしょう。私は純粹に、作戦を成功させるための提案をしてるんだ」

自然と手が離れた。その声は相変わらず平坦だが、オビワンが聞いたことのないたぐいの冷静さがあった。

「パルパティーンはこんな辺鄙な惑星に来るには非常識なくらいの大部隊を連れている。今まで我々が相手にしていたのは単なる偵察に過ぎないと思えるほどの数です。となると、万が一にも勝ち目

はない。だが奴を一人にすれば状況をひっくり返せる。二対一になるわけですからね」

「だったら彼を早く一人にするしかないな。問題は方法だが」

にやりと笑った顔がマスクの向こうに見えたような気がした。アナキンは壁に寄りかかって腕を組み、「それは簡単です」と答えた。

「私が囧になればいい。奴は私を見つけ次第すぐに殺すでしょうが、ただでは殺さないはずだ。ここに新たな弟子となるかもしれない素材がいることは、奴にも分かっているでしょう」

「私は堕ちないぞ。いくらお前を目の前で殺されてもな」

「分かっていますよ。でも奴は焦っている。私の代わりにジェダイ狩りを進め、尋問官をまとめるための強力な駒が欲しいはずだ。どうせいつでも殺せるなら試してみてもいいと考えているのでは？」

オビ＝ワンは深くため息をついた。シスの思考法は理解できない。

「……お前の言いたいことは分かった。だがお前一人で投降するのは少々リスクが高すぎないか。私といっ合流できるか分からないんだぞ」

「立ち止まっている時間をこれ以上引き延ばすことの方がずっとリスクでしょう。勇気を出してください。大丈夫ですよ。どうせ我々はいつか死んでフォースと一体になるわけですし、いつ死んでも同じです」

「馬鹿なことを言うんじゃない。生きて戻れ。私もなるべく生きて戻るよう努力する」

『『なるべく』じゃなくてもう一声欲しいところですが、まあいいです。生きて戻りましょう』

どちらともなく片手を差し出し、軽く握り合う。そして二人同時に空を見上げる。デストロイヤーはだんだん近づいてきていて、いつも不快なほど晴れ渡っていたタトゥイーンの空を目いっぱい占領している。

170へ。

191

その部屋はまるで夜のように、あるいは宇宙空間のように黒くざらざらと輝いていた。タトゥイーンの二つの太陽に照らされてもお暗く、しかし光はじゅうぶんにある。それらの不可思議な色合いを持つ内装のちょうど真ん中に彼は立っていた。椅子が真後ろにあるのに、座っているのは別の人物だ。座っているというよりは眠っている。眠っているというよりは眠らされている。

「説明は要らんようだな」

深くフードをかぶったパルパティーンは、オビ＝ワンでなくアナキンの方を見てそう言った。「父親に似てフォースの強い子だ。しょせん幼児だが、見る者が見れば恐ろしい力を持っていると分かる。実際、数年もしないうちに恐ろしい存在に成長するだろうな」

「……彼を保護していた夫婦はどうした。殺したのか？」

オビ＝ワンはできるだけ平坦な声でそう聞いた。彼のペースに引きずり込まれてはいけない。「さてな。知りたければ探せばよい」

「そうするさ。だがお前を倒してからだ」

「ゴミ粉碎機の中で死んでいなければよいがな」

彼は口角を引き上げて笑い、うるさそうにマントを払う。その陰でオビⅡワンはこっそり安堵した。大丈夫だ。ラーズ夫妻は生きている。もしかしたらひどい状態かもしれないが、それでもこの船の中のどこかで生きてはいいる。

「彼がアナキンの息子だと分かっているからさ。それとも彼らを拷問にでもかけたのか」

「少し頭を使えば分かることだ。これだけのフォースを抱えた者は銀河に二人としない。そしてアミダラの死にはいまだ不審な点が多すぎる。となれば、導き出される答えはひとつよ」

「ルークをさらった目的もひとつだな。彼は我々どちらに対しても最強の取り引き材料になる」

けたたましい笑い声が響いた。どこまでも不愉快な声なのに、なぜだか耳を傾けなければならぬような気にさせられる。

「お前たちは取り引きなどできる立場にはないのだ、愚か者め。なぜこのような幼児をこの椅子に座らせていると思う？ これは玉座だ。銀河帝国の、そしてシスの玉座。すべての知覚種族の頂点に立つ者のみ座することができる。私の弟子ともなれば、それに値する地位が約束されよう」

「馬鹿な！ ルークはまだ三歳だ。どうやってお前の弟子にする気だ？」

「お前たちジェダイはさらに幼い子供をさらって洗脳していたのではなかったか？ 己の罪を思い出せ。私を非難する前にな」

マントの陰に隠れたルークをもう一度見る。これだけ騒いでも起きないということは、彼はかなり強力で鎮静されている。薬でかフォースの力では分らないが、さらわれてから途切れることなく眠らされているのだらう。いつもはやっぱり砂漠を駆け回っている子なのに。

「……分かった。取り引きに応じよう」

「貴様のような死にかけの敗残者に取り引きなど求めておらぬわ」

「交渉する気がなければわざわざ我々をここに招くはずがない。彼の姿を見せるはずもない。いたい何が望みだ？ 私から何を引き出したい？」

「オビワン、やめてください。熱くなりすぎだ」

ずっと黙っていたアナキンが口を開いても後には引けなかった。「お前は黙っている」とうなり、一歩前に踏み出す。

「さあ言え、ダース・シディアス。何が望みだ？ 何と交換ならルークを解放する？」

「オビワン！」

ついに手が出た。手袋つきの大きな義手で顔の下半分を覆われて息もできなくなる。「な」

「あなたこそしばらく黙っていてくれ。いまのあなたは彼のために自分の命どころか今後何百年の銀河の命運すら差し出しかねない」

アナキン、と言いたいのに言えない。そのままがいていると今度は無理やり横向きに抱えられ、

口をふさがれる。

「彼の発言は忘れてくれ、シディアス卿。我々は交渉には応じない。お前が何を望もうと、何も応える気はない」

「ほう、情けない未熟者の元弟子が少しは成長したか。私が手塩にかけただけある」

「お前が私にしたことやしなかったことについて今さら何か言う気はない。いま必要なのは言葉でなく力だ。シスの師弟は常に力と支配で語り合う」

「私と力で勝負しようと言うのか、ベイダー卿？」

「そうだ、と彼は言い、オビIIワンを解放してライトセーバーを取り出した。

「私はお前と決着をつけにきた。言葉で何と言おうと、心で何と思おうと、力でそれを示せなければ私はずっとこのままだ。一生『ベイダー卿』をやめられない。悔やむことも、終わりにすることも、その先に進むこともできない。だからお前に決闘を挑む。最後くらい、策を弄せず勝負を受けろ」

「苦痛を逃れたいから来たのだな、馬鹿め。それほど死にたいか」

「まさか。生きたいからお前に挑むんだ」

ライトセーバーの柄から光刃が伸び、彼の黒いアーマーを青く照らす。その光は神々しく、同時にどこか痛々しかった。シディアスもマントの下からライトセーバーを抜き、奇妙な動作で構える。

「ではゆくぞ、かつての我が弟子よ。フォースと一体になる覚悟を決めておけ」

彼は短く「お前こそ」と答えると、後ろを振り向いてこう言った。

「ではオビⅡワン、私の中のあなたを借ります。あなたの力、あなたの正しさ、あなたの優しさも見ていてください」

186へ。

192

今日自分たちが死ぬことは、もはや決まっているようなものだ。となれば後のことを考えないとならない。つまりはルークのこと。彼は最後の希望だ。彼さえいれば、オビⅡワンもアナキンもいなくてもきつと銀河は救われる。

オビⅡワンは双眼鏡を放り出し、スピーダーに乗って荒野を駆け抜けた。そこかしこで殺戮が行われ、あちこちで悲鳴が聞こえてくる。だがそんなものは耳には入らない。ルークを見つけ、ラーズ夫妻に遺言を託し、元に戻るといふ大事な任務があるからだ。

いくつもの水分農家が燃やされたことを忘れていたわけではなかった。ルークの安否が分からないことだって、ちゃんと覚えていた。馬鹿馬鹿しい大きさのスターデストロイヤーがゆっくりと降下してくるところを目の当たりにしてもいた。

だがそれでも行かなければならなかった。彼は希望だ。救世主だ。自分たちが残らず死んだ後、きつと銀河を救ってくれるはずの唯一の人物だ。だから迷いなどない。後悔もない。

159へ。

193

こんなときにルークとレイアが存在を明かすわけにはいかない。もし話すことがあったとしても一番最後だ。危険はないと保証できるようになったとき。そんなときがいつ訪れるかは知らないが、このあいまいな状況で話せば致命的な混乱に陥るだろう。何しろ弟子はマスターに嘘をつけない。シディアスがアナキンの子の生存をちらとでも疑えば、ルークの身に危険が迫ることになる。

結局オビ＝ワンは肩をすくめただけで何も言わず、さりげなく目をそらした。

「やはり信用できないようだな」

「そうではないよ。ただ、物事には口にするべきタイミングというのがある」

「あなたらしい言い分だ」

アナキンは自嘲気味にそう答え、ラグの上に横になってまた眠り始めた。彼が子供のころからそうではあったが、腹を割って話すというのはなかなか難しい。

201へ。

194

曇り空なのが幸いした。もし今日がいつものように晴天だったら、昼間に長時間外をうろつくだけで体力を大きく削がれていたはずだ。特にアナキンは全身真っ黒ですべての熱を吸収してしまう。しかも晴れ渡った砂漠の中で黒はどうしようもないほど目立つ。本人もそれを分かっているのか、

家からイオピー色のブランケットを持ち出して頭からかぶっていた。さすがに暑いのでは、と思ったが何も言わない。必要もないのに目立ってしまつては困るからだ。

「もう見つけたのか。早いな」

ひとつしかない双眼鏡をのぞいていたアナキンは、燃えた家を眺めながらぼつりとそう言った。

「帝国軍が来たのか？」

「ストームトルーパーの一個分隊が家の前にいます。セオリー通りなら応援を呼ぶでしょう」

「部隊が集結する前に潰したいところだな。武器はブラスターだけか？」

「ライフルを提げてるのもあります。あと全員分のスピーダー」

「まさに渡りに船だな。ちょっと待っているろ」

何気なくそう言つて崖の上を見上げると、アナキンは笑いをこらえているような声で「ご無事で」と答えた。

「スピーダーの残りは壊しておいてくださいよ」

「分かっているよ。お前は引き続き警戒していてくれ」

フードを深くかぶり、周囲の景色に紛れながら砂丘を下りていく。ふもとから目を凝らしてかつての自分の家を見ると、アナキンの言うとおり全身白一色のトルーパーたちが炎の周りで何かをしていた。報告し、指示を待ち、支援を要請し、調査し、行き先を思案しているところだろう。オビワンは視界に入らない角度から忍び寄り、燃えさかる家の影に一人のトルーパーを引きずり込ん

だ。そして適当に気絶させ、白いヘルメットと武器を奪い、炎の中に放り投げる。もう一人、さらに一人、と続けていくと、ついに気づかれた。ブラスターを向けられ、形だけ両手を挙げる。

「貴様が隠れ潜んでいたジェダイだな？」

ふたたび形ばかりに頷き、残った部隊を観察する。残っているトルーパーは三人で、スピーダーはそばに固めて置いてある。よく訓練を受けていそうな兵士たちだがブラスターの構え方が定石とは違っている。昔はジェダイにブラスターを向けるとき、武器をしっかりと脇に抱えておかねばならぬ者はいなかった。フォースで奪われないようにするためだ。やれやれ、と思った。すでに世界は変わったのだ。自分たちはたった三年で忘却される程度のものだったのか。

だがいつまでも感慨に浸っているわけにはいかない。オビワンはフォースを操って三人分のブラスターを一気に奪い取り、そのまま火に投げ入れた。そして全員の頭と頭をぶつけてまたしても適当に気絶させてコムリンクつきのヘルメットを奪う。

おそらくアナキンは全員殺せと言うだろうが、スピーダーと連絡手段がなければタトゥインでは死んだも同然だ。仲間に発見してもらうか、通りがかりのジャワに拾ってもらうしか生きる道はない。

チェックポイントRに記入された数字が2以下なら、184へ。

3以上なら、185へ。

195

現時点で抱えているもっとも大きな問題は戦力だ。ろくな装備もない自分たちが差し出せるものは体力と機転くらいしかない。よく休んでどちらもフル稼働できるようにしておかなければならない。特にアナキンは死にかけた状態から回復してまだ一日も経っていないのだ。いまは眠らせ、できるだけ体力を回復させた方がいい。

毛布をアナキンの体にかけてやり、自分もラグの上に横になる。彼は何か言いたそうにしていたがそのまま目を閉じる。二つの朝日が昇り、目が覚めたら、最後の日が始まる。生きていられるかどうかは分からない。彼が生きていたかどうか分からない。生きていべきなのかも分からない。彼の生を、そして自分の生を許すべきなのかも分からない。だが一番大事なのは、自分がどうしたいかだ。

すべてはお前が考えるんだ、とクワイ||ガンは言った。頭だけでなく、心でも。ジェダイの枠を外せ。思い込みの檻を破れ。そうして初めて本当に『行動した』と言える。無茶な助言だがそれは真実だ。彼の言うとおり、心が欲するものに手を伸ばせば、後悔だけはしないはずだ。

チェックポイント「R・フォースボンド」に2と記入し、158へ。

196

さっさと準備を済ませ、出る前に簡単に作戦を確認した。

一、まずこの家に火をつける。二、おびき寄せられてきたトルーパーたちから通信機器とスピーダーを奪う。三、通信を盗み聞いて相手の動きを把握しつつ、少人数に分かれた部隊を潰していく。四、襲撃のときは姿を見せ、残りを追わせる。五、数を減らしたら最終的にモス・アイズリー宇宙港へ引きつけ、パルパティーンを引っ張り出す。

「六、ウォーカーは相手にしない。も付け足してください。タンクまで数に入れたら永遠に終わらないでしょうから」

「はなからそんなつもりはないよ。それに、ウォーカーのことに気が回るほどうまくいくとは限らないしな」

「ずいぶん懐疑的ですネ。あなたが立てた作戦なのに」

オビIIワンは肩をすくめ、「だからだよ」と答えた。

「我々の一番の目的は兵士の数を減らすことではない。パルパティーンを倒すことだ。押し返すわけでも見つからないよう隠れるわけでもなく、倒すことだ。それが目的である以上、どんなアクションでも起きうるさ」

「確かに、あなたの想定外の動きをしたら奴だけだ。私にも奴の行動は予測がつかない。突然目の前に現れてもおかしくありません」

「彼が本当にタトゥイーンに来ているかどうかは分かるか？」

「そろそろ周回軌道に達しているころでしょう。もう奴を感じることはできませんが、壊したはず

のコムリンクが異音を立てている。どうやら妨害は無駄だったみたいだ」

ぎょっとしてアナキンを見ると、今度は彼が肩をすくめた。

「ああ、そう言えば言ってますね。今回は私が囧になります。あなたは後ろから撃つ役を」

「……何だと？」

「ヘルメットごと壊さなければ奴の追跡を逃れるのは不可能だ。ということは、敵が寄り道をせず一直線に私に向かってこられるよう、目立つところで迎え撃つのは私の役目だということになる」

「何を馬鹿な！」

思い切り腕をつかみ、引き寄せる。だが彼の体がびくともしない。

「お前はだめだ。表に出てはだめなんだ。頼むから目立たないようにしていきな、作戦通りに」

「作戦はその場で変えるものです。アクシデントが起こったなら役割を交代するべきだ。それでも最後まであなたに守られたままでいろうと言うなら、それは無理な相談だ、オビワン。私には意志がある。そのための力もある。あなたが返してくれたライトセーバーはその二つを私にくれた。これはあなたがさせたも同然の決断だ」

両膝から力が抜け、その場にへたり込みそうになった。

「過去の自分に誇れるような行動をしろ、と言ってくれたのはあなただ。私は二度と後悔したくない。自分を貶める選択をしたくない。これからはそのための行動を続けたい。生き延びさえすればいいとあなたは言うてくれたけれど、いくら生き延びても自分を誇れなければ生きること自体に意味

はない。だから、私はあなたを守る。あなたのただ一人の友として、あなたを守る。あなたの命だけでなく、あなたのつまらない思い込みや、あなた自身を何ひとつ守ってくれないあなたのかたくなな心から、あなたを救う。それが唯一、自分を誇れる選択なんだ」

黒いマスクから漏れ出る空気はあたたかかった。そのあたたかさは頬に当たり、鼻の先に当たり、少し迷ってからようやく唇に当たった。

「……やっぱり、キスは無理ですね」

照れくさそうなそのセリフが終わらないうちに、衝動的に両腕を広げて彼の大きな体を抱き寄せた。顔をアーマーの肩にうずめ、必死に激情をこらえる。

彼はいつの間にか大人になっていたのだ。オビⅡワンの見ていないところで、誰の庇護も受けず、優しく教えられることもなく。

「分かった。パルパティーンを引きつける役はお前に任せる」

「それはよかった」

「だが約束してくれ。無駄死にだけはするな。無理だと思ったらすぐに私を呼べ。パルパティーンと一対一になる状況だけは避ける」

「もちろん分かっています。他には？」

「ないよ」

「なら、さっそく行動しましょう。まずはこの家を燃やすところからですね」

オビⅡワンは体を離し、ぎこちなく微笑してから頷いた。そして数秒迷い、背伸びをしてマスクのあごのところに軽く口づける。

「……今のって」

「キスだよ。できれば、今度はもっといいことをしよう」

194へ。

197

落ち着け、と声に出してつぶやく。いくらシディアスでも、今すぐやって来られるわけではない。来るとしてもまず偵察を出してからだ。

目を閉じ、彼と繋がっているフォースに呼びかける。相変わらず緊張が伝わってくる。理由のない不安ではないし、作戦がうまくいくかを案じている感じでもない。何かをはっきりと恐れている。その上で苦しんでいる。まるで目の前に彼がいるかのような……。

もうじつとしてはいられなかった。オビⅡワンはもつれる足取りでスピーダーに駆け寄り、急いでエンジンをかけ、彼が潜んでいる岩陰に向かって走らせた。普段より湿った冷たい風にローブをはためかせながら、無事でいてくれ、とひたすら祈る。空はますます暗くなっている。日差しが遮られた砂漠の空気は寒々しく、砂を巻き上げる風も氷のように冷たい。しかしそんなことには構ってられない。

やがて目的の岩場が見えてくると、オビⅡワンはスピーダーを急停止させた。停めたくて停めたわけではない。停めざるをえなかったのだ。切り立った岩の上をかすめるようにして船が遠ざかっていく。それが帝国のシャトルだと気づいたときには、足の甲を杭で打ちつけられたように動けなくなった。心臓が早鐘を打っている。フォースを通じて伝わってくるのは恐怖でも不安でもなく、ある種の覚悟だ。

足が千切れそうになるほど走った。走りながら自分のライトセーバーを抜き、何の意味もないと知りながら光刃を起動させた。たった数十メートルの距離が数億光年のように思えた。結果は分かっていた。知りたくもないが知っていた。理解したくもないが理解していた。ライトセーバーを持った義手の腕が転がり、命を奪うのに少しの無駄もない位置に刺し傷があり、まったくなすすべもなく殺されたアナキンの体が砂漠に横たわり、

気づいたときには膝が地面についていた。膝から下がなくなったのかと思うほど足に感覚がない。腕も動かない。しかし四肢はどれもすっかり自分にくっついていて。黒いしみのような感情が徐々に大きくなり、まるで波のようにごぼごぼとわき上がってくる。

頼むから殺してくれ。頼むから殺してくれ。頼むから殺してくれ。頼むから……。

それでも表情ひとつ変えられず、涙ひとつ流せないのは損な性分だと思う。愛した男が死んでもまるで何も感じていないみたいに見える。あと数分経てば立ち上がることでだってできるだろう。足を前に出して歩き出し、スピーダーに戻り、何食わぬ顔でまた元の暮らしに戻る。生きながらにし

て死に、死にながらにして生き、何かに希望を託しながら日々をやり過ごすことさえできる。本当にそれでいいのかどうかは知らない。ただ耐えられるから耐えているだけだ。もしこの場で誰かが殺してくれるなら、これ以上耐える必要はなくなる。

「殊勝な心がけだな、マスター・ケノービ。結局のところ、君は私が現れるのを待っていたのではないのかね？」

背後から聞こえてくる声は記憶しているものよりもしわがれていて、まるで死神だった。

「私を殺したいならそうするといいい、ダース・シディアス。もちろん殺されないよう抵抗はするが、私ではお前に勝てないだろうから」

「ジェダイ特有の悪しき結果論だな。貴様らは目的のために結果を利用する。自らの欲望を現実の事象になすりつけ、『これでよかったのだ』と思い込む」

「そうかもしれない」

ゆらりと立ち上がり、オビ・ワンはライトセーバーを持ち直して後ろを振り返った。

「私の友人を殺したことについて、何か言いたいことはないのか？」

「手応えについてか？ それとも謝ればよいのかね？」

「彼はお前の弟子でもあった男だ。お前たちの師弟関係は私の目には限りなく邪悪にしか見えないが、一概にそうとは言えない面もあったろう。なのに、何のためらいもなく殺せたのか？」

「それは道を違えた弟子を殺したことがある者にしか理解できん感情だ。……ああ、そう言えば君

はひと思いに殺してやったりなどしなかったのだな。愛した弟子の手足を斬ってひどい火傷を負わせ、再起不能にしてから置き去りにしたのだった」

オビⅡワンが逆上して襲いかかってくるのを待っていることは分かっていた。同時にオビⅡワンが決して逆上しないであろうことを見抜かれているのも分かっていた。だったら彼は何のためにここに姿を現したのだろう。殺すだけなら言葉など交わさずすぐに殺せばいい。アナキンにそうしたように、ライトセーバーを持つ手を斬って心臓を刺せばいい。

いぶかしく思われていることに気づいたのか、パルパティーンは微笑を浮かべてゆっくりこちらに近づいてきた。

「そう警戒するな。私は取り引きに来たのだよ、ケノービ」

「取り引き？ アナキンを殺しておいてか？」

顔をしかめてそう聞くと、彼は半分ローブに隠れた目を細めて頷いた。

「それは必要ないだろう。君にも、私にも。それよりもっと大きなものがこの星にある。君が残りの人生を賭けて守る価値のあるものがある。ルーク・スカイウォーカー。今は私の手の中にある」
動揺を顔に出さないようにするのが精一杯だった。ルークが捕まった。

「君が隠していただけあってすさまじいフォースを持っているが、いくら才能があってもまだたった三歳の子供だ。使えるように育てるには時間がかかる。そこで提案だ。君が投降し、私を手伝うと言うなら彼を解放しよう」

「……馬鹿な」

「まだ理解できないかね。これが取り引きだよ。君が誰より愛した男の忘れ形見を見逃してやろうと言ってるんだ。君の残りの人生と引き替えに。さて、どうする、マスター・ケノービ？ 愛した者の面影をすべて捨てて生き延びるかね？ だが君はおそらくこの条件を呑む。ジェダイの結果論に当てはめ、『これでよかったのだ』と自分を納得させるだろう。そうだろう？」

(ED 18・取り引き)

198

ほどなくして決着はついた。アナキンは片方の義手を失って太ももを貫かれ、オビ・ワンはわき腹を深く斬られ、肋骨を何本も折り、腕とすねにも傷を負った。二人とも立っているのがやっとで、ライトセーバーを持ち上げることすらできない。それでも決着はついた。シディアスはルークの眠る玉座にすぎるように倒れ伏し、二本のライトセーバーはどちらも二つに斬られていた。最後の一撃を浴びせたのはアナキンで、深すぎるほど深く踏み込んで片方の手で彼のライトセーバーと彼の胴体を真っ二つに斬り裂いた。絶命した師の顔を見下ろす彼からは、何の感情も伝わってこない。力と支配だけで語り合えるなら、シスの師弟にはもはや感情すら余分なものかもしれない。

「……戻ろうか」

「ええ」

「しかしこれからどうしたものかな」

オビⅡワンは激痛の走る腕を上げてルークを抱え上げ、片足を引きずったまま部屋を後にする。「正直なところ、これほどうまくいくとは思わなかったから後のことをまったく考えていなかった。シディアスと戦えば二人とも無事ではいられないと思っていたんだ。まあ、ここにルークがいた時点でどちらかは死ぬわけにはいかなかったんだが」

「相変わらずぎょっとするようなことをさらっと言いますね。あの涙の会話は何だったんですか？」
「怒るな。生きて戻るつもりではいたよ。だが現実には……、まあいいか。いまはルークの問題に集中せねばな。とりあえずオーウェンとベルーを探そう。おそろくどこかに監禁されているはずだ」
盛大なため息が聞こえ、オビⅡワンは足を止めて振り返った。

「何だ？ 何か文句があるのか？」

「当然でしょう。目の前に答えがあるのに気づいていないんだから」

彼の指さすところには、皇帝のデスクがあった。コンソールがあり、ビュースクリーンがあり、キーボードがある。

「……なるほど。これで調べると言うんだな。不正アクセスだが」

「へええ？ 不正アクセスは苦手でしたか？ 私の船のデータを幾度となく盗み見ていたようだからってつきり趣味なのかと思いましたか」

「別に私は何も見てないぞ。日記にはアクセスしないでやってやった。どうせ物騒な詩くらいしか

書いてないだろうしな」

「日記なんてつけてませんし詩作なんてしたこともありません。とにかく、早く調べましょう。パルパティーンが死んだことがばれたら生きて戻れない」

アナキンは慣れた動作でビュースクリーンを起動し、片手で手早く目的のデータを探り出す。

「あった、これだ。どうやら他の農民たちと一緒に大部屋に閉じ込められているようですな」

「そうか、困ったな。大人数だとどうやって目につく」

「それを解決し、さらに我々も逃げやすくなる一石二鳥の作戦がありますが、試してみませんか？」
彼がにやりと笑っているのが見えなくても分かった。

「お前の考えくらい分かっている」

「そうですか？ たとえば？」

「この船のエンジンを切って墜落させる気だろう。ここから監房のロックを解除し、混乱に乗じて脱出ポッドで逃がす。ポッドなら墜落しても衝撃を吸収できるからな。……まあ、なかなかいい案だ」
「どうも。ならさっそくいきますか」

まるで遊びにでも行くかのような気安さでそう宣言し、船のシステムにやすやすと侵入し、全動力を停止させる。

最初は何も感じなかった。少しだけふわっと浮かんできたかのような、心地よい浮遊感だけがあった。しかし次の瞬間からはとても立っていられなくなった。これほど大きなものがまっさかさまに地表

に落ちていくのだ。自由落下の加速度と振動ときしみと恐怖の悲鳴とけたたましい警報が世界全体に満ち満ちている。

「まったく大げさだな。ほら、立ってください。落ちる前にさっさと動かないと」

「わ、分かっている。監房の扉は？」

「開けました。隔壁を閉めて近くの脱出ポッドまで道を作っておきましたから大丈夫でしょう」

オビⅡワンはがくがくと揺れる床からどうにか立ち上がり、ルークを抱えたまま外に出た。走りにくくて仕方ないが走らないと死ぬ。腕の中のルークも殺すことになる。アナキンは半分破れたマントをひるがえしながら前を走っていて、ときどきすれ違うトルーパーたちをフォースで押しのけている。もはや動いていないリフトで滑り降りるようにして最下層にたどり着き、監房に繋がっている通路に出ると船はもはや水平を保ってはいられなくなっていた。

いまは角度にして十五度くらいだが、そのうちさらに船尾側に傾く。農民たち全員が脱出できる猶予はあと数十秒といったところだろう。

「オビⅡワン！」

その混乱と焦りと切り裂くような声が聞こえ、オビⅡワンは足を止めて背後を振り向いた。オーエンとベルーだ。二人とも煤だらけで傷だらけだが、生きている。

「よかった。二人とも無事だったんだな」

「ルークは？ 生きているのか？」

「ああ。眠っているだけだ。そのうち目を覚ます」

オビィワンはそのままオーウエンにルークを返そうとした。それは心のうちから出た自然な動作だったし、何しろ二人は泣き出さんばかりで、やっとルークの無事が確認できたことを心から喜んでいて、彼が戻ってくることを少しも疑問に思っていなかった。分かっていた。返さなければならぬことくらい分かっていた。それでも後ろを振り返らないわけにはいかなかった。

アナキンと目を合わせる。いいのか、と目で聞く。これが最後のチャンスだ。自分が本当の父親だと名乗り出るチャンスだ。血の繋がった父親として彼を養育したいならその権利を主張することくらいはできるし、少なくともルークを腕に抱くことくらいはできる。彼はパドメが命がけで産み落とした子なのだ。そのくらいはしただけいい。

だが彼は首を横に振り、さらに急角度で傾き続ける床を蹴って必死に壁に取りつき、二人に手を差し出した。

「私の手をつかんで登れ。すぐそこにポッドがある」

ルークを抱いたオーウエンは黙って頷いた。アナキンが二人を引き上げた先には、小さなポッドが口を開けている。他の人々はすでに脱出したらしく、残っているものはひとつしかない。

「入ってベルトを締めたらすぐに扉を閉めろ。それだけで射出される」

「あんたらのぶんのポッドは？　これが最後のひとつだぞ」

「我々はジェダイだ。気にするな。それよりもその子連れて早く逃げろ」

パシユ、と気の抜けた音がし、最後のポッドが風を切る。揺れ続け、加速し続け、傾き続ける船の中で、オビⅡワンは少しかだけ声をあげて笑った。「我々はジェダイだ」。

そうだな、ジェダイだ。私たちはジェダイだ。お前はついにここに帰ってきてくれた。

「何を笑ってるんですか、こんなときに」

「何でもないよ」

「ごまかさなくても分かってますよ。ポッドがなくなってたのは、まあ確かに私の計算ミスです。でもそんなに笑わなくてもいいでしょう。それとも何か別のことですか？」

「理由など何でもいいさ。最後くらい笑わせてくれ」

「またそうやってごまかす。最後くらいいいこと言ってくださいよ。誠意のある、何かいい言葉を」
「愛してるよ、アナキン。戻ってきてくれて本当にうれしい。これははたして、いいことになるかな」

チェックポイントAからRまでに記入された数字の合計が11以下なら、

チェックポイントAからRまでに記入された数字の合計が12以上なら、

206167へ。

199

「まーだ照れくさいんですか？ 覚えてるからこの姿勢なんでしょう？ まず口の中に出させてくれる約束だったのに僕がすっかり忘れるところでした」

「そんな約束をした覚えはないぞ」

「しました。あなたがその気になりさえすれば絶対やってくれるって言いました。おかげで今日一日ぼうっとしてたんですよ。評議會の間で真面目な話してるときもつい想像して集中力が、」

「本当に心臓が強い男だな、お前は。何者かに陥れられたというのに下半身の心配か」

「元弟子の将来を思うならこんな大事件が起こる日の朝に裸でベッドに入ってきて悶々とさせないでください」

きっぱりそう言うのと、オビⅡワンは相変わらず表情に「？」を浮かべたままため息をついた。言い訳をする気力がないのかもしれないし、あのときの気まずさを思い出したのかもしれない。

ベルトを外され、下半身がむき出しになるとかすかに悔いを覚えた。一回出してからにすればよかった。この状態ではきっとすぐに終わってしまっただけで格好悪い。だがあたたかみで湿った口に含まれたとたん丸一日ぶんの欲望が出口を求めて暴れ始め、「格好悪い」などという言葉はあつという間に吹っ飛んでいった。

いつもは過剰なほど音を気にするくせに、こんなときだけは下品な水音を立てることを何とも思わないらしくあからさまな音を立てて頭が上下する。角度が変わると柔らかくて細いひげがしゃりしゃりと当たっていけない気持ちになる。上下するたび前髪が落ちるのがうっとうしいのか、ときどき顔を離して不機嫌そうに髪をかき上げている。挿入されることを想像でもしているのだろう。たまに熱い息をついて腰がくねる。見ていると頭の中が熱くなる。ただ出すだけじゃ足りない。めちゃくちゃにしたい。

限界まで硬くなったペニスを口の中から引き抜き、顔に押し当てる。嫌がって当然の行為なのにオビⅡワンはぼうつとした顔でされるがままになっていて、口元をかすめるたびにキスをしてこようとまでする。膨れた先端を唇に押し当ててふたたび中にねじ込むと、口を大きく開けて根元まで深くくわえ込んだ。大きく上下するたびに先端が柔らかな喉の奥にこつこつと当たる。

苦しくないですか、と聞こうとしたのに、口をついて出てきた言葉はまったく違っていた。

「ほんとにやらしいな。頼んでもないのにここまでするなんて」

吐息混じりにそう言うと、オビⅡワンの背中がぴくりと震えた。

「こんなことなら今日の朝も遠慮せずしゃぶってもらえばよかったな。マスターはこういうの大好きみたいだから」

ふたたび腰がうごめく。興奮しているのだ。

「ああ、すごくやらしい顔してる。入れてほしくなったんですか？ でもまだだめですよ。おとなしくしてください」

金色の髪に指を絡ませてひとふさ引つ張ると、舌の動きにいつそう熱が入った。

「聞き分けがいいですね、マスター。普段のあなたとは大違いだ」

ついに鼻からくぐもった声が漏れ始め、愛撫がひとつの目的に収斂していく。早く射精させて終わらせようとしていることは分かっていた。こっちとしてはできるだけ長くその瞬間を押しとどめなかったが、もう無理だ。情けないあえぎを抑えることに精一杯で、腰がバウンドするのを止めら

れない。喉の奥を突かれて苦しそうに涙を溜めているオビワンの頭を押さえる。苦しめて悪いと思っているのに、罵り言葉ばかりが頭に浮かんでくる。このままめちゃくちゃに壊してやりたくない。だがひとかけらの理性だけは残っていて、射精する瞬間に口内から引き抜いて顔を押しのけ……たら、そのせいで大変なことになった。

58へ。

200

もう少しだけ話をしよう、と言いたかったのに、何となく言葉が出なかった。気恥ずかしい思いもあるし、今さら何を、という気持ちもある。だがフォースで結ばれてしまうともうごまかしは通用しない。アナキンはしばらく沈黙した後、「世間話程度なら」とつぶやいて片膝を抱えた。

「昔話をごめんだ。自分で嫌というほど見てきたし、今さら思い出すこともありません」

「確かに、お前は昔の自分をずいぶん嫌っていたようだな」

「当然です。あんな男は早々に見放されてしかるべきだ」

「おや、と思った。その口調は混じりけのない忌々しさに満ちていて、本気だったの自分自身を嫌悪しているのが分かった」

「なるほど。どうしても自分が許せなかったのか、お前は。だから殺そうとまでした」

「……これは世間話ですか？」

声に警戒が混じっている。

「目の前で分析されるのは不愉快だ。話がしたいならその癖を直してくれないと困る」

「分かったよ、悪かった。なら話題を変えよう。そうだな……」

様々なことが頭に浮かんだがどれも口にはできなかった。誰が生きていて、誰が死んだのか。誰を殺したのか。昔の知り合いに正体を見破られたことはないのか。尋問官とは何者なのか。彼らと仲間意識のようなものが芽生えたのか。パルパティーンとの会話、シスのライトセーバーをどう作るのか、普段はどこにしているのか、どんな地位を与えられたのか、……。するべき話などない。ひとつもない。自分たちはいったい何なのだろう。昔は少し顔を合わせていないだけで彼に聞きたくてたまらないことがいくつもできた。たいていうるさがられてきちんとした会話にはならなかったが、それでも「気にかけている」ことを後ろめたく思いはしなかった。

「どうやら困っているようですね」

「まあ、そうだな」

素直に認めるのは癪だったが、認めざるを得ないことは間違いない。

「改めて考えるとあまりないかもしれない。私たちはすでにフォースで繋がってしまったのだし、これと言って聞きたいことは、」

「アソーカは生きてます」

まったく何でもないことのように、淡々とした声で彼はそう言った。

「なん、だって……？ 感じるのか？」

「いえ、もう彼女との繋がりはありません。でも手配者リストに名前が載っていた。どこで何をしているのかまでは知りませんが、賞金稼ぎに転身したか抵抗組織に身を置いているかのどちらかでしょう。彼女はあなたと違って辺鄙なところでじっとしていられるような性格ではないから」

椅子からずり落ちそうになった。彼女が死んだと思っていたわけではないし、どこかで生きているだろうことをかたく信じてはいたが、ただ生存を願っていることと確定した情報として耳に入れるのとは大違いだった。

「彼女を見つけたら戦うことになったはずです。暗黒面の力を失った状態ではアソーカに勝てませんが、こうなる前の私なら倒せたでしょう。そうしたら……悲願にまた一歩近づくことになる」

「ジェダイを一人残らず滅ぼすことがシスの悲願だったな」

アナキンは短く息をつき、膝の上に置いた手で拳を作った。

「シスの悲願でなく私の悲願の話です。彼女はアナキン・スカイウォーカーに近い存在だった。彼女を殺すことができればさらに大きな力を暗黒面から得られる。あるいはアソーカを暗黒面に墮として弟子とし、二人で立ち向かえばシディアス卿を打ち破ることさえできる」

「ずいぶん物騒な願いだ」

「一般的にはそうでしょう。だがシスの弟子にとっては、それこそが究極の人生の目的と言っている」「シディアスを倒してマスターになったら、また弟子に命を狙われるのにか？」

「もちろん。マスターになることはいつか殺されることと同義なんだ」

「本気でそんな馬鹿げたことを信じ込んでいるのか？……いや、信じ込んでいた、のか」

沈黙が場を支配した。アナキンから伝わってくる感情は「虚無」だ。乾き切って何も無い。悲願を達成したいという気持ちも、達成できなくなった虚しさも、自分の生き方を否定された悔しさもない。その願いは彼が喪失と苦痛の中で必死につかもうとしたたったひとつの希望でもあるのだ。オビⅡワンがルークの存在にそれを求めたように、信仰のようにそれにすがるしかなかった。唯一の希望だと信じた。そんな大事なものをなくしてしまったら、人は砂漠のように乾いてしまう。「アソーカのことを話してくれてありがとう」

オビⅡワンはぼそりとそう言い、あごに手を当てた。

「彼女が困っているなら助けてやりたいが、そうもいかないだろうな。うまく隠れてくれることを祈るしかない」

「潜伏は得意のほうです。滅多なことでは見つからないでしょう」

そうだな、とつぶやいて微笑むと、アナキンはおずおずとマスク越しに視線を合わせてきた。

「何か言いたそうな顔をしていますね」

どきりとした。一瞬でも頭に浮かんだことを、彼は見透かしている。

誠意は等価交換でなければならぬのではないか。彼の悲願達成の鍵になったかもしれないアソーカの生存を明かしてくれたなら、あのことを黙っているべきではないのではないか。つまり、

ルークとレイアのことだ。

アナキンにルークとレイアの生存を伝えるなら、
やめておくなら、
163 へ。
183 へ。

201

ぼうっとしたまま適当に食事をし、元に戻った地下室を整理し直した後、通りがかったジャワのサンドクロラーを停め、例の果物といくつかの医療品を交換した。ジャワたちは遠い星系から来た生の果物を珍しがり、信じられないほど交換レートを上げてくれたが、惜しいという気持ちがないわけではなかった。だが食べる者がいないのなら必要ない。もはや幻想的な感傷に浸る必要もない。必要なのは、現実に向かうことだ。

これから彼がどんな道をたどるにせよ、まず生命を維持できなければ何もできない。液体栄養を注入するためのドレーンチューブが埋め込まれていたということは固形の食べ物でなく経管栄養剤が必要だろうし、ケロイド状になったままの皮膚を清潔に保つためには大量の洗浄剤が要る。問題はそんなものをジャワたちが扱っているかどうかだったが、一応あることにはあった。もちろんコルサントで手に入るものとは比べものにならないし数も足りない。二、三日もすれば出て行かざるをえなくなるだろう。

サンドクロラーが行ってしまおうと、オビIIワンは考え事をしながらのろのろと家に戻った。来

たる日のためにはスピーダーが絶対に要る。目立つからできるだけ家のそばに置きたくなかったがこうなってしまうのはもう隠れていることすら無意味だ。だがタトゥインにおけるスピーダーの価値は高く、生の果物一個とはとても交換してもらえない。困った、と思った。ちょうどよくそのへんに打ち捨てられていたりしないだろうか。ないな、と小さくつぶやき、家の中に戻る。この問題はさらにじっくり考えるべきだろう。残された時間は長くない。

188
へ。

202

迷うな、と声に出してつぶやいた。アナキンを信じろ。彼はもつとも頼りになる相棒だった男だ。いくらシディアスと一対一になったとしても簡単にやられるわけがない。感情を抑えずに焦って自分の役目を放り出せばこちらに不利になる。ふうう、と息を吐き、ふたたび双眼鏡を構え直す。私はジェダイだ。いつでも焦らず、不安に頭を支配されず、冷静に行動できる。だから持ち場を守ってじっとしていることだってできる。

しばらく双眼鏡ごしに大虐殺の様子を眺めていると、いきなり心臓に繋がった大きな動脈が千切れたかのような衝撃を受けた。あまりの痛みに声も出せない。手を離れた双眼鏡は崖を転がり落ちていき、オビ・ワンはそのままうつぶせになって倒れ込んだ。冷や汗が噴き出る。関節が固まる。目がちかちかする。心臓が破れてしまったような感じがする。だがまだ生きているということは、

心臓は無事なのだ。少なくとも。

激しい痛みはほんのわずかずつ引いていき、やがて嫌な余韻を残して消え去った。何だったんだろう、と思ったとき、その余韻が喪失感であることに気づいてぎょっとした。オビⅡワンはここで荒野を眺めていただけだ。何かを喪失するようなことなどしていないし、何も起こっていない。殺戮は何キロも先で行われていて、あまり遠すぎるせいでグロテスクな光景もまるで他人事だった。しかしその感覚はじわじわと大きくなっていく。喪失は心を蝕み、体の感覚を奪い、足を萎えさせる。自分はいったい何を失ったのだろうか。そんなに大きなものが、この銀河から消えたのか。まるで実感は湧かないが、真相を探ってみるべきかもしれない。

顔を上げて崖から飛び降りようとしたとき、オビⅡワンの目に飛び込んだものは巨大な瞳だった。そして尖った歯、赤い粘膜。このクレイトドラゴンはおビⅡワンが双眼鏡を落とした音を聞きつけ、ここまでやって来たに違いない。そして口を開け、あとは閉じるだけ。小さくため息をつく。自分のことはいいい。いつかは死ぬのだろうし、それは今日だった可能性も高い。だがアナキンを置いていかないと誓ったのだ。彼を一人にすることだけはしたくなかった。

なのに口が閉じられる瞬間、脳裏に浮かんできたのはアナキンが初めて覆いかぶさってきたことのことだった。唇を軽くはまれたときまるで歯を立てられて丸ごと食べられているようだった。最後の瞬間に思い出したのがこんなことだなんて、もちろん彼には言えないけれど。

203 「分かった」

短くそう言い、さらに強く腕をつかむ。

自分を二度と許せないなら、少しでも受け入れられる自分を新たに作らなければならない。彼が命を賭けるのは、きっとそのために必要なことなのだろう。それをオビィワンが受け入れてやらないうでどうする。どんな結果になっても見守ってやろう。それがマスターの役目だ。

オビィワンは最後に肩を抱き寄せ、ヘルメットに頬をすり寄せてから彼を送り出した。できるなら無事に帰ってきてほしい。シディアスを倒し、予言を成就させ、胸を張って自分の元に戻ってきてほしい。そのとき初めて、二人はようやく新たな一步を踏み出すことができるだろう。過去と現在をいしずえにした、本当の自分たちを見つけることができるはずだ。

170 へ。

204

暗く狭いトンネルを猛スピードで走り抜けると真っ赤な世界が現れた。荒れ狂う溶岩の海、赤く照らされた夜の空。そのムスタファアの地獄の中に彼はいる。小さな足場は不安定で、彼はマグマの中に落ちないよう必死でへりにしがみついている。あのころのアナキンではなく、ダース・ベイ

ダーとしての姿だ。オビⅡワンは迷わず彼に手を差し出し、「アナキン」と呼びかける。

「ほら、手を取りなさい。私と一緒に帰ろう」

すると灼熱の溶岩流の中からいくつも腕が現れた。それらはオビⅡワンを地獄へ引きずり込もうとする怨霊の腕のように見えた。握ったら熱で腕が残らず焼け落ちるだろう。それを分かっているが、そのすべてを手を取る。案の定両方の手がなくなり、腕もなくなる。困った。これでは彼を連れて帰れない。呆然としていたら、いきなり体を横向きに抱えられた。

「ぼうっとしているとあなたまで落ちますよ」

何やら笑いをこらえているような声が聞こえた。

「帰ろうなんて言ったくせに、あつという間に体が半分なくなっただじゃないですか。僕がいなかったらどうするつもりだったんです？」

マスクの下に懐かしいにやり笑いを思い浮かべる。オビⅡワンは泣きたくなるような、同時に笑い出したくなるような気持ちを持って余し、半分なくなっただに力を入れて咳払いをした。

「えらそうに言っているがずいぶん遅かったじゃないか」

「まさかあなたがあんな無謀なことをするとは思わなかったもので。でもその状態さすがにまずいんじゃないですか。フォースの世界で痛めつけられたら心の方に影響が出るかもしれませんよ」

「死にはしないよ。私は強いんだ。このくらいどうってことはない」

アナキンはオビⅡワンを抱えたまま陸地に飛び移り、さらに強く、力を込めて抱く。

「じゃあ、いきますよ。覚悟を決めてください」

「ああ。これでまた我々の間に繋がりができるな」

「クワイーガンが生きてたらあなたを叱るでしょうね」

「それはない。むしろ心配なのは前だ。こんなタイミングで急にフォースの繋がりを切ったらシディアスはおそらく勘づく。今までのお前の感情の変化もすべて伝わっていただろうから、弟子に何が起こったか正確に把握できるはずだ。彼の行動は素早いぞ」

「分かっています。それでも切らないと」

深く頷き、欠落だらけの体をもぞもぞと動かし「やろう」と告げた。アナキンも同じくらい深く頷く。意識を集中させ、同調させる。触れ合っているところが溶け合い、肉体が混じり合っている。やがて自他の差がなくなり、二人はひとつの異形となり果てる。

普通、他人とフォースの繋がりを結ぶのにこんな方法を取ることはない。いつも一緒にいて、同じように行動し、互いのことを考えていれば自然と繋がるものだ。心が離れれば自然と離れるし、また結びたいと思うなら相手とそれなりの関係を保ち続けられいい。だからこんなやり方は、一種の性交のようなものなのだ。性急に相手を求めて深く潜って結合する。焦っている自覚はある。もつと時間をかけるべきだとも思う。彼が間違ひなくこちら側に帰還したと断言できる状態でなければ繋がるのは危険だと、きつとヨーダなら言うだろう。だが待てなかった。早く繋がりがなかった。彼が何を考えているか、何を感じているのか、いつもどれほどの闇に身を焼かれているのかを知りた

かった。そして何より、愛した男を早くこの手に取り戻したかったからだ。

ゆっくりと目を開けると、目の前にはアナキンの顔があった。マスクごしの顔だ。彼は左右を見直し、自分の体を見下ろし、オビⅡワンを遠慮なくじろじろと眺めてからため息をついた。

「……本当にやったんですね」

「もう後悔しているのか？ 早いじゃないか」

「相変わらず情緒ってものを理解してないな、あなたは。余韻から出た感嘆の言葉です。後悔なんてしてない」

「そうか。それは何よりだ」

オビⅡワンは何となく顔をそむけて立ち上がり、少し離れた椅子に腰かけた。

「で、体調はどうだ？」

「別にどうとも」

「だったらもう眠ろう。あるいは、」

口に出してしまって後悔した。アナキンは不思議そうに首をかしげている。

やはりアナキンを休ませてやるなら、

作戦会議をするなら、

162へ。

もう少しだけ話をするなら、

200へ。

まず変化に気づいたのはアナキンだった。そのとき彼は電子双眼鏡を手にしていて、家の窓から峡谷の向こうを眺めていた。窓の横に常備してある双眼鏡はジャワに交換してもらったもので、昔使っていたものに比べると性能は格段に落ちる。だがここでオビⅡワンが見たいものはひとつしかないから何の問題もなかった。つまり、ラーズ家の周囲の様子がはっきりと見えればいいのだ。逆に言えば、この双眼鏡ではっきり見えるのはラーズ家の周囲までということになる。

オビⅡワン、と静かに呼ぶ声が聞こえ、オビⅡワンは作業の手を止めて駆け寄った。

「どうした？ 何か見えたか」

「峡谷の向こうで煙が上がってます。二、三、……複数だ」

瞬きもできなかった。アナキンが見ているのは、ラーズ家のある方向だ。

「……まずい」

「ええ。どうやら周囲の農家を焼き払って我々をおびき出す作戦にしたようですね」

「すまないが、すぐに行く。お前はここにいてくれ」

「私も行きます」

「だめだ。私一人で行く」

「冗談じゃない。あなた一人で何ができると言うんです？ あんな大軍相手に」

そう言われて足が止まった。確かにそうだ。だが、それでも、行かなければ。

「お前まで危険にさらすわけにはいかないんだ。頼むからおとなしくしていてくれ」

「それはこっちのセリフだ。あなたこそここでおとなしくしているべきです。分かっているでしょう、あれば我々をおびき出すための作戦なんですよ。のこのこ出て行ったら敵の思うつぼだ。集中砲火を浴びて死ぬ」

「それでもだ。それでも行かないとならない。そうしなければ私は、生き延びてきた意味がない」
「? どういう意、」

「とにかくお前は無事でいてくれ。きつと戻ってくる」

腕をつかんで追いつがってくるアナキンを突き飛ばし、全速力で走り出す。居間の入り口に立ってかけたパイプをすべて倒し、扉を閉め切り、一目散に駆けていく。荒野の向こうに立ち上る黒い煙はどんどん大きくなり、数を増していく。オビⅡワンは唇を噛みしめ、さらにスピードを上げる。

彼を守ると誓ったのになんてまだ。襲撃を予測していたのに、なぜ何の手も打たなかった? 自分が死ぬのはいい。オビⅡワンは選ばれし者ではないし、銀河に何の影響も及ぼさない。だが、ルークが死ぬのはだめだ。まだ彼をアナキンに会わせていない。一度くらい、息子顔をを見せてやりたい。たとえ命と引き替えでも、ルークのことだけは絶対に守る。

そこまで考えが及んだとき、ふと思った。オビⅡワンがいなくなったら、アナキンはどうなるだろう。彼一人で何ができるだろう。シディアスにあらがい切ることができるだろうか。二度と彼を置いていけないという誓いを、またしても破ったことにはならないだろうか。

いいや、と声に出してつぶやく。必ず生き延びる。ルークを救い出し、アナキンを守りに戻る。後ろを振り向きたくなる衝動をこらえ、大砂原をまっすぐに駆け抜けていく。ローブがはためき、髪が乱れ、汗が首すじを伝ってはすぐに蒸発する。大丈夫。生き延びられないことなどないはずだ。アナキンの元に戻れないことなど、決してない。

159へ。

206

最初に感じたのはのどの渇きと頬に触れる冷たさだった。自分が砂の上に倒れていることはすぐに分かった。口の中がじやりじやりしているし服の中にも入り込んでいて気持ち悪い。清潔な水で口をゆすぐたい。そしてシャワーを浴びたい。聖堂にいたころなら数十秒歩くだけでかなった願いが、いまだは何より難しい。それなりに水分の穫れる日ならまだいいが、連日から乾いていると一口含むことすら躊躇してしまう。今日も起きたらすぐに貯水タンクを確認しにいかないとな、と思い、オビ＝ワンは頭を振って髪についた砂を落とした。なぜこんなところで寝ていたのだろう。砂漠の真ん中で眠ったら寒くてたまらないはずだ。家に入る前に力尽きたのか。いや、家は燃やした。燃やした？ そうだ。ストームトルーパーをおびき寄せるために火をつけようと提案したら、「執着がなさすぎる」と呆れられた。誰に？ アナキンに。アナキン？ 彼はどこに行っただんだ？

一気に覚醒した。脳の芯までがざあっと冷え、思考が走る前に立ち上がりとする。しかし筋肉

に力を入れたとたん、目の前が真っ赤になるほどの激痛が走った。腕が痛い。背中が痛い。首が痛い。腹が痛い。足が痛い。腰が痛い。目が痛い。だが起き上がれないことはない。ただ痛いだけだ。痛むだけなら、我慢すれば済む。オビⅡワンはドロイドじみた動作で立ち上がり、あたりを見回した。空はいつの間にかまた真っ青で水分農家泣かせの晴天が広がっていたが、地表の方は地獄だった。砂漠のただなかに大きな残骸と小さな残骸と千切れた人体が無数に落ちている。きしむ体を無理に動かし、砂煙の立ち込める景色を見回してたった一人の人物を探す。少し欠けた黒いヘルメットに黒いアーマー、半分千切れた黒いマント。しかしいくら駆け回っても何も見つからない。視界に映るものの中に黒はない。アナキン、と叫んでも、必死に残骸をどかしても、彼は見つからない。彼だ、つたものさえここにはない。

徐々に歩けなくなつて立ち止まり、それでも歩こうとして膝をつき、膝でも体重を支えられなくなつて腕をつく。アナキンが死んだわけはなかった。自分一人が生き残つたわけもなかった。いい加減そんなものはうんざりだった。一人で彼の影を抱えて生きるなんて、もう絶対に嫌だった。砂の上にぽたぽたと涙が落ちる。自分が涙を流している驚きよりも、ただ水分がもつたいたいのだけ思った。そのとき、肩に重さのない何かが触れた。羽根のように軽く、空気より重たい。その不思議な感触につられて顔を上げると、視線の先に見慣れたものが見えた。ジャワのサンドクローラーだ。墜落したデストロイヤーから売り物になりそうなものを探しに来たのだらう。抜け目のないことだ。

必死の思いで立ち上がり、ふらつく足取りでサンドクロローに近づく。ジャワに何か用があったわけでもなかったが、彼らの行いを見過ごせなかった。もしアナキンのヘルメットを売り物にする気ならきつく言ってやろう。それは私の友人のものだ。手を出すな、と。

しかしジャワたちは残骸を検分していたのではなかった。一ヶ所に集まって何かをやっている。

「……まさか」

たくさんのジャワが作った円の中心に、なかば砂に埋もれた黒いスーツが見えた。ジャワたちは何かを話し合いながら、黒い物体を素手で掻き出している。

「待ってくれ!」

足を引きずりながら全速力で走り出す。一歩前に踏み出すたびに痛みが全身を駆け巡るが少しも気にならない。

「待ってくれ、それは私の友人だ。人間なんだ!」

ジャワの言葉でたどたどしく言い、輪をかき分けて黒いものの前に立ちふさがる。

「彼はドロイドじゃない。死んだ人間は売り物にはならない。頼むから下がってくれないか」

彼らは顔を見合わせる。そして肩をすくめ、いっせいにオビ1ワンを責め始めた。ジャワの言葉を要約するところなる。お前に言われなくても分かっている。自分たちが何百年タトゥイーンでこの商売をしてきたと思っているんだ。舐めるな。生きた人間とドロイドの違いくらい分かる。

「……生きた、人間?」

なおも憤然と言葉を続けようとするジャワを尻目に、オビⅡワンは一気に黒いものを砂から引きずり出した。間違はなくアナキンだ。ヘルメットの張り出した部分が割れているが機能はしている。マスクも傷だらけだが空気は漏れていない。スーツは裂け目だらけだが、胸のパネルのランプはしっかり点灯している。人工肺も人工呼吸器も動いている。生命維持装置が働いている。生きている。

「アナキン！ アナキン、起きてくれ！」

声もかれんばかりに叫び、アナキンの肩を揺さぶる。だが意識が戻らない。脳に深刻なダメージがあるのかもしれない、と一瞬考え、すぐにそれを振り払ってもう一度呼びかける。何度も何度もマスクの頬を叩いていると、後ろにいたジャワたちが「それじゃだめだ」と嘲笑してきた。

ジャワの一人がオビⅡワンの肩をつついてくる。手に何かを持っている。こぶし大の、生の果物だ。「それで目覚めると？」

大きく頷く。

「果物は高級品だ。せっかく交換したのだから君らが食べろ。美味しいものを食べても意識が戻りはないし、それに彼はもうそういったものは、」

今度は罵倒の言葉が聞こえた。お前はおれたちを舐めてるのか。そのくらい見れば分かるしこれをするつもりなど毛頭ない。何が言いたいのか本当に分からないのか？お前それでも魔法使いか？「魔法？ その果物で何か奇跡が起けるとでも？」

首がもげるほど首を横に振る。ジャワは、果物の中を指さしている。

「ああ、なるほど、水分か！ いけるかもしれない」

そうつぶやいただけでジャワたちは水を持ってきてくれる。それはおそらく自分たちが飲むための貴重な水だ。オビⅡワンは丁寧に礼を言い、手早くマスクを外し、チューブから水を注入し、また戻してしばらく様子を見る。ジャワは周りで何かがやがやと騒いでいて、この魔法使いは水の礼にスピダーをくれるらしいと適当な嘘を言っている。聞こえなかった振りをし、彼らに背中を向ける。アナキンの彼の頭をそつと膝に乗せる。あたたかさを感じる。手触りを感じる。彼が伝わってくる。大丈夫。アナキンは生きている。命ある限り心は死なない。生きていればやり直すチャンスも生き直すチャンスも、思い悩む機会も道に迷う機会も無限にできる。もう予言のために生きなくていい。オビⅡワンの期待に応えようと苦しむ必要だってない。ここは自由な空だ。いつまでも、どこまでも、何の制約もなく、自分の翼だけを信じて飛べる空。だから戻ってこい。それを味わえる幸せをお前に差し出せたら、私はもう何の心残りもない。

「……また言ってる」

マスクのせいで彼が目を開けたかどうかは分からなかった。その独り言のような呆れ声は、奇妙な調子で響きながら耳に届いた。

「いつ死んでもいいような感じのことはもう言わないって約束したじゃないですか」

発声器の調子が悪いのかもしれない、と思ったが、調子が悪いのは自分の耳だった。すべてのものが遠く聞こえる。

「オビⅡワン、聞いてるんですか。まさかもう忘れたんじゃないでしょうね。そんなに前のことじゃないのに」

「アナキン」

「何です？ 言い訳でもしたいんですか？」

「アナキン、」

それ以外は言葉にならなかった。オビⅡワンは膝に乗せたアナキンの上半身を抱きしめ、無心のまま不規則な呼吸を続けた。もう泣きたくなかったのに涙が出てくる。涙は彼のマスクを濡らし、縁を伝って砂の上に落ちる。

「私が生きていてうれしいですか？」

「当然じゃないか」

「あなたは？ 生きていてよかった？」

片方だけ残ったアナキンの義手が涙でべたべたの頬を撫でる。濡れたひげとあごを撫でる。

「ほら、言ってください、オビⅡワン。生きててよかったでしょう？」

「ああ、よかったよ。生きていてよかった」

「これから先はどうするんです？」

「分からない。決めていないよ。まさか生きているとは思わなかったんだ」

「でも生きてる。みっともない姿でぼろぼろだけど、もう胸を張れないけど、どうしようもないほ

ど不完全だけど、二度と完璧には戻れないけど、そもそも生きる資格は少しもないけど、きつとこれからも毎日苦しいけど、それでも私は生きてる。生きてる限り、二度と後悔しない選択をする義務がある。だからずっと私のそばにいてください。それだけはいま決めてもいいですよね？」

涙声はついに派手な嗚咽になった。こんな風に泣くのはきつと赤ん坊のころ以来だ。一度も記憶に残っていない。しかしその貴重な熱い涙はすぐに蒸発し、タトゥーインの大気中のわずかな水蒸気として生まれ変わる。だがそれをもう「水分がもったいない」とは思わなかった。だってそうしなければならなかったのだ。そうしなければ、本当に自分を理解することはできないから。恐れずに正面から感情と向かい合わなければ、自分の望みを知ることさえできないから。

「アナキン」

「はい？」

「いま、決める」

「はい」

「私のそばにいてくれ」

「ええ、もちろん。でも大変ですよ、きつと」

「風呂のことか？ それなら何も気にすることは、」

「……全然違います！ 違うことです！ というかそんなことい言わなくてもいいでしょう？」

二人は同時に笑い出し、同時に顔を近づける。そしてどちらともなく唇を寄せる。そのキスは何

だか初めてのような、妙な気恥ずかしさに満ちていて、どうしてか昔のことを思い出した。だがもう昔は終わりだ。たったいまから未来が始まる。未来はその言葉の響きよりもずっと残酷で、世界も自分たちも次々に変化していき、何度も自分を許せなくなり、どうしても生きていたくないと思いい、ときどき幸せで、ときどき笑い合えて、やっぱり生きていてよかった、と息をつく有象無象の日々の集合体にすぎない。それでも未来を生きていかなければならないのは、隣に彼がいるからだ。アナキン・スカイウォーカー、生意気な弟子で、子供で、頼りになる相棒で、親しい友で、一度は仇敵になり、きつとこれからはまた別のものに変化していく、たった一人の大事な恋人。

The End

(ED 22・未来)

チェックポイントPに2と記入されているなら、
119 (クリア後のおまけ) へ。



ゲームに関するご質問、ご感想は左のメールフォーム
よりお願いいたします。

メサイア・コンプレックス

2018.6.24 zooz (まち子)

pixiv 7129944
twitter _MA2CO
website <http://split.icca.jp/zooz/>

printed by コミックモール

この作品は個人による二次創作であり、映画、アニメシリーズ、あらゆる公式、
その他現実のすべてのものと無関係です。
保管・閲覧の際は一般のファンの方や関係者の目に触れることのないようお願い
いたします。ご不要になりましたらシュレッダーへ。

無断転載、ネットオークション、中古書店等への転売をかく禁じます。